高松市埋蔵文化財調査報告　第99集

市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第２冊

高　松　城　跡（寿町一丁目）

２００７年3月

高松市教育委員会

例　　言

1．本報告書は，市街地再開発関連街路事業のうち都市計画道路高松駅南線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第２冊であり，高松市西の丸町・寿町一丁目に所在する高松城跡（寿町一丁目）の調査報告を収録した。本報告書ではⅠ区の第１遺構面・第２遺構面，Ⅱ区，Ⅲ区を報告する。なお，第１冊では書名・遺跡名を『高松城跡（無量壽院跡)』としていたが，遺跡名は高松城跡（寿町一丁目）で統一する。

2．発掘調査期間は，平成14年11月28日～平成15年３月14日と平成17年12月19日～平成18年２月28日の２年次に分かれている。

3．発掘調査および本報告書作成は，高松市教育委員会が実施した。

4．調査から報告書作成に至るまで，下記の関係機関ならびに方々のご指導とご協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略，五十音順)

香川県教育委員会

片桐節子　　片桐孝治　　蔵本晋司　　乗松真也　　松本和彦　　森下友子

5．調査は，文化振興課文化財専門員 大嶋和則と中西克也（～平成18年３月　讃岐文化遺産研究会　平成18年４月～　文化振興課非常勤嘱託職員）が担当し，大朝利和が補佐した。

6．本報告書の執筆は，第１章第１節を大嶋，第２章を文化振興課文化財専門員 川畑聰が行い，それ以外は中西が行った。編集は中西が行った。

7．本報告書の第４章第１節樹種同定は，(株）吉田生物研究所に委託した。

8．本報告書の出土遺物写真撮影は，杉本和樹（西大寺フォト）に委託した。

9．発掘調査で得られた全ての資料は，高松市教育委員会で保管している。

10．本報告書における表記および記述に関する凡例は，以下のとおりである。

(1) 使用した遺構略号は次のとおりである。

ＳＢ　掘立柱建物跡　　ＳＤ　溝　　ＳＥ　井戸　　ＳＫ　土坑　　ＳＰ　柱穴

ＳＵ　犂跡状遺構　　ＳＸ　性格不明遺構

(2) 出土遺物観察表中の表記方法は次のとおりである。

ａ．法量の中で（　）を付けているのは残存値である。

ｂ．色調が内外面とも同じ場合には内外面と表記する。

ｃ．土器胎土の粒土表記の基準

微砂：非常に細かい　細砂：0.5㎜以下　粗砂：0.5～1㎜　細礫：１㎜以上

(3) 方位の北は，国土座標第Ⅳ座標系(世界測地系)の北であり，標高は東京湾平均海面からのプラス値である。

(4) 土壌及び土器観察の色調表現は，『新版　標準土色帖』(農林水産省技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色表監修)による。

(5) 挿図の一部に国土地理院地形図「高松北部」と高松市都市計画図２千５百分の１「高松市街北部」を一部改変して使用した。

(6) 第４章自然科学的分析は，市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第１冊に既載したが，本報告書に記載する木製品が関係するため再度記載する。

(7) 写真図版の出土遺物の中で，本報告書に記載する第１・２遺構面出土の遺物のみ番号をつける。

本　文　目　次

第１章　調査の経緯と経過
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査の経過……2
第２章　地理的・歴史的環境
　第１節　地理的環境……4
　第２節　歴史的環境……4
第３章　調査の成果
　第１節　調査の概要……8
　第２節　基本土層……9
　第３節　遺構・遺物……13
　　第１小節　Ⅰ区　第２遺構面……13
　　1　掘立柱建物跡……13
　　2　溝……14
　　3　井戸……16
　　4　土坑……21
　　5　柱穴……28
　　6　性格不明遺構……31
　　7　第２遺構面出土遺物……39
　　第２小節　Ⅰ区　第１遺構面……42
　　1　溝……42
　　2　井戸……49
　　3　土坑……56
　　4　柱穴……63
　　5　犂跡状遺構……65
　　6　性格不明遺構……66
　　7　第１遺構面出土遺物……71
　　第３小節　Ⅱ区……72
　　第４小節　Ⅲ区……74
第４章　自然科学的分析
　第１節　高松市高松城跡出土木製品の樹種調査結果……75
第５章　まとめ
　第１節　遺構の変遷……81
　第２節　絵地図・文献史料における「西ノ丸」について……82
出土遺物観察表……89

挿　図　目　次

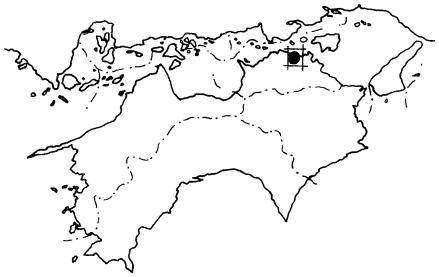
第 1 図 遺跡位置図…… 1
第 2 図 調査地位置図（1）…… 5
第 3 図 調査地位置図（2）…… 6
第 4 図 高松城跡周辺主要調査地位置図…… 7
第 5 図 調査区設定図…… 8
第 6 図 Ⅰ区土層図 …… 10
第 7 図 Ⅰ区第２遺構面平面図…… 11・12
第 8 図 ＳＢ 1201 平・断面図…… 13
第 9 図 ＳＢ 1201 出土遺物実測図…… 14
第 10 図 ＳＤ 1201 ～ 1203 断面図及び出土遺物実測図 …… 14
第 11 図 ＳＤ 1204 平・断面図及び出土遺物実測図…… 15
第 12 図 ＳＥ 1201 平・断面図…… 16
第 13 図 ＳＥ 1201 出土遺物実測図（1）…… 17
第 14 図 ＳＥ 1201 出土遺物実測図（2）…… 18
第 15 図 ＳＥ 1201 出土遺物実測図（3）…… 19
第 16 図 ＳＥ 1201 出土遺物実測図（4）…… 20
第 17 図 ＳＫ 1201 平・断面図及び出土遺物実測図…… 21
第 18 図 ＳＫ 1202 平・断面図及び出土遺物実測図…… 21
第 19 図 ＳＫ 1203 平・断面図及び出土遺物実測図…… 22
第 20 図 ＳＫ 1204 ～ 1208 平・断面図及び出土遺物実測図 … 23
第 21 図 ＳＫ 1209 平・断面図…… 24
第 22 図 ＳＫ 1209 出土遺物実測図（1）…… 25
第 23 図 ＳＫ 1209 出土遺物実測図（2）…… 26
第 24 図 ＳＫ 1210・1211・1215 平・断面図
及び出土遺物実測図 …… 26
第 25 図 ＳＫ 1212 平・断面図及び出土遺物実測図…… 27
第 26 図 ＳＫ 1213・1214 平・断面図及び出土遺物実測図…… 28
第 27 図 第２遺構面ＳＰ出土遺物実測図 …… 29
第 28 図 ＳＸ 1201 平・断面図及び出土遺物実測図…… 32
第 29 図 ＳＸ 1202 平・断面図…… 32
第 30 図 ＳＸ 1202 出土遺物実測図（1）…… 33
第 31 図 ＳＸ 1202 出土遺物実測図（2）…… 34
第 32 図 ＳＸ 1203 平・断面図及び出土遺物実測図…… 35
第 33 図 ＳＸ 1204・1205 平・断面図及び出土遺物実測図…… 36
第 34 図 ＳＸ 1206 平・断面図及び出土遺物実測図…… 37
第 35 図 ＳＸ 1207 平・断面図及び出土遺物実測図…… 38
第 36 図 ＳＸ 1208・1209 平・断面図及び出土遺物実測図…… 39
第 37 図 第２遺構面出土遺物実測図（1）…… 40
第 38 図 第２遺構面出土遺物実測図（2）…… 41
第 39 図 第２遺構面出土遺物実測図（3）…… 42
第 40 図 Ⅰ区第１遺構面平面図（1）…… 43・44
第 41 図 Ⅰ区第１遺構面平面図（2）…… 45
第 42 図 ＳＤ 1001 平・立面図…… 45
第 43 図 ＳＤ 1001 出土遺物実測図（1）…… 46
第 44 図 ＳＤ 1001 出土遺物実測図（2）…… 47
第 45 図 ＳＤ 1001 出土遺物実測図（3）…… 48
第 46 図 ＳＥ 1001 平・断面図…… 49
第 47 図 ＳＥ 1001 出土遺物実測図（1）…… 50
第 48 図 ＳＥ 1001 出土遺物実測図（2）…… 51
第 49 図 ＳＥ 1002 平・断面図…… 52
第 50 図 ＳＥ 1002 出土遺物実測図（1）…… 53
第 51 図 ＳＥ 1002 出土遺物実測図（2）…… 54
第 52 図 ＳＥ 1003・ＳＰ 1039 平・断面図 …… 55
第 53 図 ＳＥ 1003 出土遺物実測図…… 56
第 54 図 ＳＫ 1001・1002 平・断面図及び出土遺物実測図…… 57
第 55 図 ＳＫ 1003 ～ 1005 平・断面図及び出土遺物実測図 … 58
第 56 図 ＳＫ 1007・1009 平・断面図…… 59
第 57 図 ＳＫ 1013・1014 平・断面図及び出土遺物実測図…… 59
第 58 図 ＳＫ 1015 平・断面図…… 60
第 59 図 ＳＫ 1016 ～ 1018 平・断面図及び出土遺物実測図 … 61
第 60 図 ＳＫ 1019・1020 平・断面図及び出土遺物実測図…… 62
第 61 図 第１遺構面ＳＰ出土遺物実測図 …… 64
第 62 図 ＳＵ 1001 出土遺物実測図…… 65
第 63 図 ＳＸ 1002 平・断面図及び出土遺物実測図…… 66
第 64 図 ＳＸ 1003 平・断面図及び出土遺物実測図（1）…… 67
第 65 図 ＳＸ 1003 出土遺物実測図（2）…… 68
第 66 図 ＳＸ 1004 平・断面図及び出土遺物実測図…… 69
第 67 図 第１遺構面出土遺物実測図（1）…… 70
第 68 図 第１遺構面出土遺物実測図（2）…… 71
第 69 図 第１遺構面出土遺物実測図（3）…… 72
第 70 図 Ⅱ区平面図 …… 73
第 71 図 Ⅱ区出土遺物実測図 …… 73
第 72 図 Ⅲ区平・断面図及び出土遺物実測図 …… 74

図　版　目　次

図版１－１　第２遺構面完掘状況（東から）
　　－２　第２遺構面完掘状況（西から）
図版２－１　第２遺構面完掘状況（南から）
　　－２　第２遺構面完掘状況（北から）
図版３－１　ＳＢ 1201 完掘状況（西から）
　　－２　ＳＢ 1201　Ｐ－２
　　－３　ＳＢ 1201　Ｐ－４
図版４－１　ＳＥ 1201 土層断面（西から）
　　－２　ＳＥ 1201 完掘状況（南から）
　　－３　ＳＫ 1202 ～ 1208 完掘状況（北から）
図版５－１　ＳＫ 1209 土層断面（西から）
　　－２　ＳＫ 1209 完掘状況（東から）
　　－３　ＳＫ 1212 完掘状況（北から）
図版６－１　北東部完掘状況（東から）
　　－２　ＳＸ 1202（西から）
　　－３　ＳＸ 1201 完掘状況（西から）
図版７－１　第１遺構面完掘状況（東から）
　　－２　第１遺構面完掘状況（西から）
図版８－１　ＳＤ 1001 完掘状況（東から）
　　－２　ＳＤ 1001 完掘状況（東から）
　　－３　ＳＥ 1001 検出状況
図版９－１　ＳＥ 1001 完掘状況（北から）
　　－２　ＳＥ 1002 検出状況（南から）
　　－３　ＳＥ 1002 完掘状況（東から）
図版 10 －１　ＳＥ 1003 完掘状況（西から）
　　－２　ＳＫ 1020 完掘状況（西から）
　　－３　ＳＰ 1039 硯出土状況（西から）
図版 11 －１　ＳＸ 1003 完掘状況（南から）
　　－２　ＳＸ 1003 西側土層断面
　　－３　第１遺構面完掘状況（東から）
図版 12 －１　第１遺構面完掘状況（北から）
　　－２　第１遺構面完掘状況（東から）
　　－３　第１遺構面完掘状況（東から）
図版 13 －１　Ⅱ区全景（東から）
　　－２　Ⅲ区全景（西から）
　　－３　Ⅲ区土層断面
図版 14　出土遺物（１）
図版 15　出土遺物（２）
図版 16　出土遺物（３）
図版 17　出土遺物（４）
図版 18　出土遺物（５）
図版 19　出土遺物（６）
図版 20　出土遺物（７）

第１章　調査の経緯と経過

第１節　調査に至る経緯



第１図　遺跡位置図

高松市では，サンポート高松整備事業の一環でJR高松駅周辺の再開発事業を進めており，これに伴い都市計画道路高松駅南線の整備が計画された。道路新設部分は幅員20m，延長約90m，事業面積約1,800㎡である。

平成13年度に事業主体である高松市都市開発部都市再開発課から，高松市教育委員会に対して道路建設予定地における埋蔵文化財について照会があった。当該地は周知の埋蔵文化財包蔵地としては認識されていなかったが，東側には国史跡高松城跡が所在し，西側隣接地では（財）香川県埋蔵文化財調査センターによって調査が行われた高松城跡（西の丸町地区）が所在した。また，事業予定地は周辺の発掘調査成果や地割と絵図との比較によって，江戸時代には高松城内であり，東半が西ノ丸，西半が中堀に位置することが推定された。しかし，事業予定地内には鉄筋コンクリート造の建物が建てられており，撹乱を受けている可能性もあったため，事前に道路建設予定地内について試掘調査を実施し，埋蔵文化財の包蔵状況を確認することで合意した。

これを受け，高松市教育委員会では平成13年10月９・10日に道路建設予定地内の用地取得地について試掘調査を実施した。事業予定地東半の西ノ丸推定地のみが試掘可能であり，道路幅員の両端に沿って東西方向のトレンチを設定した。南側のトレンチでは，中世と江戸時代の３面の遺構面を確認し，それぞれから土坑を検出した。北側のトレンチでは，西半は溝や柱穴を検出したが，東半はコンクリート基礎による撹乱が遺構面以下まで及んでいた。このため事業予定地の北東部分については撹乱が著しく，遺跡は消滅してしまっているが，その他の部分についてはほぼ全面に遺跡が所在することが判明した。なお，事業予定地西半は試掘調査できなかったが，堀が推定されていることから遺構の深さが深く，また既存建築物が２階建であることから地下遺構に対する撹乱の影響が少ないと考えられた。さらに，西側隣接地において（財）香川県埋蔵文化財調査センターによって調査が行われた高松城跡（西の丸町地区）が所在することからも，埋蔵文化財が包蔵することは確実視された。試掘調査結果については都市再開発課と香川県教育委員会に報告した。

平成14年９月11日に都市再開発課より埋蔵文化財発掘の通知が提出され，これに対し，９月26日に香川県教育委員会から事前に発掘調査を行うよう指導があった。これを受け，都市再開発課と協議を行った結果，道路建設前の平成14・15年度の２ヵ年で発掘調査を実施し，記録保存を行うことで合意した。平成14年度においては事業予定地の東半と西端部分が用地取得済みであったことから，この範囲を調査対象とした。東半のうち北東部については試掘調査によって撹乱が著しいことが判明しており発掘対象範囲から除外した。このため，東半部分の発掘面積は360㎡となった。西端は堀の検出が予想され，掘削深度が深くなることから，十分な法面を設け，10m四方の100㎡程度を調査することとした。また，平成15年度については，事業予定地の中央部分を発掘対象地としていたが，用地取得が完了しなかったため調査は延期となった。その後，平成17年度において用地取得が部分的に完了した範囲内で175㎡の調査を実施し，堀に伴う石垣や多量の遺物の出土が認められた場合には平成18年度以降に残りを調査することで合意した。平成17年度調査地は堀内にあたり遺物量も少なかったことから，この調査において全調査を完了した。

第２節　調査の経過

１．発掘調査の経過

第１次発掘調査は，平成14年11月28日～平成15年３月14日に実施した。東側の調査区はＩ区，西側の調査区はⅡ区と称する。本調査については，事前協議の中で廃土搬出費用の削減という観点から，遺構の調査に伴う廃土は調査区内に仮置きすることとなり，Ｉ区は二分して調査を実施した。Ｉ区の東側をＩ－１区，西側をＩ－２区と仮称した。最初にＩ－１区・２区の第１遺構面を調査し，次にＩ－１区の第２遺構面・第３遺構面を調査した。最後にＩ－２区の第２遺構面・第３遺構面の調査を実施した。Ⅱ区の調査は調査期間の最終に実施した。

第２次発掘調査は，平成17年１２月19日～平成18年２月28日に実施した。調査の目的は中堀の東側の石垣の確認であり，南北両側に住宅が接するように建っており，さらに掘削深度が3.5ｍ以上になると想定されたために十分な安全対策を講じた後に調査を行った。

以下，調査日誌を掲げて調査の詳細について報告する。

調　査　日　誌　（抄）

平成14年

11月

28日にＩ－１区の重機による第１遺構面までの機械掘削作業を開始し，29日に終了する。

12月

２～５日にＩ－１区の第１遺構面の遺構検出作業を行う。６日に遺構配置図を作成し，東端より遺構の調査を開始する。９・10日に柱穴などの小規模の遺構を完掘し，同時にＩ－２区の重機による第１遺構面までの機械掘削作業を行う。

11～16日にＳＤ1001・ＳＫ1010・ＳＥ1001の掘り下げを行い，土層図を作成する。

17・18日にＳＥ1002の掘り下げ，Ｉ－２区の遺構検出作業を行う。24日にＩ－２区の遺構配置図を作成し，遺構の調査を開始する。27日までＳＤ1001，ＳＥ1001・1002，ＳＸ1003等の大きな遺構を完掘する。ＳＤ1001では集石を検出する。

平成15年

１月

６・７日にＩ－２区の溝・柱穴・土坑を完掘し，調査区の北壁・西壁の土層図を作成する。８・９日に調査区南壁の土層図を作成する。

10日にＩ区における第１遺構面の空中写真測量を行う。高所作業車を使用して全体の完掘写真を撮り，次に個々の遺構の写真を撮る。

14～16日にＩ－１区の重機による第２遺構面までの機械掘削作業を行い，遺構配置図を作成した後にＳＸ1201や柱穴などの遺構の調査を行う。ＳＤ1001を掘り下げる。

17日に柱穴や土坑等の全ての遺構を完掘し，20・21日に遺構の平面図を作成する。全体の完掘写真を撮り，次に個々の遺構の写真を撮る。

22～24日にＳＰ1203～1208に切られるＳＫ1209を掘り下げて完掘する。調査区東端より第３遺構面までの機械掘削作業を行い，随時，遺構検出作業を行う。

28～31日にＳＤ1301～1303，ＳＥ1301，ＳＸ1301，土坑，柱穴の調査を行う。

２月

3・4日にＳＤ 1301 ～ 1304，ＳＥ 1301，ＳＸ 1301 を完掘する。ＳＤ 1301 は集石が検出され，平面図を作成する。ＳＥ 1301 の石組と曲物の平面図・立面図を作成する。

5日にＩ－１区の第３遺構面の空中写真測量を行う。6日にＳＤ 1301・1304 の遺物出土状況の平面図を作成し，遺物を取り上げる。ＳＤ 1302 の集石の平面図を作成し，五輪塔２点を取り上げる。

7日にＳＤ 1302 の集石を取り除き，完掘写真を撮る。ＳＸ 1302 を掘り下げる。

10 ～ 14 日にＩ－１区ＳＤ 1302 の平面図とＳＤ 1001 の列石立面図を作成し，ＳＤ 1303・1304 を完掘する。Ｉ－２区において第２遺構面までの機械掘削作業を行い，遺構検出作業を行う。

17 日にＩ－２区の第２遺構面の遺構配置図を作成した後に柱穴・土坑の調査を行う。

18 ～ 24 日にＩ－２区第２遺構面の柱穴・溝・土坑を完掘し，ＳＢ 1201，ＳＥ 1201 は土層図を作成した後に完掘する。全ての遺構を完掘した後に平面図を作成する。Ｉ－２区第２遺構面の完掘写真を撮り，個々の遺構の写真を撮影する。

25・26 日にＩ－１区のＳＤ 1001 の列石を取り除き，地山まで掘り下げる。調査区南壁の土層図の下層を付け加える。Ｉ－２区の第３遺構面までの機械掘削作業と遺構検出作業を行う。

27・28 日にＩ－２区の第３遺構面の柱穴・土坑・溝の調査を行う。ＳＤ 1301 を完掘し，土層図と集石平面図を作成する。北西側に検出された第３遺構面上層のピット群・土坑群を完掘する。

３月

4日にＩ－２区のＳＤ 1302 の掘り下げを行う。土層観察用の畦を２本設定する。調査区北西側を掘り下げ，第３遺構面下層の遺構を検出し，遺構配置図を作成する。5日にＳＤ 1302 の東側畦の土層図を作成し，青磁香炉の出土平面図作成と写真撮影を終える。

10 日にⅡ区の調査を行う。現地表から約 2.50 mの深さまで重機により掘り下げる。

11・12 日にＩ－２区第３遺構面の全ての遺構を完掘する。

13 日にⅡ区の一部に鉄板を打ち込み，約 3.50 mの深さまで掘り下げる。下層に中堀の埋土である黒褐色シルト質極細砂が検出される。Ｉ－２区第３遺構面とⅡ区の空中写真測量を行う。

平成 17 年

12 月

コンクリート基礎の撤去を行う。

平成 18 年

1 月

コンクリート基礎の撤去を行い，15 日に試掘として重機により約 1.5 m掘り下げた。その結果，砂層が厚く堆積しており，十分な安全対策が必要であることが確認される。

２月

7日に重機により現地表からの深さ約 3.40 mまで掘り下げる。午後より人力による調査を実施する。ラミナ状堆積をなす堀の埋土を掘り下げ，地山であろう砂礫層を確認し，調査区南側を完掘する。

8日に土層図を作成し，北側を完掘する。午後より平面図を作成し，写真撮影を行う。

２．整理作業の経過

第１次発掘調査の整理作業は次のように実施する。平成 14 年度末～ 15 年度は出土遺物の水洗いと図面修正と遺物の復元・選定作業を行う。平成 16 年度～ 17 年度前半に遺物の実測を行う。平成 17 年度後半～ 18 年度前半に挿図を作成し，平成 19 年１月中旬までに原稿の執筆を完了する。

第２次発掘調査の整理作業は，平成 18 年度前半に出土遺物の水洗い・実測を行い，挿図を作成し，平成 19 年１月中旬までに原稿の執筆を完了する。

第２章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

瀬戸内海に北面した香川県のほぼ中央に，低い山塊に囲まれた高松平野がある。高松平野は西側が南から五色台へと続く山地，東側が立石山山地によって取り囲まれた東西 20km，南北 16km の範囲に及んでいる。また，この平野は，讃岐山脈から流下し，北へ流れて瀬戸内海へ注ぐ香東川をはじめ本津川・春日川・新川などによって形成された扇状地でもある。

さて，高松城の城下町として発展した高松市街地は，香東川の東流路が瀬戸内海に注いでいた河口の中洲や砂堆上に立地している。このため，城下町は高松城築城と同時にこの中洲や砂堆を大規模に埋め立てて形成されたと考えられている。香東川は，現在，石清尾山塊の西を直線に北流する西流路のみだが，17 世紀初頭，高松藩に招かれた西嶋八兵衛の河川改修によって一本化されたものである。なお，17 世紀の廃川直前の流路は御坊川としてその名残をとどめている。

第２節　歴史的環境

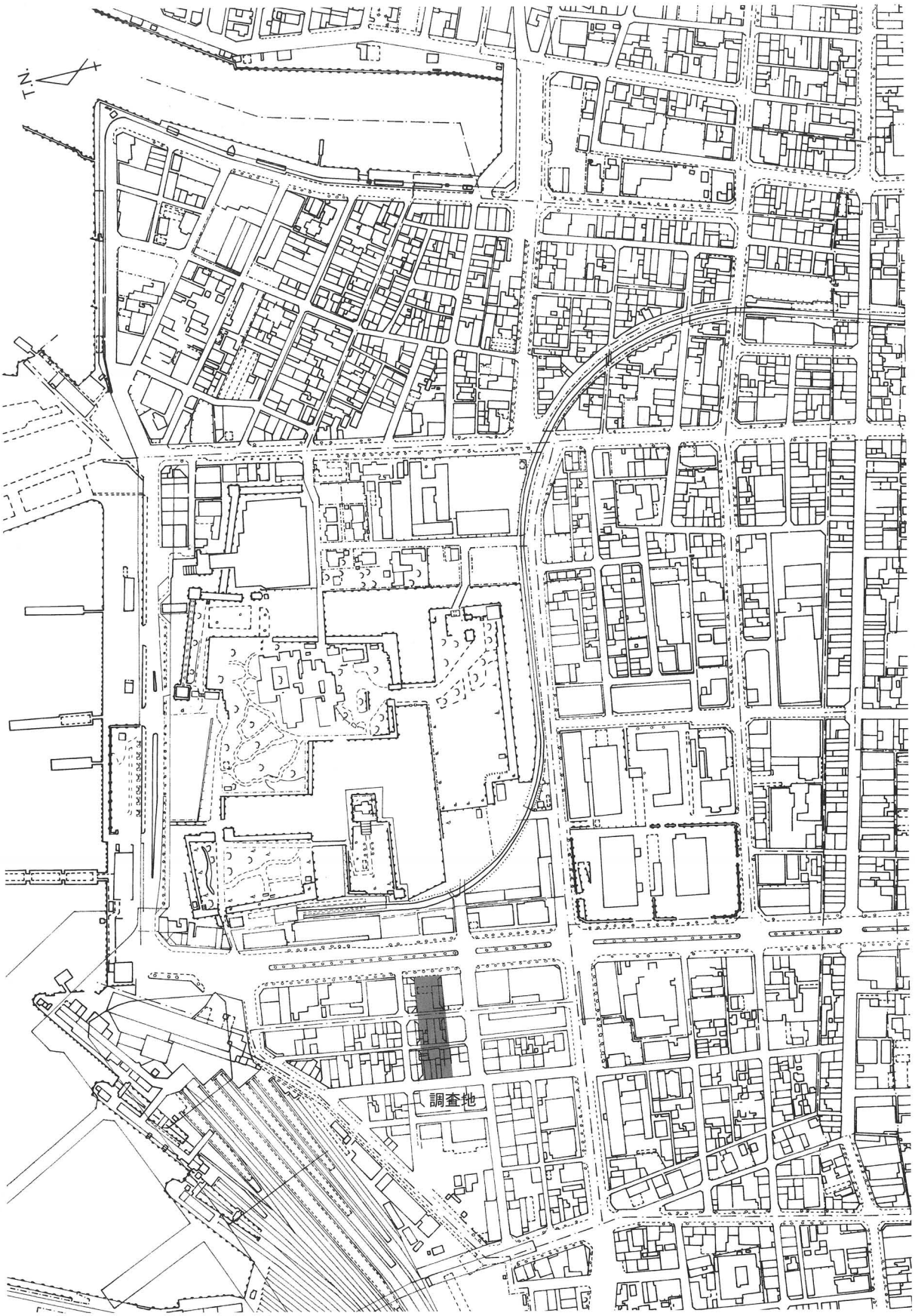
高松市街地の下に埋没している中洲や砂堆上に初めて人の活動が認められるのは，弥生時代後期である。高松城内南に位置する高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）では，ベースとなる砂層上面より柱穴とともに弥生土器が多く出土し，付近に集落が存在していた可能性が指摘できる。この発掘調査では，平安時代前期の溝もわずかながら確認している。

この地域の土地が安定し，人が恒常的に居住できるようになるのは平安時代後期と考えられる。当時，この地域は篦原郷と呼ばれ，安楽寿院領である野原庄が高松城跡の南方に所在していた。野原庄は，白河院の勅使田が応徳年間頃 (11 世紀末葉) に立券荘号されたものである。康治２年 (1143) ８月 19 日の太政官符によれば野原庄の四至が条里によって表記されていることから，土地が安定し条里地割または条里呼称がこの地まで普及していたと考えられる。

さらに時代が下ると，荘園としての機能以外にも，文安２年 (1445) の「兵庫北関入船納帳」には船籍地として名前が記載されていることから，中世においては港町としての機能を有していたと考えられる。時代は遡るが，高松城跡西の丸地区の発掘調査では，11 世紀後半～ 13 世紀前半の護岸施設とともに県外から搬入された土器が高い比率で出土している。さらに，西の丸地区に隣接する浜ノ町遺跡では，白磁四耳壺を埋納していた 13 世紀末から 15 世紀末の集落跡が確認されている。また，本遺跡第３遺構面では 16 世紀に存在した寺院である無量壽院に関係する遺構・遺物が見つかっている。一方，高松城跡東の丸地区に目を転じると，16 世紀後半以前の漁民の墓群が検出されている。城跡より南東方向にある片原町遺跡においては，15 ～ 16 世紀に属するＬ字形の大溝を検出しており，これは居館の外側にめぐらしていた堀の一部と考えられている。

このように，高松市街地下において，古代末から中世の集落等が確認され，かつて港町が栄えていたと考えられる。この砂堆や中洲上に中世都市が立地する状況は，博多や草戸千軒遺跡にも見られるように全国的な傾向であり，これらの都市をつなぐ交易が行われていたのであろう。このような時代背景のもとに，高松城がこの地に築かれ，城下町が整備されたと考えられる。

さて，この高松城および城下町を造ったのは，豊臣秀吉の家臣であった生駒親正である。豊臣秀吉の

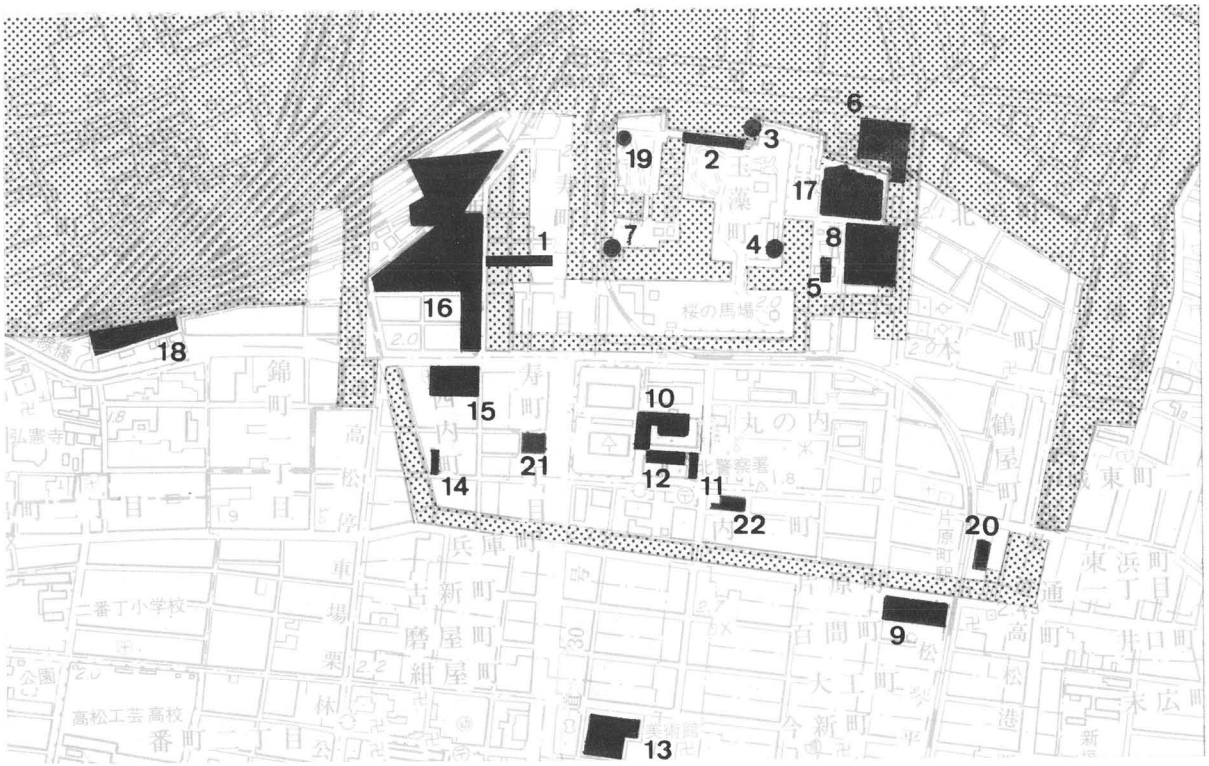


第２図　調査地位置図（１）（S：1/5,000）

第３図　調査地位置図（２）（高松城下図を基に作成）（S：1/2,500）

四国征伐により，天正13年(1585)長宗我部元親が降伏し，讃岐国は仙石秀久・十河存保に与えられ，その後尾藤知宣の領国となったが，天正15年(1587)生駒親正が入封し，讃岐17万6千石を領した。高松城は，生駒親正の居城として，翌天正16年から築城され，数ヵ年を要して完成された水城である。北の守りを瀬戸内海にゆだね，堀には海水が引き込まれるのが水城と呼ばれる由縁である。また，南方には大手(旧太鼓門)を構え，城の南側に城下町が展開する「後堅固」の城でもある。城の構造は，内堀・中堀・外堀といった三重の堀をめぐらし，内堀より内側には本丸・二ノ丸・三ノ丸などの曲輪を配している。本丸は，さらに堀によって他の曲輪と独立しており，本丸と二ノ丸をつなぐ鞘橋を落とすことによって敵の侵入を防ぐ構造となっている。

生駒氏は御家騒動により寛永17年(1640)出羽国矢島に転封となり，代わって松平頼重が寛永19(1642)年に高松城主となり，東讃岐12万石を領した。松平頼重は，城の改修を度々行っているが，寛文10年(1670)頃の大規模な改修では，北ノ丸・東ノ丸を造成するとともに，月見櫓・続櫓・渡櫓などを造り，北に設けた水手御門より直接海から出入りができるようにしている。松平氏は明治4年(1871)に廃城になるまで11代にわたって230年間城主を務めた。その後，天守は老朽化のため明治17年(1884)に取り壊され，高松城跡は昭和29年(1954)に高松市が取得し，翌30年玉藻公園として市民に開放し，現在に至っている。一方，史跡として昭和30年(1955)に国指定を受け，文化財の保護が図られている。



1 高松城跡(寿町一丁目)
2 高松城跡三ノ丸石垣
3 高松城跡水手御門
4 高松城跡三ノ丸（多目的トイレ）
5 高松城跡作事丸
6 高松城跡　艮櫓台突堤
7 高松城跡地久櫓台
8 高松城跡東ノ丸（県歴史博物館）
9 片原町遺跡
10 高松城跡（松平大膳家上屋敷跡）
11 高松城跡（松平大膳家中屋敷跡）
12 高松城跡（丸の内地区）
13 紺屋町遺跡
14 高松城跡（ＰＴＡ会館）
15 高松城跡西ノ丸（高松北警察署）
16 高松城跡西ノ丸（西ノ丸町Ａ～Ｃ地区）
17 高松城跡東ノ丸（県民ホール）
18 浜ノ町遺跡
19 高松城跡二ノ丸（玉藻公園西門料金所）
20 高松城跡（東町奉行所跡）
21 高松城跡（寿町二丁目テナントビル）
22 高松城跡（厩跡）

第４図　高松城跡周辺主要調査地位置図（Ｓ：1/10,000）

第３章　調査の成果

第１節　調査の概要

本遺跡の調査は，道路建設に伴う発掘調査であるため東西方向に長い調査区に設定された。第１章で記述したように，平成14年度の調査は国道30号線（通称中央通り）に接する東端の部分と高松駅に面する西端の部分において実施し，東側の調査区をⅠ区，西側をⅡ区と呼称する。平成17年度の調査はⅠ区と道路を挟んだ西側において実施し，Ⅲ区と呼称する。

Ⅰ区は，高松城の中堀の内側，内堀の外側に位置しており，調査前は駐輪場であった。この地点は寛永15～16年に描かれた『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』には「生駒隼人下屋敷」と記載されている。1650年代前半の『高松城下図屏風』では１頭の馬と二人の人物が描かれている。享保年間の『高松城下図』と文化年間の『高松市街古図』，弘化年間の『高松城下町屋敷割図（弘化年間高松城下絵図）』等では何も書かれておらず空白である。

試掘調査の結果によりⅠ区の北東部分にコンクリート基礎が確認され調査対象外となったため，Ⅰ区の平面形は横向きの逆「Ｌ」字形を呈する。東西方向の長さは29.50 m，南北は18.00 mである。調査では中世から明治時代に至る３面の遺構面が検出された。

第５図　調査区設定図　（S：1/1,000）

第１遺構面では江戸～明治時代の遺構を検出し，標高は1.20 m前後である。主な遺構としては，井戸・溝・土坑・柱穴がある。遺構は調査区全域において検出しているが，北壁の中央から東側にかけては撹乱を受けていた。

第２遺構面では江戸時代の掘立柱建物跡・井戸・溝・土坑・柱穴等の遺構を検出し，その標高は1.10 m前後である。調査区の西側ではほぼ全域に遺構を検出したが，東側の北壁付近は第１面と同一の撹乱を受け，南壁付近に石列を有する第１面のＳＤ1001があり，遺構の検出は中央部の狭い範囲のみである。

第３遺構面は，中世から江戸時代初頭の遺構が調査区全域に分布しており，その標高は0.80～1.00 mである。主な遺構は井戸・溝・土坑・柱穴であり，調査区北西部では遺構面が北方向に緩やかに低くなっており，第３遺構面の上位に確認された遺構面を第３遺構面上層と呼称する。

Ⅱ区は，中堀の西端と推定される位置であり，中堀西側の石垣の確認を目的に調査を実施した。調査前には木造の個人住宅とビルが建っていた。調査区の平面形は長方形を呈し，上端の東西方向の長さは10.00 m，南北12.50 mである。約0.60 mの深さまでコンクリート基礎があり，明治時代に埋め立てられた海砂が地表面から約2.50 mの深さまで達する。その下は中堀の埋土であり，地表面から約3.50 mまで掘り下げたが，堀底面は確認できなかった。さらに，西側の石垣は検出されなかった。

Ⅲ区は，中堀の東端と推定される位置であり，中堀東側の石垣の確認を目的に調査を実施した。調査前にはビルが建っていたため，調査区全域に地表面から約0.60 mの深さまでコンクリート基礎があった。調査は東西5.00 m×南北3.00 mの範囲に鋼鉄製の矢板を打ち込み，その内側に鋼鉄の内枠を設置するという十分な安全対策を講じた後に実施した。調査の結果，東側の石垣は検出されなかった。

第２節　基本土層（第６図）

Ⅰ区では北壁の一部と西壁・南壁の土層図を作成した。

地表面から約0.60 mの深さまで花崗土（第１層）で埋め立てられ，その直下に昭和20年７月４日の高松空襲による焼土・炭を多量に含む黒褐色シルト質細砂（第２層）が最大0.40 m堆積している。

第３～６層は明治時代から第２次世界大戦までの埋め立てである。

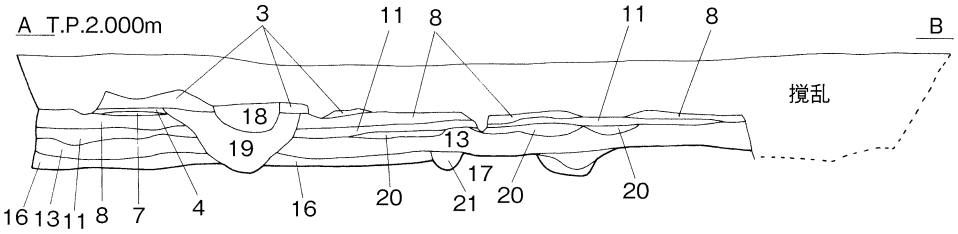
第７・８層の灰白色および灰黄色シルト質細砂の上面は第１遺構面である。第８層は最大0.20 mの厚さでほぼ水平な堆積をなしている。第７層は薄く，部分的に確認した。

第13層の褐灰色シルト質極細砂～細砂の上面は第２遺構面である。厚さは0.20 mであり，北西方向に若干低くなっている。西壁の土層図では撹乱により第14層以上が削平されているが，調査区内では撹乱が浅く，第１・２遺構面の遺構が検出されている。

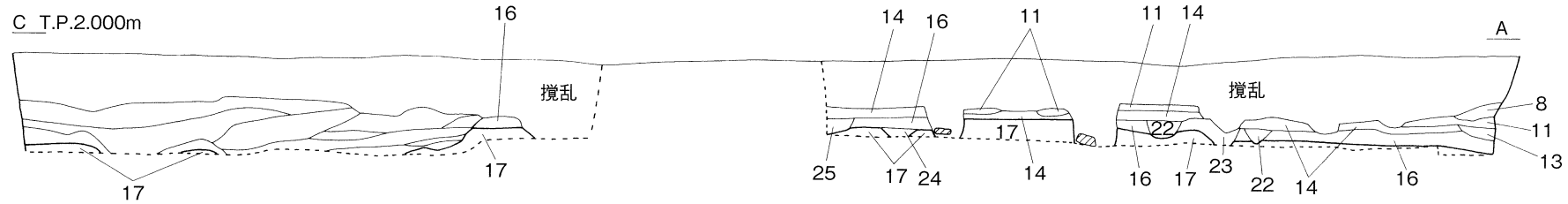
第16層の浅黄色細砂の上面は第３遺構面上層の確認面であり，調査区の北西隅のみに堆積し，北西方向に若干低くなっている。第17層の淡黄色細砂の上面は第３遺構面である。上層と同様に北西方向に低くなっている。

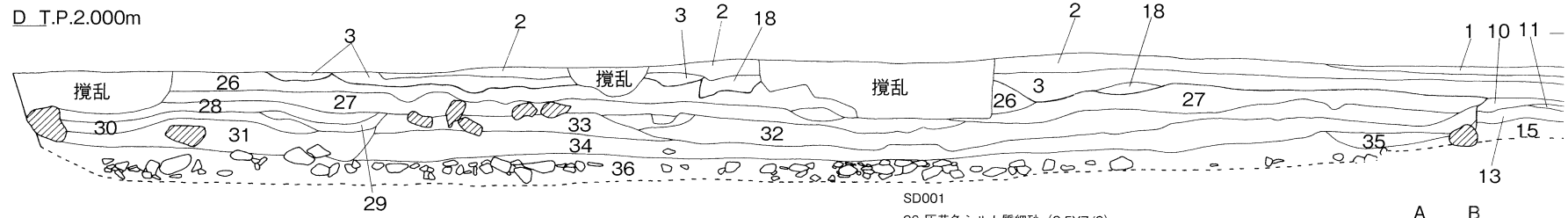
Ⅱ区は現地表面から約3.50 mの深さまで重機により掘り下げるが，崩落しやすい海砂と湧水のため土層図は作成できなかった。現地表面から深さ2.50 mまでは明治時代に埋め立てられた海砂であり，その下位は堀底面近くの堆積であると考えられる暗緑灰色シルトが堆積している。

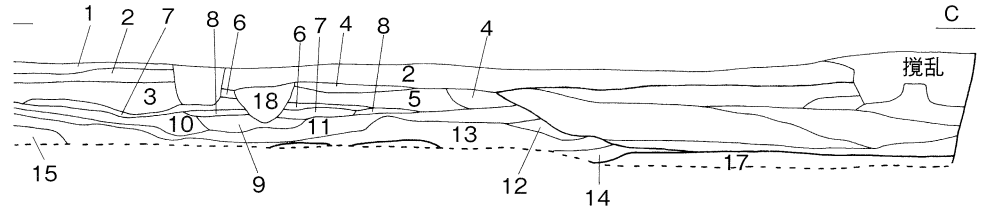
Ⅲ区は現地表面から約3.40 mの深さまで中～粗砂が厚く堆積し，その下位は黒褐色シルト・灰色細砂・灰白色中～粗砂の薄い層が交互にラミナ状堆積しており，その厚さは約0.50 mである。これらの土層が堀底面近くの堆積であると考えられる。最下層は砂礫層である。



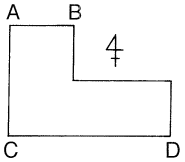
1. 花崗土
2. 黒褐色シルト質細砂（10YR3/1　焼土・炭を多量に含む）
3. 浅黄色シルト質細砂（2.5Y7/3）
4. にぶい黄色シルト質細砂（2.5Y6/3）
5. 灰白色細～粗砂（2.5Y8/2）
6. 灰白色シルト質細砂（2.5Y7/1）
7. 灰白色シルト質細砂（5Y8/2）
8. 灰黄色シルト質細砂（2.5Y6/2）
9. 褐灰色シルト質細砂（10YR4/1）
10. 褐灰色シルト質細砂（10YR5/1　灰白色細砂を含む）
11. 灰白色＋灰黄色細砂（2.5Y8/2+7/2　13層を含む）
12. 灰黄褐色シルト質細砂（10YR5/2　11層を含む）
13. 褐灰色シルト質極細～細砂（10YR4/1）
14. 黒褐色シルト質極細～細砂（10YR3/1）
15. にぶい黄橙色シルト質極細～細砂（10YR5/3）
16. 浅黄色細砂（2.5Y7/4　ややしまる）
17. 淡黄色細砂（2.5Y8/3　地山）
18. 浅黄色シルト質細砂（2.5Y7/4）
19. 灰オリーブ色シルト質細砂（5Y6/2）
20. 褐灰色＋灰黄褐色シルト質細砂（10YR4/1+6/2）
21. 灰黄褐色シルト質細砂（10YR4/2）
22. 灰黄褐色シルト質細砂＋浅黄色細砂（10YR5/2+2.5Y7/4）
23. 灰黄褐色シルト質細砂＋浅黄色細砂（10YR6/2+2.5Y7/4）
24. にぶい黄橙色細砂（10YR7/3）
25. 褐灰色シルト質細砂（7.5YR4/1　灰白色細砂を含む）



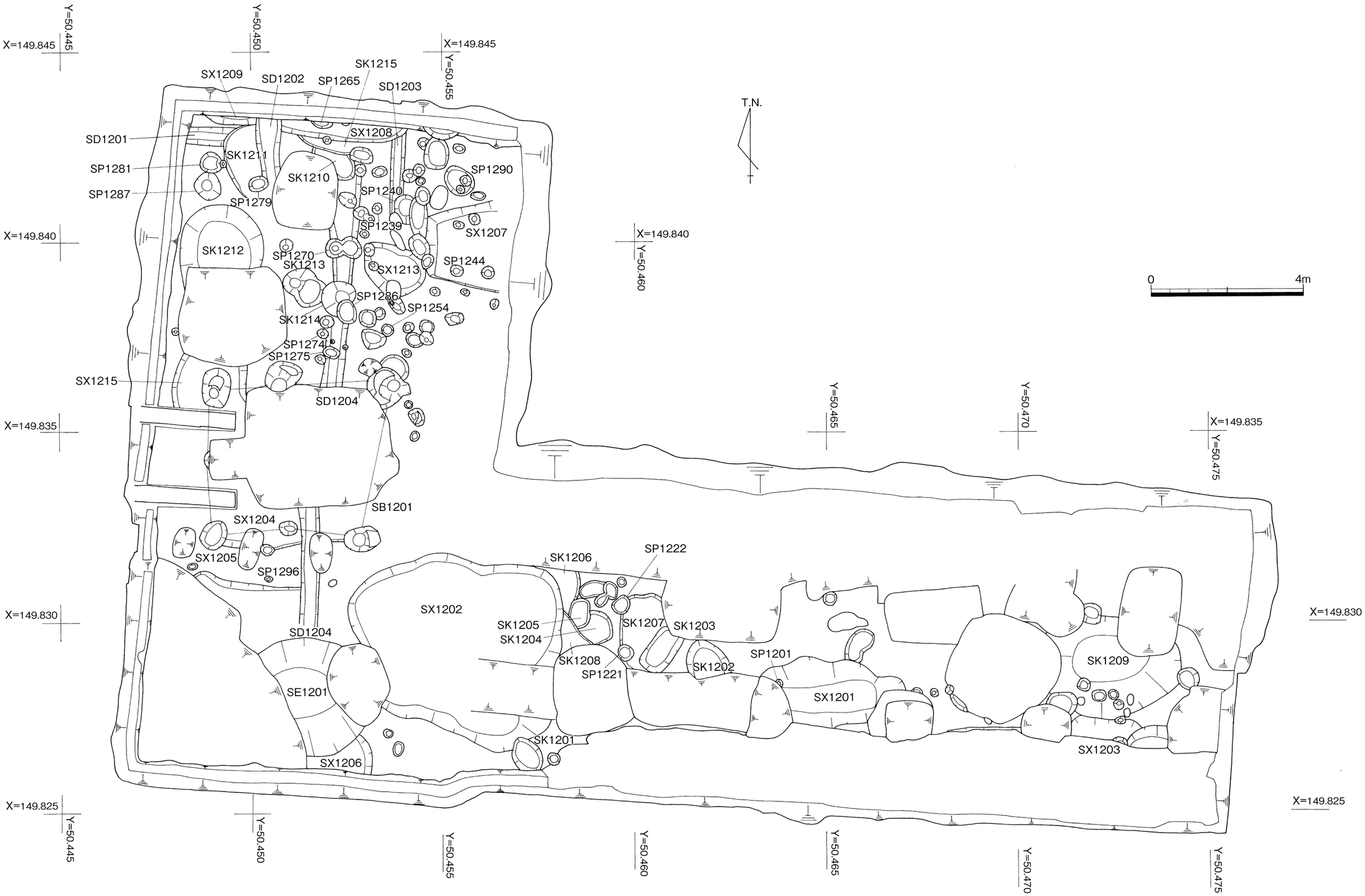




SD001
26. 灰黄色シルト質細砂（2.5Y7/2）
27. 灰オリーブ色シルト質細砂（5Y6/2）
28. 浅黄色細砂＋礫（2.5Y7/3）
29. 浅黄色細砂＋礫（2.5Y7/4）
30. 灰黄色細砂＋礫（2.5Y6/2）
31. 浅黄色シルト質細砂＋灰白色粗砂（2.5Y7/3+8/2）
32. 灰白色細～粗砂（5Y8/2）
33. 灰白色シルト質細砂（5Y7/1）
34. 浅黄色シルト質細砂＋灰白色細～粗砂（2.5Y7/3+8/2　小石を含む）
35. 褐灰色シルト質細砂（10YR6/1）
36. 褐灰色シルト質細砂＋石・礫（10YR6/1）



第6図　Ⅰ区土層図（S：1/80）



第７図　Ⅰ区第２遺構面平面図（S：1/100）

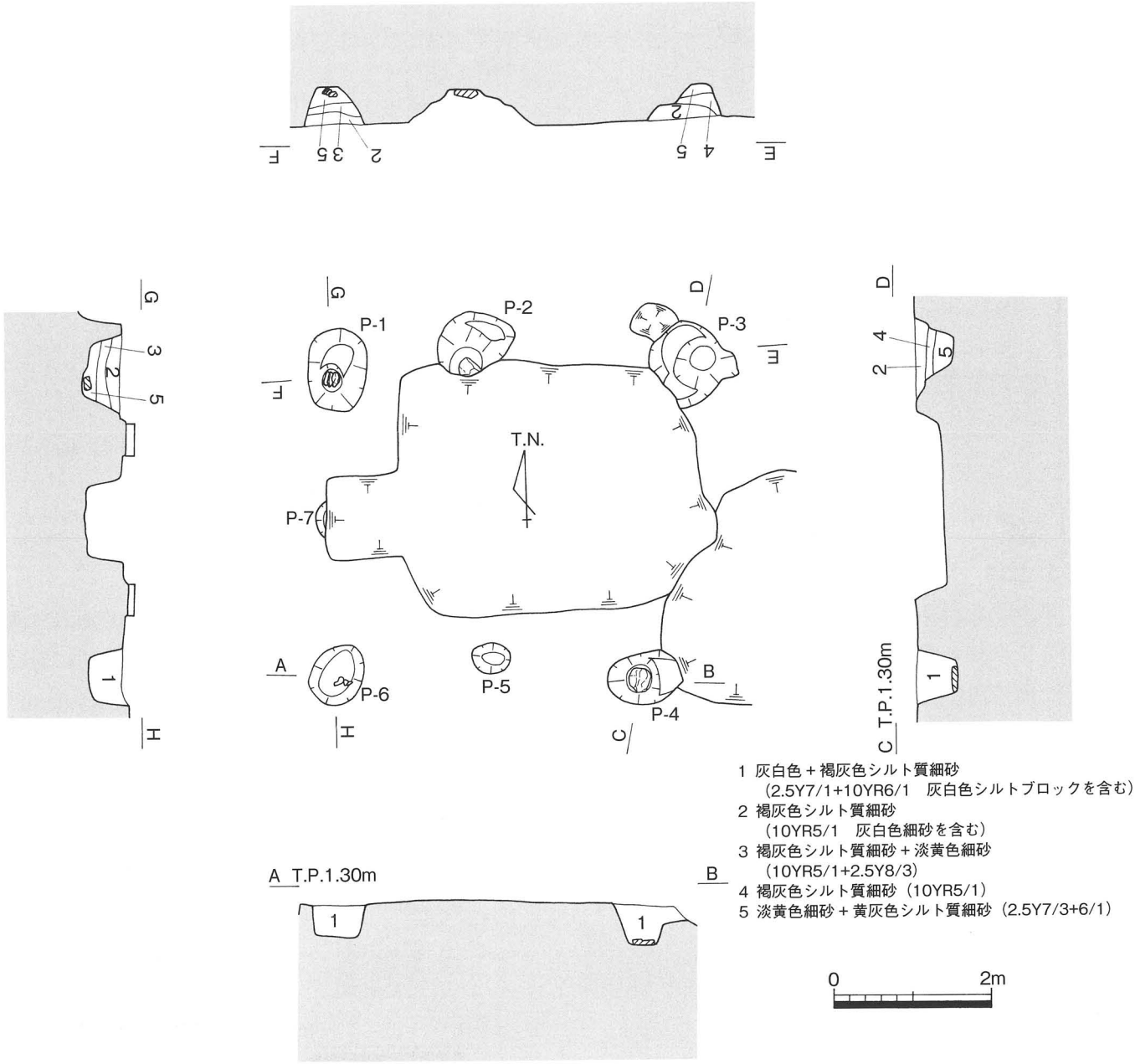
第３節　遺構・遺物

第１小節　Ⅰ区　第２遺構面

１　掘立柱建物跡

ＳＢ 1201（第８・９図）

調査区西端の中央において検出した掘立柱建物跡であり，中央部には近代の撹乱が大きく掘り込まれている。検出した標高は 1.00 ～ 1.07 ｍである。規模は南北２間×東西２間（4.90 × 5.30 ｍ）である。主軸方位はＮ－ 90°－Ｅである。検出した柱穴は７個であるが，Ｐ－３とＰ－４の間に撹乱により消失するが１個の柱穴が存在していたと考えられる。南北の芯芯間距離は 1.80 ～ 2.00 ｍ，東西の芯芯間距離は 1.80 ～ 3.00 ｍを測る。Ｐ－３の位置が北東側にやや離れており，建物跡の平面形は台形を呈する。直径 0.48 ｍのＰ－５を除く，その他の柱穴は直径 0.80 ～ 1.03 ｍ，検出面からの深さ 0.40 ～ 0.49 ｍを測り，平面形はやや不整な円形ならびに楕円形を呈する。Ｐ－１～４の掘り方は段を有し，Ｐ－１・２・４は底面



第８図　ＳＢ 1201 平・断面図（Ｓ：1/80）

に扁平な根石が残存する。埋土は５層に分けられ，水平な堆積状態をなす。出土遺物には 11・12 のように中世のものも含まれるが，所属時期は 16 世紀末～ 17 世紀初頭である。

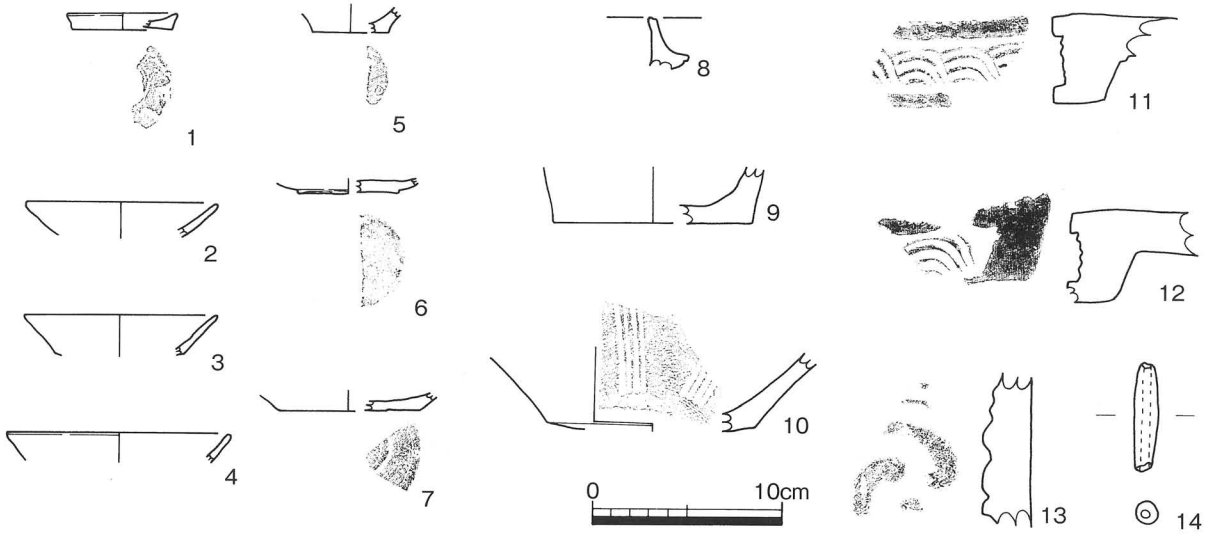
出土遺物は，土師質土器小皿（１～３），同杯（４～６），土師器杯（７），土師質土器羽釜（８），須恵質土器甕（９），土師質土器擂鉢（10），軒平瓦（11・12），軒丸瓦（13），土錘（14）である。

１は器高の低い小皿で，体部の調整は回転ナデ，底部は回転ヘラ切りが施される。２・３は口径 10cm を測り，調整はナデである。４は口径 11.8cmを測り，５の底部は静止ヘラ切り，６は回転糸切り，７は回転ヘラ切りが施される。

８は直立する口縁部と水平に伸びる鍔部である。９は平底でナデが施される。10 は内面に４本一単位の卸目がある。

11･12 は「重波文的波状文」の軒平瓦であり，波の皺は３～５本である。12 は瓦当上縁を幅広く面取り，顎後縁に狭い面取りが施される。13 は巴文である。

14 は細管状の土錘である。

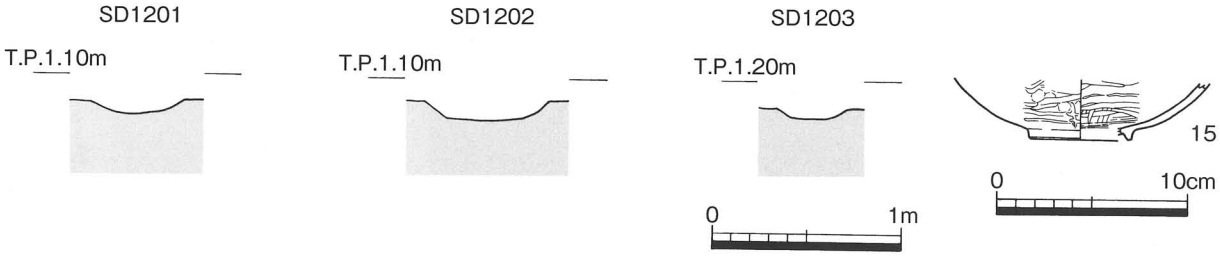


第９図　ＳＢ 1201 出土遺物実測図（S：1/4）

2　溝

ＳＤ 1201（第７・10 図）

調査区北西隅において検出した溝であり，ＳＫ 1211 に切られる。検出した標高は 0.96 ｍである。溝の方位は狭い検出範囲ではあるがＮ－ 90°－Ｅを示す。検出できた溝の全長は 1.30 ｍで，直線的に延びる。溝の西側は調査区外にかかっているが，ＳＫ 1211 より東側は検出できなかった。溝の幅は 0.50 ｍ，検出面からの深さは５cmを測る。断面は浅いＵ字形を呈し，底面のレベルは平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。遺物は出土していないが，検出状況や重複関係から所属時期は 17 世紀初頭である考えられる。



第 10 図　ＳＤ 1201 ～ 1203 断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＤ 1202（第７・10 図）

調査区北西隅において検出した溝であり，ＳＰ 1279，ＳＸ 1208 に切られ，ＳＫ 1211，ＳＸ 1209 を切る。溝の南側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 0.98 ｍである。溝の方位は狭い検出範囲ではあるがＮ－ 0°－Ｅを示す。検出できた溝の全長は 1.64 ｍを測り，直線的に延びる。溝の北側は調査区外にかかっている。溝の幅は 0.50 ～ 0.68 ｍ，検出面からの深さは 0.10 ｍを測る。断面は浅いＵ字形を呈し，底面のレベルは平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。遺物は出土していないが，検出状況や重複関係から所属時期は 17 世紀初頭であると考えられる。

ＳＤ 1203（第７・10 図）

調査区北西隅において検出した溝であり，ＳＰ 1237・1240・1279，ＳＸ 1208 に切られる。検出した標高は 1.05 ｍである。溝の方位は狭い検出範囲ではあるがＮ－ 5°－Ｅを示す。検出できた溝の全長は 2.26 ｍを測り，直線的に延びる。溝の北側は調査区外にかかっている。溝の幅は 0.50 ｍ，検出面からの深さは 0.10 ｍを測る。断面は浅いＵ字形を呈し，底面のレベルは平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂である。検出状況や重複関係から所属時期は 17 世紀初頭であると考えられる。

出土遺物は瓦器椀（15）で，その時期は 12 世紀に比定されるが混入品である。

ＳＤ 1204（第 11 図）

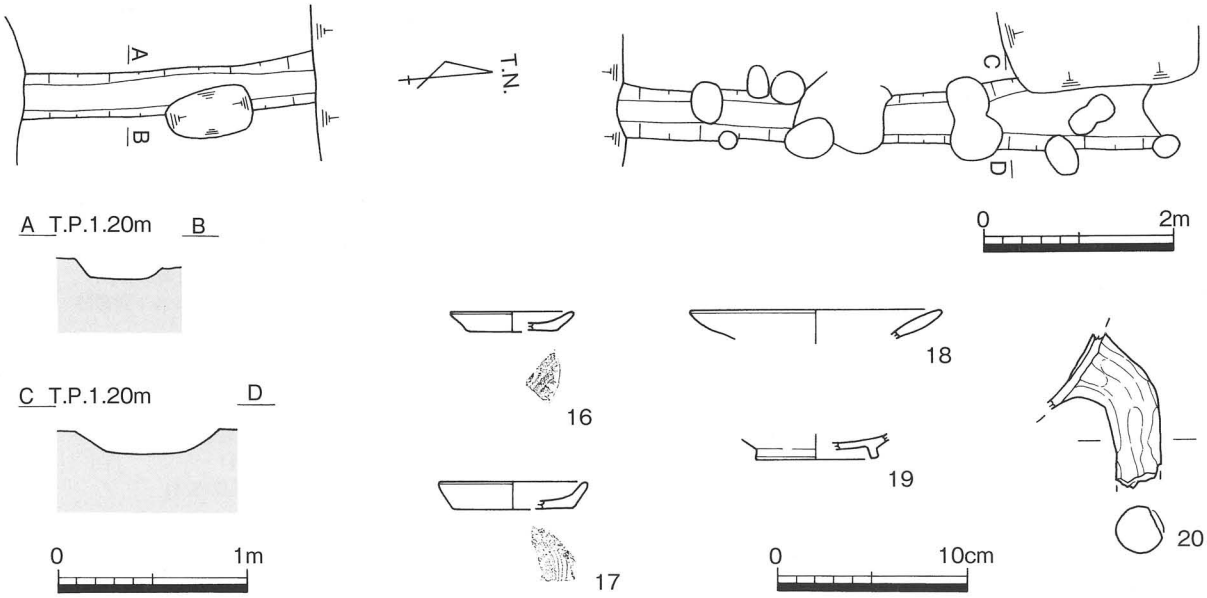
調査区北西隅において検出した溝であり，ＳＥ 1201，ＳＫ 1210･1214，ＳＰ 1268 ～ 1275 に切られる。検出した標高は 1.00 ～ 1.08 ｍである。溝の方位はＮ－ 5°－Ｅを示す。溝の北端はＳＫ 1210，南端はＳＥ 1201 に切られ，中央部は近代の撹乱により一部消滅する。検出できた溝の全長は 12.00 ｍを測り，ほぼ直線的に延びる。溝の幅は 0.46 ～ 0.75 ｍ，検出面からの深さは 0.03 ～ 0.12 ｍを測る。断面は浅いＵ字形を呈し，底面のレベルは南から北方向に緩やかに低くなる。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。他の遺構との関係から，所属時期は 16 世紀末期～ 17 世紀初頭であると考えられる。

出土遺物は，土師質土器皿（16・17），同甕（18），黒色土器椀（19），土師質土器足釜（20）である。

16･17 は器高の低い小皿で，体部の調整は回転ナデである。16 の底部は回転ヘラ切り後に板目が施され，17 は回転ヘラ切りが施される。

18 は甕の口縁部であり，口縁部の中央はやや厚くなる。

19 はやや高い高台を有し，内面にヘラミガキが施される。



第 11 図　ＳＤ 1204 平・断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/80・1/40・1/4）

3　井戸

ＳＥ 1201（第 12 ～ 16 図）

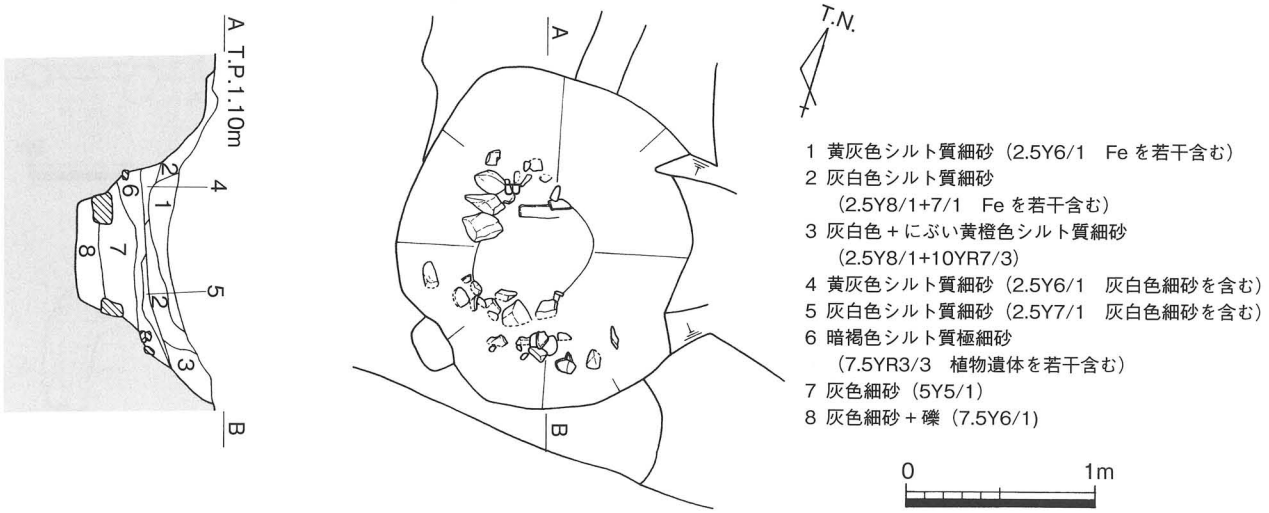
調査区南西隅において検出した井戸であり，西側上面の一部は第１遺構面のＳＸ 1003 により削平され，東側は試掘トレンチにかかる。本遺構はＳＤ 1204 とＳＸ 1206 を切る。検出した標高は 1.00 m前後である。平面形は南北方向に長軸を持つやや不整な楕円形を呈し，南北方向の直径は 3.60 m，東西方向は 3.15 m を測る。検出面から最深部までの深さは 1.50 m を測り，底面は中央より若干南西側に片寄った位置にある。底面の直径は 1.30 m を測る。井戸の断面形態は逆台形を呈し，掘り方は急傾斜であり，僅かな段を有する。埋土の中央から下位にかけては大小の石が多量に出土した。同様に側面にも大小の石を検出した。これらの石は井戸枠の石組みに使用された石材であると考えられるが，石組みの大部分は崩落している。井戸の底面には井戸枠の板材が数枚出土した。石材と板材の出土から判断して，本遺構は石組みと木枠を構造とする井戸であったと考えられる。埋土は８層に分層できた。第１層は黄灰色シルト質細砂，第２層は灰白色シルト質細砂，第３層は灰白色＋にぶい黄橙色シルト質細砂，第４層は灰白色細砂を含む黄灰色シルト質細砂，第５層は灰白色細砂を含む灰白色シルト質細砂，第６層は植物遺体を若干含む暗褐色シルト質細砂，第７層は灰色細砂，第８層は灰色細砂＋礫である。上層の第１～５層はやや乱れた堆積状態であるが，下層の第６～８層は水平な堆積である。出土遺物には古い要素を持つ遺物も含まれるが，所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，磁器皿（21），同碗（22･23），陶器甕（24･27 ～ 30），同杯（25），同壺（26），同擂鉢（31 ～ 39），土師質土器皿（40 ～ 53），同杯（54 ～ 57），同鉢（58），同鍋（60），同足釜（61･62），瓦質土器（59），瓦器椀（63），白磁碗（64），青磁碗（65），須恵器甕（66），軒丸瓦（67），丸瓦（68･69），軒平瓦（70），道具瓦（71），鬼瓦（72），瓦製円盤（73），土錘（74 ～ 76），加工板（77 ～ 83），曲物（84），骨（85）である。

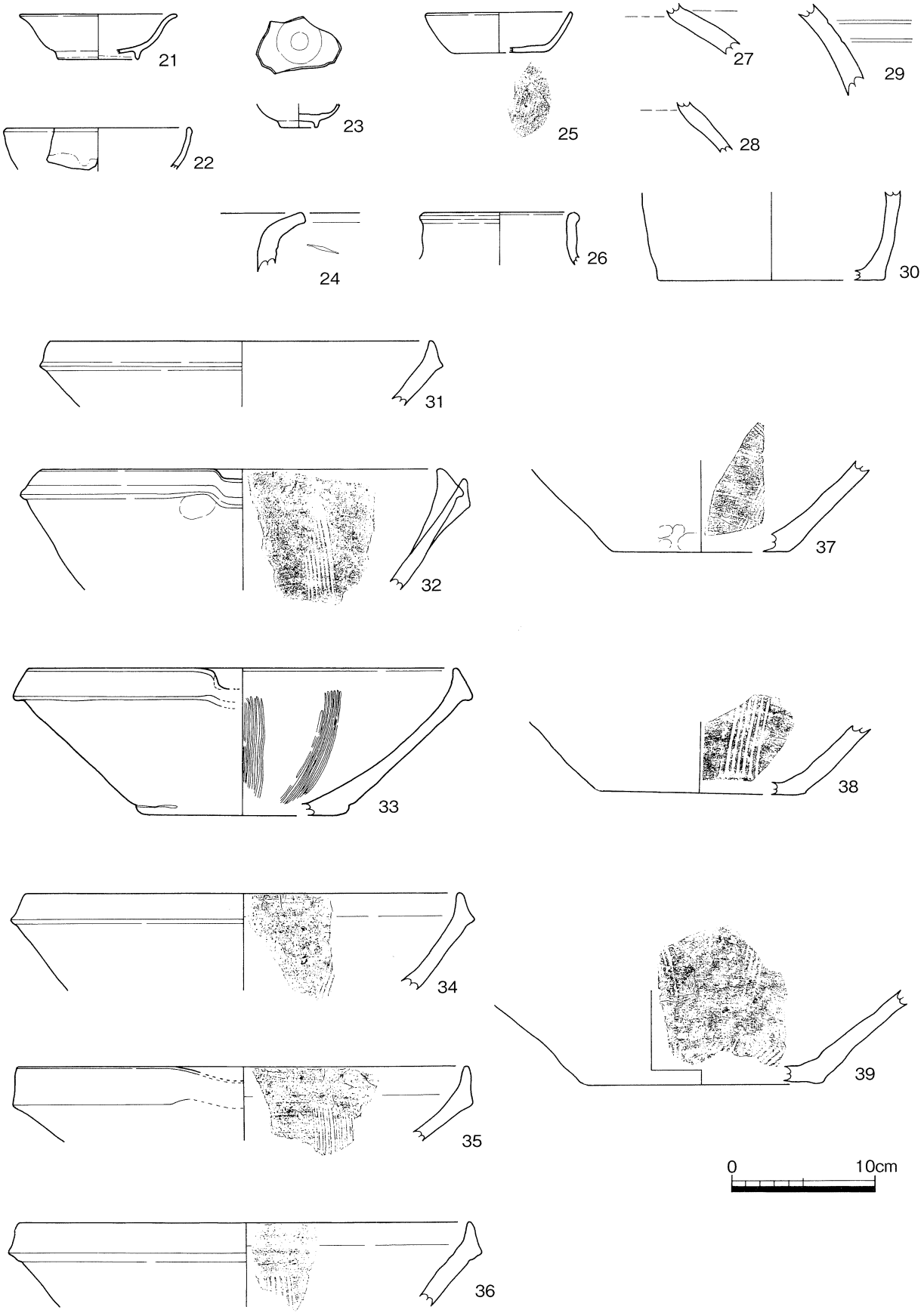
21 ～ 23 は肥前系磁器である。21 は折縁の小皿であり，畳付が露胎である。22 は内湾する体部で，下半は無釉である。23 は見込に蛇ノ目釉剥ぎが施される。

24 は陶器甕の口縁部である。25 ～ 30 は備前焼陶器である。25 は若干内湾気味の体部で，底面の調整は回転糸切りの後に板目が施される。26 は直立する口縁部であり，口縁部端部がやや肥厚する。27 ～ 29 は肩部破片である。30 は平底からほぼ直立する。

31 ～ 39 は備前焼擂鉢である。31 ～ 36 は上下にやや拡張する口縁部であり，外面の調整は回転ナデ



第 12 図　ＳＥ 1201 平・断面図（S：1/80）



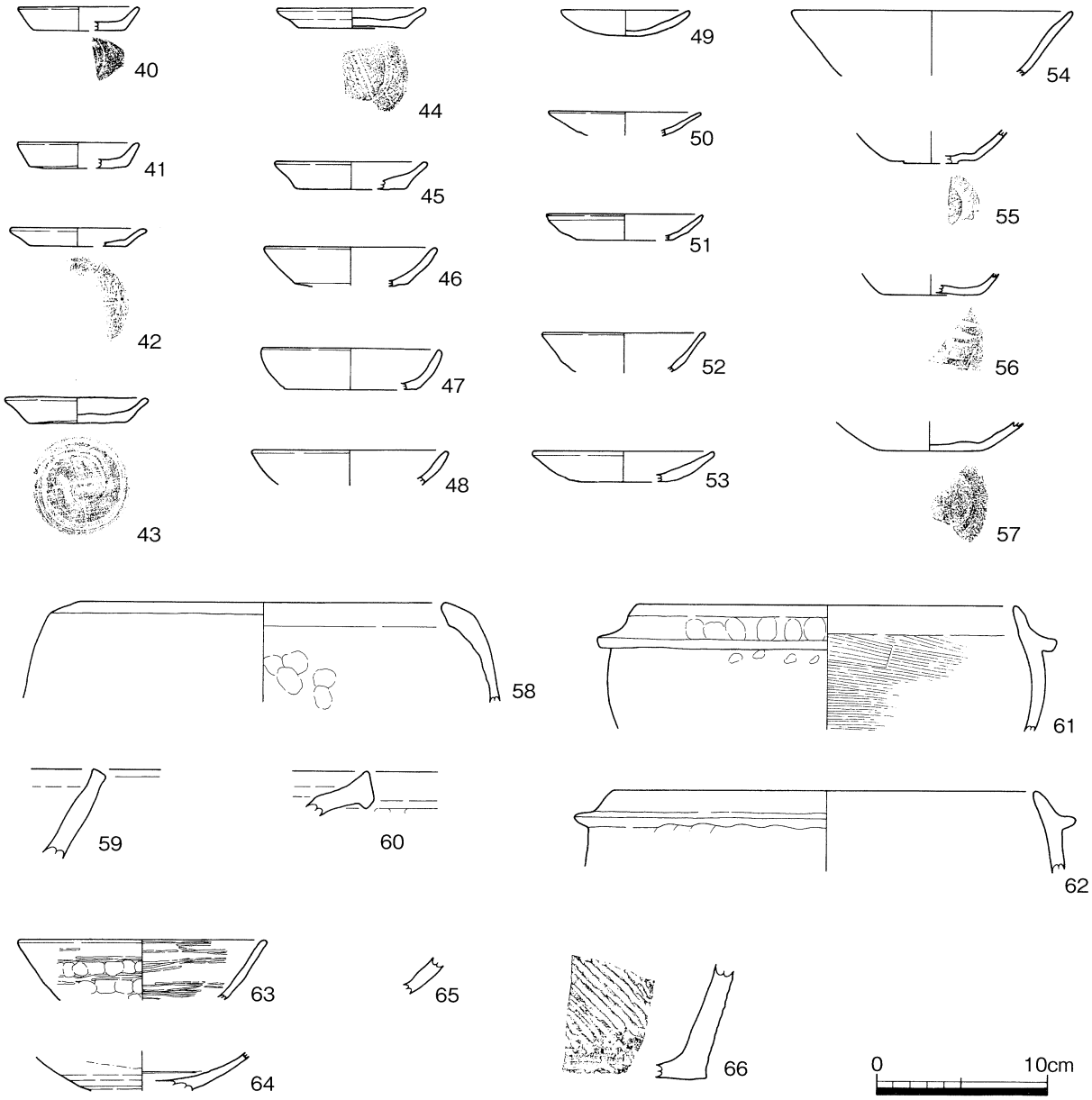
第13図　ＳＥ 1201 出土遺物実測図（1）（S：1/4）

が施される。内面の卸目は６～８本一単位である。

40～45は口径８～９cmを測り，体部の短い形態の小皿である。40の底部の調整は回転ヘラ切りの後に回転ヘラナデ，41は回転ヘラ切りの後にナデ，42・43は回転ヘラ切りの後に板目，44は回転ヘラ切りの後に板目，回転ヘラナデが施される。46～48は口径10～11.5cmを測り，体部と底部の境が明確である。46の底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。47は僅かに内湾気味の体部である。49～53は体部と底部の境が不明瞭で，体部が緩やかな傾斜で立ち上がる。49の底部はナデが施される。50・51・53はロクロ成形痕が明瞭に見られる。

54は口径16.4cmを測り，体部はほぼ直線的に延びる。55の底部は回転ヘラ切りの後に板目，回転ヘラナデが施され，56は回転ヘラ切りの後に板目，57は回転ヘラ切りの後にナデが施される。

61・62は内傾する口縁部の外面に鍔が付き，鍔からの立ち上がりがやや長い。61の体部外面は指頭圧が施され，煤が付着する。内面は横方向のハケが施される。



第14図　ＳＥ1201出土遺物実測図（２）（Ｓ：1/4）

63は体部外面に指頭圧の後にヘラミガキ，内面に間隔のあくヘラミガキが施される。

64は底部近くの体部破片であり，外面に回転ヘラケズリが施される。65は鎬蓮弁文を配する。

66は外面に平行タタキ，内面に指頭圧・ヘラナデが施される。

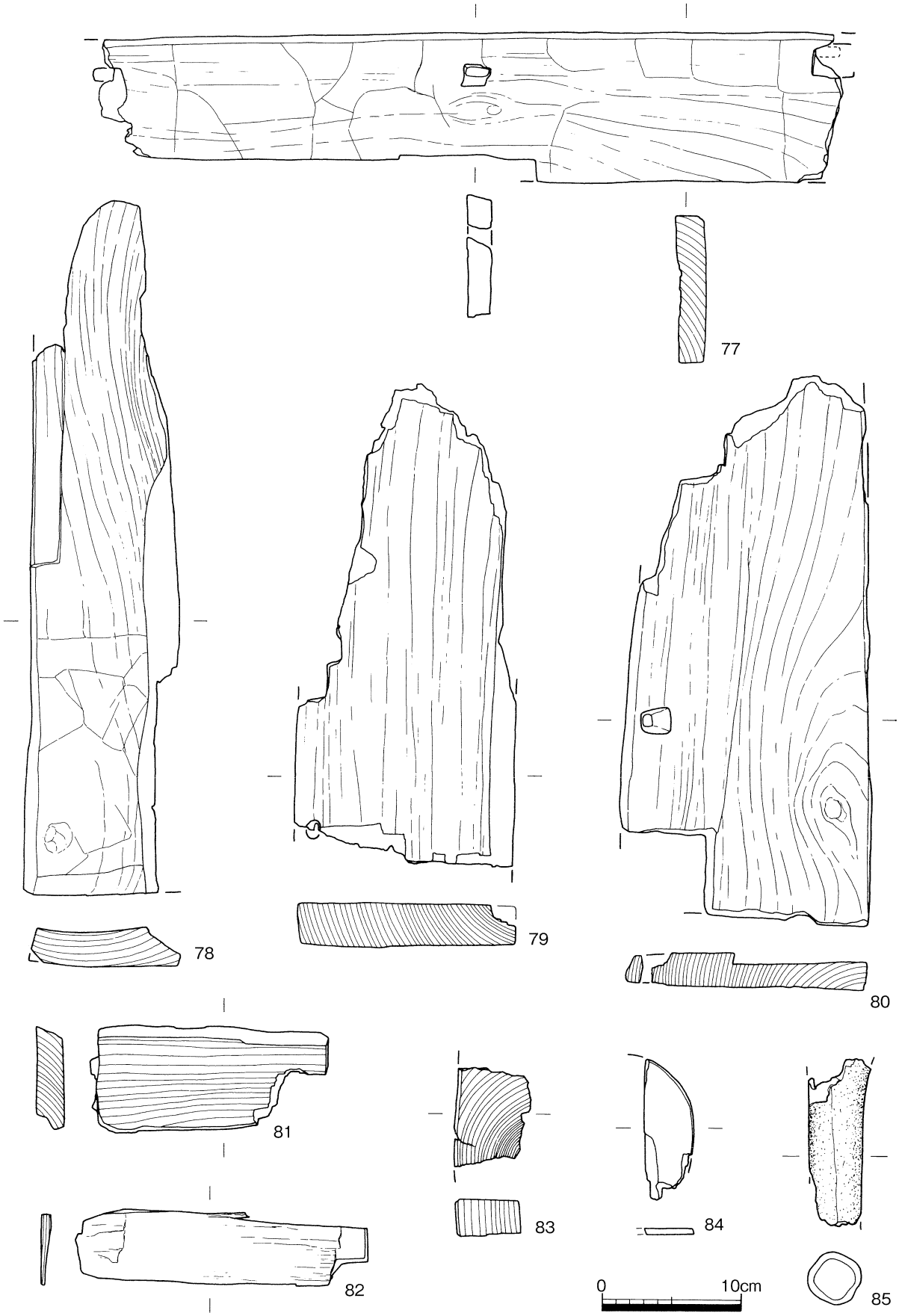
67は瓦当に巴文がある軒丸瓦で，尾は長く，珠文の間隔は狭い。68は玉縁の破片である。69は凸面に縄目叩き痕，凹面に布目が残存する。70は瓦当に梵字のある軒平瓦で，凹面は布目・コビキAの痕跡が残存し，凸面は横方向のヘラナデが施される。梵字は胎蔵界五仏を表し，無量寿如来・大日如来・開敷華王如来を意味する3文字が残存する。71は僅かに湾曲する道具瓦，72は鬼瓦の角である。

73は瓦製の円盤であり，不整な円形に加工する。

74は側面に溝を有する有溝土錘，75は管状土錘，76は細管状土錘である。

77～81は井戸枠の可能性がある板材であり，77・79～81は柾目材，78は板目材である。77・78は加工痕が明瞭に見られ，77・79・80は方形の孔が1ないし2個残存する。82は薄い板材であり，加工痕が見られる。83は切断面を有する。84は曲物の底板である。

第15図　ＳＥ1201出土遺物実測図（3）（S：1/4）



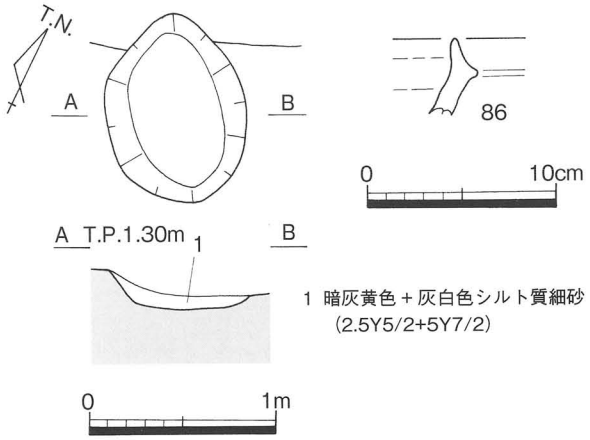
第16図　ＳＥ 1201 出土遺物実測図（４）（S：1/4）

4　土坑

ＳＫ 1201（第 17 図）

調査区の南端中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＸ 1202 を切る。検出した標高は 1.20 m前後である。平面形は不整な楕円形である。南北方向の長軸は 2.00 m，東西方向の短軸は 0.75 mを測る。検出面からの深さは 0.20 mである。底面は平坦である。埋土は暗灰黄色＋灰白色シルト質細砂である。所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，備前焼擂鉢（86）であり，口縁端部を上下に少し拡張する。



第 17 図　ＳＫ 1201 平・断面図及び出土遺物実測図
（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1202（第 18 図）

調査区中央において検出した土坑であり，単独で存在する。検出した標高は 1.10 m前後である。南半分は試掘トレンチにより削平される。残存する平面形は不整な円形であり，南北方向の直径は 1.04 m以上，東西方向は 1.07 mを測る。検出面からの深さは 0.10 mである。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄色＋黄褐色シルト質細砂である。出土遺物や埋土から所属時期は 17 世紀初頭であると考えられる。

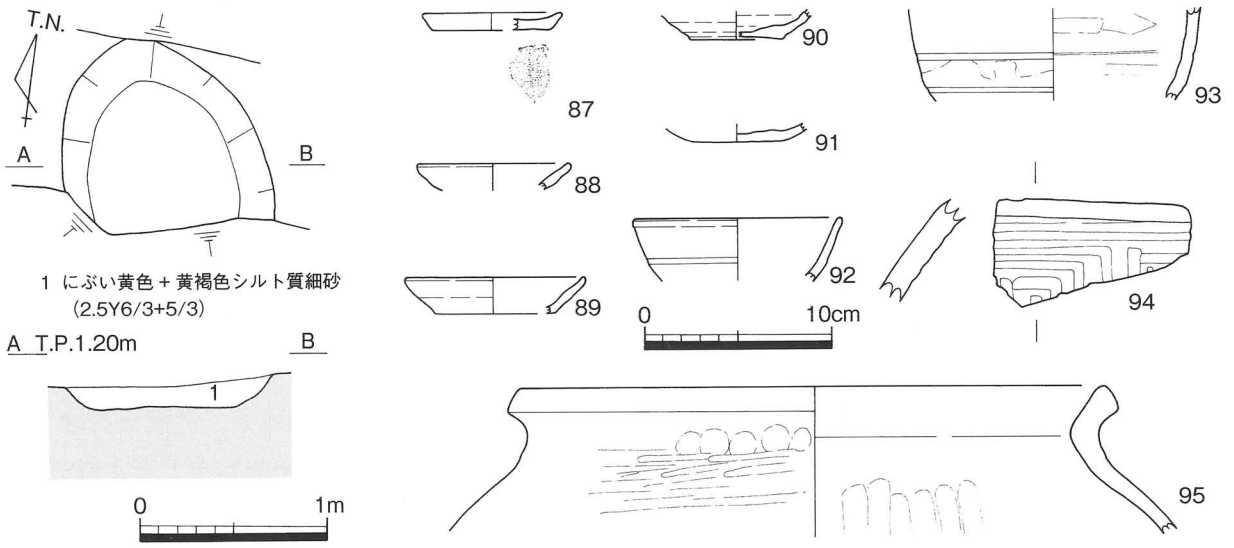
出土遺物は，土師質土器皿（87 ～ 89），同杯（90･91），陶器碗（92），同鉢（93･94），土師質土器甕（95）である。

87・88 は体部の短い形態の小皿であり，87 の底部は回転ヘラ切りの後にヘラナデが施される。89 は直線的な体部で，底部との境は明確である。

90 は体部の内外面にロクロ成形痕が明瞭に残存し，底部は回転糸切りが施される。91 は体部と底部の境が不明瞭であり，底部にはナデが施される。

92 は肥前系陶器碗で，外面に沈線を巡らす。93 は肥前系陶器鉢で，外面に浅い沈線を２本巡らし，内面にナデ・板ナデが施される。

95 は短く外反する口縁部で，体部外面は指頭圧，ヘラミガキ，内面は指頭圧，ナデが施される。

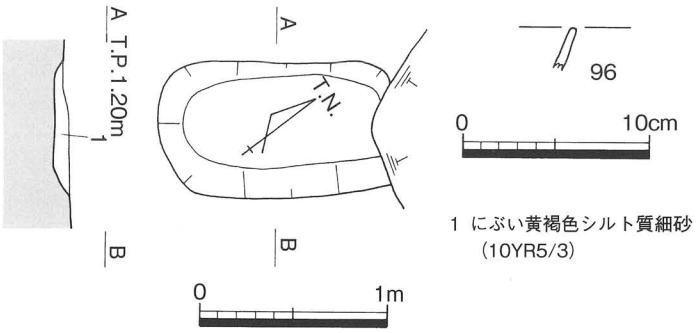


第 18 図　ＳＫ 1202 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1203（第 19 図）

調査区中央において検出した土坑であり，ＳＫ 1207 を切る。検出した標高は 1.00 ｍである。平面形は隅丸長方形であり，南北方向の長軸は 1.15 ｍ以上，東西方向の短軸は 0.70 ｍを測る。検出面からの深さは８㎝である。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂である。所属時期は 17 世紀前半である。

出土遺物は，肥前系磁器碗 (96) である。



第 19 図　ＳＫ1203 平・断面図及び出土遺物実測図）
（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1204（第 20 図）

調査区中央において検出した土坑であり，ＳＫ 1205・1208 に切られる。検出した標高は 0.95 ｍ前後である。平面形は不整な円形である。検出した規模は南北方向 0.80 ｍ，東西方向 0.74 ｍを測る。検出面からの深さは２㎝である。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。検出状況や他の遺構との重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，瓦器椀（97・98），数点の土師質土器破片がある。97・98 は口縁部が若干外反する器形で，体部外面に指頭圧と僅かなヘラミガキ，内面にヘラミガキが施される。

ＳＫ 1205（第 20 図）

調査区中央において検出した土坑であり，ＳＫ 1204・1206 を切り，ＳＫ 1208 に切られる。検出した標高は 0.92 ｍである。平面形は不整な隅丸方形であり，南北方向の長軸は 0.80 ｍ，東西方向の短軸は 0.50 ｍを測る。検出面からの深さは３～６㎝である。底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。検出状況や他の土坑との重複関係から，所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

ＳＫ 1206（第 20 図）

調査区中央において検出した土坑であり，ＳＫ 1205・1208，ＳＸ 1202 に切られる。検出した標高は 0.88 ｍ前後である。本遺構の北側は近代の撹乱により消滅し，さらに他の遺構に切られるため平面形の全容は不明であるが，残存する形から円形であると考えられる。検出した規模は，南北方向 1.17 ｍ，東西方向 1.34 ｍを測る。検出面からの深さは４～８㎝である。底面は北方向にやや低くなるが，ほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。検出状況や他の土坑との重複関係から，所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

ＳＫ 1207（第 20 図）

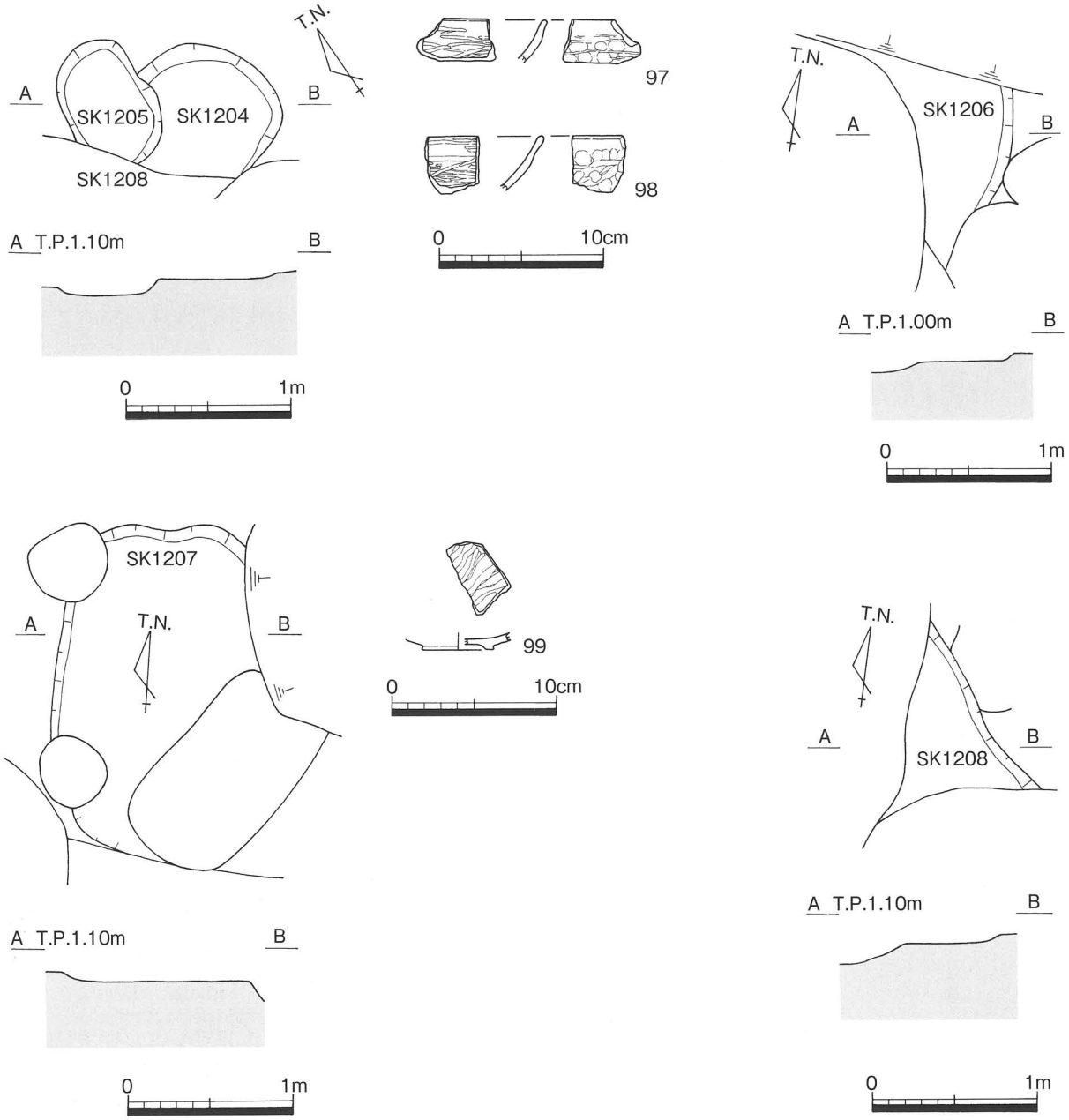
調査区中央において検出した土坑であり，ＳＫ 1203，ＳＰ 1221・1222 に切られる。検出した標高は 0.93 ～ 0.96 ｍである。本遺構の北東側は近代の撹乱により消滅し，さらに南側は試掘トレンチにより削平される。残存する形から平面形は隅丸長方形であると考えられる。検出した規模は，南北方向の長軸が 1.98 ｍ，東西方向の短軸が 1.25 ｍを測る。検出面からの深さは３～８㎝である。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂である。重複関係から所属時期は 17 世紀前半と考えられる。

図化できた出土遺物は，瓦器椀（99）だが，その他に数点の土師質土器破片がある。99 は低い高台で，内面にヘラミガキが施される。

ＳＫ 1208（第 20 図）

調査区中央において検出した土坑であり，ＳＫ 1204・1205・1206 を切り，ＳＸ 1202 と第 1 遺構面ＳＥ 1003 に切られる。検出した標高は 0.96 m前後である。本遺構の大部分はＳＸ 1202 とＳＥ 1003 に切られ，北側の一部のみ残存する。このために平面形の全容は不明であるが，検出した北壁は直線的であり，大規模な遺構であると想定できる。検出した規模は，南北方向 1.10 m，東西方向 0.84 mを測る。検出面からの深さは 0.10 mである。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。検出状況や他の土坑との重複関係から，所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。



第 20 図　ＳＫ 1204 ～ 1208 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1209（第 21 ～ 23 図）

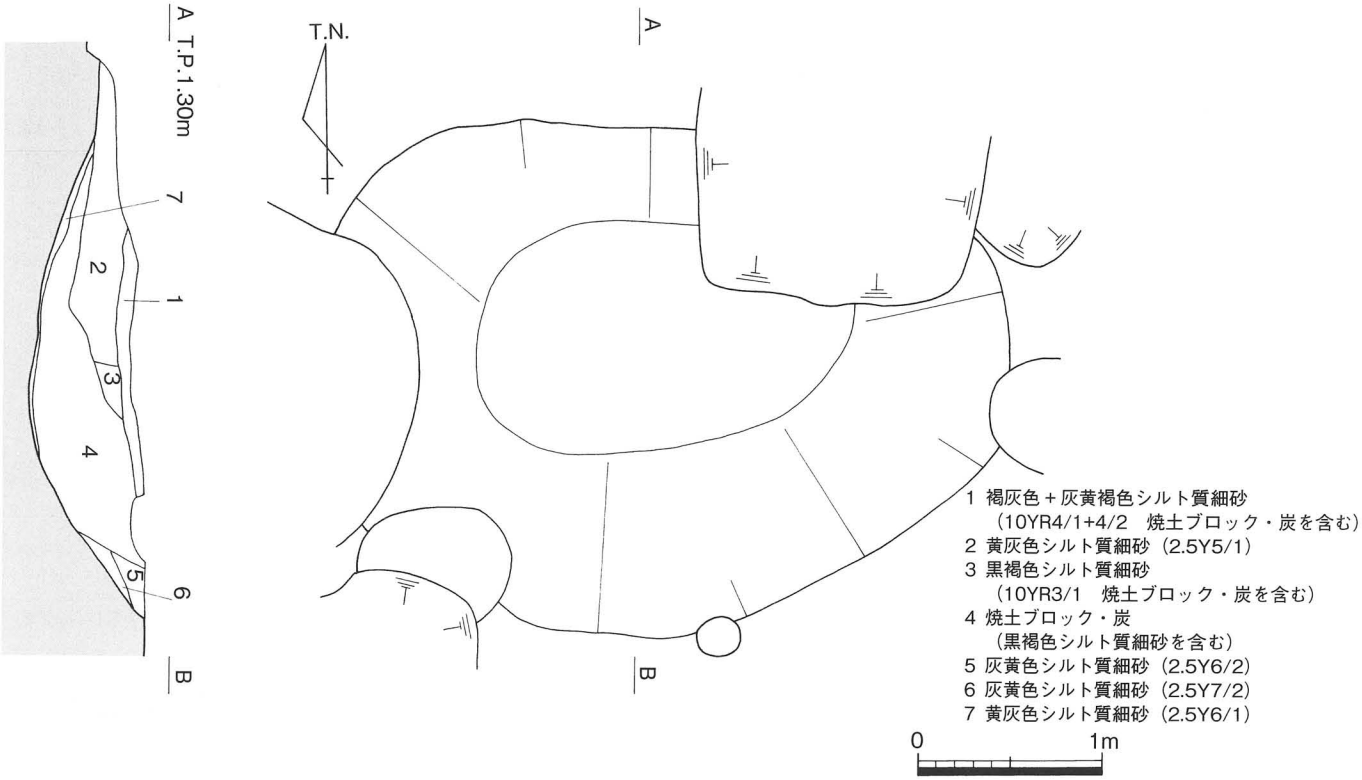
調査区東端において検出した土坑であり，ＳＰ 1202 ～ 1210，第１遺構面ＳＥ 1002 に切られる。本遺構の北東隅は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 1.15 ｍである。平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。ＳＥ 1002 に切られるため東西方向本来の規模は確定できないが，検出した東西方向の長軸は 3.15 ｍ，南北方向の短軸は 2.72 ｍを測る。底面の平面形は上場と同様に東西方向に長い楕円形を呈し，その規模は 2.05 ｍ× 1.25 ｍを測る。底面は中央部が若干低くなる。掘り方は非常に緩やかな傾斜である。埋土は７層に細分でき，第１層は褐灰色＋灰黄褐色シルト質細砂，第２層は黄灰色シルト質細砂，第３層は黒褐色シルト質細砂，第４層は黒褐色シルト質細砂を含む焼土ブロック・炭，第５・６層は灰黄色シルト質細砂，第７層は黄灰色シルト質細砂である。第１・３層は焼土ブロック・炭を含み，さらに第４層焼土ブロック・炭が厚く堆積しており，本遺構は火災による焼土を埋めたと考えられる。所属時期は出土遺物や重複関係から 17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，陶器皿（100），同蓋（101），同擂鉢（102），同甕（103・104），土師質土器擂鉢（105），同足釜（106・107），同鍋（108），同甕（109），同皿（110 ～ 116），同杯（117 ～ 121），同火舎（122），青磁碗（123），須恵器高杯（124），軒丸瓦（125），丸瓦（126），瓦製円盤（127），砥石（128），鉄製品（129）である。

100 は肥前系陶器皿であり，口縁部が僅かに外反する。高台は非常に小さく，体部外面下半は露胎である。101 は軟質施釉陶器であり，外面に細い沈線を巡らす。

102 は備前焼擂鉢で，内面に５本一単位の卸目が見られる。体部外面は回転ナデが施される。103・104 は備前焼甕であり，103 の口縁端部は折り返され，玉縁状口縁となる。104 の外面は回転ナデ・ナデ，内面は回転ナデ・板ナデが施される。

105 は口縁部が肥厚し，内面に４本一単位の浅い卸目が見られる。106・107 は鍔からの立ち上がりがやや長い器形であり，106 の内面は横方向のハケが施される。108 は口縁部内面と口縁端部外面に横方



第 21 図　ＳＫ 1209 平・断面図　（S：1/40）

向の粗いハケが施される。109は２本の細い沈線の間に花文状の刻印が見られる。

110～116は口径８～10cmを測り，体部と底部の境が明確である。110の底部は回転ヘラ切りの後に回転ヘラケズリ，内面に指ナデが施される。111の底部は回転ヘラ切りの後に板目が施され，口縁端部に煤が付着する。114の底部は回転ヘラ切りの後にナデ，115は回転ヘラ切りが施される。

117～121は底部であり，118の底部は回転ヘラ切りの後にナデ，119・120は内外面にロクロ成形痕が明瞭に見られ，底部に回転ヘラ切りの後にナデ，120の底部は板目・回転ヘラナデが施される。

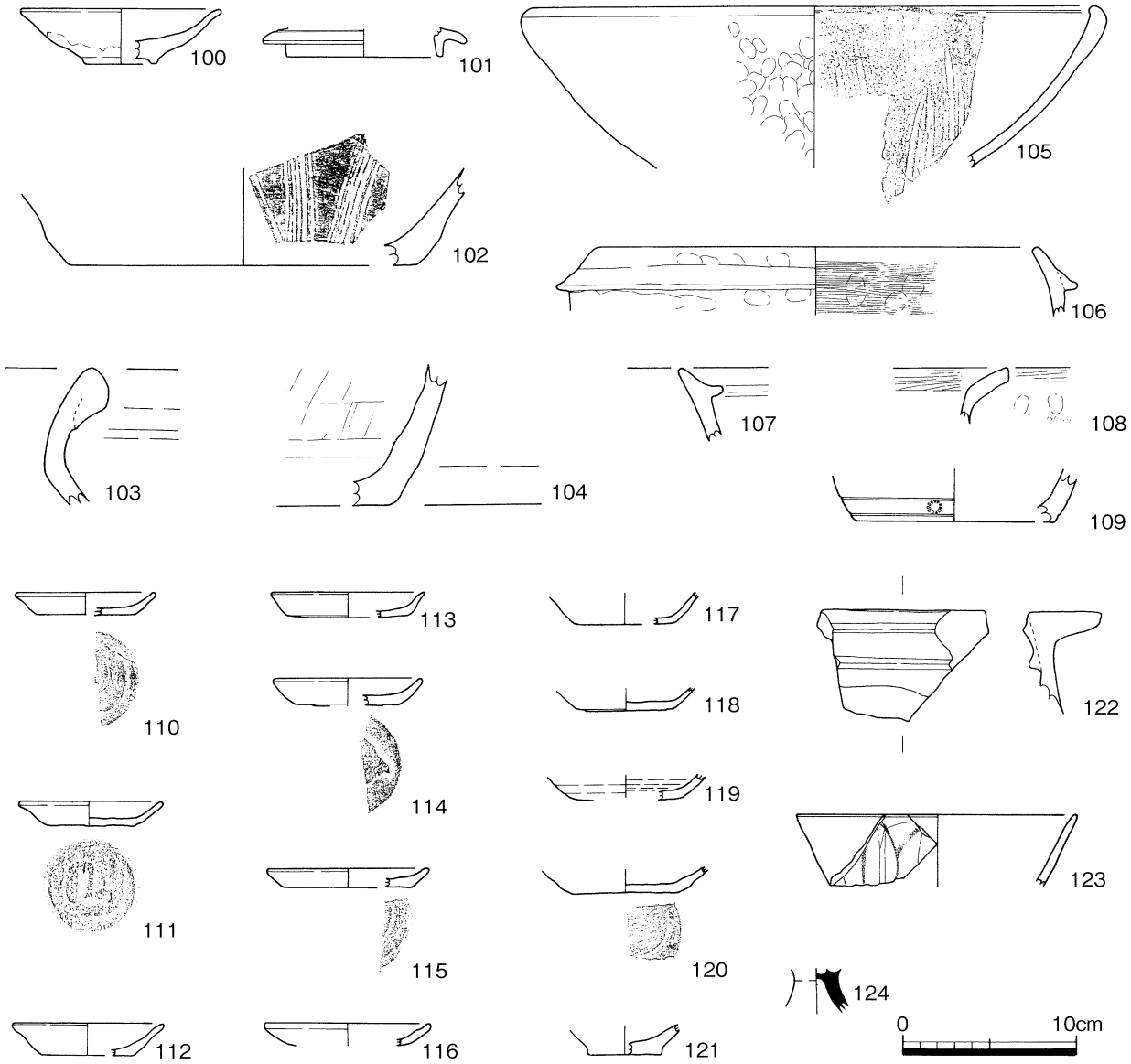
122は口縁端部が外側に大きく張り出し，内面に２本の粘土帯を貼り付ける。

123は鎬蓮弁文を配する青磁碗である

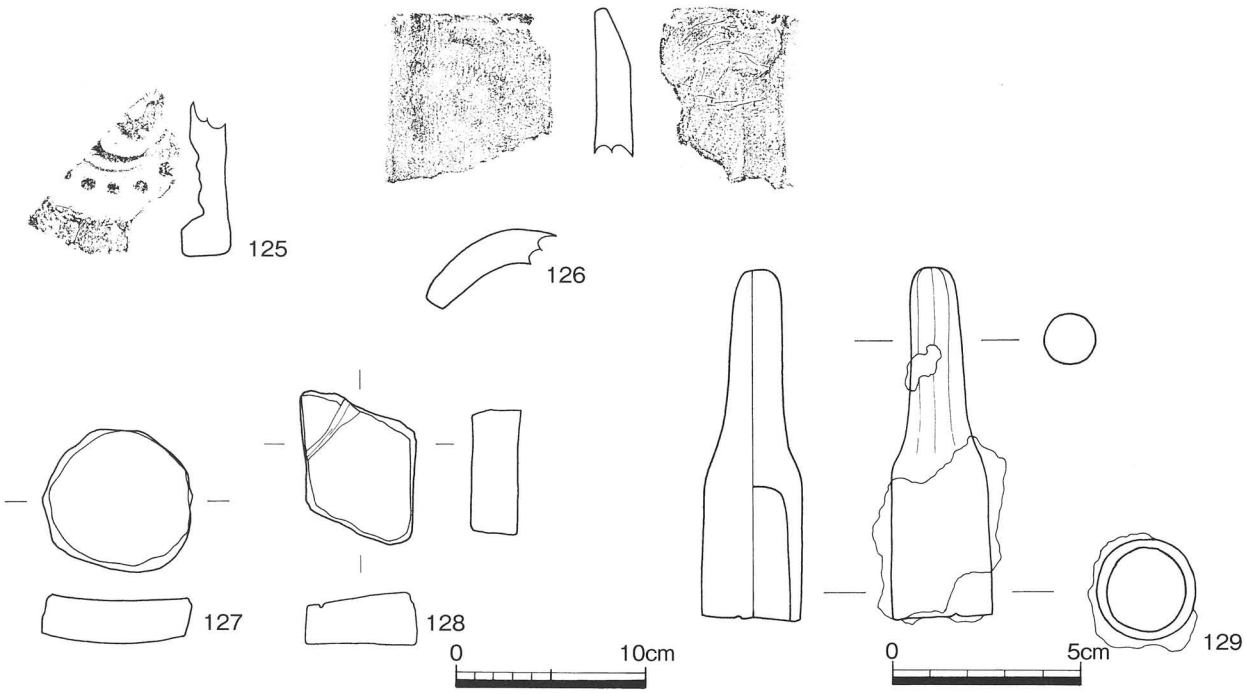
125は瓦当に巴文がみられる軒丸瓦であり，尾は長く，珠文の間隔は狭い。瓦当裏面はナデが施される。126は凸面に縄叩き痕，凹面に布目が残存する。127は瓦を円形に加工する。

128は砂岩の砥石であり，２面に使用痕が見られる。

129は用途不明の鉄製品で，下半はソケット状の中空である。



第22図　ＳＫ1209出土遺物実測図（１）（S：1/4）



第23図　ＳＫ 1209 出土遺物実測図（２）（S：1/4・1/2）

ＳＫ 1210（第 24 図）

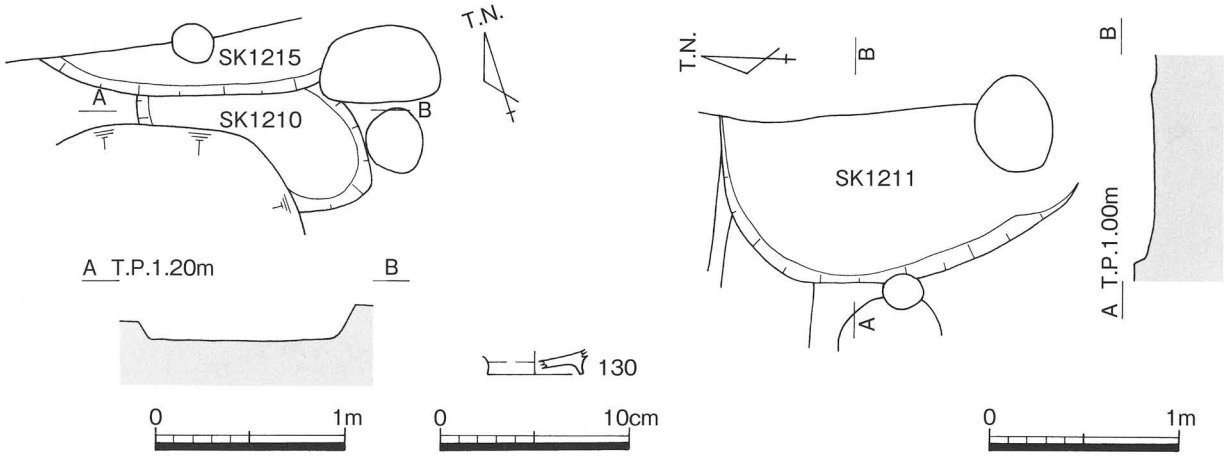
調査区北西隅において検出した土坑であり，ＳＫ 1215，ＳＰ 1263 に切られる。検出した標高は 1.05 mである。本遺構の北側は近代の撹乱により消滅する。平面形は東西に長い楕円形であり，東西方向の長軸は 1.32 mを測る。検出面からの深さは 0.17 mである。底面はほぼ平坦である。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。出土遺物と重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，須恵質土器椀 (130) であるが，ほかに土師質土器と陶磁器の小片が出土した。

ＳＫ 1211（第 24 図）

調査区北西隅において検出した土坑であり，ＳＤ 1201 を切り，ＳＤ 1202，ＳＰ 1279・1280 に切られる。検出した標高は 0.95 mである。平面形は不整な円形であり，検出した南北方向は 1.92 m，東西方向は 0.88 mを測る。検出面からの深さは５～ 12cmである。底面は北方向に緩やかに下がる。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。出土遺物と重複関係から所属時期は 17 世紀前半と考えられる。

出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。



第24図　ＳＫ 1210・1211・1215 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1212（第 25 図）

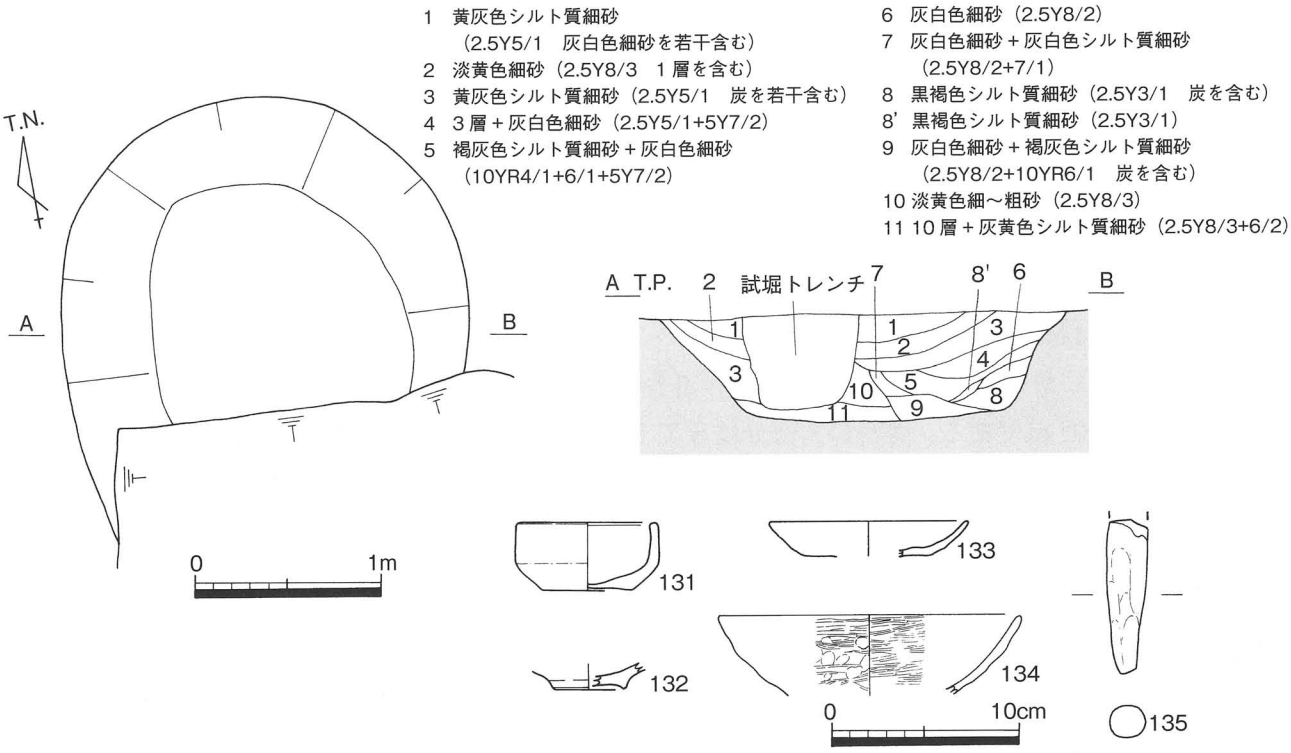
調査区北西隅において検出した土坑であり，単独に存在するが，南側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 0.94 ～ 1.00 ｍである。平面形は円形であり，検出した南北方向の長さは 1.68 ｍ，東西方向の直径は 2.18 ｍを測る。検出面からの深さは 0.57 ｍである。底面はほぼ平坦である。掘り方は緩やかな傾斜であり，断面は逆台形を呈する。埋土は 10 層に細分でき，その堆積過程は次の３段階になると考えられる。まず，最下層の第 10・11 層が西方から堆積し，次に第４～９層が短期間に堆積し，最後に第１～３層が全体を覆うようにレンズ状に堆積する。出土遺物や埋土から所属時期は，17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，陶器鉢（131），土師質土器椀（132），同杯（133），同足釜（135），瓦器椀（134）である。

131 は軟質施釉陶器であり，体部下半は露胎である。底部は回転ヘラ切りが施される。

132 は低い高台を有し，内面・底面はナデが施される。133 は口径 10.8cmを測り，底部に回転ヘラ切りの後にナデが施される。体部内外面にロクロ成形痕が明瞭に残る。

134 は体部外面に指頭圧，ヘラミガキ，内面に細かいヘラミガキが施される。

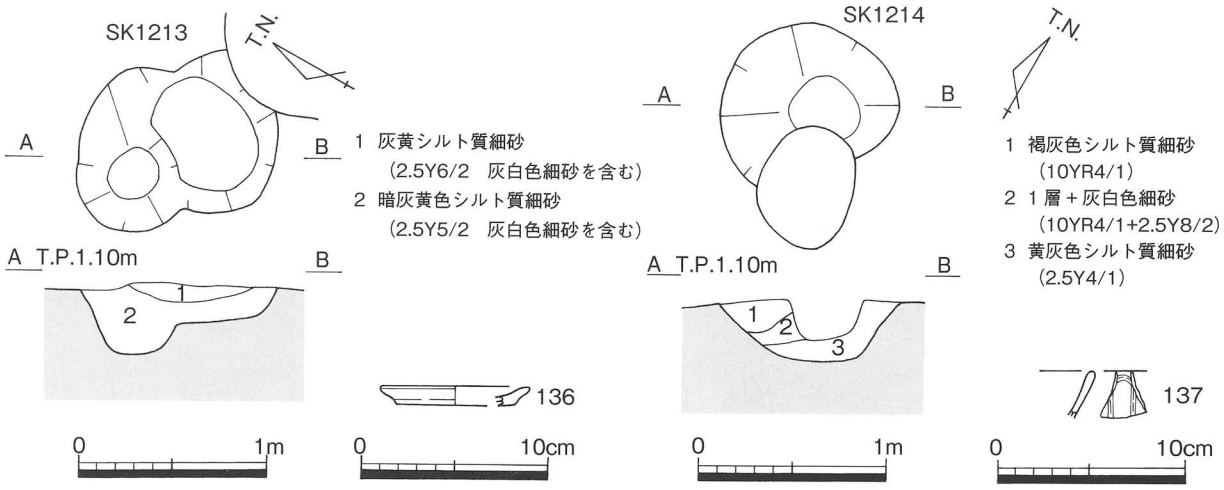


第 25 図　ＳＫ 1212 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1213（第 26 図）

調査区北西側において検出した土坑であり，ＳＫ 1214 に切られる。検出した標高は 1.00 ｍ前後である。平面形は中央に抉りのある楕円形であり，２基の土坑が合体したような形である。南北方向の長軸は 1.07 ｍ，東西方向の短軸は 0.85 ｍを測る。掘り方は緩やかな傾斜で，底面は段を有し，北西寄りに最深部がある。検出面から最深部までの深さは 0.37 ｍを測り，最深部と段部の比高差は 0.10 ｍである。段部はほぼ平坦であり，底面は狭い。埋土は２層に分層でき，第１層は灰白色細砂を含む灰黄色シルト質細砂，第２層は灰白色細砂を含む暗灰黄色シルト質細砂であり，その中で第２層が大部分を占める。出土遺物や重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，土師質土器皿（136）のみであるが，数点の土師質土器と陶磁器の破片も出土する。136 は非常に体部の短い形態の小皿であり，底面にナデが施される。



第26図　ＳＫ 1213・1214 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1214（第 26 図）

調査区北西側において検出した土坑であり，ＳＤ 1204，ＳＫ 1213 を切り，ＳＰ 1286 に切られる。検出した標高は 1.05 m前後である。平面形は不整な円形であり，直径は 0.96 mを測る。底面は東側にやや片寄る。検出面からの深さは 0.31 mを測る。底面は狭く，土坑断面は逆台形を呈する。埋土は３層に分層でき，第１層は褐灰色シルト質細砂，第２層は褐灰色シルト質細砂＋灰白色細砂，第３層は黄灰色シルト質細砂である。出土遺物や重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，青磁碗（137）のみであるが，数点の土師質土器と陶磁器の破片も出土する。137 は口縁部の小片であり，口径は不明である。外面に鎬蓮弁文を配する。

ＳＫ 1215（第 24 図）

調査区北西隅において検出した土坑であり，ＳＤ 1204，ＳＫ 1210 を切り，ＳＸ 1208 に切られる。検出した標高は 1.02 mである。遺構の大部分はＳＸ 1208 に切られており，平面形は不明である。検出した南北方向は0.36 mを測るのみである。検出面からの深さは３cmである。底面は北方向に緩やかに下がる。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂の単一層である。検出状況や重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

5　柱穴

ＳＰ 1201（第 27 図）

調査区中央において検出した柱穴であり，ＳＸ 1201 と重複する。検出した標高は 1.10 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.20 m，深さは８cmを測る。埋土は浅黄色シルト質細砂である。

出土遺物は，鉄釘（138）であり，断面は方形である。

ＳＰ 1221（第 27 図）

調査区中央において検出した柱穴であり，ＳＫ 1207 を切る。検出した標高は 0.98 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.42 m，深さ６cmを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂＋灰白色細砂である。

出土遺物は，龍泉窯系青磁碗（139）であり，見込みに片切彫りで劃花文を描く。

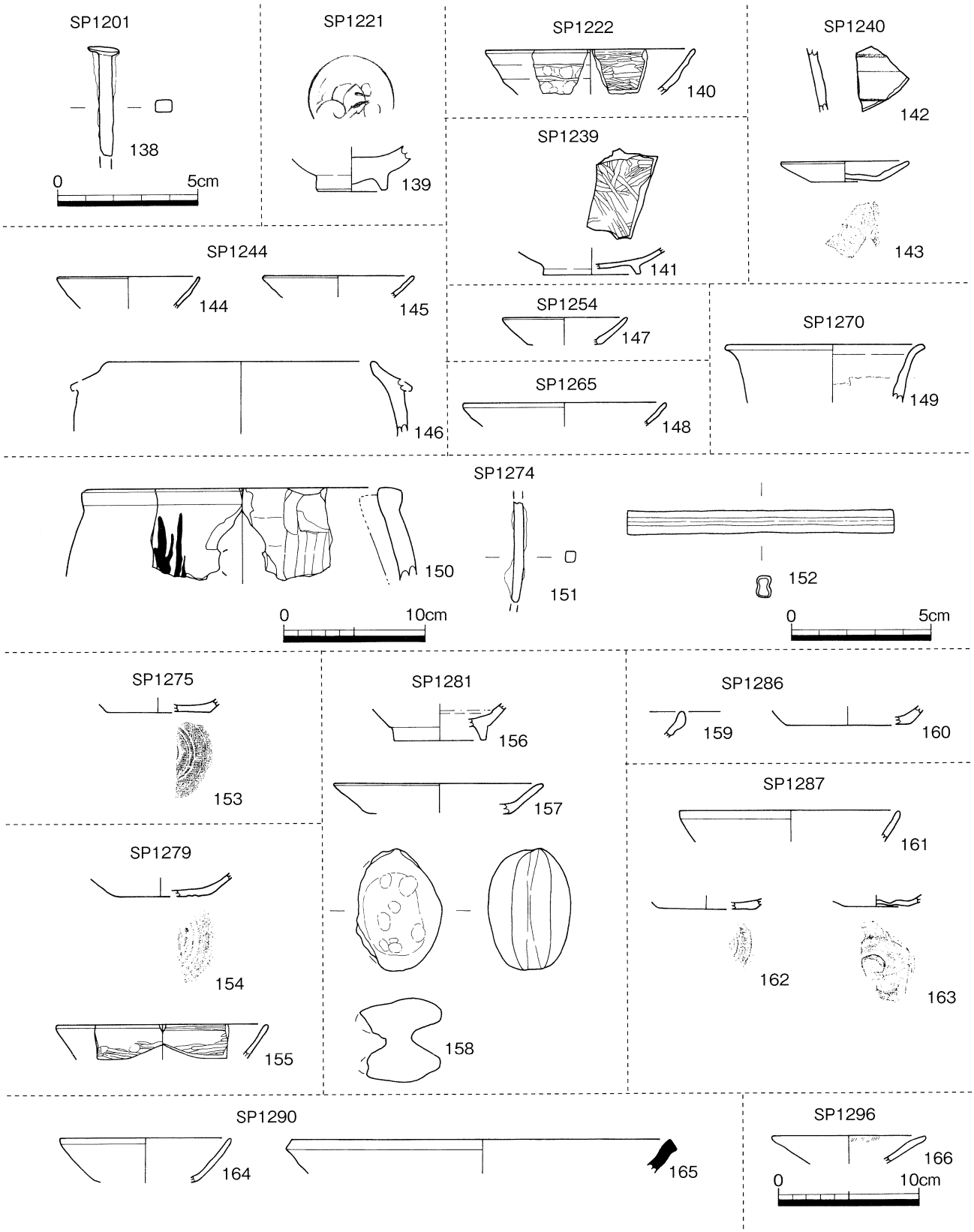
ＳＰ 1222（第 27 図）

調査区中央において検出した柱穴であり，ＳＫ 1207 を切る。検出した標高は 0.93 mである。平面形は不整な円形を呈し，直径は 0.46 × 0.48 m，深さは５cmを測る。埋土は黒褐色＋灰黄褐色シルト質細砂＋灰白色細砂である。出土遺物は，瓦器椀（140）で，内面に細かなヘラミガキが施される。

ＳＰ 1239（第 27 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，単独で存在する。検出した標高は 1.06 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.25 m，深さは 0.20 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は，瓦器椀（141）で，やや高い高台を持つ。内面はヘラミガキが施される。



第 27 図　第２遺構面ＳＰ出土遺物実測図（S：1/4・1/2）

ＳＰ 1240（第 27 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，ＳＤ 1204 を切り，ＳＰ 1299 に切られる。検出した標高は 1.04 mである。平面形は楕円形を呈し，直径は 0.40 × 0.70 m，深さは 0.10 mを測る。埋土は灰黄褐色＋淡黄色シルト質細砂である。

出土遺物は，陶器甕（142），土師質土器杯（143）である。143 は，ＳＰ 1244 出土の破片と接合する。底部は回転ヘラ切りの後に板目，内面にナデが施される。

ＳＰ 1244（第 27 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，ＳＸ 1207 を切る。検出した標高は 1.01 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.34 m，深さは 0.16 mを測る。埋土はにぶい黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は，土師質土器杯（144・145），同足釜（146）である。

ＳＰ 1254（第 27 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，単独で存在する。検出した標高は 1.03 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.25 m，深さは 0.10 mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂である。

出土遺物は，土師質土器杯（147）である。

ＳＰ 1265（第 27 図）

調査区北西隅において検出した柱穴であり，ＳＸ 1208 を切る。柱穴の北半分は調査区外にかかる。検出した標高は 1.02 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.48 m，深さは 9 ㎝を測る。埋土は褐灰色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は，須恵質土器杯（148）である。

ＳＰ 1270（第 27 図）

調査区北西隅において検出した柱穴であり，ＳＤ 1204 を切り，ＳＰ 1285 と重複する。検出した標高は 1.05 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.42 m，深さは 0.10 mを測る。埋土は灰白色粗砂を含む灰黄褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は，肥前系陶器壺（149）である。

ＳＰ 1274（第 27 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，ＳＤ 1204 を切り，ＳＰ 1273 と重複する。検出した標高は 1.00 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.25 m，深さは 0.12 mを測る。埋土はにぶい黄色シルト質細砂である。

出土遺物は，土師質土器火鉢（150），鉄釘（151），青銅品（152）である。150 は外面に墨書が見られ，内面に器受用の突起がある。151 は断面方形である。152 は用途不明で，断面が 8 の字形を呈する。

ＳＰ 1275（第 27 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，ＳＤ 1204 を切る。検出した標高は 1.04 mである。平面形は楕円形を呈し，直径は 0.30 × 0.42 m，深さは 0.14 mを測る。埋土は灰白色細砂を多量に含むにぶい黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は，土師質土器杯（153）で，底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。

ＳＰ 1279（第 27 図）

調査区北西隅において検出した柱穴であり，ＳＤ 1202，ＳＫ 1211 を切る。検出した標高は 0.96 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.40 m，深さは 0.13 mを測る。埋土は淡黄色シルト質細砂である。

出土遺物は，土師質土器杯（154），黒色土器杯（155）である。154 は底部に回転ヘラ切りが施される。155 は黒色土器Ａ類で，外面に指頭圧とヘラミガキ，内面にヘラミガキが施される。

ＳＰ 1281（第 27 図）

調査区北西隅において検出した柱穴であり，ＳＰ 1280 に切られ，ＳＰ 1287 と重複する。検出した標高は 0.98 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.58 m，深さは 0.13 mを測る。埋土は黄褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は，磁器碗（156），土師質土器杯（157），有溝土錘（158）である。156 は外面露胎であり，高い高台を持つ。157 は 15cmの口径に対して低い器高で，底部はナデが施される。

ＳＰ 1286（第 27 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，ＳＤ 1204，ＳＫ 1214 を切る。検出した標高は 1.05 mである。平面形は楕円形を呈し，直径は 0.56 × 0.40 m，深さは 0.10 mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は，白磁碗（159），土師質土器杯（160）である。159 は玉縁状の口縁部である。160 は底部に回転ヘラケズリが施され，内面には黒漆が付着する。

ＳＰ 1287（第 27 図）

調査区北西隅において検出した柱穴であり，ＳＰ 1281 と重複する。検出した標高は 0.94 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.70 m，深さは 0.44 mを測る。埋土は黄灰色シルト質細砂＋灰白色細砂＋灰白色シルトである。

出土遺物は，黒色土器椀（161），土師質土器杯（162・163）である。161 は黒色土器Ａ類であり，162 の底部は回転ヘラケズリ，163 は回転ヘラ切りの後にナデが施される。

ＳＰ 1290（第 27 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，ＳＰ 1232･1233 に切られる。検出した標高は 1.01 mである。平面形は楕円形を呈し，直径は 0.84 × 0.65 m，深さは 0.16 mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂の単一層である。出土遺物は，土師質土器杯（164），須恵器甕（165）である。

ＳＰ 1296（第 27 図）

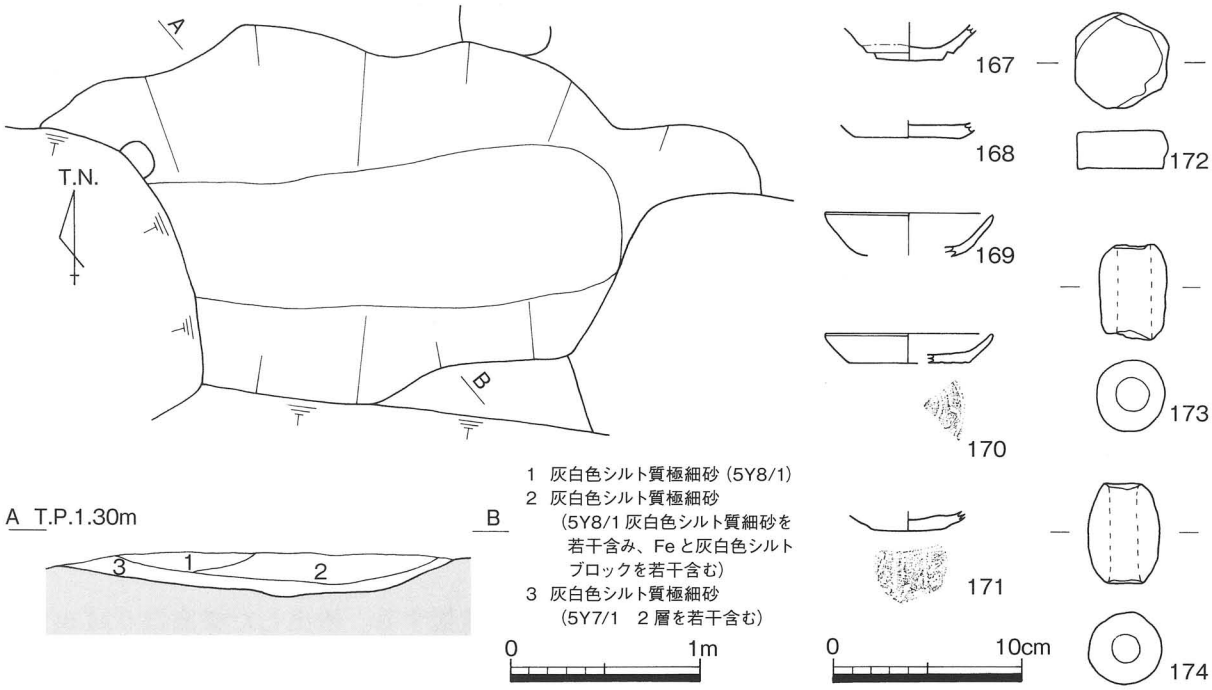
調査区南西側において検出した柱穴である。検出した標高は 1.10 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.22 m，深さは 5cmを測る。出土遺物は，土師質土器杯（166）である。

6　性格不明遺構

ＳＸ 1201（第 28 図）

調査区中央やや東寄りにおいて検出した落ち込みであり，ＳＰ 1201・1216 と重複する。本遺構の東端は第 1 遺構面のＳＫ 1005，南側は第 1 遺構面のＳＤ 1001 に切られ，西端は試掘トレンチにより消滅する。検出した標高は 1.15 mである。平面形は東西方向に長軸を持つ不整な楕円形を呈する。検出した長軸の長さは 3.10 mを測り，南北方向の短軸は 1.95 mを測る。底面は上端と同様で東西方向に長い平面形であり，検出した東西方向の長さは 2.30 m，南北方向は 0.70 mを測る。検出面からの深さは 0.23 mを測る。掘り方は非常に緩やかである。底面は西方向に若干低くなる。埋土は色調や包含物の若干違う３層の灰白色シルト質極細砂である。所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

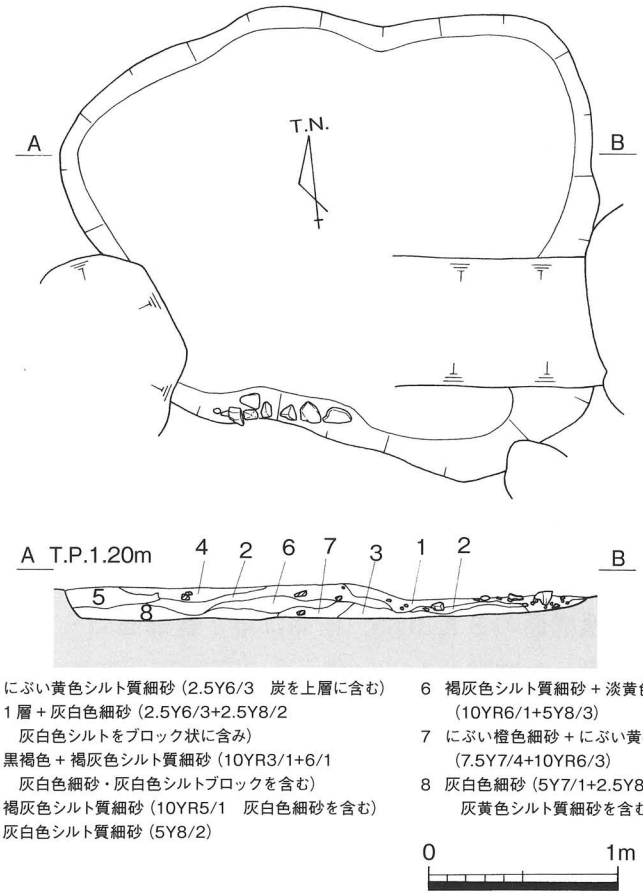
出土遺物は，陶器碗（167），同皿（168），土師質土器皿（169 ～ 171），瓦製円盤（172），土錘（173・174）である。167 は削り出し風の高台で，外面下半は露胎である。168 は底部に回転ヘラケズリが施される。169 は直線的な体部で，体部と底部の境は不明瞭である。170 は体部の短い形態の小皿であり，底部は回転ヘラ切りが施される。171 の底部は静止糸切りの後にヘラケズリが施される。172 は瓦を円形に加工する。173・174 は管状土錘であり，中央に径の大きな孔を穿つ。



第28図　ＳＸ 1201 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＸ 1202（第 29 ～ 31 図）

調査区中央やや西寄りにおいて検出した落ち込みであり，ＳＫ 1201 と第１遺構面のＳＥ 1003 に切られ，ＳＫ 1206・1208 を切る。本遺構の南東隅は試掘トレンチにより，南西隅は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 0.86 ～ 1.16 m である。平面形は北側に長辺を持つ不整な台形を呈する。長辺の長さは約 2.60 m，短辺は約 2.20 m であり，南北方向の長さは約 2.25 m を測る。検出面からの深さは 0.46 m を測り，底面はほぼ平坦である。南西隅付近の壁面に沿って拳大～人頭大の石が並んで検出された。埋土は８層に細分でき，その堆積状態は複雑であり，上層の第１・２層には礫や小石を多量に含む。出土遺物や重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

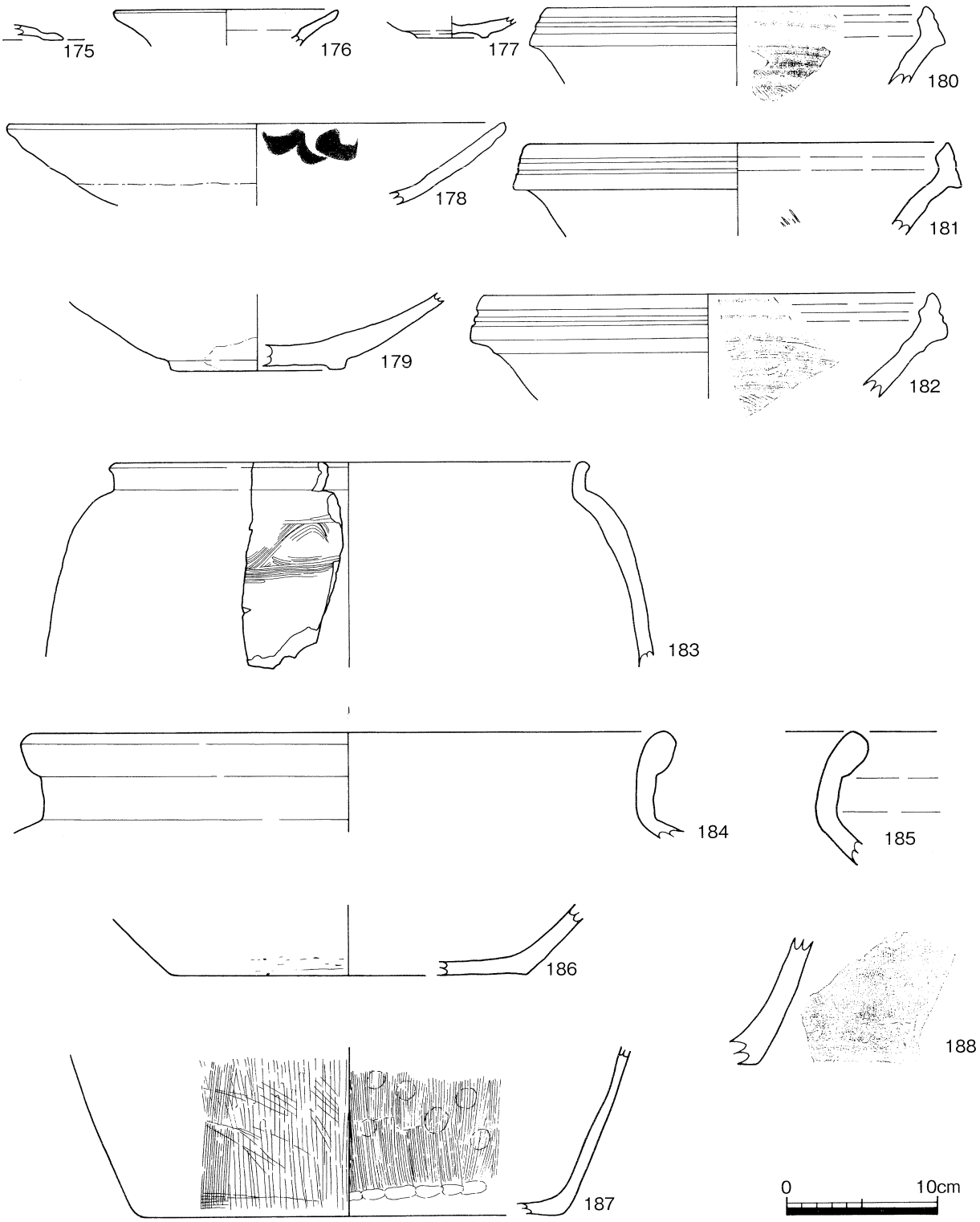


第29図ＳＸ 1202 平・断面図（S：1/40）

出土遺物は，陶器蓋（175），同皿（176），磁器皿（177），陶器大皿（178），陶器鉢（179），同擂鉢（180 ～ 182），同甕（183 ～ 188），土師質土器甕（189・190），同足釜（191・192），同皿（193 ～ 195），同杯（196 ～ 200），同焼塩壺（201），同椀（202），弥生土器高杯（203），イイダコ壺（204），土錘（205），軒丸瓦（206 ～ 208），獅子瓦（209）である。

175は蓋の小片である。176は肥前系陶器で，体部で折れ，口縁端部が内方向に先細る。177は肥前系磁器で，内面に施釉される。低い高台であり，畳付は静止ヘラ切りが施される。178は肥前系陶器であり，直線的な体部の外面下半は露胎である。179は肥前系陶器で，扁平な高台を持つ。

180～182は備前焼擂鉢で，口縁部を上下に拡張し，凹線が2本みられる。卸目は斜め方向に施され

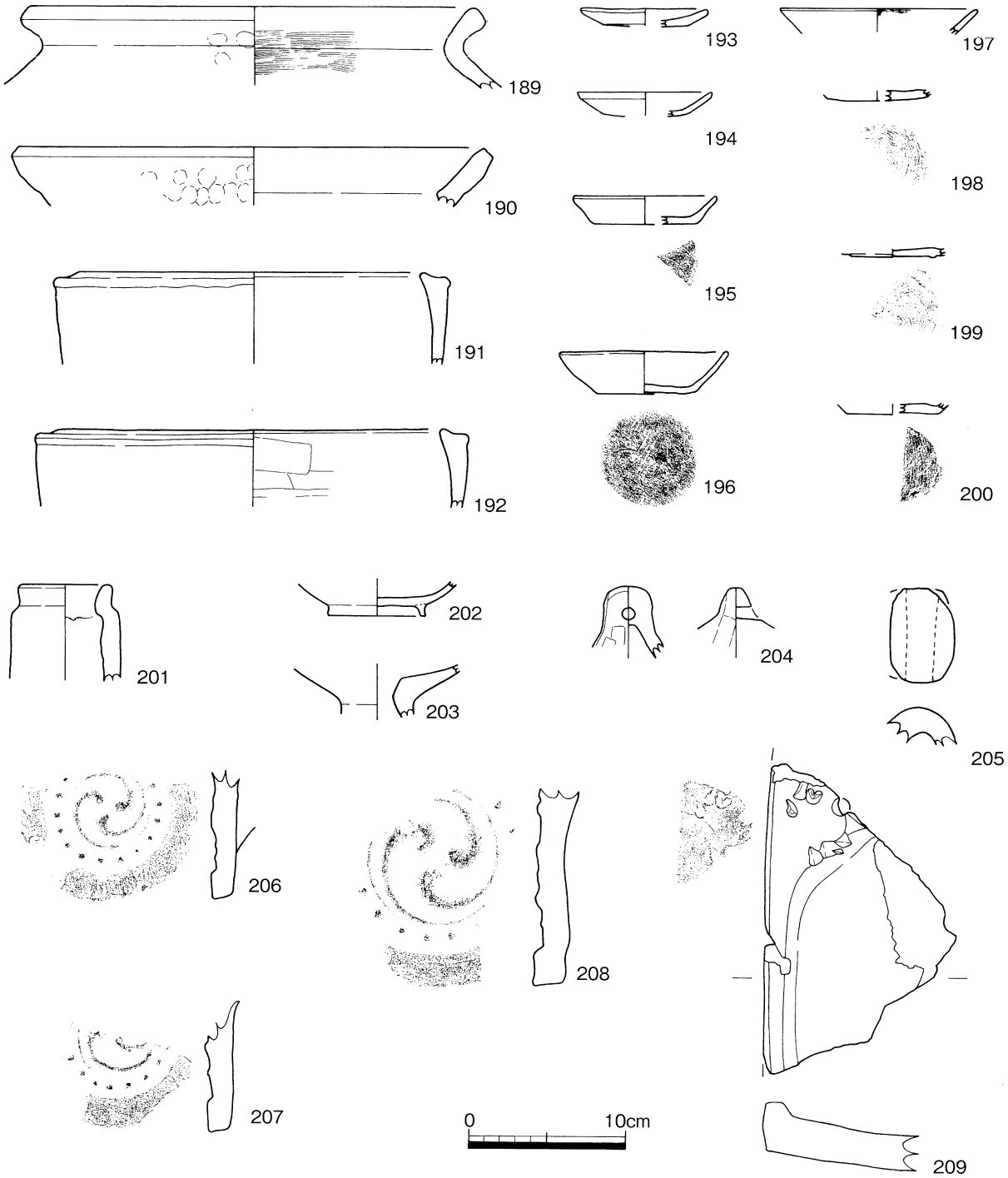


第30図　SX 1202 出土遺物実測図（1）（S：1/4）

る。183 ～ 188 は備前焼甕である。183 は口縁部が短く直立し，肩部外面に櫛描直線文と波状文がある。184・185 は大甕の口縁部であり，口縁部は直立し，口縁端部は外側に拡張する。186 ～ 188 は平底の底部であり，186 の外面にヘラケズリが施され，187 は外面にヘラナデ，内面に指頭圧・縦方向のハケ，188 は外面にヘラナデが施される。

189 は短く外半する口縁部で，口縁端部が若干肥厚する。体部内面は横方向のハケが施される。190 の口縁端部は角ばり，外面に指頭圧が残存する。191・192 は内傾する口縁部の外面直下に鍔が付く。

193 は体部の短い小皿であり，底部は回転ヘラナデが施される。194・195 は体部がやや長い小皿で，194 の底部はナデ，195 は回転糸切りが施される。



第 31 図　S X 1202 出土遺物実測図（2）（S：1/4）

196は口径10.7cmを測り，底部は板目の後にナデ，内面に指ナデが施される。197は口縁端部に煤が付着する。198・199の底部は回転糸切り，200は静止糸切りが施される。202はやや高い高台を持ち，底部は指頭圧・静止ヘラケズリ・ヘラナデが施される。

201の口縁部は体部から屈曲し直立する。板作り成形であり，外面はヘラナデ，内面は部分的なヘラナデが施される。

204はイイダコ壺の上部破片である。205は直径3cmの管状土錘である。

206～208は瓦当に巴文のある軒丸瓦であり，瓦当裏面にヘラナデが施される。206は巴頭部が丸みを持ち，僅かにくびれを有し，尾はやや短く，珠文の間隔は狭い。207は206の巴文とほぼ同様であるが，尾がやや長い。208は巴が太く，尾は長い。珠文の間隔は広い。

209は凹面に梵字の刻印があるが，一部分のみの残存であるため意味は不明である。

ＳＸ 1203（第32図）

調査区南東隅において検出した落ち込みであり，ＳＰ 1202・1203，ＳＫ 1209と重複する。本遺構の南側は第1遺構面ＳＤ 1001に切られ，東端と中央部は近代の攪乱により消滅する。検出した標高は1.09～1.16ｍである。本遺構はＳＤ 1001に大部分を切られ，北端部のみの検出であり平面形は不明である。検出できた東西方向の長さは5.75ｍ，南北方向の長さは0.60ｍを測る。最深部は検出した平面形の東端に位置し，検出面からの深さは0.28ｍを測る。埋土は黄灰色シルト質細砂＋灰白色細砂である。遺物は古い要素を示すが，埋土や重複関係から所属時期は17世紀前半と考えられる。

出土遺物は，白磁碗（210），土師質土器杯（211），同羽釜（212），骨（213）である。

210は体部の破片であり，下半は露胎である。

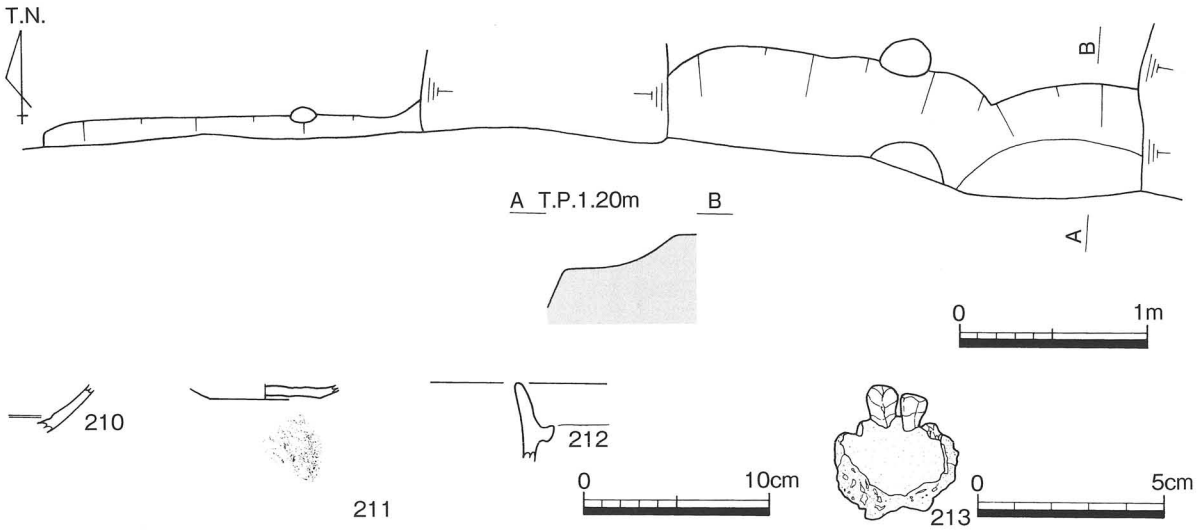
211はやや上げ底の底部であり，静止ヘラ切りの後に周辺部に回転ヘラケズリが施される。

212は内傾する口縁部の外面に短い鍔が付く。外面の調整はヨコナデ，内面は板ナデが施される。

213は顎骨であり，奥歯2本が残存する。

ＳＸ 1204（第33図）

調査区南西側において検出した落ち込みであり，ＳＢ 1201，ＳＤ 1204，ＳＰ 1293に切られる。本遺構の北側は近代の大きな攪乱とコンクリート基礎により消滅する。検出した標高は1.15ｍである。直線的に延びる南壁のみの検出であるため平面形の全容は不明であるが，大規模な遺構であると推測される。

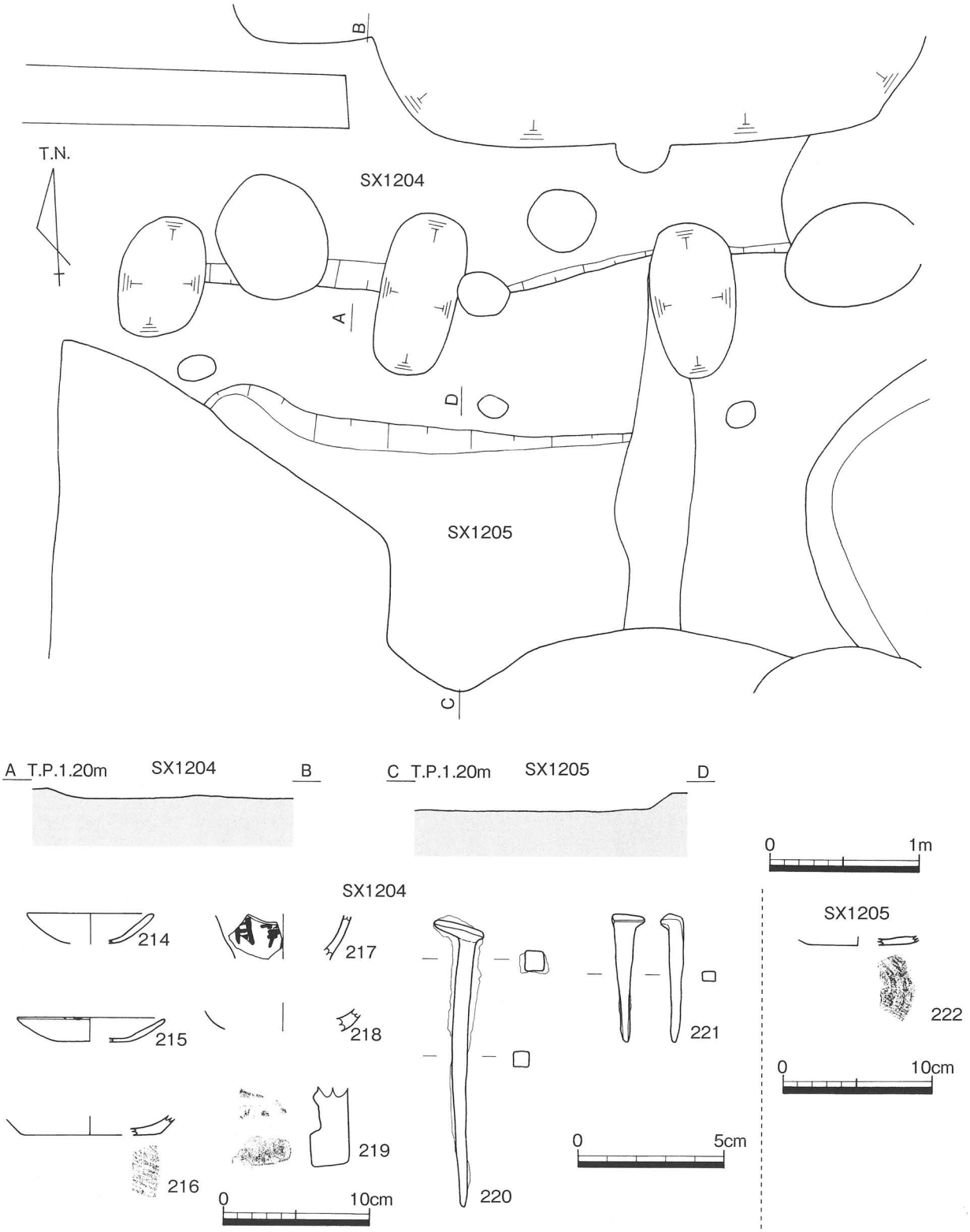


第32図　ＳＸ 1203平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4・1/2）

検出できた南辺の長さは3.45 m，検出面からの深さは6㎝を測る。底面は平坦である。埋土は黄灰色シルト質細砂である。検出状況や重複関係から所属時期は17世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，土師質土器皿（214・215），同杯（216・217），青磁碗（218），軒丸瓦（219），鉄釘（220・221）である。

214・215の体部は緩やかな傾斜で立ち上がり，体部と底部の境は不明瞭である。215は底部にナデが施され，口縁端部に煤が付着する。216は底部に静止ヘラ切りの後に回転ヘラケズリが施される。217



第33図　ＳＸ1204・1205平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4・1/2）

は器高の高い形態であり，外面に「月　幸（？）」の墨書がある。

218 は体部下半の破片である。

219 は瓦当に巴文のある軒丸瓦の破片である。

220・221 は断面方形の釘であり，完形品である。220 は全長 9.7cm，221 は 4.3cmを測る。

ＳＸ 1205（第 33 図）

調査区南西側において検出した落ち込みであり，ＳＤ 1204，ＳＥ 1201，第 1 遺構面ＳＸ 1003 に切られる。検出した標高は 1.12 m である。本遺構の南側はＳＥ 1201 とＳＸ 1003 に大きく切られており，検出できたのは北辺付近の一部のみであり，平面形の全容は不明である。検出した北辺の長さは 2.90 m，南北方向の長さは 1.75 m を測る。検出面からの深さは 0.10 m であり，底面は若干凹凸がある。埋土は黄灰色シルト質細砂である。埋土や重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，土師質土器杯（222）のみであるが，数点の陶磁器片も出土した。222 は底部に回転ヘラ切りの後に静止ヘラケズリ・ナデ，内面に指ナデが施される。

ＳＸ 1206（第 34 図）

調査区南西隅において検出した落ち込みであり，北側はＳＥ 1201，西側は第 1 遺構面ＳＸ 1003 に切られる。南側は調査区外にかかる。検出した標高は 1.10 m前後である。検出した範囲は非常に狭く，遺構全体の平面形は不明であるが，残存する東辺は湾曲していることより本遺構は円形を呈すると考えられる。検出した東西方向の長さは 1.92 m，南北方向は 0.90 m を測る。検出面からの深さは 0.13 m を測り，底面は東方向に緩やかに下がる。埋土は褐黄灰色シルト質細砂＋灰白色細砂の単一層である。検出状況や重複関係から所属時期は 17 世紀前半であると考えられる。

出土遺物は，土師器杯（223），土師質土器羽釜（224），白磁碗（225）であり，その他に数点の陶磁器片が出土した。

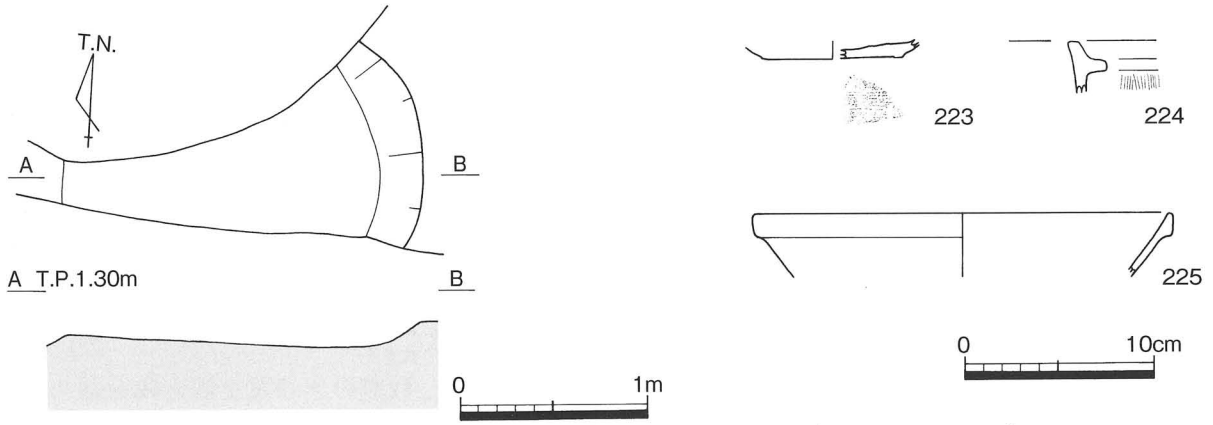
223 は底径 7.6cmを測る大型の杯であり，底部は静止ヘラケズリが施される。

224 は若干内傾する口縁部の外面に鍔が付く。鍔は断面方形であり，ほぼ水平である。外面は縦方向の粗いハケが施される。

225 は口径 22.0cmを測る大型であり，口縁部は玉縁状である。

SX1207（第 35 図）

調査区北西隅において検出した落ち込みであり，ＳＰ 1241 ～ 1244・1299 に切られ，ＳＰ 1291・1292 を切る。本遺構の東側は調査区外にかかる。検出した標高は 1.01 m前後である。検出できたのは遺構の西側のみであるが，下端の平面形から推測すると本遺構の平面形は不整な長方形であると考えられる。検出した南北方向の長さは 2.40m，東西方向の長さは 1.85 m を測る。検出面からの深さは 6 ～ 17cm を



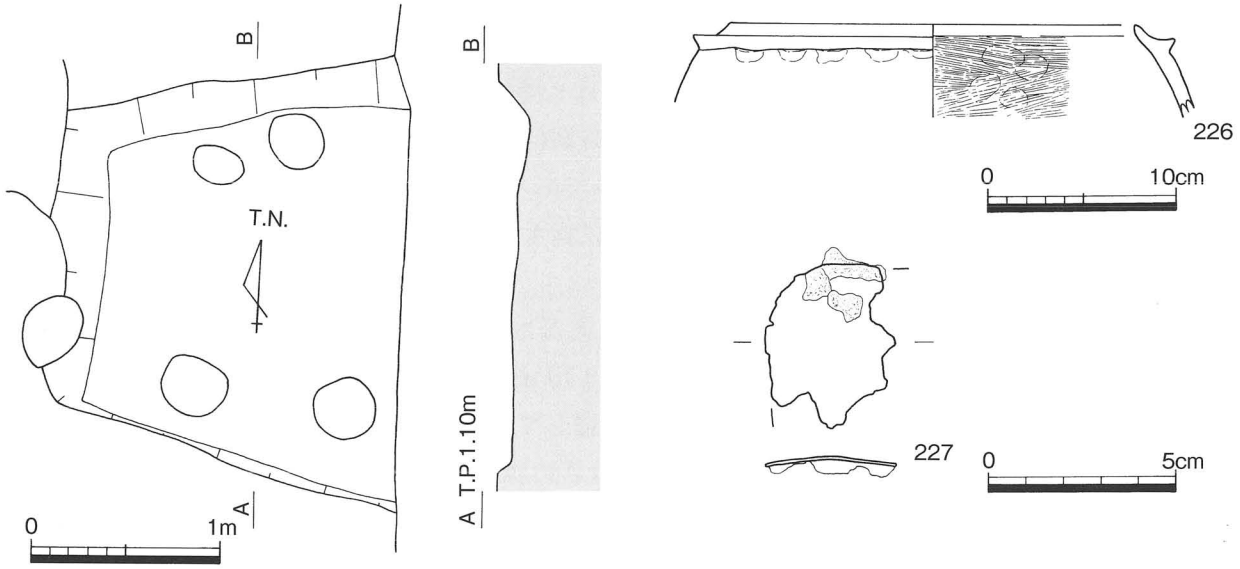
第 34 図　ＳＸ 1206 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

測り，底面は北方向に緩やかに下がる。北辺と西辺の掘り込みは緩やかな傾斜である。埋土は褐灰色シルト質細砂＋灰白色細砂である。検出状況から所属時期は17世紀前半と考えられる。

出土遺物は，土師質土器足釜（226），鉄板（227）であり，その他に数点の陶磁器片が出土した。

226は内傾する口縁部の外面に鍔が付く。鍔は断面三角形を呈する。外面には指頭圧・ナデが施され，内面は横方向の細かいハケが施される。

227は薄い鉄板であり，若干湾曲する。



第35図　ＳＸ1207平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＸ1208（第36図）

調査区北西隅において検出した落ち込みであり，ＳＤ1204，ＳＫ1215を切り，ＳＰ1264～1266に切られる。本遺構の北側は調査区外にかかる。検出した標高は1.04ｍ前後である。本遺構は南辺付近のみの検出であり，全体の平面形は不明であるが直線的な南辺となだらかに曲がる南東・南西両隅を参考にすると，平面形は大規模な隅丸方形と考えられる。検出した東西方向の長さは3.65ｍ，南北方向の長さは0.51ｍを測る。検出面からの深さは0.12ｍを測り，底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂＋灰白色細砂である。検出状況や重複関係から所属時期は17世紀前半と考えられる。

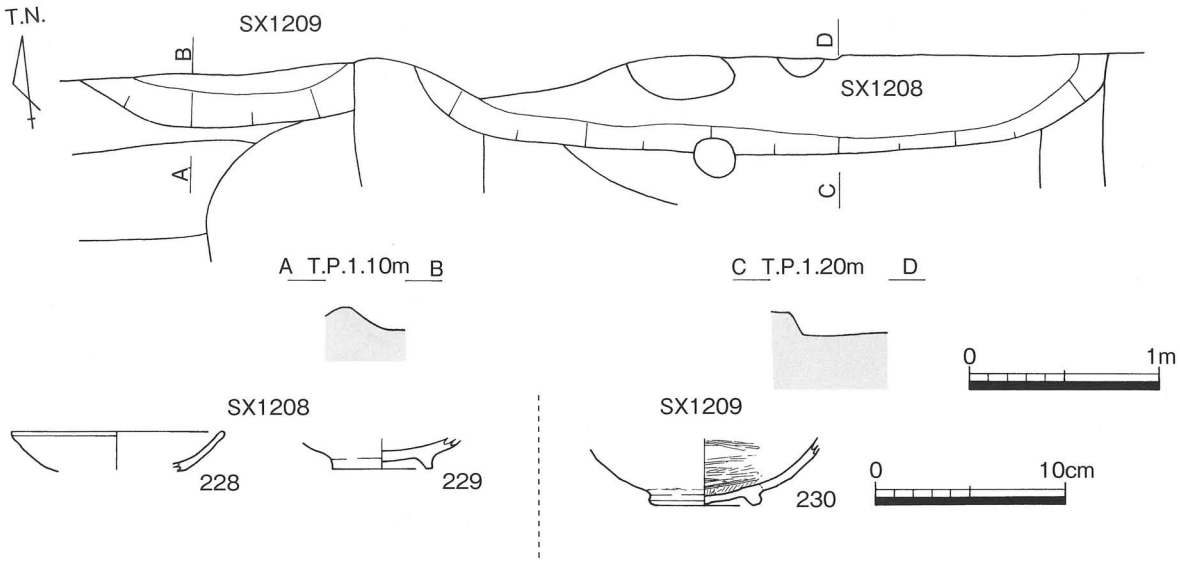
出土遺物は，土師質土器皿（228），瓦器椀（229）であり，その他に数点の陶磁器片が出土した。

228は口径11cmで，若干内湾気味の体部である。229はやや高い高台を持ち，内面にヘラミガキが施され，回転ナデの高台以外の外面にナデが施される。

ＳＸ1209（第36図）

調査区北西隅において検出した落ち込みであり，ＳＤ1202に切られ，ＳＫ1211と重複する。本遺構の北側は調査区外にかかる。検出した標高は0.95ｍである。本遺構は南辺のみの検出であり，全体の平面形は不明であるが，なだらかに湾曲する南辺を参考にすると，平面形は大規模な円形と考えられる。検出した南辺の長さは1.50ｍ，南北方向の長さは0.27ｍを測る。検出面からの深さは0.12ｍを測り，底面は平坦である。掘り込みはなだらかな傾斜である。埋土は灰白色シルト質細砂＋灰白色細砂である。検出状況や重複関係から所属時期は17世紀前半と考えられる。

図化できた出土遺物は，土師質土器椀（230）のみであるが，数点の土師質土器と陶磁器の破片も出土した。230は，底部に回転ヘラ切り，内面に丁寧なヘラミガキが施される。



第36図　ＳＸ 1208・1209 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

7　第２遺構面出土遺物（第 37 ～ 39 図）

231 は軟質施釉陶器蓋であり，外面に細い沈線が巡り，口縁部内面の長い返りは垂直である。

232 は肥前系陶器碗であり，口縁部は内湾する体部から屈曲して外反する。体部下半は露胎で，ロクロ成形痕が明瞭に残る。底部は回転ヘラケズリが施される。233 ～ 235 は肥前系陶器皿であり，体部で折れ，口縁部が内方向に先細る。体部下半は露胎である。235 は見込みに胎土目が認められ，体部下半に回転ヘラケズリが施される。236 ～ 238 は肥前系陶器皿の底部であり，見込みに砂目が認められ，外面は露胎である。236 の高台は高く，断面は方形であり，237・238 は低い高台である。239 は肥前系磁器皿であり，体部が僅かに内湾する。全面に施釉され，高台は切高台状となっている。見込みに胎土目が認められる。

240 ～ 242 は備前焼擂鉢であり，口縁端部は上下に若干拡張し直立する。口縁端部の断面は丸みを持つものと平らなものがある。内面には卸目がある。体部外面の調整は回転ナデが施される。

243 ～ 258 は土師質土器皿である。243 ～ 248 は体部の短い形態の小皿であり口径 6.8 ～ 8.4cmを測る。249 ～ 257 は前者より体部の長い小皿であり口径 8.2 ～ 11.0cmを測る。243・246 の底部は回転ヘラ切り，244 は回転ヘラ切りの後に回転ヘラナデ，247 は回転ヘラ切りの後に板目，248 は回転ヘラ切りの後に板目・ナデが施される。249 は体部と底部の境が明瞭で，底部の調整は回転ヘラ切りが施される。250 ～ 253 は体部と底部の境が不明瞭で，250 の底部は回転ヘラ切りの後に板目・ナデ，251 は口縁端部を面取りし，底部はナデが施される。252 は厚い器壁であり，底部は静止糸切りが施される。253 は先細る口縁端部に煤が付着し，底部は板目が施される。254 ～ 256 は緩やかな傾斜の体部である。257 はやや丸みのある底部から体部が立ち上がり，底部は回転ヘラ切りの後に板目・回転ヘラナデが施される。258 は底部に回転糸切りが施される。

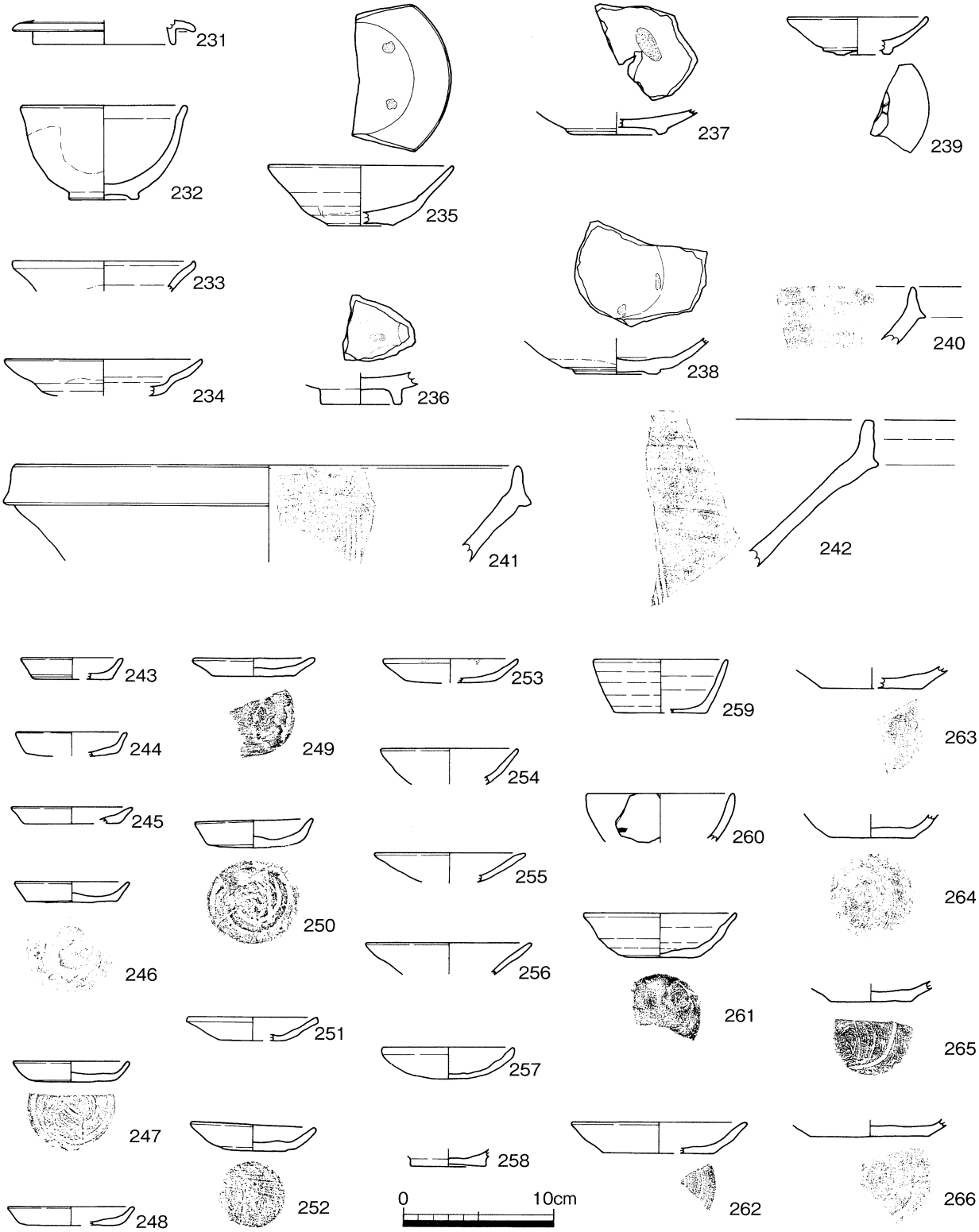
259 ～ 266 は土師質土器杯である。259 は底部から急傾斜で立ち上がる体部であり，内外面にロクロ成形痕が明瞭に残る。底部は回転ヘラ切りの後に回転ヘラナデが施される。260 は内湾する体部で，外面に墨書が認められる。261 はやや内湾する体部が僅かに折れて口縁部となる。底部は回転糸切りが施される。262 は底部に回転ヘラ切りが施され，263 は静止糸切り，264・265 は回転糸切り，266 は回転ヘラ切りが施される。

267 は土師質土器椀であり，断面台形の高台が付く。

268 は瓦器椀であり，ヨコナデが施された高い高台が付き，内面にナデが施される。

269 は土師質土器甕であり，直線的な体部からそのまま口縁部に至る。

270 は土師質土器の火消壺の蓋であり，口縁部はほぼ垂直である。外面はヘラミガキにより光沢を持ち，内面は回転ナデ・ハケが施される。



第 37 図　第２遺構面出土遺物実測図（１）（S：1/4）

271は土師質土器足釜であり，内傾する口縁部の外面に低い鍔が付く。鍔からの立ち上がりがやや長い。外面は指頭圧，内面は横方向のハケが施される。

272・273は黒色土器A類椀であり，低い高台を有する。内面にヘラミガキが施され，273は暗文が見られる。

274は須恵器椀であり，非常に低い高台を有する。

275・276は青磁碗である。275は外面に鎬蓮弁文を配し，276は雷文を配する。

277～279は青磁鉢であり，体部で僅かに折れ，口縁部は直立する。277は厚い器壁である。

280は弥生土器甕であり，口縁端部が上下に拡張する。内外面とも磨滅がおよんでいる。281は弥生土器高杯の脚部であり，外面はナデ，内面はヘラナデが施される。

282は丸瓦であり，凸面には縄叩きの後に縦方向のヘラナデが施され，凹面には布目が残存する。内面は両側面を面取りする。

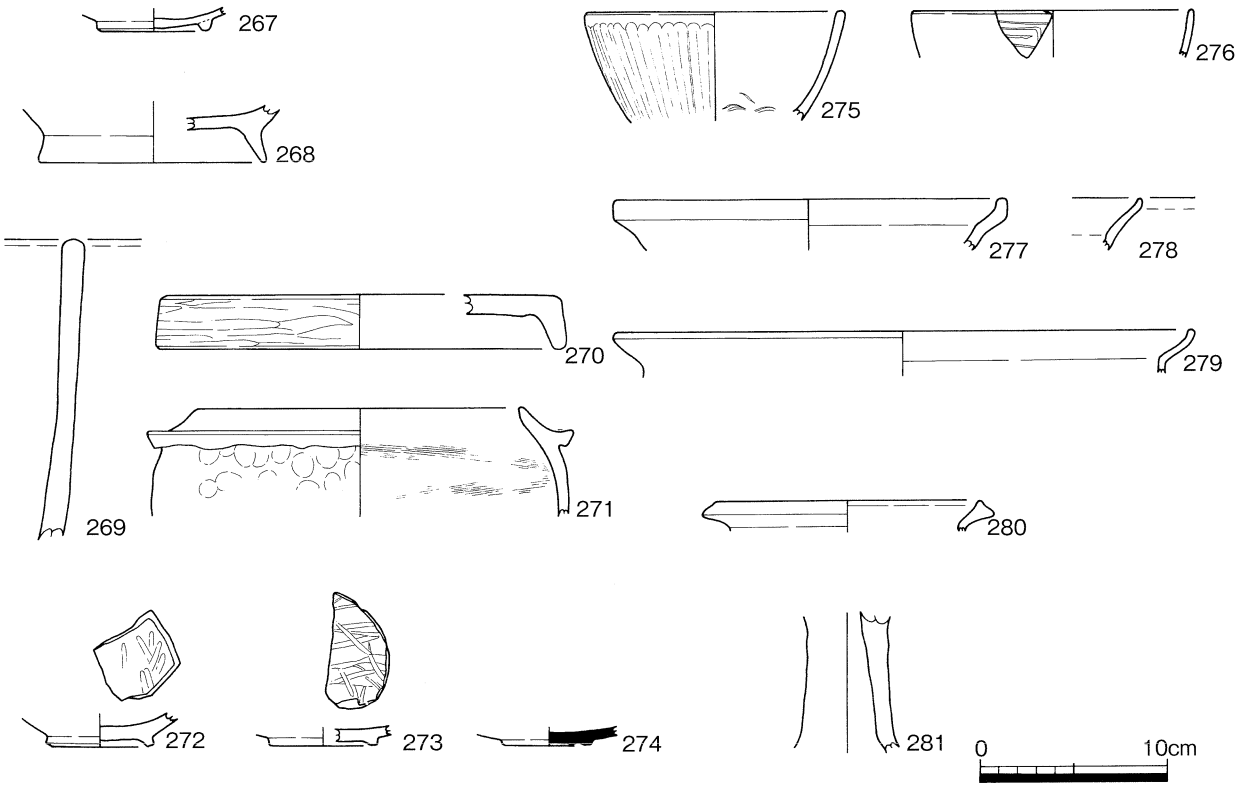
283は軒平瓦であり，瓦当に中心飾りとして巴文と珠文が見られる。瓦当裏面は横方向のナデが施される。

284は土製円盤であり，円形に割った後に断面を磨く。

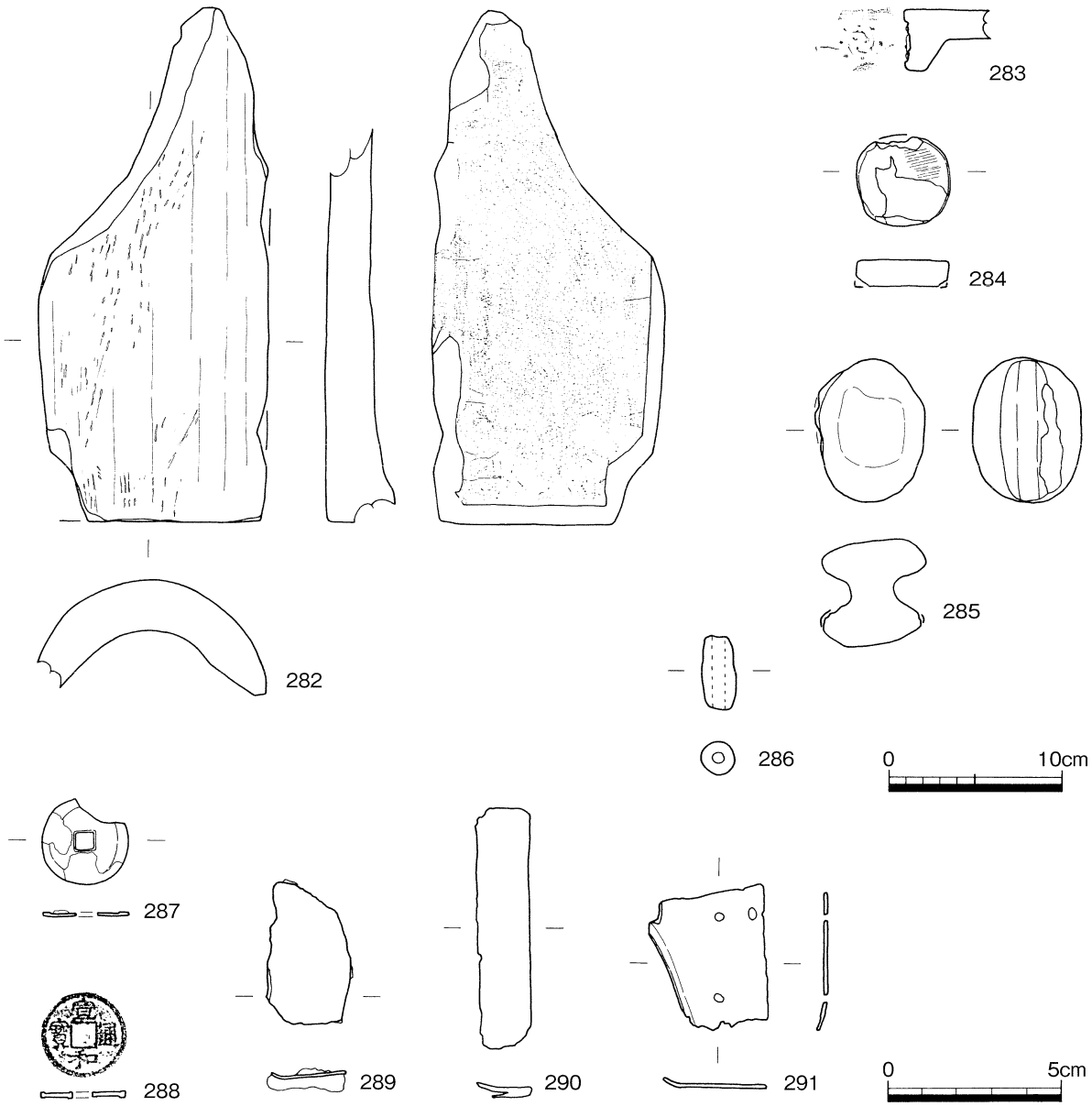
285は側面に溝を有する有溝土錘であり，ほぼ完形品である。重量は270.9gを測る。286は直径2cmを測る管状土錘であり，重量は16.9gである。

287・288は銅銭である。287は錆びのため銭名不明であるが，288は「宣和通宝」である。

289～291は用途不明の鉄板である。289は現存幅2.4cmを測り，片側がやや折れる。290は現存長7.0cm，現存幅1.3cmを測る細長い鉄板である。291は現存形が台形を呈し，3個の小孔が開けられている。



第38図　第2遺構面出土遺物実測図（2）（S：1/4）



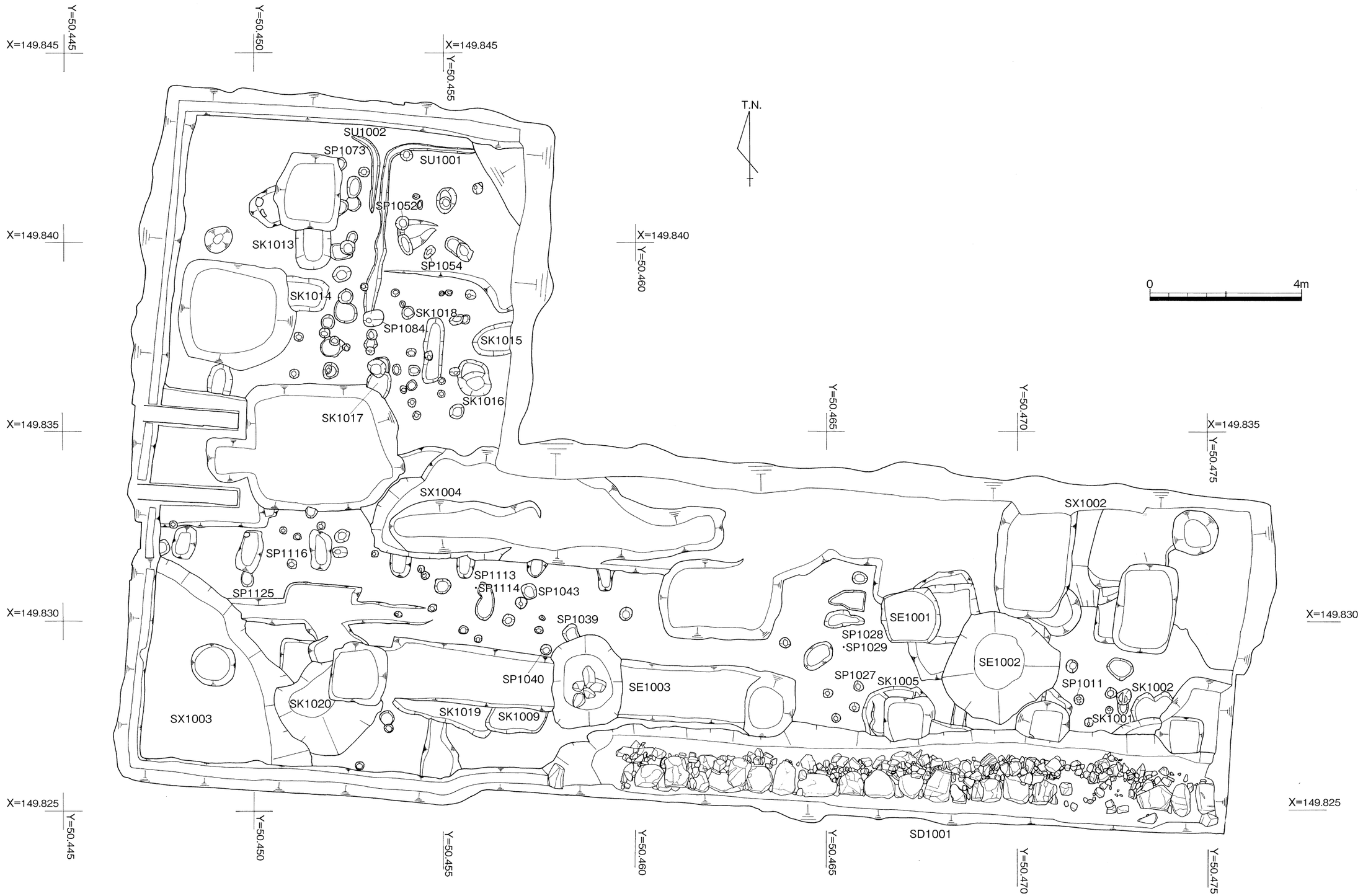
第39図　第2遺構面出土遺物実測図（3）（S：1/4・1/2）

第2小節　Ⅰ区　第1遺構面

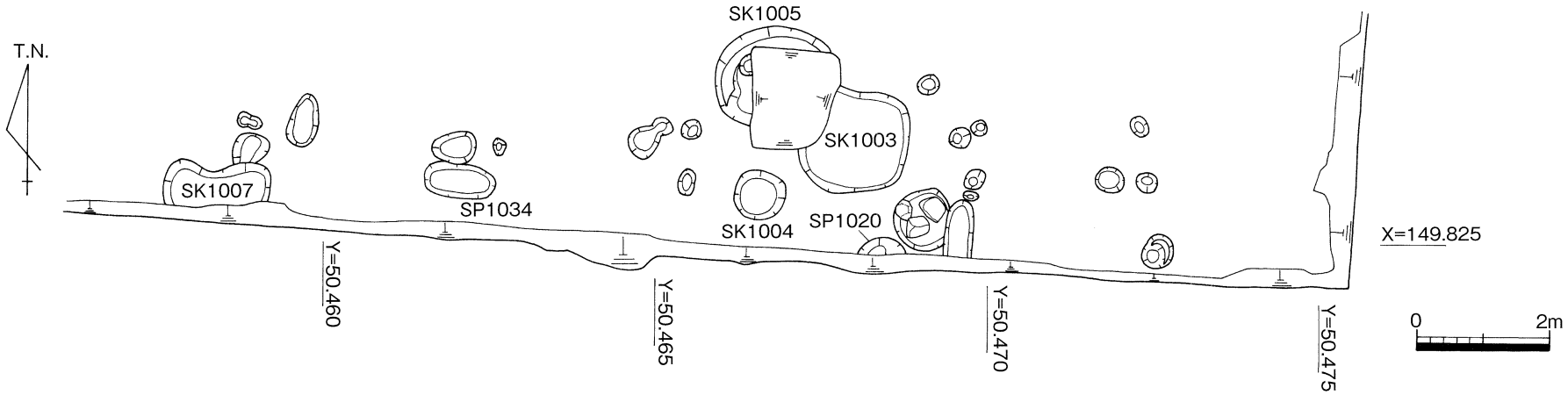
1　溝

SD 1001（第42図）

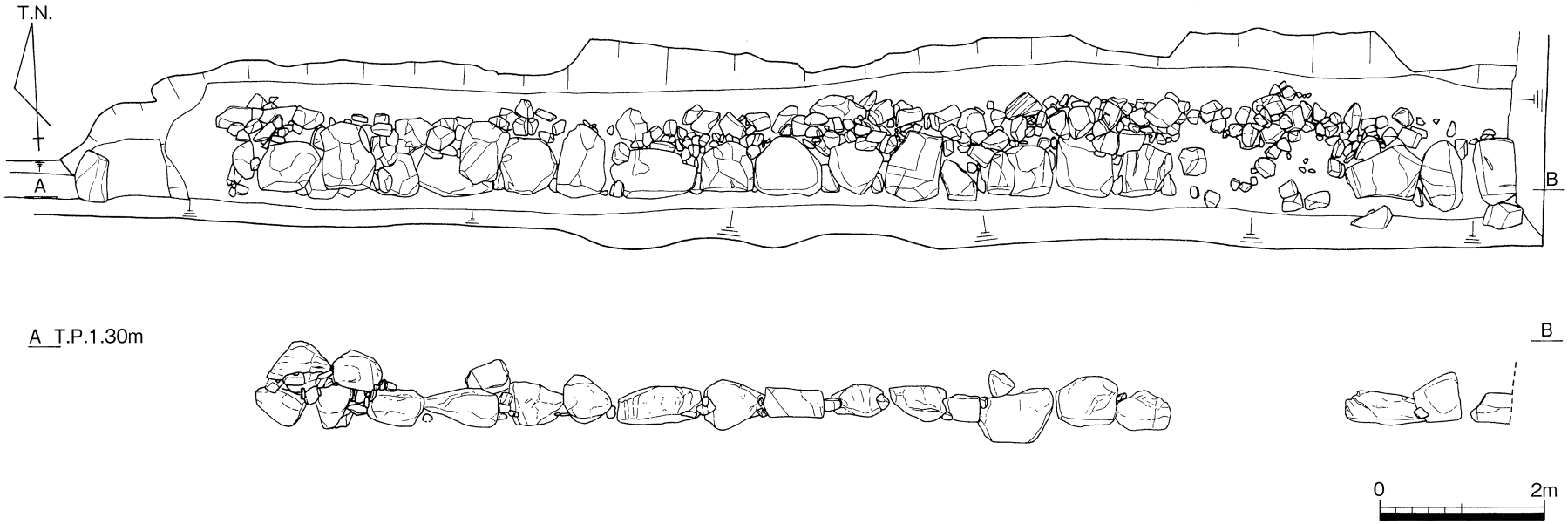
調査区南東隅から南壁中央にかけて検出した石組み溝であり，SK 1001を切り，SK 1003～1007，SP 1001～1004・1014～1023・1030～1038に切られる。調査時には石組みが建物の基礎である可能性も考えたが，本報告書では石組み溝とする。本遺構の東端上面は，近代の撹乱により消滅し，南側は調査区外にかかる。検出した標高は1.25 m前後である。主軸方位はN－92°－Eであり，ほぼ東西方向を示す。検出した溝の全長は17.50 mを測り，前述したように調査区外に延びるため完掘できなかったが，検出した南北方向の最大幅は2.20 mである。検出面から底面までの深さは約0.95～1.00 mを測り，北側の掘り込みは急傾斜である。西端の掘り込みは段をなし，その段上には0.36×0.64 mの石が単独で検出された。溝の底面直上には0.40～1.00 m大の扁平な石材が一段積みないし二段積みの状態で検出された。石組みは南側に面を通しており，ほぼ直線的に延びる。一段目の石の上面レベルはほぼ揃ってお



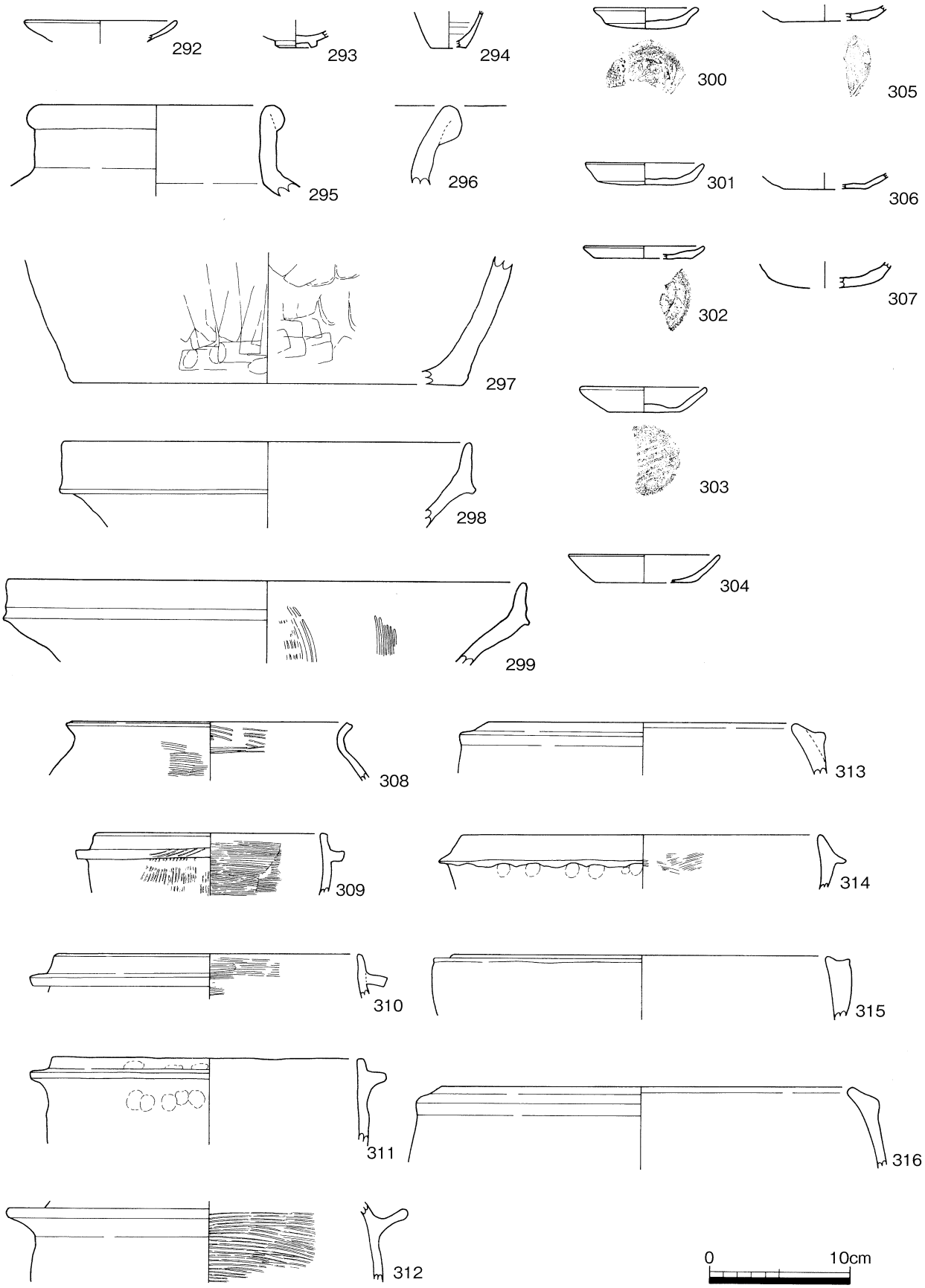
第 40 図　Ⅰ区第１遺構面平面図（１）（S：1/100）



第41図　Ⅰ区第1遺構面平面図（2）（S：1/100）



第42図　SD 1001 平・立面図（S：1/80）



第43図　ＳＤ 1001 出土遺物実測図（１）（S：1/4）

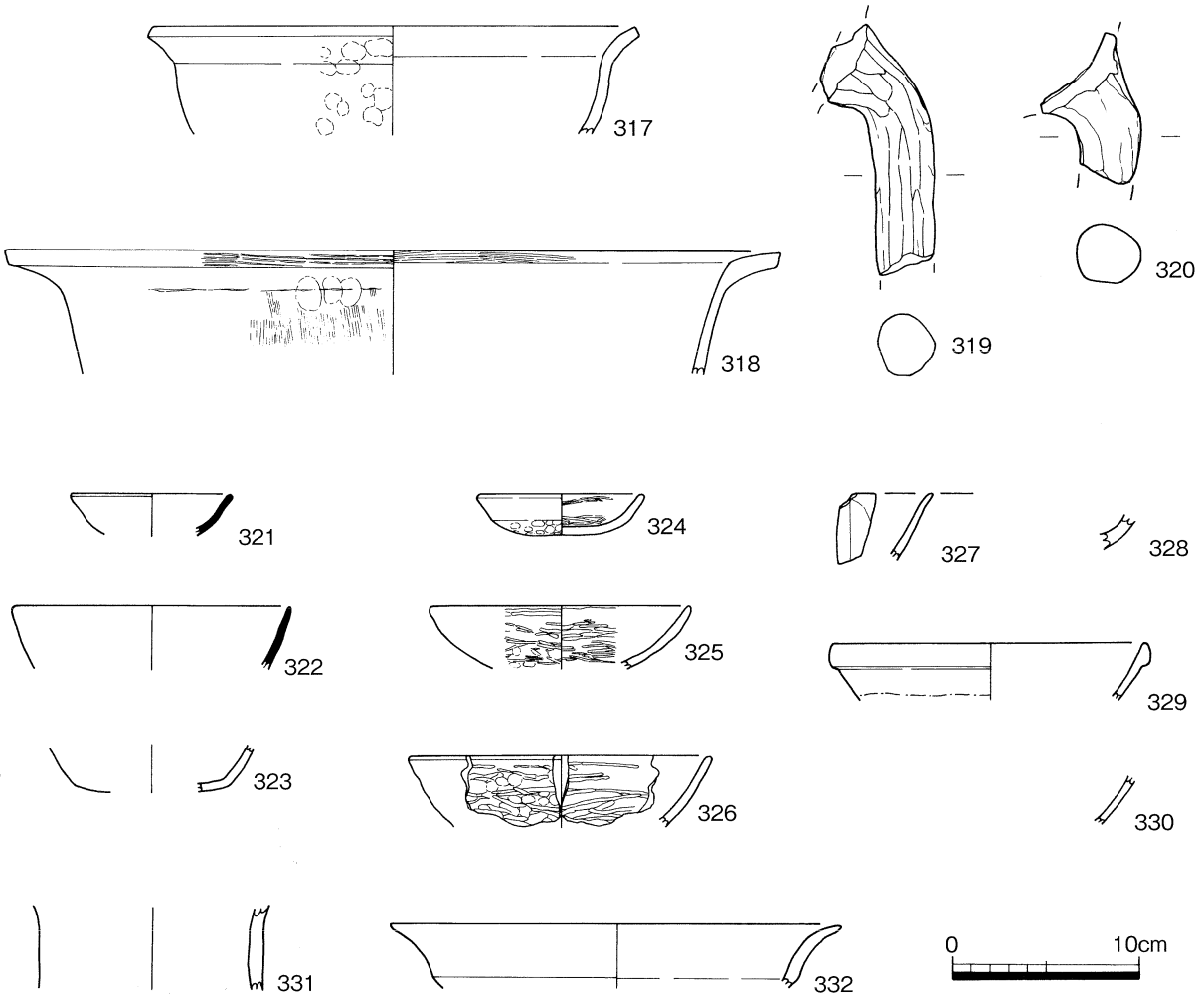
り標高 0.80 m前後である。石組みの下面は標高 0.30 mである。石組みの基盤は砂礫層である。石組みの内側は多量の小石～拳大の石が裏込めとして用いられる。出土遺物の中にはもっと古い特徴を持つ遺物も含まれるが，検出状況から所属時期は 17 世紀中頃であると比定される。

出土遺物は，磁器皿（292），同碗（293），陶器鉢（294），同甕（295 ～ 297），同擂鉢（298・299），土師質土器皿（300 ～ 307），同甕（308），同羽釜（309 ～ 312），同足釜（313 ～ 316・319・320），同鍋（317･318），須恵器杯（321･322），須恵質土器杯（323），瓦器皿（324），同椀（325），黒色土器椀（326），青磁碗（327・328），白磁碗（329・330），弥生土器壺（331），同高杯（332），土錘（323 ～ 336），イイダコ壺（337），瓦製円盤（338），丸瓦（339･340），軒平瓦（341），骨（342･343），砥石（344）である。

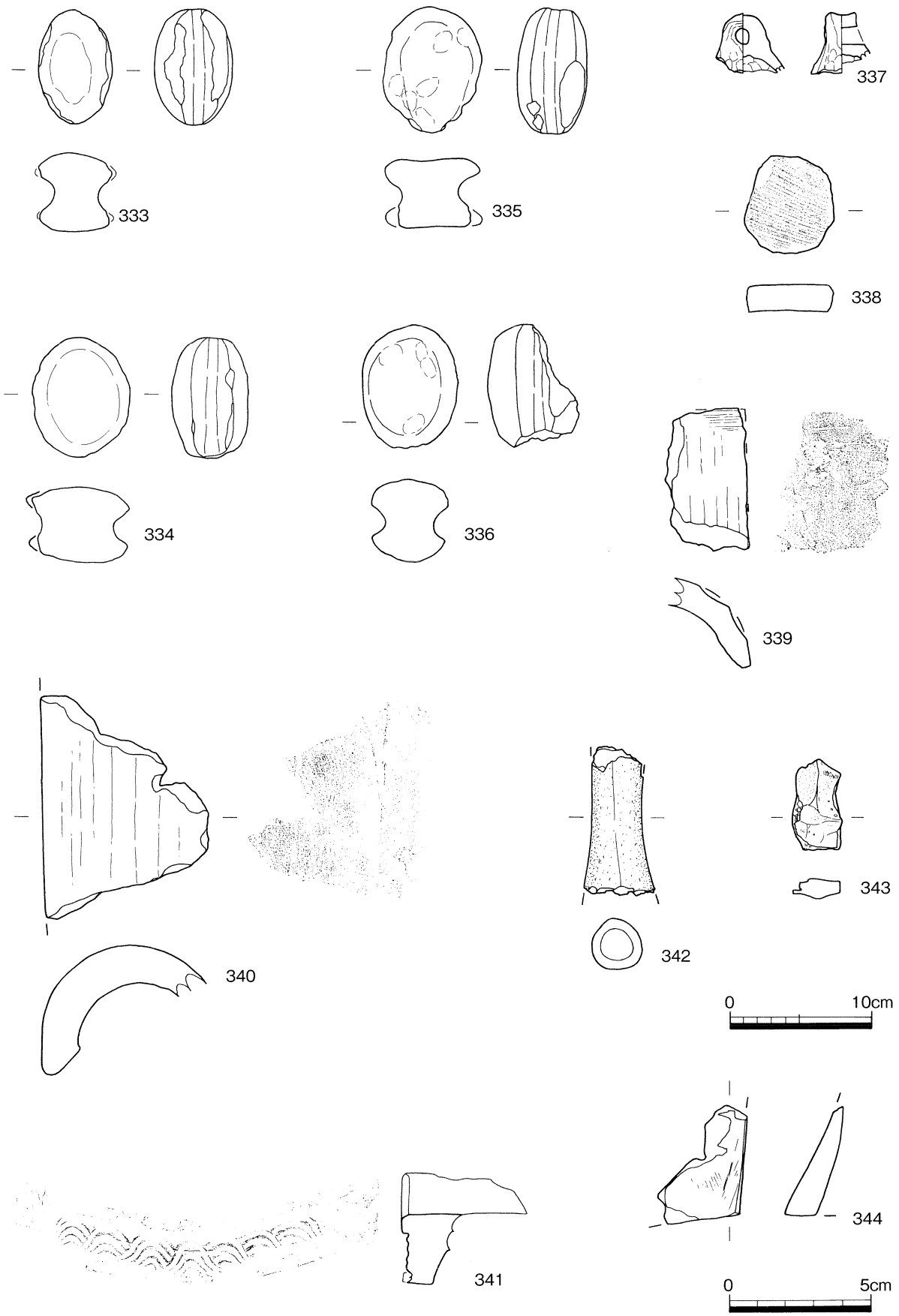
292 は生産地不詳で器高が低く若干内湾気味の体部である。293 は断面台形の高台を持ち，外面は露胎である。294 は備前系陶器であり，底部は回転糸切りが施される。

295 ～ 299 は備前焼である。295 の口縁部は直立し，口縁端部は外側に折り返す。296 の口縁部は若干外に広がり，口縁端部は外側に折り返す。297 は外面にヘラナデ，内面に板ナデ・ナデが施される。298・299 は口縁端部が上下に拡張し，外面に僅かな凹凸を有する。

300 ～ 302 は体部の短い形態で，300 の底部は回転ヘラケズリ，301・302 は回転ヘラ切りの後にナデが施される。303・304 は体部の長い形態で，303 の底部は板目・ナデ，304 はナデが施される。305 の底部は板目・ヘラナデ，306 はナデ，307 は静止ヘラケズリの後にナデが施される。



第 44 図　ＳＤ 1001 出土遺物実測図（２）（S：1/4）



第45図　ＳＤ 1001 出土遺物実測図（３）（S：1/4・1/2）

308は短く外反する口縁部であり，内外面に横方向の粗いハケが施される。

309～312は直立する口縁部外面に鍔が付く。309～311の鍔はほぼ水平に延び，312はやや上方に延びる。311を除いて内面は横方向のハケが施される。

313・314・316は口縁部外面に低い鍔が付き，315は口縁端部の直下に非常に低い鍔が付く。313は外面にナデ，内面に板ナデ，314は外面に指頭圧・ナデ，内面にハケ，315・316は外面にナデ，内面にヘラナデが施される。

317・318は口縁部の大きく外反する器形であり，317の外面は指頭圧・ヘラナデ，318の体部・口縁端部外面と口縁部内面は粗いハケが施される。

321は口径8.8cmを測る小型の杯であり，322は口径14.8cmを測る杯である。323は底部と体部の境がやや不明瞭で，底部にナデが施される。

324は底部から緩やかに立ち上がる体部で，口縁部との境に僅かな稜を有する。外面は指頭圧，内面はヘラミガキが施される。325は低い器高で体部からそのまま口縁部に至る。外面は指頭圧・ヘラミガキ，内面はヘラミガキが施される。

326は黒色土器B類であり，外面に指頭圧・ヘラミガキ，内面にヘラミガキが施される。

327は外面に鎬蓮弁文を配し，328は体部下位の破片である。329は玉縁の口縁部であり，体部下半は露胎となる。330は体部下半の破片である。

323～336は側面に溝を有する有溝土錘であり，335は中央部が若干窪む。

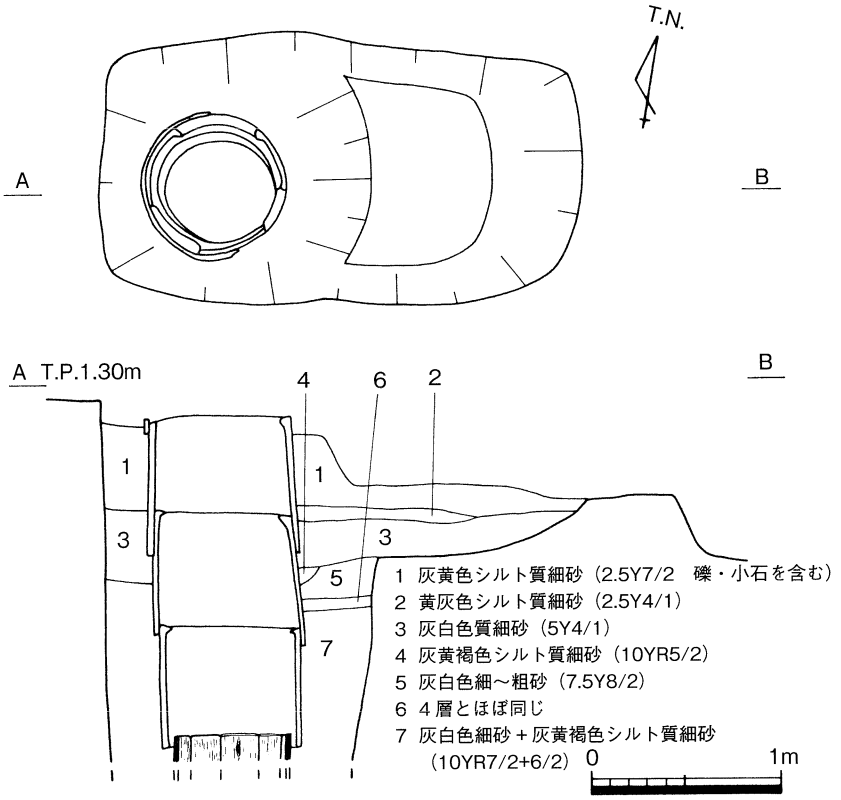
339は凸面にヘラナデが施され，凹面に布目が残存する。340は凸面にヘラナデが施され，凹面に布目・コビキA痕が残存する。341は瓦当に「重波文的波状文」があり，瓦当上縁と顎後縁に面取りが施される。

342は脚部の骨，343は肩甲骨である。344は石灰岩製の硯であり，1面のみに使用痕が見られる。

2　井戸

SE 1001（第46～48図）

調査区中央の東寄りにおいて検出した井戸であり，SE 1002を切り，東半分の上端は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は1.20 mである。上端の平面形は東西方向に長辺を持つ長方形を呈し，規模は2.58 × 1.45 mを測る。掘り方は東側に段を有し，土器組みの井戸枠は西壁寄りに位置し，その部分を正方形に深く掘り込む。その規模は1辺1.45 mを測る。土器枠は3段であり，さらに最上位に土器枠の一部が残存しており，少なくとも4段であったと考えられる。土器枠の直径は0.70 m，器高は0.70 mを測る。土器枠の下



第46図　SE 1001 平・断面図（S：1/40）

には細長い板を縦方向に並べる木枠が検出されるが，崩落の危険性があるため完掘できなかった。この木枠が井戸の最下部である。木枠の上部の標高は－0.56 mである。井戸枠内には多量の石が投げ入れられていたため土層は不明であるが，掘り方部分は7層に分層できた。所属時期は土器枠を使用していることから幕末～明治時代である。

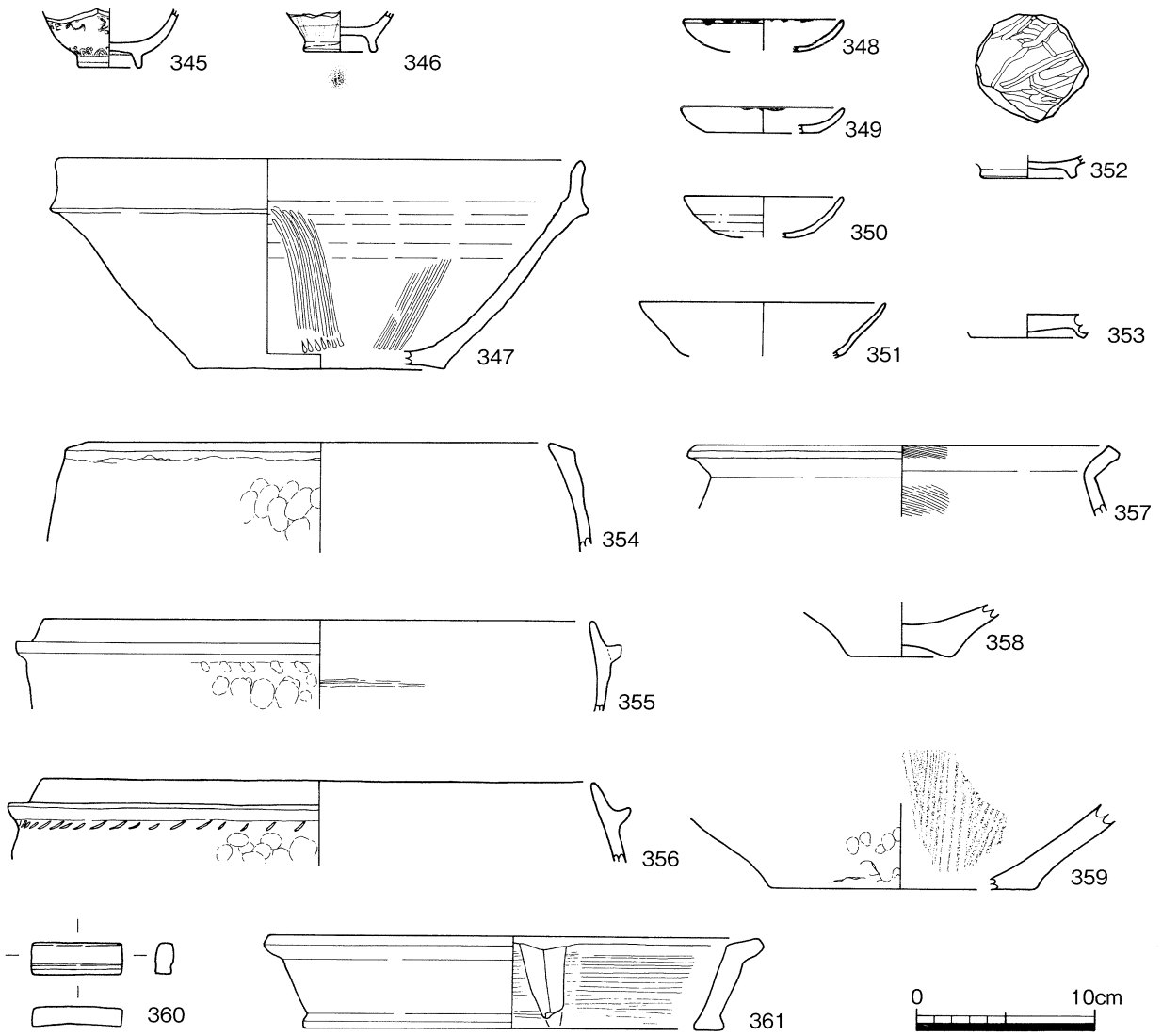
出土遺物は，磁器碗（345・346），陶器擂鉢（347），土師質土器皿（348・349），同杯（350・351），瓦器椀（352），青磁碗（353），土師質土器足釜（354～356），同甕（357・358），同擂鉢（359），須恵質土器鉢（360），五徳（361），軒丸瓦（362～364），軒平瓦（365～369），砥石（370）である。

345は文字と草文の染付けが描かれる。346は生産地不詳の磁器であり，黒色・水色・朱色の線が描かれ，底部に小判型の刻印がある。刻印は「松景」の可能性がある。

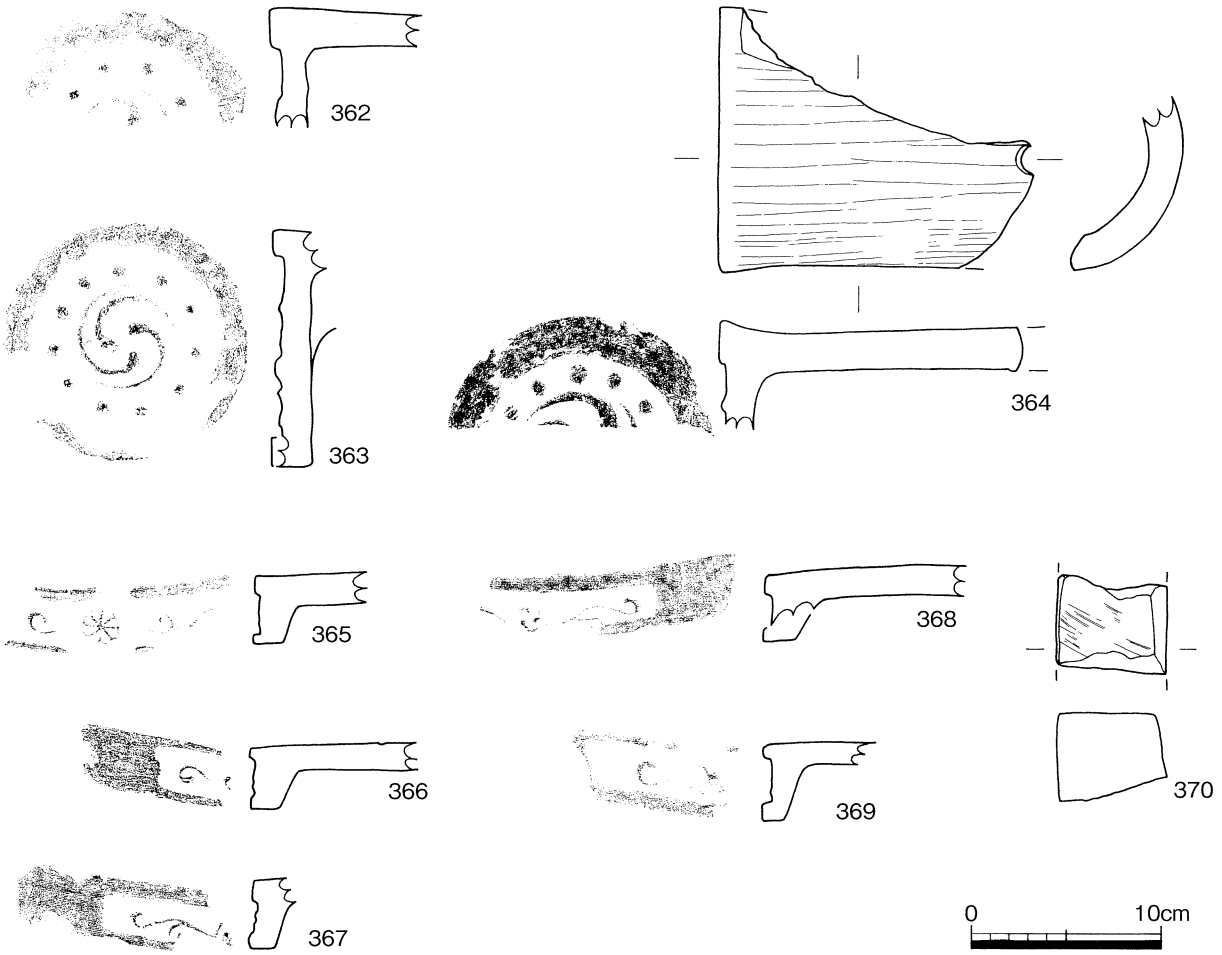
347は備前焼であり，口縁部は上下に拡張するが薄い器壁である。体部外面は指ナデが施され，内面には7本一単位の卸目がある。

348・349は口縁部に煤が付着し，調整はナデが施される。350は口径9.2cmの小型であり，底部と体部の境は不明瞭である。底部は回転糸切りが施される。351は口径14.0cmを測り，体部は緩やかな傾斜で立ち上がる。調整は内外面ともナデが施される。

354は口縁端部直下に低い鍔が付き，355・356は口縁部の外面に鍔が付く。



第47図　ＳＥ1001出土遺物実測図（1）（S：1/4）



第48図　ＳＥ1001出土遺物実測図（２）（S：1/4）

357は「く」の字口縁で，内面に斜め方向のハケが施される。358は上げ底である。

359は内面に７本一単位の卸目がある。

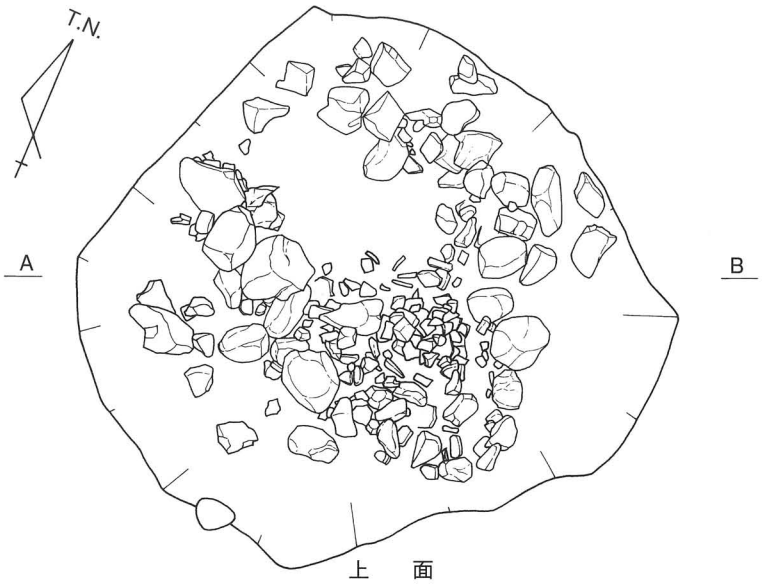
360は口縁部の破片を磨いて長方形にする。361は内面に器受用の突帯がある。

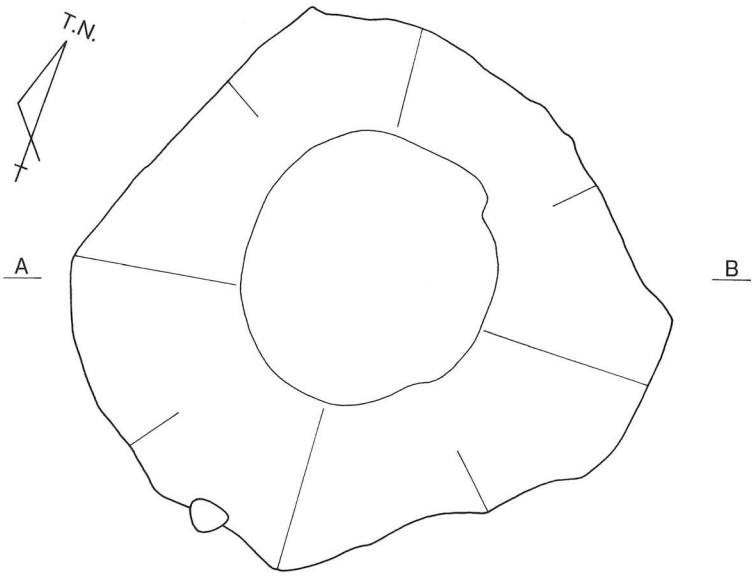
362～364は巴文の軒丸瓦である。362・364は巴の尾が短く巻き込み，珠文の間隔はやや広い。凸面はヘラナデが施される。363は珠文数11個を数え，巴頭部は丸みを持ち，僅かにくびれを有し，尾はやや短く巻き込む。365～369は瓦当に唐草文の軒平瓦である。365は中心飾りを菊花文とし，一重線の唐草文である。366・367は一重線の唐草文である。368は中心飾りを巴文とし，一重線の唐草文である。369は一重線の唐草文であり，瓦当面上端に面取りがある。

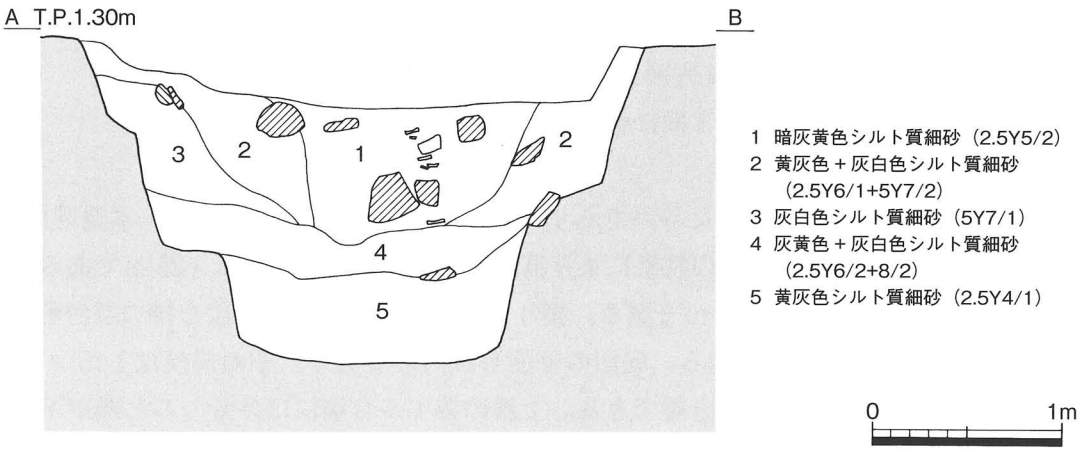
370は砂岩製の砥石であり，３面に使用痕が認められる。

ＳＥ1002（第49～51図）

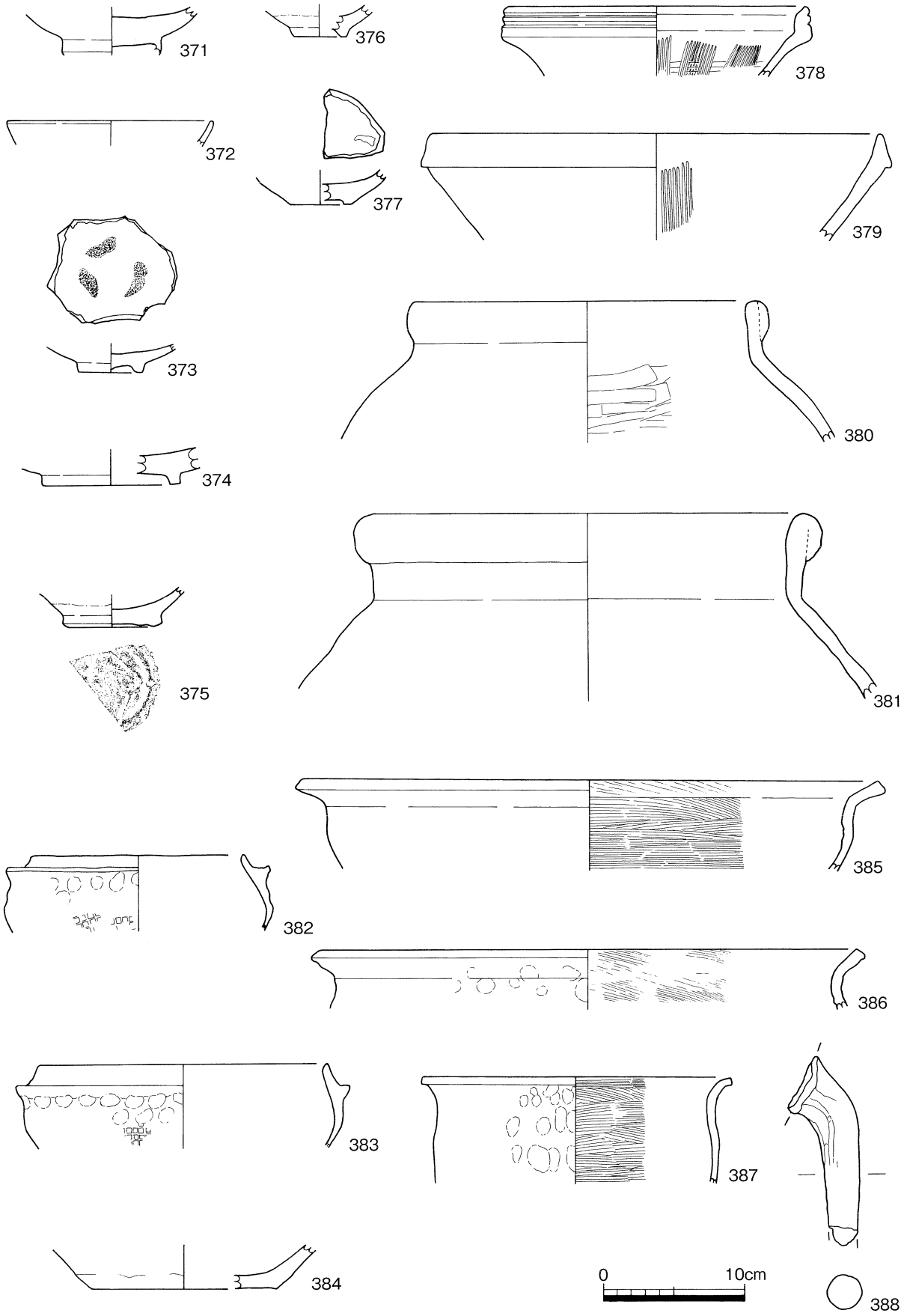
調査区南東側において検出した井戸であり，ＳＥ1001の南東に位置する。本遺構はＳＥ1001に切られ，北側と南東側の上端は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は1.25ｍである。平面形は不整な円形を呈し，直径は3.05×2.95ｍを測る。掘り方は一つないし二つの段を持つ逆台形を呈し，検出面から底面までの深さは1.65ｍを測る。底面の平面形は円形であり，その規模は1.45×1.30ｍを測り，底面は平坦である。埋土は５層に分層できる。上層の第１～３層には多量の石と礫が不規則な状態で出土し，同時に瓦も含まれ，人為的に埋められたと考えられる。下層の第４・５層は自然堆積である。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀中頃であると考えられる。





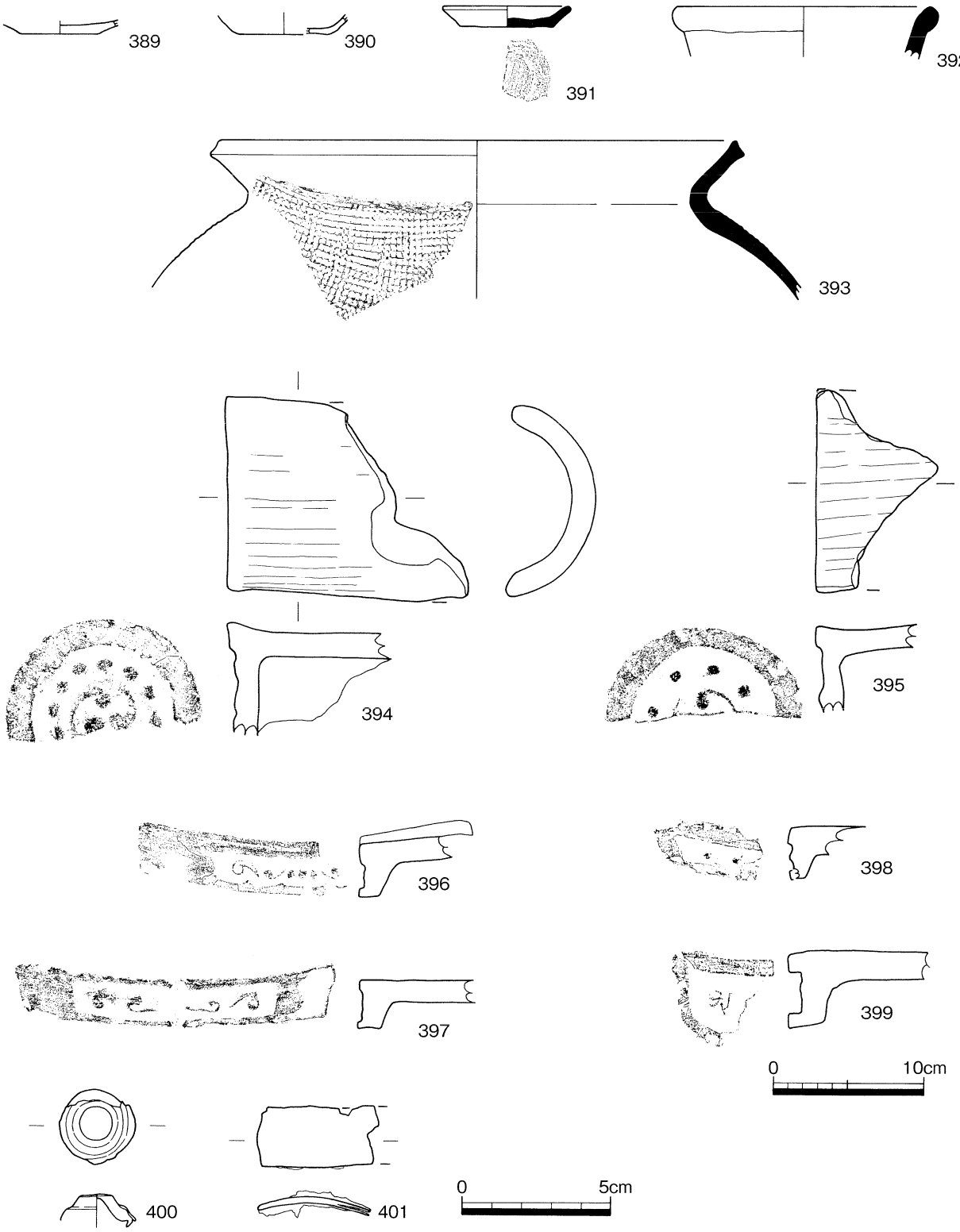


第49図　ＳＥ1002平・断面図（S：1/40）



第50図　ＳＥ1002出土遺物実測図（１）（S：1/4）

出土遺物は，磁器皿（371），陶器碗（372），同皿（373・374），同鉢（375～377），同擂鉢（378・379），同甕（380・381），土師質土器足釜（382・383・388），瓦質土器甕（384），土師質土器鍋（385），同甕（386・387），同足釜（388），土師器杯（389・390），須恵器皿（391），同甕（392・393），軒丸瓦（394・395），軒平瓦（396～399），青銅製飾り（400），鉄板（401）である。



第51図　ＳＥ1002出土遺物実測図（２）（S：1/4・1/2）

371は肥前系磁器であり，底部は肥厚する。見込みには蛇ノ目釉剥ぎと融着痕が認められる。372は肥前系陶器である。373は肥前系陶器で，見込みと畳付に３ヶ所の砂目が認められる。374は肥前系陶器で，底部は肥厚する。375は低い高台で底部に回転ヘラ切りが施される。376は肥前系陶器で，高台の断面は逆台形である。377は肥前系陶器で，見込みに融着痕が認められる。

378・379は備前焼である。378の口縁部は肥厚し，外面に２本の沈線が巡る。内面には10本一単位の卸目がある。379は口縁部が上下に若干拡張する。

380・381は備前焼で，口縁部は直立する。

382・383は内傾する口縁部に鍔が付き，体部外面下半に格子目叩き，内面に指ナデが施され，鍔以下に煤が付着する。385は口縁部が大きく外反し，体部内面に粗いハケが施され，体部下半に煤が付着する。386・387は口縁部が緩やかに外反し，外面に指頭圧，内面にハケが施される。

389は底面に静止ヘラケズリが施され，390は板目の後に回転ナデが施される。391は体部の短い小皿であり，底部は回転ヘラ切りの後に板目が施される。

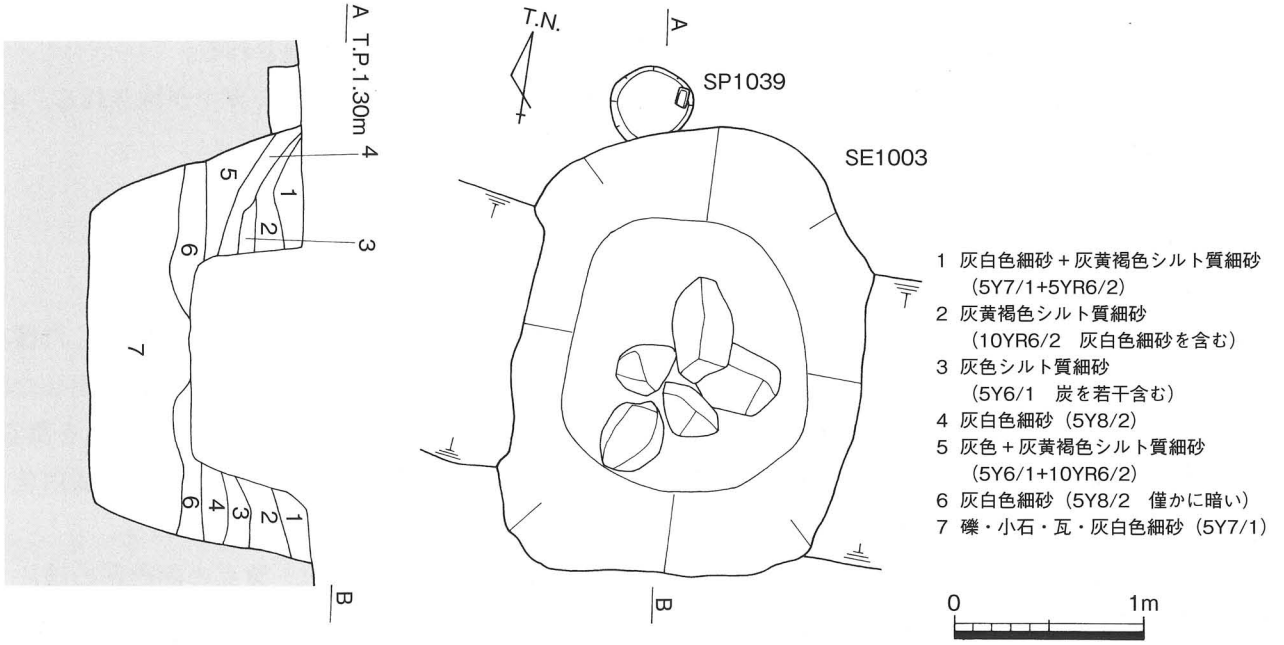
392の口縁端部は折り返し口縁である。393は体部から口縁部が鋭角に屈曲し，口縁端部が若干拡張する。体部外面は格子目叩きが施される。

394・395は巴文の軒丸瓦である。394の巴頭部は丸みを持ち，僅かにくびれを有し，尾はやや短く巻き込む。395の巴頭部は丸みを持ち，尾は非常に短く巻き込む。珠文の間隔は広い。

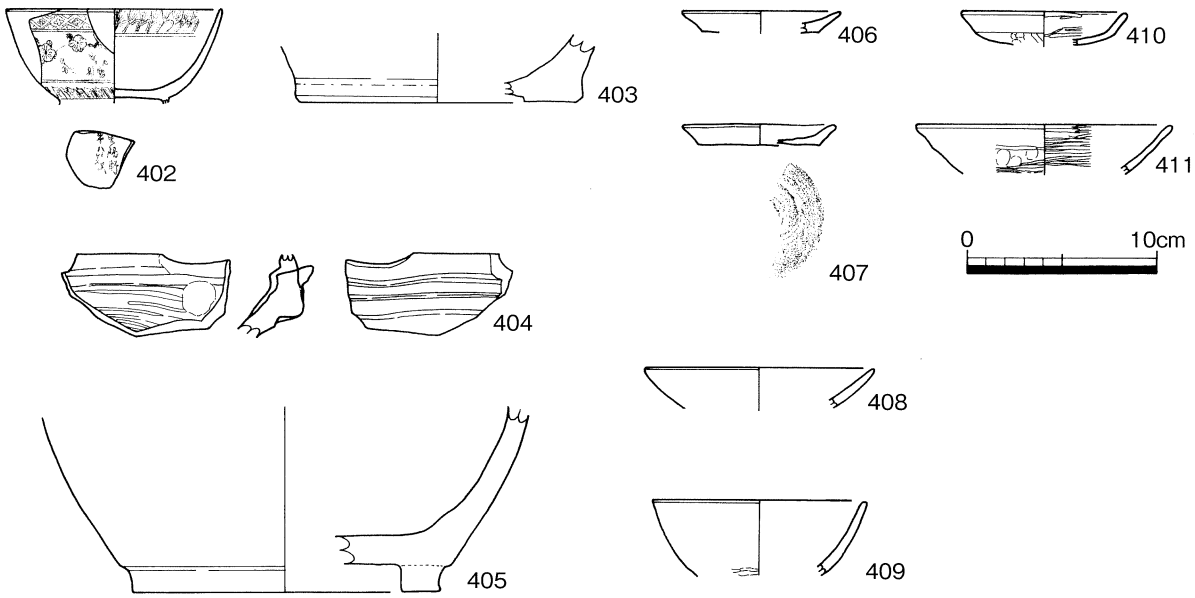
396は下向きの三葉文を中心飾りとし，文様区縦幅が狭い。397は中心飾りが磨滅して不明であり，唐草は２転する。398は珠文が認められ，文様区縦幅が狭い。399は瓦当に梵字のある軒平瓦で，梵字は胎蔵界五仏の宝幢如来を意味する。

ＳＥ 1003（第52・53図）

調査区南側中央において検出した井戸であり，ＳＤ 1001西端の北西に位置する。本遺構はＳＰ 1039と重複し，中央部の上端は試掘トレンチにより消滅する。検出した標高は1.25 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，南北方向の長軸は2.40 m，東西方向の短軸は1.85 mを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し，検出面から底面までの深さは1.25 mを測る。底面は不整な円形を呈し，その規模は1.45 × 1.25 mを測り，底面は平坦である。埋土は７層に分層できた。上層の第１～６層はレンズ状堆積をなし，下



第52図　ＳＥ 1003・ＳＰ 1039平・断面図（S：1/40）



第53図　ＳＥ1003出土遺物実測図（S：1/4）

層の第７層は礫・小石を含む灰白色細砂で，厚く堆積する。底面直上には長さ0.35～0.60ｍを測る５個の石が不規則な状態で検出される。これらの石は井戸枠としての石組みに伴うものと考えられる。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀中頃であると考えられる。

出土遺物は，磁器碗（402），陶器甕（403･405），同擂鉢（404），土師質土器皿（406～408），同杯（409），瓦器皿（410），同椀（411）である。

402は瀬戸・美濃系磁器であり，口縁端部に口錆が認められ，外面に四方襷，梅花文，連続文，圏線，内面に連続文，圏線が描かれる。底部には「東陽軒□ハ製」の銘がある。403は生産地不明陶器で，平底である。404は備前焼であり，口縁部は上下に拡張し，内外面に沈線を巡らす。405は備前焼であり，断面長方形の高台は抉りが施される。底部は回転ヘラケズリが施される。

406・407は体部の短い小皿であり，406の底部はナデ，407は回転ヘラ切りの後にナデが施される。408は体部がやや長い小皿であり，外面にヘラナデが施される。

409は器高のある形態で，体部外面は回転ナデの後に指頭圧・ヘラミガキが施される。

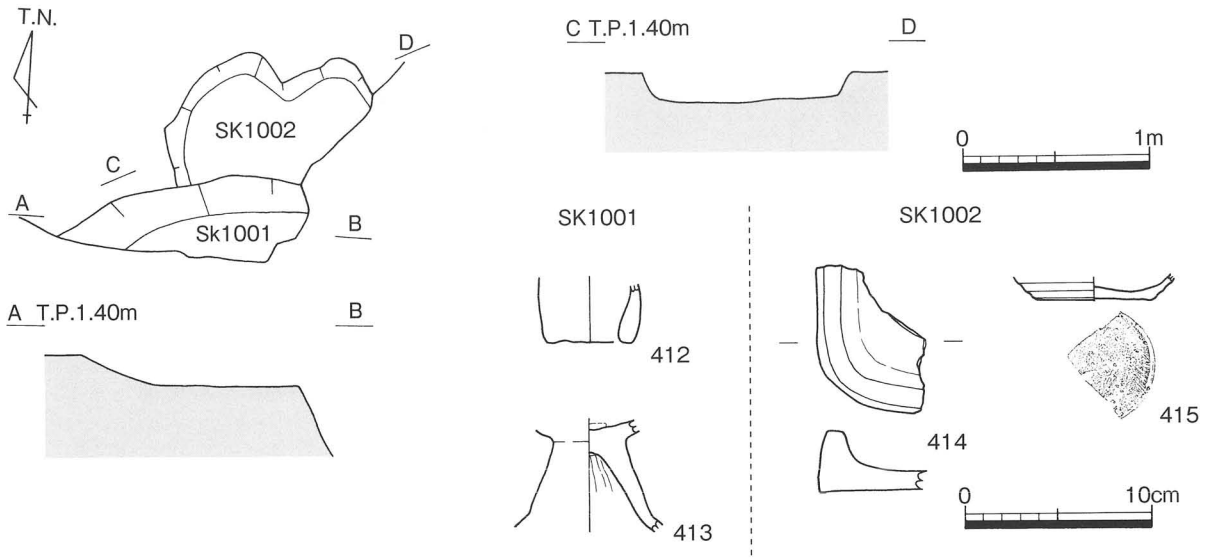
410は体部と底部の境に稜を持ち，体部外面は指頭圧・ヘラナデ，内面はヘラミガキが施される。411は外面に指頭圧・ヘラミガキ，内面に丁寧なヘラミガキが施される。

3　土坑

ＳＫ1001（第54図）

調査区南東隅において検出した土坑であり，ＳＫ1002を切り，ＳＤ1001に切られる。検出した標高は1.25ｍである。本遺構の南側はＳＤ1001に切られ，東側は近代の撹乱により消滅する。検出した部分から平面形は円形を呈すると推定できる。検出した南北方向の幅は0.45ｍ，東西方向は1.35ｍを測る。検出面からの深さは0.17ｍである。掘り方は緩やかな傾斜であり，底面は平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂の単一層である。埋土や重複関係から所属時期は17世紀後半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，イイダコ壺（412），弥生土器高杯（413）であるが，数点の陶磁器の破片も出土した。412は口縁部の破片であり，内面はナデが施される。413は脚部下半が屈曲し外方に広がり，内外面ともに磨耗が著しい。



第54図　ＳＫ 1001・1002 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1002（第 54 図）

調査区南東隅において検出した土坑であり，ＳＫ 1001 に切られ，東側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 1.24 mである。平面形は不整円形を呈し，北側が若干凹む。南北方向の幅は 0.65 m，東西方向は 1.12 mを測る。検出面からの深さは 0.17 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂である。埋土や重複関係から所属時期は 17 世紀後半と考えられる。

図化できた出土遺物は，陶器皿（414），土師器杯（415）であり，数点の陶磁器の破片も出土した。

414 は軟質施釉陶器であり，浅い隅丸方形の器形である。深い緑色の釉薬がかかる。

415 は底径 6.2cm で，底部は回転ヘラ切りの後にヘラナデが施される。

ＳＫ 1003（第 55 図）

調査区南側中央東寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＤ 1001 の上面で検出した。本遺構の北東隅は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 1.16 mである。平面形は隅丸方形を呈し，規模は 1.60 × 1.55 mを測る。検出面からの深さは 0.14 mを測る。掘り方の断面は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色シルト質細砂である。埋土や重複関係から所属時期は 17 世紀後半であると考えられる。

出土遺物は，土師器杯（416），陶器杯（417）であり，その他に数点の陶磁器片が出土した。

416 は直線的な体部が緩やかに立ち上がる。底部は回転ヘラ切りが施される。

417 は備前焼であり，外面にロクロ成形痕が残る。底部は静止糸切りが施され，体部外面上半と内面には薬釉がかかる。

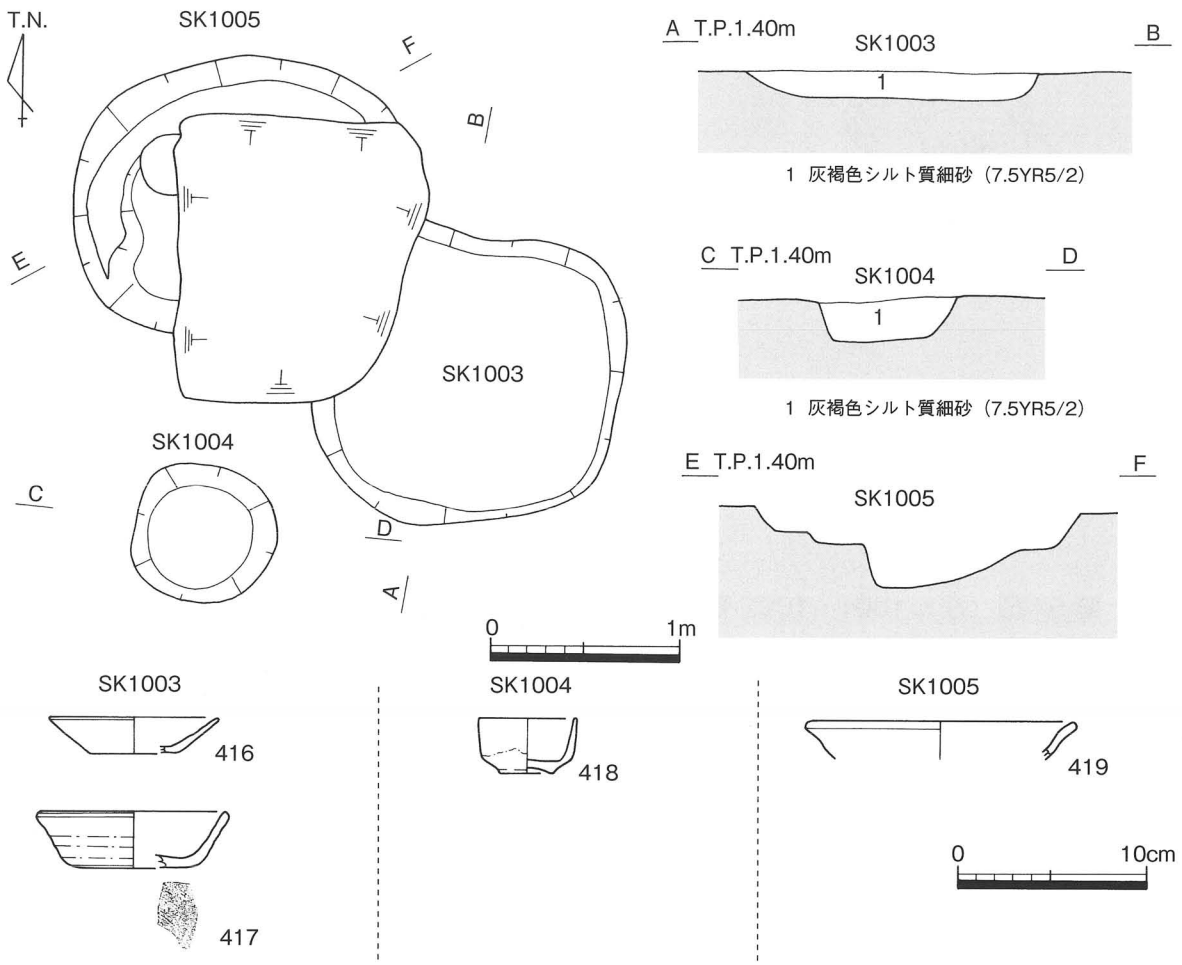
ＳＫ 1004（第 55 図）

調査区南側中央東寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＤ 1001 の上面で検出した。検出した標高は 1.16 mである。平面形は北西側の角張る不整な円形を呈し，直径は 0.75 mを測る。検出面からの深さは 0.24 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色シルト質細砂の単一層である。埋土や重複関係から所属時期は 17 世紀後半であると考えられる。

出土遺物は，肥前系陶器段重（418）であり，その他に数点の陶磁器片が出土した。418 は体部が屈曲しほぼ直立する。体部下半は露胎である。

ＳＫ 1005（第 55 図）

調査区南側中央東寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＰ 1024 を切る。本遺構の南東側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 1.16 mである。残存する平面形は東西方向に長い楕円形を呈する。



第55図　ＳＫ1003～1005平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

規模は東西方向の長軸1.85 m，南北方向の短軸1.50 mを測る。底面は中央が1段低くなっており，検出面からの深さは0.20 mである。掘り方は緩やかな傾斜である。埋土は灰褐色シルト質細砂の単一層である。埋土や重複関係から所属時期は17世紀後半であると考えられる。

図化できた遺物は，肥前系陶器碗（419）のみであるが，その他に数点の陶磁器片が出土した。419は体部が僅かに屈曲する。

ＳＫ1007（第56図）

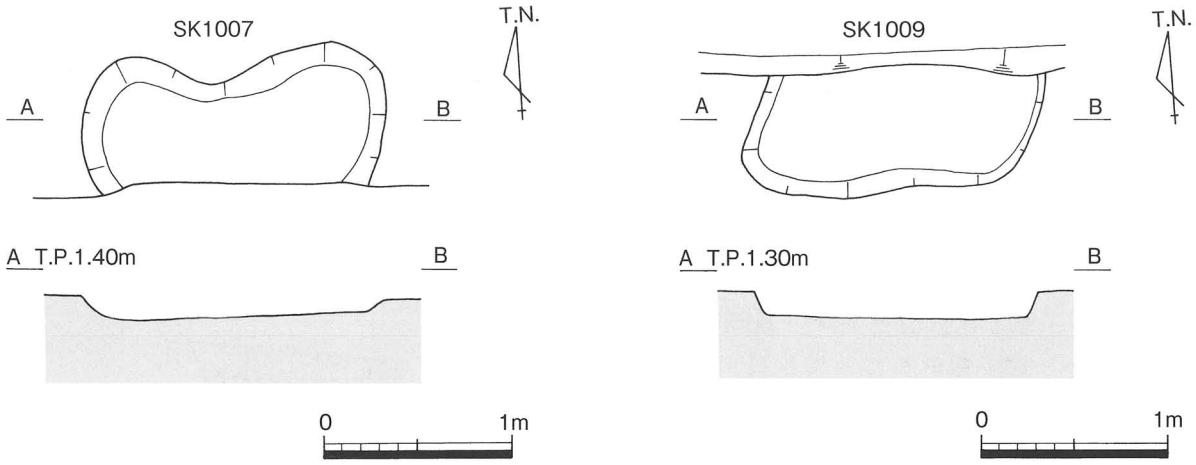
調査区南側中央西寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＤ1001の上面で検出した。本遺構の南側は調査区外に広がる。検出した標高は1.23 mである。平面形は北側中央が凹む楕円形を呈する。東西方向の長軸は1.62 m，南北方向は0.75 mを測る。検出面からの深さは9 cmである。掘り方の断面は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦である。所属時期は他の土坑と時期差はほとんどないと考えられる。

出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

ＳＫ1009（第56図）

調査区南側中央西寄りにおいて検出した土坑であり，ＳK1019を切る。本遺構の北側は試掘トレンチにより消滅する。検出した標高は1.18 mである。平面形は不整な楕円形を呈すると推定される。東西方向の長軸は1.52 m，南北方向は0.68 mを測る。検出面からの深さは0.15 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦である。埋土は灰褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片のみであり，所属時期は不明であるが，埋土や重複関係から他の土坑と時期差はほとんどないと考えられる。



第56図　ＳＫ 1007・1009 平・断面図（S：1/40）

ＳＫ 1013（第57図）

調査区北西隅において検出した土坑であり，ＳＰ1079と重複する。本遺構の北側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は1.15ｍである。平面形は長方形に近い楕円形を呈すると推定される。東西方向の短軸は0.93ｍ，検出できた南北方向の長軸は1.05ｍを測る。検出面からの深さは0.18ｍである。掘り方の断面は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色＋淡黄色細砂と灰褐色シルト質細砂の２層に分層できる。出土遺物や重複関係から所属時期は17世紀後半と考えられる。

出土遺物は，磁器皿（420），土師質土器皿（421），同杯（422）である。

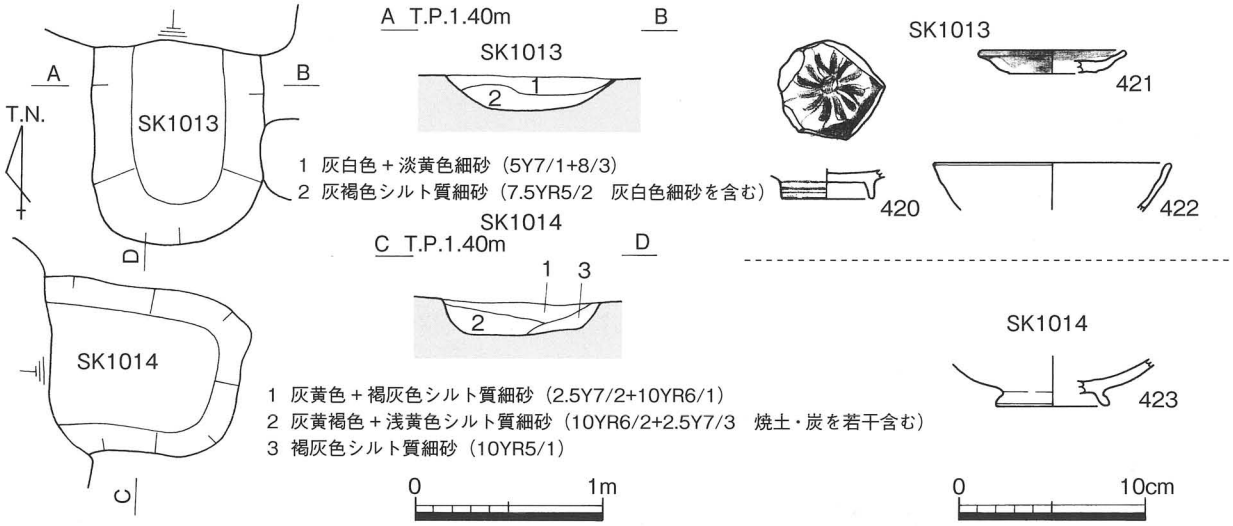
420は肥前系磁器であり，外面に圏線，見込みに退化した花弁文が認められる。

421は短い体部で内外面に煤が付着する。底部は回転ヘラ切りが施される。422は僅かに内湾する体部であり，内外面に回転ナデが施される。

ＳＫ 1014（第57図）

調査区北西隅において検出した土坑であり，西側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は1.15ｍである。平面形は長方形に近い楕円形を呈すると推定される。南北方向の短軸は0.89ｍ，検出できた東西方向の長軸は1.02ｍを測る。検出面からの深さは0.20ｍである。掘り方の断面は逆台形を呈し，底面は平坦である。埋土は灰黄色＋褐灰色シルト質細砂と灰黄褐色＋浅黄色シルト質細砂と褐灰色シルト質細砂の３層に分層できる。所属時期は出土遺物や検出状況から17世紀後半と考えられる。

出土遺物は，土師質土器椀（423），数点の陶磁器の破片である。

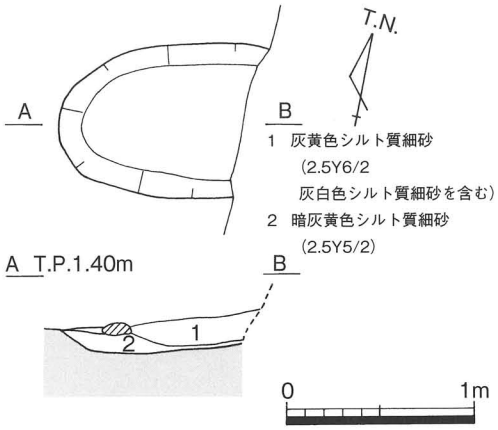


第57図　ＳＫ 1013・1014 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1015（第 58 図）

調査区北西側において検出した土坑であり，単独で存在する。本遺構の東側は調査区外に広がる。検出した標高は 1.15 mである。平面形は楕円形を呈し，南北方向の短軸は 0.82 m，検出できた東西方向の長軸は 1.00 mを測る。検出面からの深さは 0.12 mである。掘り方の断面は逆台形を呈し，底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色シルト質細砂を若干含む灰黄色シルト質細砂と暗灰黄色シルト質細砂の２層に分層できる。所属時期は出土遺物と埋土から 17 世紀後半と考えられる。

出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片である。



第 58 図　ＳＫ 1015 平・断面図
(S：1/40)

ＳＫ 1016（第 59 図）

調査区北西側において検出した土坑であり，ＳＰ 1068 に切られる。検出した標高は 1.14 m前後である。平面形は不整な円形を呈し，直径は 0.82 × 1.05 mを測る。底面北側に段を持ち，検出面から最深部までの深さは 0.24 mであり，段との比高差は 0.15 mを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は灰黄褐色シルト質細砂と灰黄褐色シルト質細砂＋灰白色細砂の２層に分層できる。出土遺物や重複関係から所属時期は 17 世紀後半と考えられる。

出土遺物は，須恵器杯（424），土師質土器椀（425・426），道具瓦（427）である。

424 はやや上げ底であり，回転糸切りが施される。

425・426 は高い高台を持ち，425 の内面はヘラミガキ，426 はナデが施される。

427 は裏面に刻印が認められる。

ＳＫ 1017（第 59 図）

調査区北西側において検出した土坑であり，南側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 1.19 m前後である。平面形は３基の土坑が合体したような不規則な形を呈し，中央に最深部を持つ円形の落ち込みがある。北側と南側の落ち込みは非常に浅い。東西方向の短軸は 0.64 m，検出できた南北方向の長軸は 0.90 mを測る。検出面から最深部までの深さは 0.30 mである。最深部の底面は平坦である。埋土は，灰黄色シルト質細砂と灰黄色シルト質細砂＋暗灰黄色シルト質細砂の上下２層に分層できる。埋土や重複関係から所属時期は 17 世紀後半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，備前焼陶器杯（428）のみであるが，その他に数点の土師質土器と陶磁器の破片が出土した。

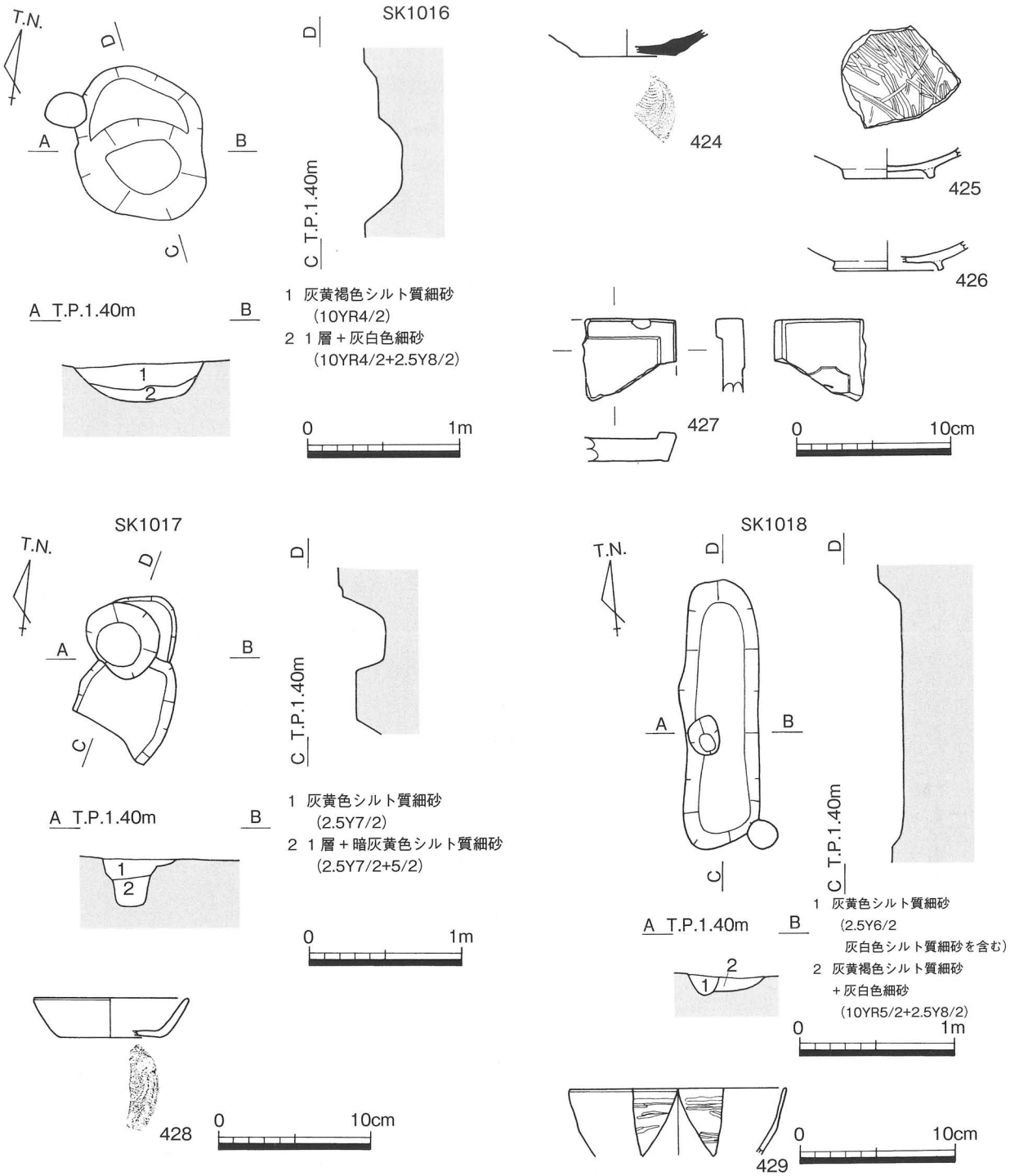
428 は底部に回転糸切りが施され，内面は指ナデである。

ＳＫ 1018（第 59 図）

調査区北西側において検出した土坑であり，ＳＫ 1016 とＳＫ 1017 の中間に位置する。本遺構はＳＰ 1069・1100 に切られる。検出した標高は 1.09 ～ 1.17 mである。平面形は細長い楕円形を呈する。南北方向の長軸は 1.71 m，東西方向の短軸は 0.50 mを測る。検出面からの深さは 0.20 mである。底面は平坦である。埋土は，灰黄褐色シルト質細砂＋灰白色細砂の単一層である。所属時期は埋土と重複関係から 17 世紀後半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，土師質土器椀（429）のみであるが，その他に数点の土師質土器と陶磁器の破片が出土した。

429 は内外面にまばらなヘラミガキが施される。



第59図　ＳＫ 1016 ～ 1018 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

ＳＫ 1019（第 60 図）

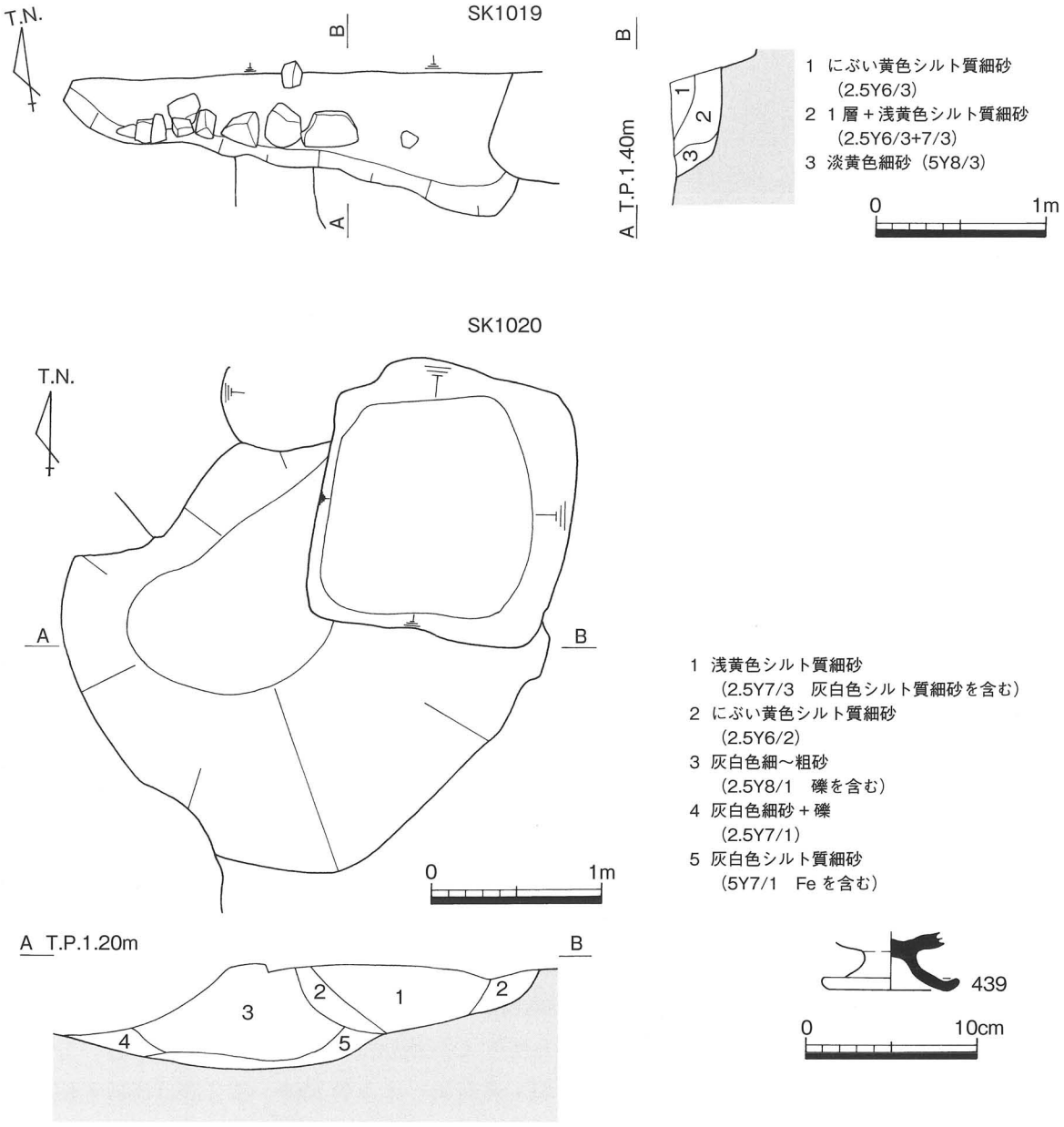
調査区南側中央やや西寄りにおいて検出した土坑であり，ＳＫ 1009 に切られる。本遺構の北側は試掘トレンチにより消滅する。検出した標高は 1.19 mである。残存する平面形は方形を呈する。検出した東西方向の幅は 2.70 m，南北方向は 0.83 mを測る。検出面からの深さは 0.33 mである。底面は北東側に緩やかに下がる。0.15 ～ 0.30 mの石が南壁に沿って並んだ状態で出土した。埋土は３層に分層できた。第１層はにぶい黄色シルト質細砂，第２層は第１層＋浅黄色シルト質細砂，第３層は淡黄色細砂である。所属時期は埋土や重複関係から判断して 17 世紀後半であると考えられる。

出土遺物は，数点の土師質土器と陶磁器の破片のみである。

ＳＫ 1020（第 60 図）

調査区南西隅において検出した土坑であり，西側上端は第１遺構面のＳＸ 1003 に切られる。本遺構の北東部は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は1.20ｍ前後である。平面形は不整な円形を呈する。東西方向の直径は 2.84 ｍ，南北方向の直径は 2.55 ｍを測る。検出面からの深さは 0.60 ｍである。底面は北西側に片寄った位置にあり，底面のレベルは中央に向かって緩やかに下がる。北側の掘り方は急傾斜であるが，その他は非常に緩やかな傾斜である。埋土は５層に分層できる。第１層は灰白色細砂を含む浅黄色シルト質細砂，第２層はにぶい黄色シルト質細砂，第３層は礫を含む灰白色細～粗砂，第４層は灰白色細砂＋礫，第５層は灰白色シルト質細砂である。堆積は大きく２回に分けられ，第３～５層が堆積した後に第１・２層が堆積する。所属時期は埋土や重複関係から 17 世紀後半であると考えられる。

図化できた出土遺物は，須恵器高杯（430）であるが，数点の土師質土器と陶磁器の破片が出土した。



第 60 図　ＳＫ 1019・1020 平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）

4　柱穴

ＳＰ 1011（第 61 図）

調査区南東隅において検出した柱穴である。検出した標高は 1.27 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.24 m，深さは 0.23 mを測る。埋土は焼土を含む褐灰色＋灰黄色細砂質シルトである。

出土遺物は，瓦製円盤（431）である。

ＳＰ 1020（第 61 図）

調査区南東側において検出した柱穴であり，ＳＤ 1001 の上面で検出した。南側は調査区外となる。検出した標高は 1.24 mである。平面形は円形を呈し，検出できた直径は 0.78 m，深さは 0.18 mを測る。埋土は灰黄色細砂である。

出土遺物は，軒平瓦（432）であり，瓦当に２転する唐草が認められ，中心部分は欠損する。

ＳＰ 1027（第 61 図）

調査区中央やや東寄りにおいて検出した柱穴である。検出した標高は 1.23 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.25 m，深さは 0.10 mを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂＋灰白色細砂である。

出土遺物は，土師質土器皿（433・434），陶器皿（435），土師質土器鍋（436）である。

433 は緩やかな傾斜で立ち上がる体部である。434 の底部は板目が施される。435 は肥前系陶器であり，口縁部が溝縁状の皿である。436 は口縁端部を面取りし，外面は指頭圧が施される。

ＳＰ 1028・1029（第 61 図）

調査区中央やや東寄りにおいて検出した柱穴である。検出した標高は 1.20 mである。平面形は楕円形を呈する。ＳＰ 1028 は直径 0.24 × 0.47 m，深さ 0.10 mを測り，ＳＰ 1029 は直径 0.24 × 0.47 m，深さ 0.13 mを測る。拳大の石が数個出土した。ＳＰ 1028 の埋土は浅黄色シルト質細砂＋灰白色シルト質細砂，ＳＰ 1029 は灰白色細砂である。

出土遺物は，陶器皿（437）であり，内外面とも施釉される。

ＳＰ 1034（第 61 図）

調査区南側中央においてＳＤ 1001 の上面で検出した柱穴である。検出した標高は 1.20 mである。平面形は楕円形を呈し，直径は 0.50 × 1.10 m，深さは 0.20 mを測る。埋土は灰黄色細砂である。

出土遺物は，須恵質土器甕（438）である。

ＳＰ 1039（第 52・61 図）

調査区南側中央において検出した柱穴で，ＳＥ 1003 と重複する。検出した標高は 1.04 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.39 m，深さは 0.17 mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は，小型の硯（439）である。

ＳＰ 1040（第 61 図）

調査区南側中央において検出した柱穴である。検出した標高は 1.04 mである。平面形は円形を呈する。直径は 0.26 m，深さは８cm を測る。埋土は灰黄色シルト質細砂である。

出土遺物は，土師質土器皿（440・441）である。440 は口縁端部を面取りし，底部は回転糸切りが施される。441 は口径 11.8cm を測り，底部に糸切りが施される。

ＳＰ 1043（第 61 図）

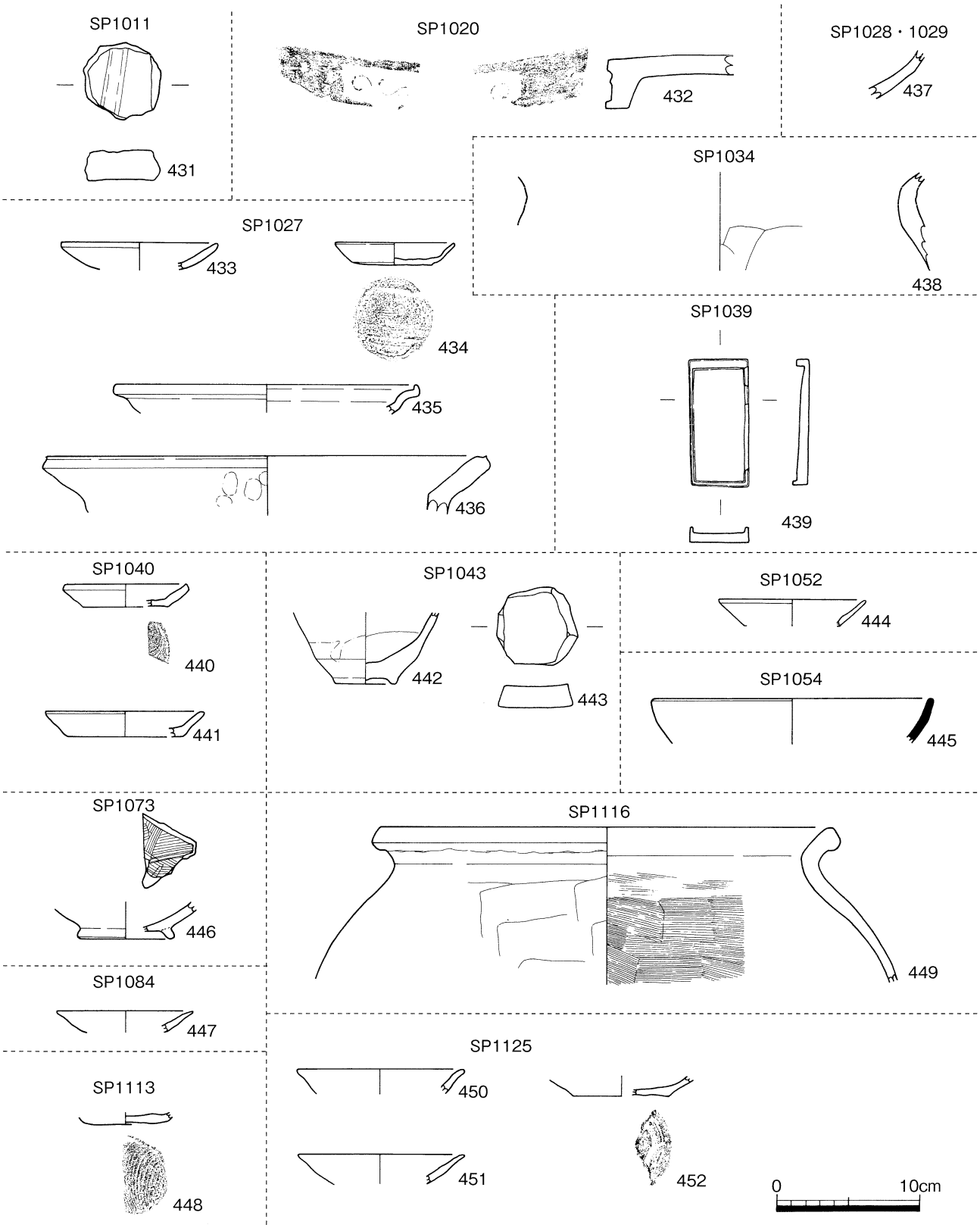
調査区南側中央やや西寄りにおいて検出した柱穴である。検出した標高は 1.00 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.36 m，深さは 0.15 mを測る。埋土は灰黄色シルト質細砂である。

出土遺物は，陶器碗（442），瓦製土盤（443）である。442 は肥前系陶器であり，外面下半は露胎である。内面に圏線が巡る。443 は瓦を方形に近い円形に割っている。

ＳＰ 1052（第 61 図）

調査区北西側において検出した柱穴である。検出した標高は 1.18 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.35 m，深さは 0.25 mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂＋灰白色細砂である。

出土遺物は，土師質土器皿（444）である。



第 61 図　第１遺構面ＳＰ出土遺物実測図（S：1/4）

ＳＰ 1054（第 61 図）

調査区北西側において検出した柱穴である。検出した標高は 1.14 mである。平面形は不整な楕円形を呈し，直径は 0.22 × 0.38 m，深さは 0.12 mを測る。埋土は浅黄色シルト質細砂である。

出土遺物は，須恵器杯（445），数点の土師質土器の破片である。

ＳＰ 1073（第 61 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，西側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 1.17 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.30 m，深さは 0.13 mを測る。埋土は灰黄褐色シルト質細砂の単一層である。

出土遺物は，内面にハケが施される須恵質土器椀（446），数点の土師質土器の破片である。

ＳＰ 1084（第 61 図）

調査区北西側において検出した柱穴であり，ＳＵ 1001 を切る。検出した標高は 1.18 mである。平面形は楕円形を呈し，直径は 0.46 × 0.56 m，深さは 0.39 mを測る。埋土は灰黄色＋灰黄褐色シルト質細砂である。出土遺物は，土師質土器皿（447）で，口縁部が薄くなっている。

ＳＰ 1113（第 61 図）

調査区南側中央やや西寄りにおいて検出した柱穴であり，ＳＰ 1114 と重複する。検出した標高は 1.00 mである。平面形は楕円形を呈し，直径は 0.41 × 0.63 m，深さは 6 cmを測る。底面直上に長さ 0.32 m の石が出土した。埋土は灰黄褐色シルト質細砂である。

出土遺物は，底面に静止糸切りが施される土師質土器杯（448）である。

ＳＰ 1116（第 61 図）

調査区南側中央やや西寄りにおいて検出した柱穴である。検出した標高は 1.04 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.40 m，深さは 0.12 mを測る。埋土は灰黄褐色＋黄灰色シルト質細砂である。

出土遺物は，土師質土器甕（449）であり，口縁部が短く外反する。体部外面は板ナデ，内面は細かいハケが施される。

ＳＰ 1125（第 61 図）

調査区南西隅において検出した柱穴であり，北側は近代の撹乱により消滅する。検出した標高は 1.20 mである。平面形は円形を呈し，直径は 0.40 m，深さは 8 cmを測る。埋土は褐灰色シルト質細砂の単一層である。

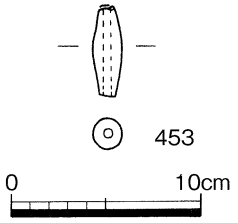
出土遺物は，土師質土器杯（450･451），土師器杯（452）である。450･451 は口縁端部が若干外反する。452 は底部に回転ヘラ切りが施される。

5　犂跡状遺構

ＳＵ 1001（第 40・62 図）

調査区北西側において検出した犂跡状遺構であり，ＳＰ 1047・1081・1084 に切られる。調査時に溝の可能性も考えたが，規模が小さいこととＳＵ 1002 が並行して検出されたことから犂跡状遺構とする。検出した標高は 1.19 mである。本遺構はＳＰ 1084 から北方向にほぼ直線的に延び，ＳＰ 1047 付近で直角に屈曲し東方に延びる。東端は近代の撹乱により消滅する。幅は 0.12 ～ 0.34 m，深さは 2 cmを測る。埋土は灰白色細砂の単一層である。他の遺構との重複関係から本遺構の所属時期は 17 世紀後半と考えられる。

出土遺物は，管状土錘（453）と数点の土師質土器小片である。



第 62 図　ＳＵ 1001
出土遺物実測図（S：1/4）

ＳＵ 1002（第 40 図）

調査区北西側において検出した犂跡状遺構であり，ＳＵ 1001 の西側に並行して延びる。検出した標高は 1.19 ｍである。検出できた範囲は北端のみであり，南北方向に短く延び，北端でほぼ直角に屈曲し西方に延びる。幅は 0.20 ｍ，深さは２cmを測る。埋土は灰白色細砂の単一層である。出土遺物はないが，所属時期はＳＵ 1001 と同じであると考えられる。

6　性格不明遺構

ＳＸ 1002（第 63 図）

調査区東端において検出した落ち込みであり，東側と西側は近代の撹乱により消滅する。本遺構の北側は調査区外に広がる。検出した標高は 1.22 ｍである。検出できた範囲は非常に狭く，平面形は不明である。検出できた南北方向の幅は 2.55 ｍ，東西方向は 0.80 ｍを測る。検出面からの深さは 0.58 ｍであり，掘り方は非常に緩やかである。底面は北方向に若干下がる。埋土は６層に分層できた。第１層はにぶい黄橙色＋褐灰色シルト質細砂，第２層は白灰色粗砂，第３層は灰白色細砂，第４層は灰黄色シルト質細砂，第５層は灰白色細砂＋黄灰色シルト質細砂，第６層は褐灰色シルト質細砂であり，第１層には多量の礫や瓦が多量に含まれる。出土遺物や埋土から所属時期は 18 世紀と考えられる。

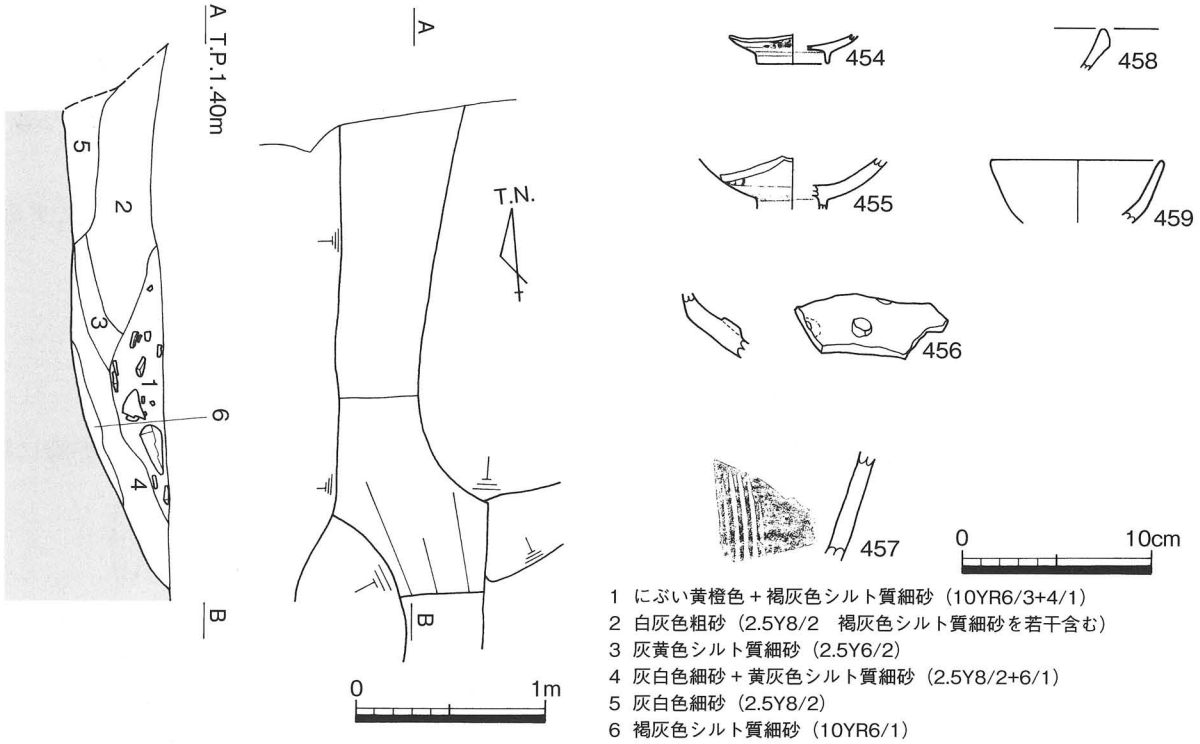
出土遺物は，磁器碗（454・455），陶器壺（456），同擂鉢（457），白磁碗（458），土師質土器杯（459）である。

454･455 は瀬戸･美濃系磁器である。454 は外面に草文，高台に圏線が描かれる。455 は体部外面に圏線･連続文，高台に圏線が描かれる。

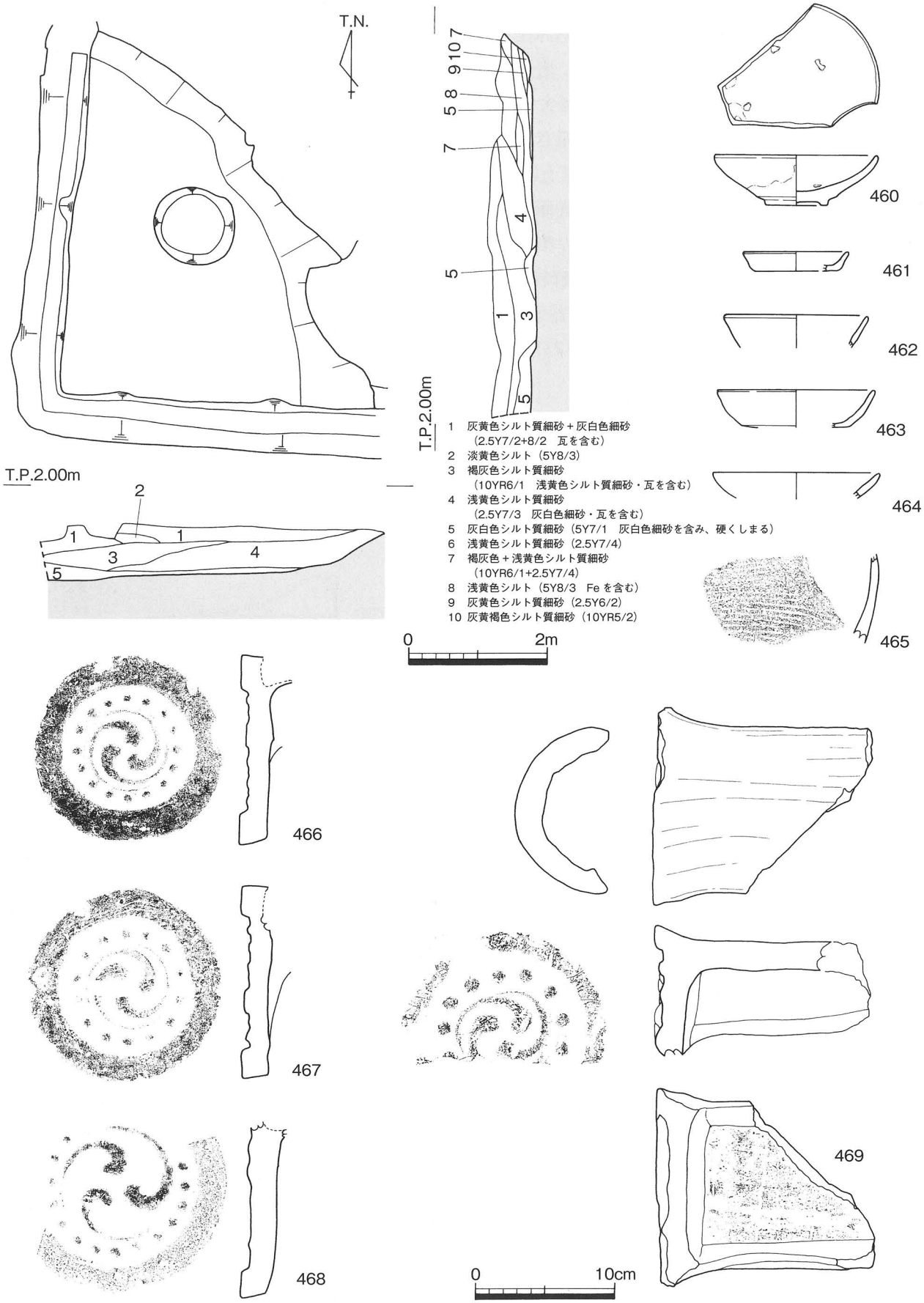
456 は備前焼陶器壺の肩部片である。457 は備前焼陶器であり，外面はナデが施される。

458 は玉縁状の口縁を呈する。

459 は口径９cm を測り，体部が僅かに内湾する。



第 63 図　ＳＸ 1002 平・断面図及び出土遺物実測図（Ｓ：1/40・1/4）

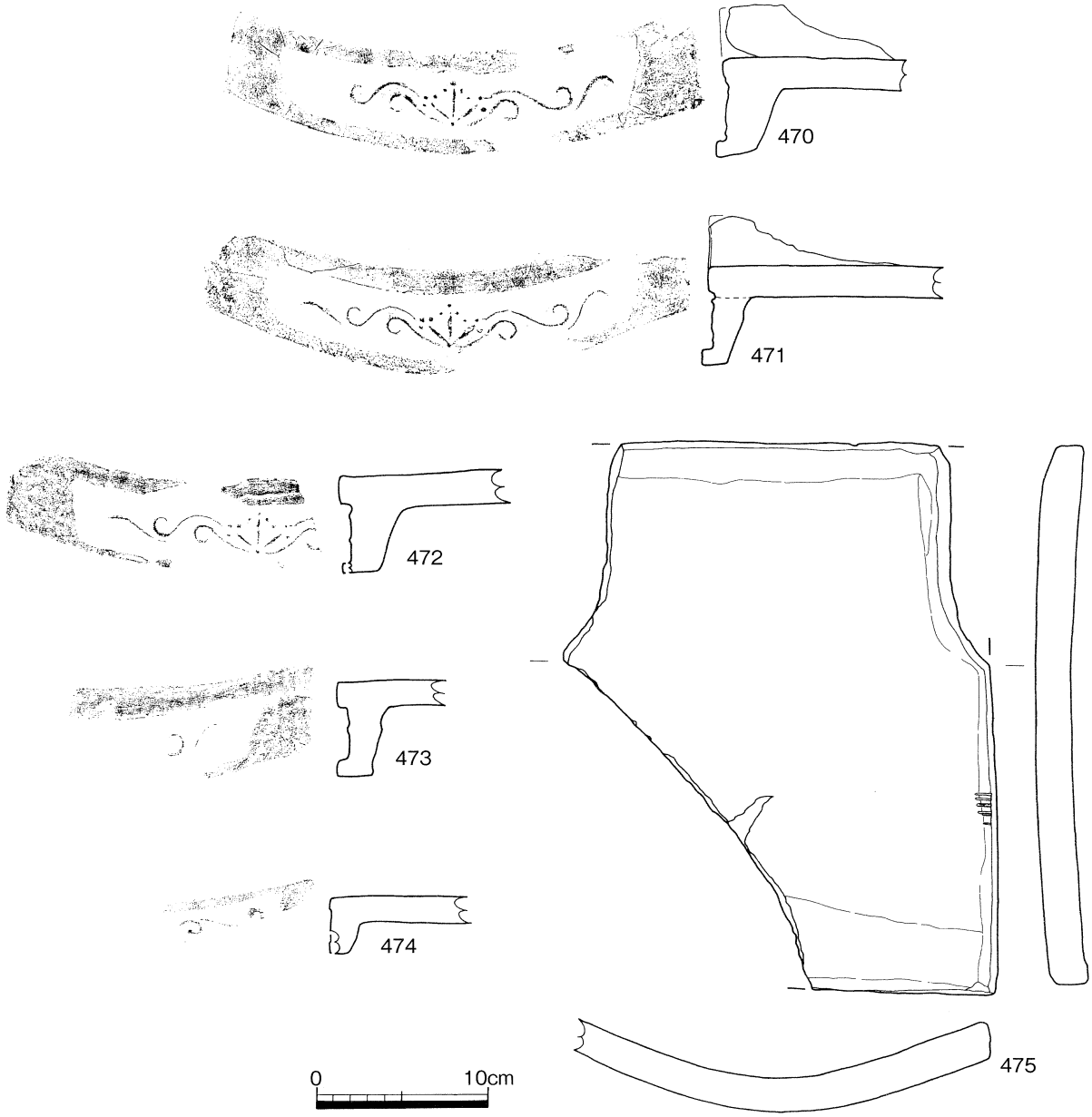


第 64 図　S X 1003 平・断面図及び出土遺物実測図（1）（S：1/80・1/4）

ＳＸ 1003（第 64・65 図）

調査区南西隅において検出した落ち込みであり，ＳＫ 1020 を切る。検出した標高は 1.20 ～ 1.24 mである。本遺構の南側と西側は調査区外に広がり，検出できた範囲は全体の 1/4 のみである。残存する平面形は緩やかに湾曲しており，本遺構は大規模な円形であると推測できる。南北方向の幅は 5.27 m，東西方向は 4.50 mを測る。検出面からの深さは 0.76 mである。東側の掘り方は緩やかであるが，北側はやや急傾斜である。底面は平坦である。埋土は 10 層に分層でき，その堆積は大きく二つに分かれる。まず，灰白色細砂を含み固くしまる第５層が底面直上に堆積し，第６～ 10 層が北側を中心に堆積する。次に，第１～４層が広い範囲に堆積する。この第１～４層は瓦を多量に含んでおり，人為的な堆積を示している。出土遺物や埋土，重複関係から所属時期は 17 世紀後半と考えられる。

出土遺物は，陶器皿（460），土師質土器皿（461），同杯（462 ～ 464），弥生土器甕（465），軒丸瓦（466 ～ 469），軒平瓦（470 ～ 474），平瓦（475）である。



第 65 図　ＳＸ 1003 出土遺物実測図（２）（S：1/4）

460は肥前系陶器であり，体部外面下半は露胎である。見込みには胎土目が３ヶ所認められる。

461は体部の短い形態の小皿であり，底部には回転ヘラ切りが施される。462は直線的な体部であり，463は若干内湾気味の体部で，底部にナデが施される。464は緩やかな傾斜の体部である。

465は外面に平行叩きが施される。胎土は石英・長石・角閃石を多量に含む。

466～469は瓦当に巴文のある軒丸瓦である。466～468は幅広い外区で，巴頭が比較的に不明瞭であり，尾は細く，やや長く巻き込む。珠文径はやや小さく，14個・16個を数える。469は幅狭い外区で，巴頭は比較的明瞭で，尾は細くやや長い。凹面には布目・コビキＢ痕・接合痕が残存する。

470～474は瓦当に唐草文のある軒平瓦であり，唐草は一重で２転ないし３転する。中心飾りは上向きの三葉文の各先端に珠文を３点配する。475は凸凹面に縦方向のナデが施され，凹面には面取りが認められる。

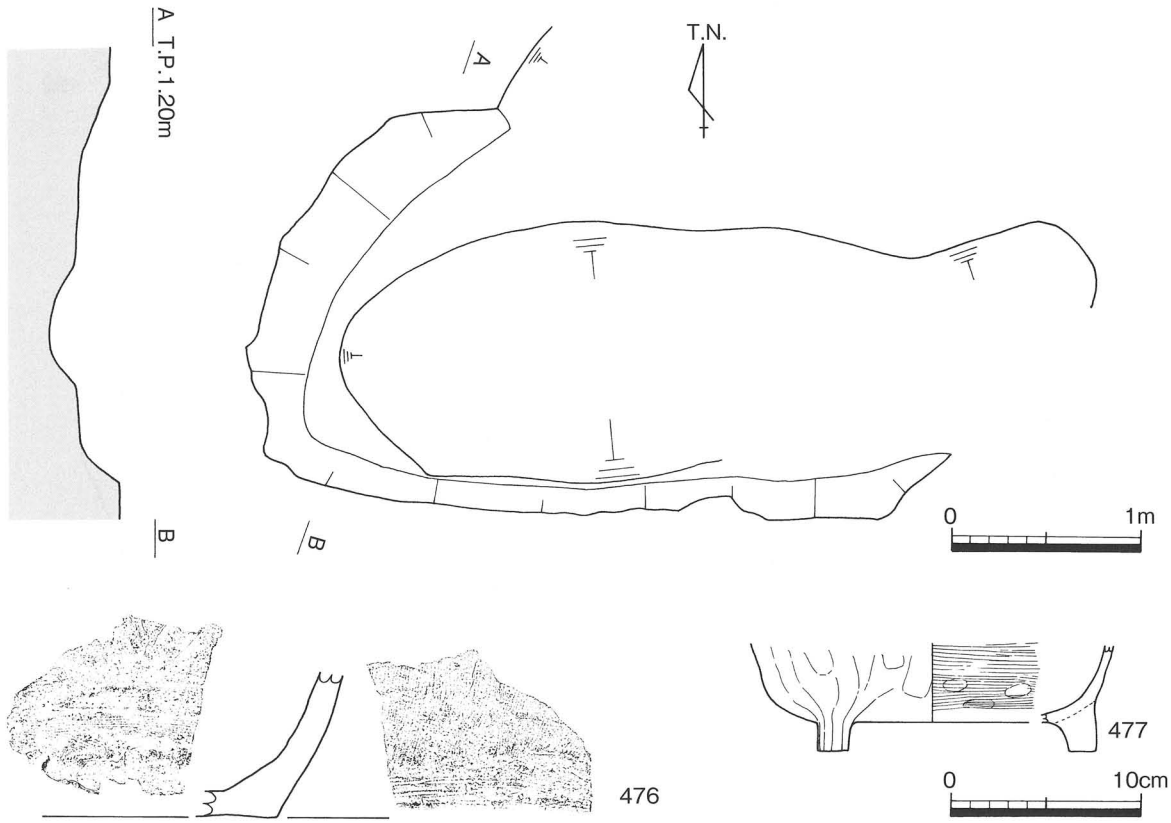
ＳＸ1004（第66図）

調査区中央西寄りにおいて検出した落ち込みである。検出面の標高は1.00～1.11ｍである。本遺構は西側と南側のみ残存し，平面形は楕円形を呈すると考えられる。検出できた東西方向の長軸は3.73ｍ，南北方向の短軸は2.15ｍを測る。検出面からの深さは0.23ｍである。掘り方は緩やかであり，特に西壁は非常に緩やかな傾斜である。底面はほぼ平坦である。埋土は灰白色細砂＋黄灰色シルト質細砂である。出土遺物や埋土から所属時期は17世紀後半と考えられる。

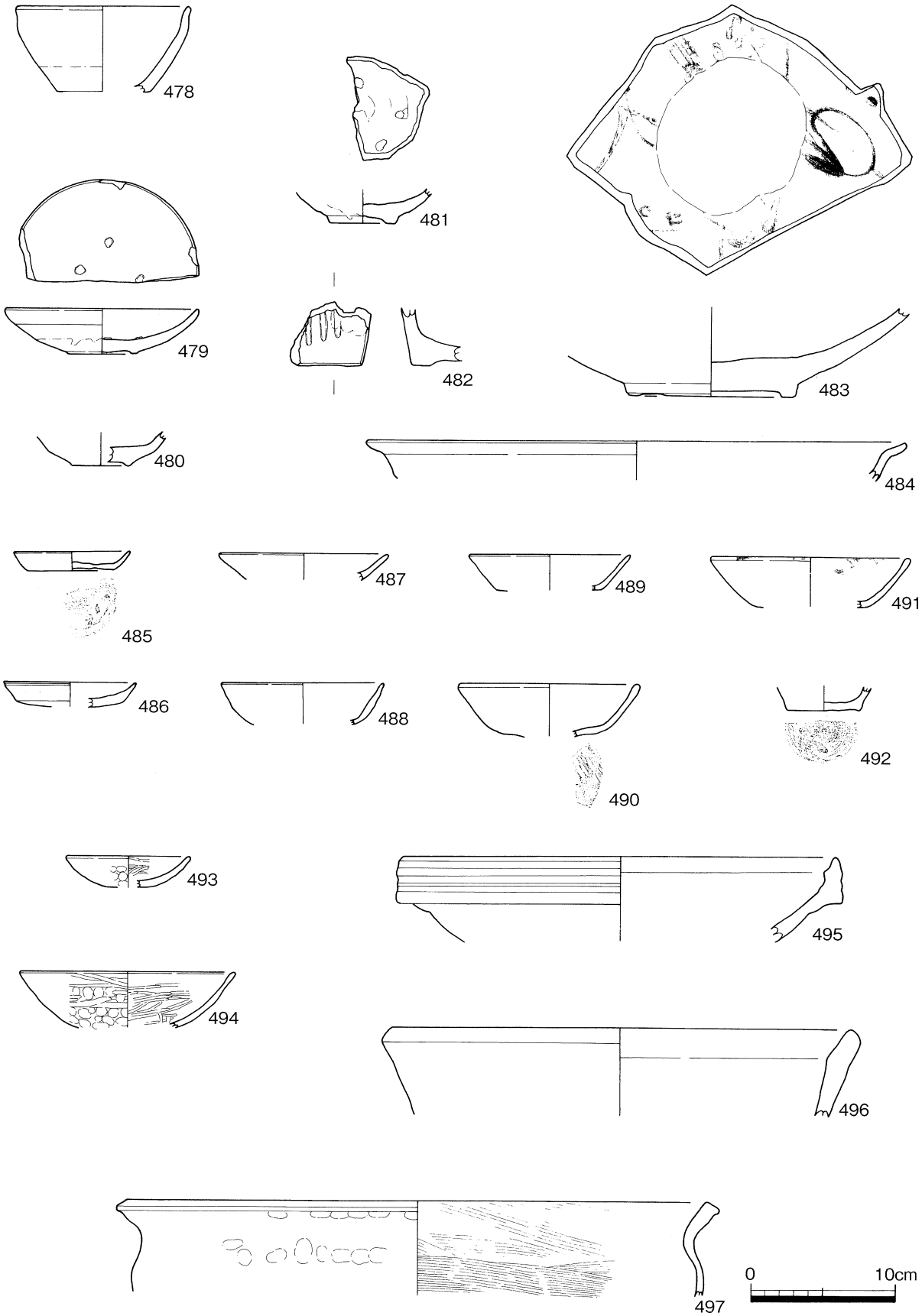
出土遺物は，陶器甕（476），土師質土器火鉢（477），数点の土師質土器小片である。

476は備前焼陶器であり，外面に縦方向と横方向のハケ，内面と底部にハケ・ナデが施される。

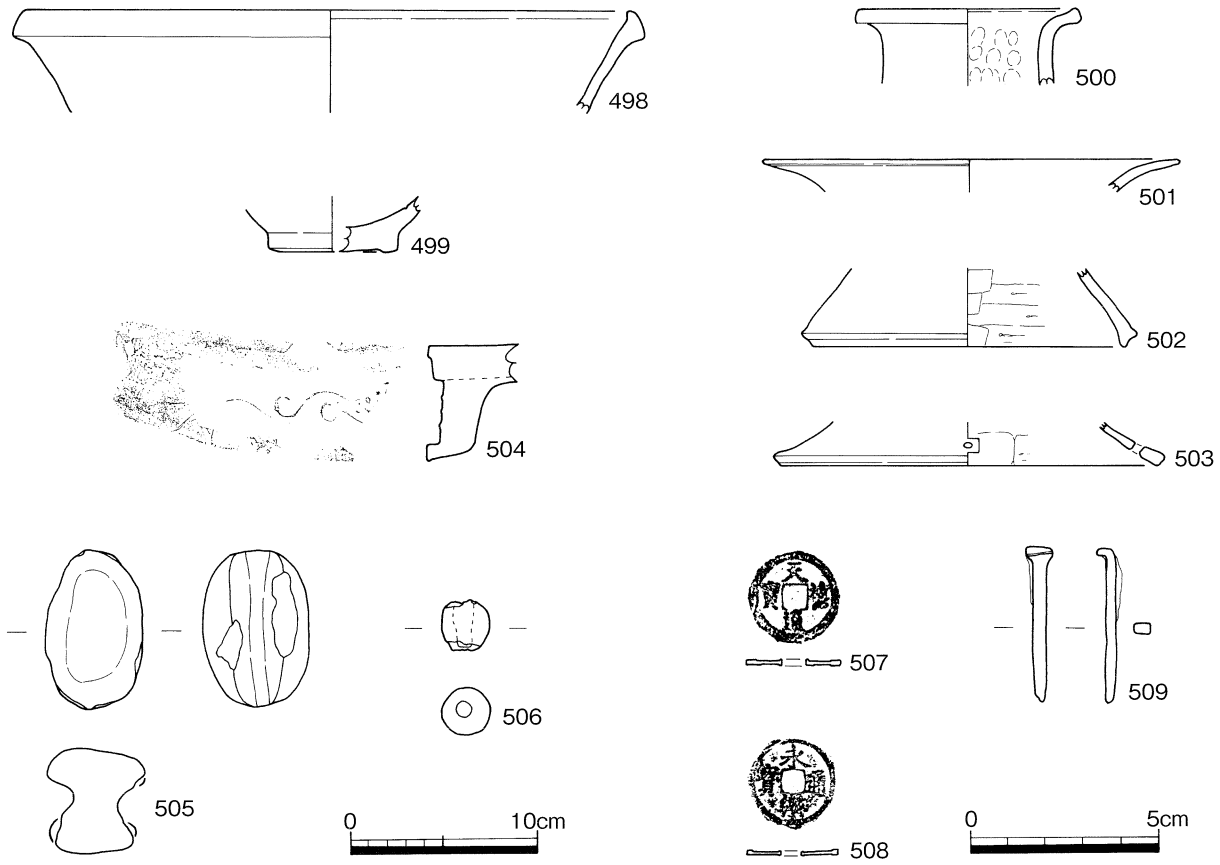
477は棒状の脚部を有し，外面にヘラナデ，内面に横方向の粗いハケ・ナデが施される。



第66図　ＳＸ1004平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/40・1/4）



第67図　第1遺構面出土遺物実測図（1）（S：1/4）



第68図　第1遺構面出土遺物実測図（2）（S：1/4・1/2）

7　第1遺構面出土遺物　（第67～69図）

478～509は第1遺構面より出土した遺物であり，510～526は近代の撹乱より出土した遺物である。

478は肥前系磁器天目碗であり，口縁部は僅かに屈曲する。479は肥前系陶器皿であり，非常に低い高台が付く。見込みには胎土目が3ヶ所認められる。480は陶器皿であり，体部中央で湾曲する。高台は非常に低い。481は肥前系陶器碗であり，見込みには胎土目が3ヶ所認められる。482は陶器鉢であり，平面形は方形を呈する。底面は露胎である。483は肥前系陶器鉢であり，内面に草花文が描かれる。484は陶器皿であり，口縁部が大きく屈曲し外反する。

485～487は土師質土器皿である。485・486は体部の短い小皿であり，485の底部は回転ヘラ切りが施され，486は口縁端部外面に細い沈線が巡る。487は体部のやや長い小皿である。488～492は土師質土器杯である。490は口縁端部が丸く収まり，底部は静止ヘラケズリが施される。491は口縁端部に煤が付着し，底部は回転ヘラ切りの後にナデが施される。492は底部に回転ヘラ切りが施される。

493は瓦器皿であり，体部外面に指頭圧，内面にヘラミガキが施される。494は瓦器椀であり，体部外面に指頭圧・ヘラミガキ，内面にヘラミガキが施される。

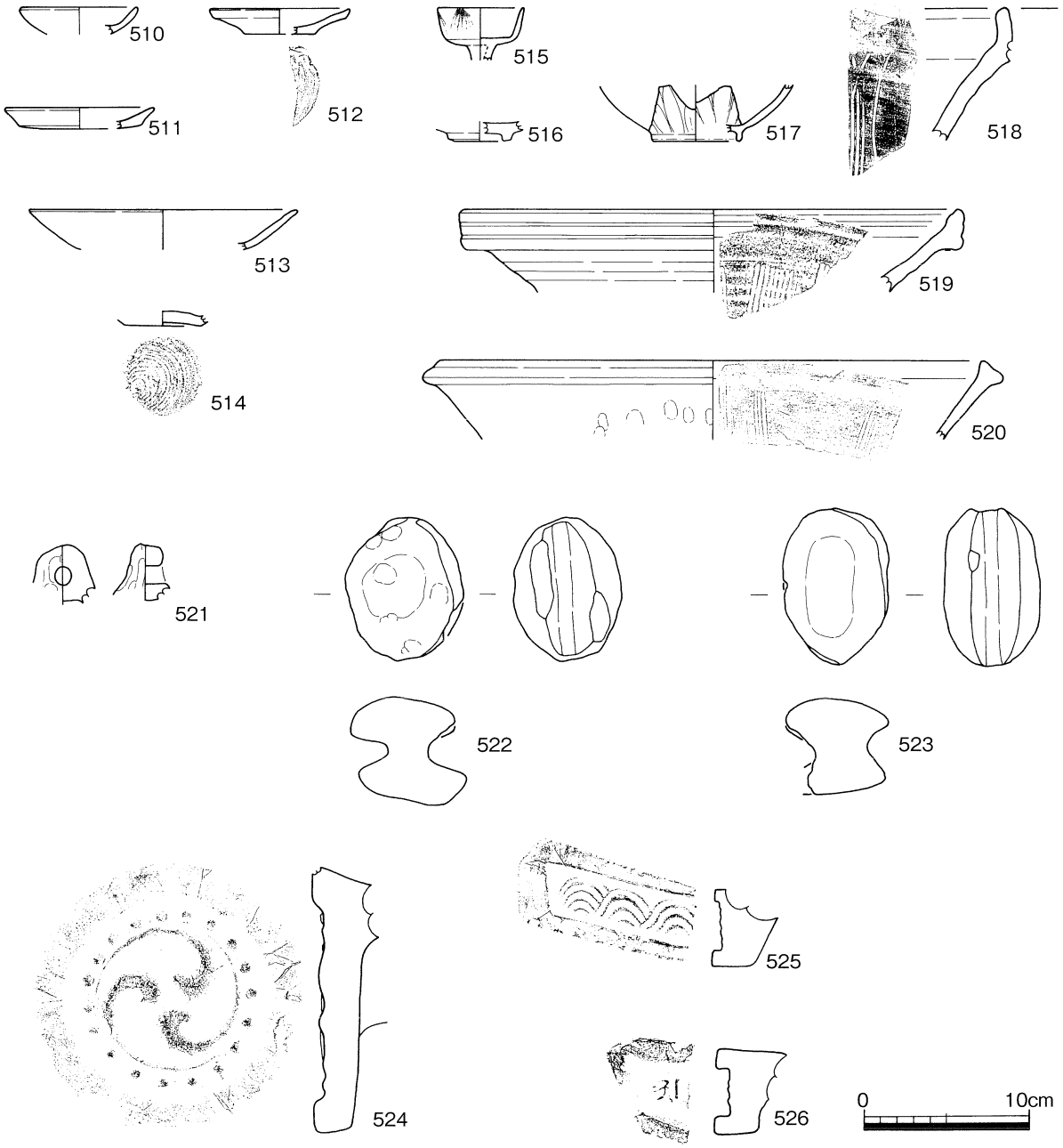
495は備前焼陶器擂鉢であり，口縁端部を上下に拡張し，内外面に数条の沈線を巡らす。496・497は土師質土器鍋である。498は須恵質土器捏ね鉢であり，口縁端部を上下に拡張する。499は青磁碗であり，外面は無釉である。500は弥生土器壺，501は弥生土器甕，502・503は弥生土器高杯である。

504は瓦当に唐草文のある軒平瓦で，中心飾りは上向きの三葉文の各先端に珠文を3点配する。

505は有溝土錘，506は管状土錘である。

507は「天禧通宝」，508は「永楽通宝」である。509は鉄釘である。

510～512は土師質土器皿であり，512の底部は回転糸切りが施される。513・514は土師質土器杯で

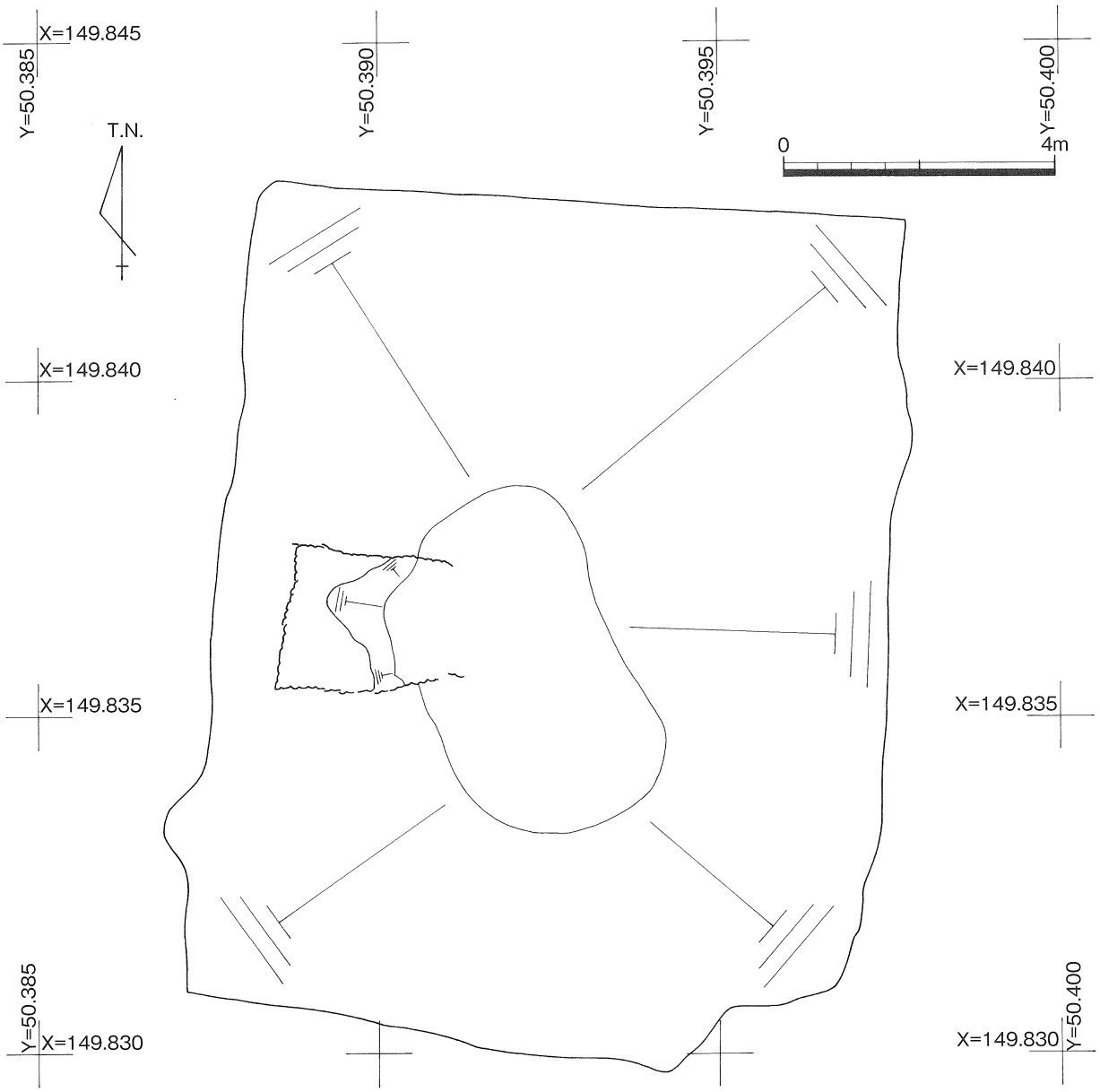


第69図　第1遺構面出土遺物実測図（3）（S：1/4）

あり，513は低い器高である。514の底部は回転ヘラ切りが施される。515は瀬戸・美濃系磁器仏飯器である。516は白磁碗である。517は青磁碗で，鎬連弁文を刻む。518・519は備前焼陶器擂鉢である。518は口縁部が直立し，519は口縁部が上下に拡張し，内外面に数条の沈線が巡る。520は瓦質土器擂鉢で，口縁端部を拡張させている。521はイイダコ壺，522･523は有溝土錘である。524は巴文のある軒丸瓦で，巴頭に僅かな抉りが入り，尾は細く，長く巻き込む。珠文は19個を数える。525は「重波文的波状文」の軒平瓦，526は無量寿如来を意味する梵字のある軒平瓦である。

第3小節　Ⅱ区（第70・71図）

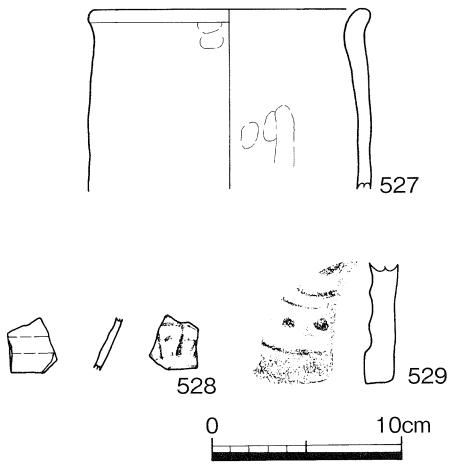
調査区の平面形は10.00 × 12.50 mを測る方形である。調査は，まず現地表と建物のコンクリート基礎を重機で取り除き，明治時代の埋め立ての上面を確認する。さらに中堀の石垣と底面を検出するために重機で掘り下げた。埋め立ては海砂を使用しており，現地表面から約2.50 mの深さまで達した。湧水と



第70図　Ⅱ区平面図（S：1/100）

崩落が著しいため，調査区西壁中央において鉄板を打ち込んだ部分のみをさらに約1.00 m掘り下げた。下方の埋土は黒褐色シルト質極細砂と明緑灰色細砂であり，ラミナ状堆積が認められた。この土は堀底面の堆積土であると考えられる。現地表面から約3.50 mの深さまで掘り下げたが，湧水と崩落のため堀の底面は確認できなかった。調査の目的のひとつである石垣は調査区内では検出できなかった。この結果，Ⅱ区は中堀の中に位置しており，中堀の西岸の石垣は調査区より西側に存在すると考えられる。

出土遺物は，埋め立ての海砂より土師質土器甕（527）やガラス瓶が出土し，黒褐色シルト質極細砂より肥前系磁器猪口（528），巴文の軒丸瓦（529）と数点の植物遺体が出土した。



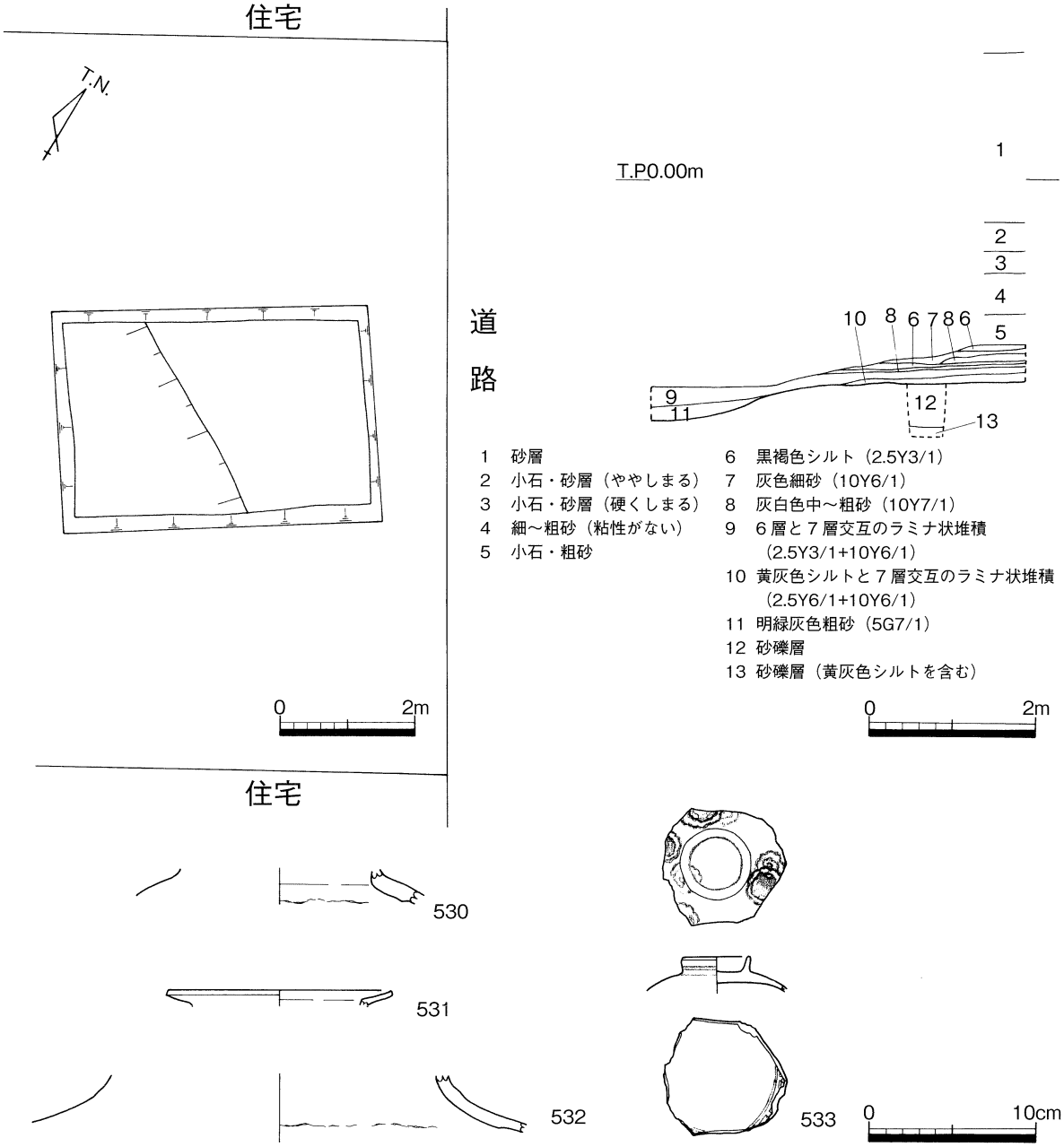
第71図　Ⅱ区出土遺物実測図（S：1/4）

第４小節　Ⅲ区（第72図）

調査区の平面形は長方形を呈し，その規模は南北幅3.30 m，東西幅4.70 mを測る。調査に先立ち，崩落防止と安全確保対策を十分に行い，その後に調査を実施した。

現地表面から約3.40 mの深さまでは重機により掘り下げ，以下は人力で約0.50 m掘り下げた。埋土は13層に細分でき，現地表面からの深さ約2.00 mまでが第１層の砂層，その下に約1.50 m堆積する第２～５層の砂層，シルトと砂層が交互にラミナ状堆積する第６～10層，第11層の明緑灰色粗砂，第12・13層の砂礫層を確認した。第１～５層は埋め立てた砂であり，第６～10層と第11層は堀底面直上の堆積層，第12層が地山であると考えられる。第12層は現地表面から約3.90mの深さであり，調査区中央から西側に向かって0.50 mの比高差で下がる。調査の結果，調査区内では中堀の東岸石垣は検出できなかった。Ⅰ区では西ノ丸が検出されていることから，Ⅲ区は中堀の東端に位置しており，中堀の東岸石垣はⅠ区とⅢ区の間に存在すると考えられる。

出土遺物は，弥生土器壺（530），同甕（531・532），磁器蓋（533）である。530～532は第６～11層より出土し，内外面とも磨滅が著しい。533は第２～５層より出土した瀬戸・美濃系磁器である。



第72図　Ⅲ区平・断面図及び出土遺物実測図（S：1/100・1/80・1/4）

第４章　自然科学的分析

第１節　高松市高松城跡出土木製品の樹種調査結果

（株）吉田生物研究所

１．試料

試料は高松市高松城跡から出土した容器２点，部材９点の合計 11 点である。

２．観察方法

剃刀で木口（横断面），柾目（放射断面），板目（接線断面）の各切片を採取し，永久プレパラートを作製した。このプレパラートを顕微鏡で観察して同定した。

３．結果

樹種調査結果（針葉樹３種）の表と顕微鏡写真を示し，以下に各種の主な解剖学的特徴を記す。

１）　マツ科マツ属［二葉松類］（Pinus sp.）

（遺物Ｎｏ．２～７，９）

（写真Ｎｏ．２～７，９）

木口では仮道管を持ち，早材から晩材への移行は急であった。大型の垂直樹脂道が細胞間隙としてみられる。柾目では放射組織の放射柔細胞の分野壁孔は窓型である。上下両端の放射仮道管内は内腔に向かって鋸歯状に著しくかつ不規則に突出している。板目では放射組織は単列で１～15 細胞高のものと，水平樹脂道を含んだ紡錘形のものがある。マツ属［二葉松類］はクロマツ，アカマツがあり，北海道南部，本州，四国，九州に分布する。

２）　ヒノキ科アスナロ属（Thujopsis sp.）

（遺物Ｎｏ．11）

（写真Ｎｏ．11）

木口では仮道管を持ち，早材から晩材への移行は穏やかであった。樹脂細胞は晩材部に散在または接線配列である。柾目では放射組織の分野壁孔はヒノキ型からスギ型で１分野に２～４個ある。板目では放射組織はすべて単列であった。数珠状末端壁を持つ樹脂細胞がある。アスナロ属にはアスナロ（ヒバ，アテ）とヒノキアスナロ（ヒバ）があるが顕微鏡下では識別困難である。アスナロ属は本州，四国，九州に分布する。

３）　スギ科スギ属スギ（Cryptomeria japonica D.Don）

（遺物Ｎｏ．１，８，10）

（写真Ｎｏ．１，８，10）

木口では仮道管を持ち，早材から晩材への移行は急であった。樹脂細胞は晩材部で接線方向に並んでいた。柾目では放射組織の分野壁孔は典型的なスギ型で１分野に１～３個ある。板目では放射

組織はすべて単列であった。樹脂細胞の末端壁はおおむね扁平である。スギは本州，四国，九州の主として太平洋側に分布する。

高松市高松城出土木製品同定表

番号	遺構	遺物番号	品名	樹種
1	ＳＥ１２０１	８４	曲物底板	スギ科スギ属スギ
2	ＳＥ１２０１	８３	加工材	マツ科マツ属［二葉松類］
3	ＳＥ１２０１	７９	板材	マツ科マツ属［二葉松類］
4	ＳＥ１２０１	７７	板材	マツ科マツ属［二葉松類］
5	ＳＥ１２０１	７８	板材	マツ科マツ属［二葉松類］
6	ＳＥ１２０１	８０	板材	マツ科マツ属［二葉松類］
7	ＳＥ１２０１	８１	板材	マツ科マツ属［二葉松類］
8	ＳＥ１２０１	８２	板材	スギ科スギ属スギ
9	ＳＰ１３１７		加工材	マツ科マツ属［二葉松類］
10	ＳＥ１３０１		加工材	スギ科スギ属スギ
11	ＳＥ１３０１		曲物（井筒）	ヒノキ科アスナロ属

参考文献

島地　謙・伊東隆夫 「日本の遺跡出土木製品総覧」 雄山閣出版（1988）

島地　謙・伊東隆夫 「図説木材組織」 地球社（1982）

伊東隆夫 「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ～Ⅴ」 京都大学木質科学研究所（1999）

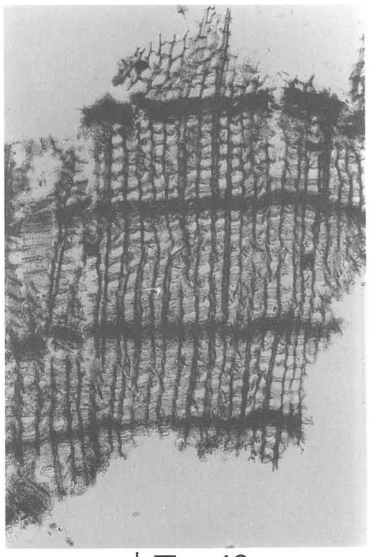
木村四郎・村田　源 「原色日本植物図鑑木本編Ⅰ・Ⅱ」 保育社（1979）

深澤和三 「樹体の解剖」 海青社（1997）

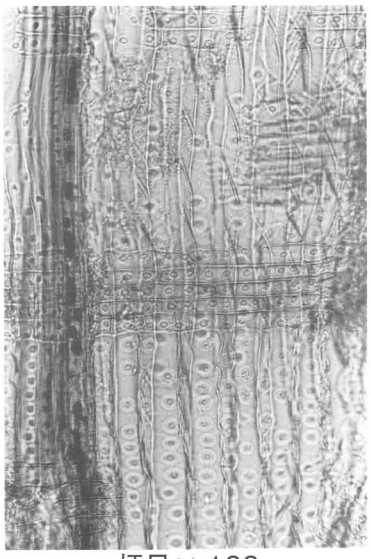
使用顕微鏡

Nikon

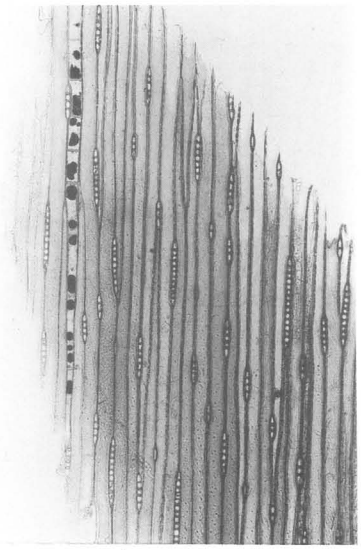
MICROFLEX UFX-DX Type　115



木口× 40

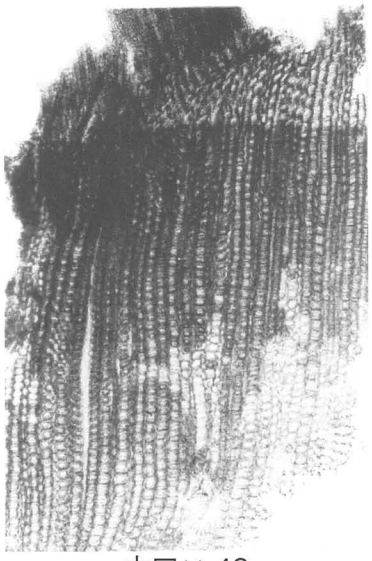


柾目× 100

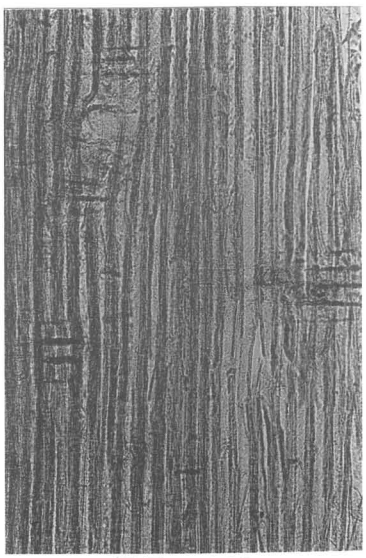


板目× 40

No-1　スギ科スギ属スギ



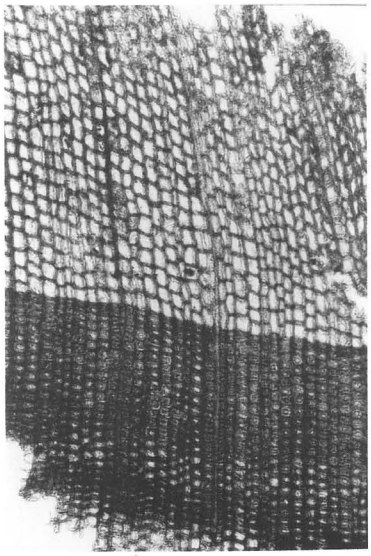
木口× 40



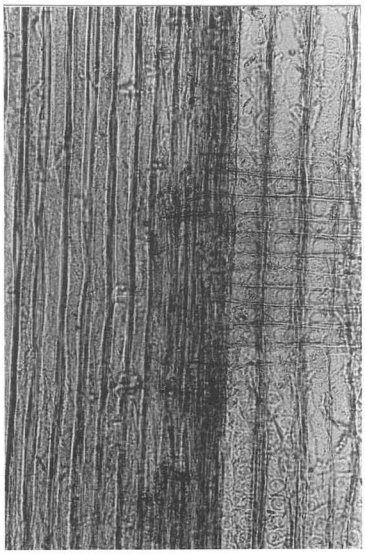
柾目× 100

板目× 40

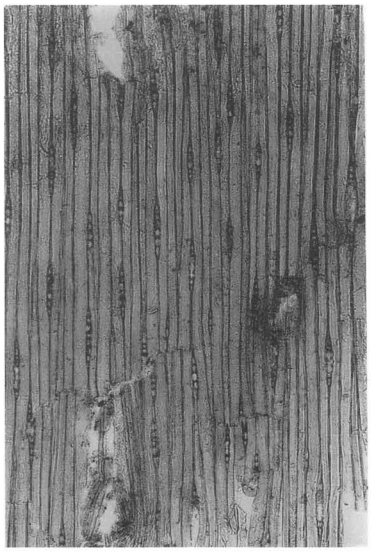
No-2　マツ科マツ属［二葉松類］



木口× 40

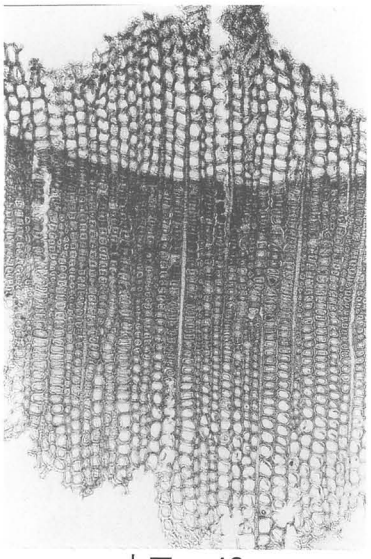


柾目× 100

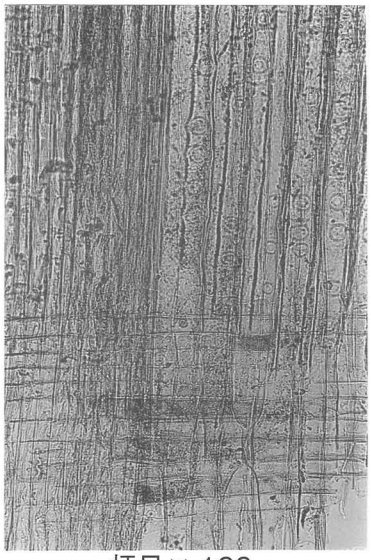


板目× 40

No-3　マツ科マツ属［二葉松類］



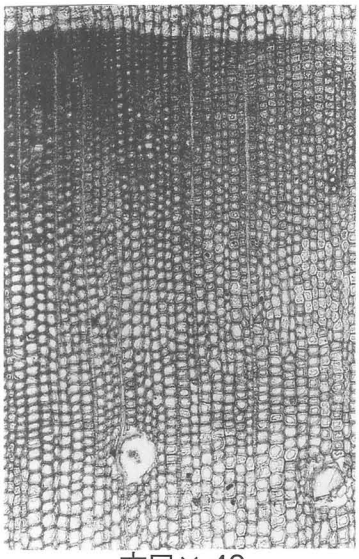
木口× 40



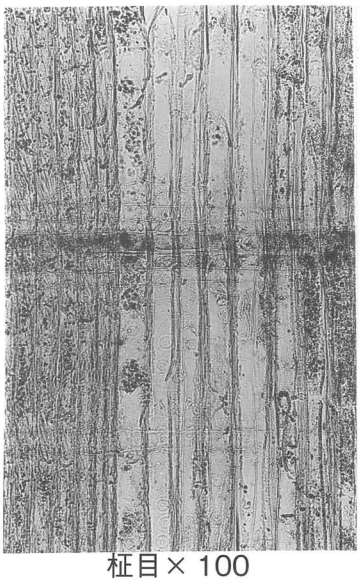
柾目× 100

板目× 40

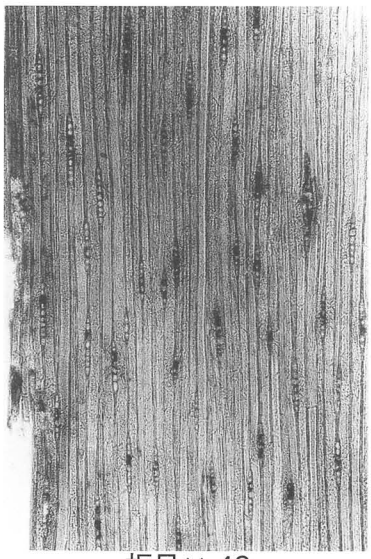
No-4　マツ科マツ属［二葉松類］



木口× 40

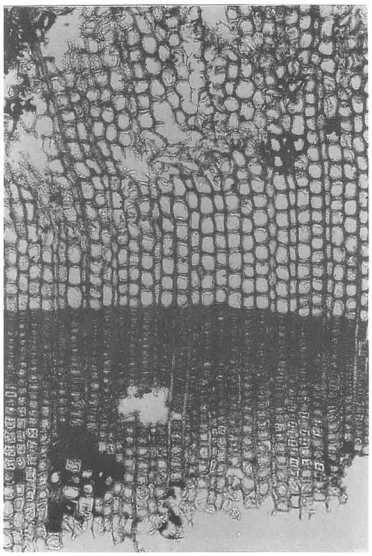


柾目× 100

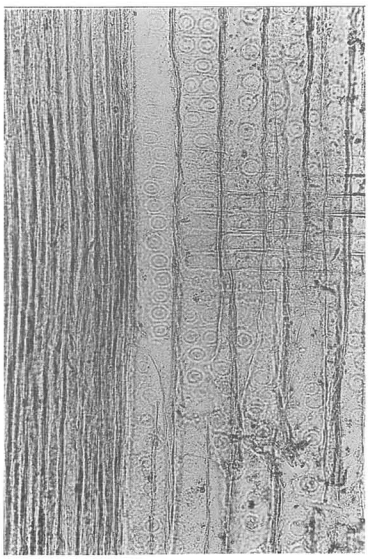


板目× 40

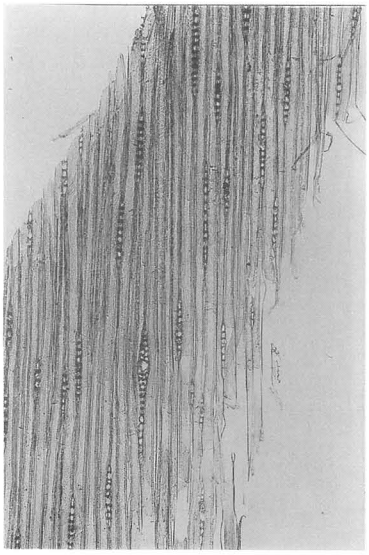
No-5　マツ科マツ属［二葉松類］



木口× 40

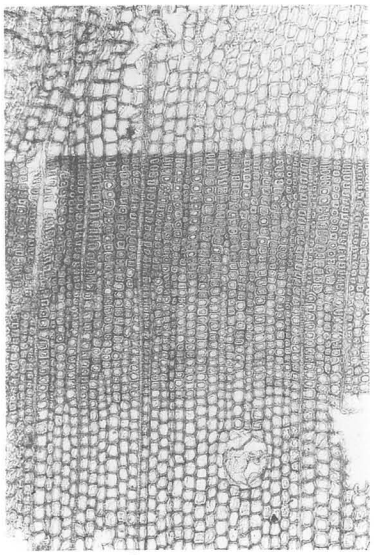


柾目× 100

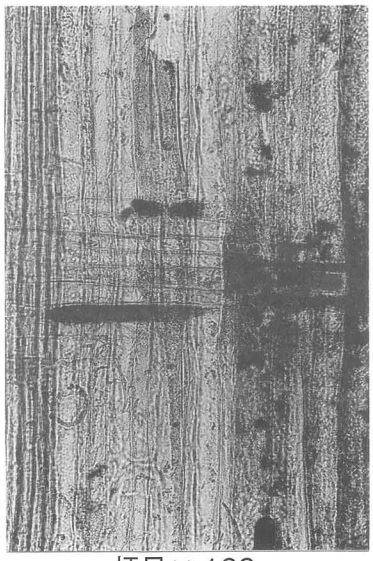


板目× 40

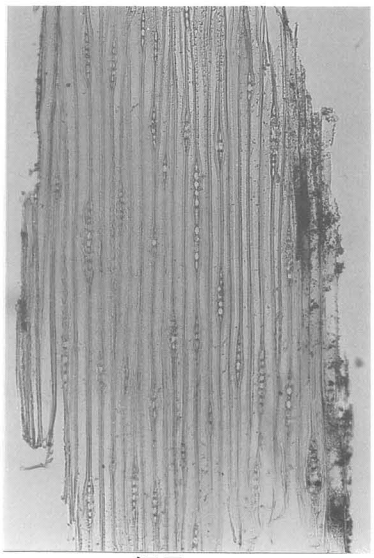
No-6　マツ科マツ属［二葉松類］



木口× 40

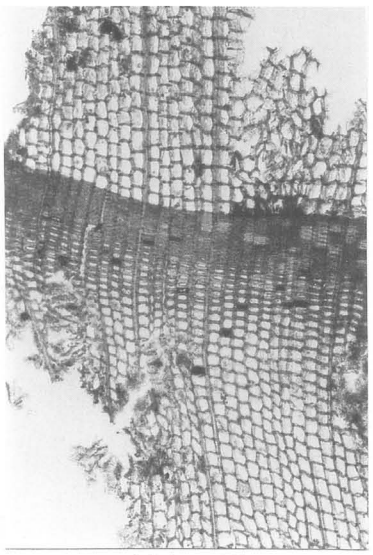


柾目× 100

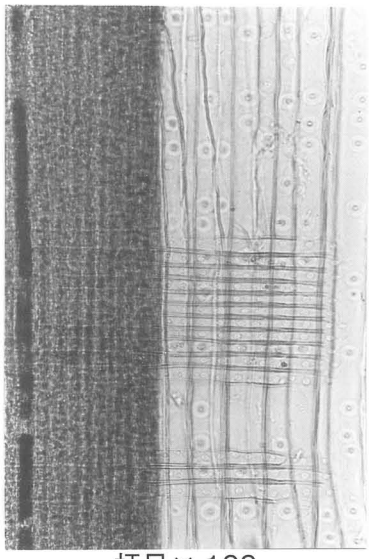


板目× 40

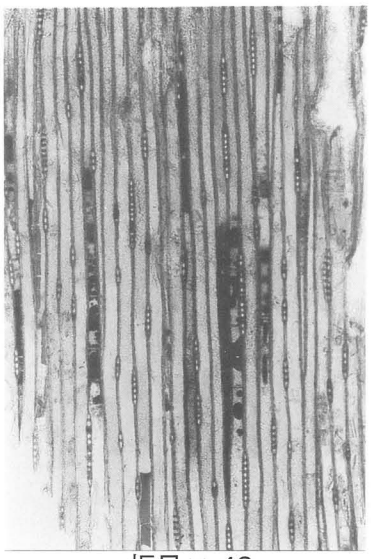
No-7　マツ科マツ属［二葉松類］



木口× 40

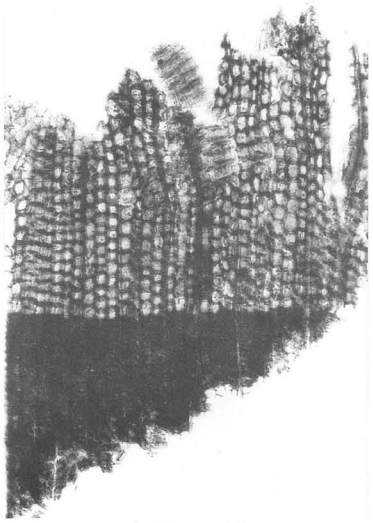


柾目× 100

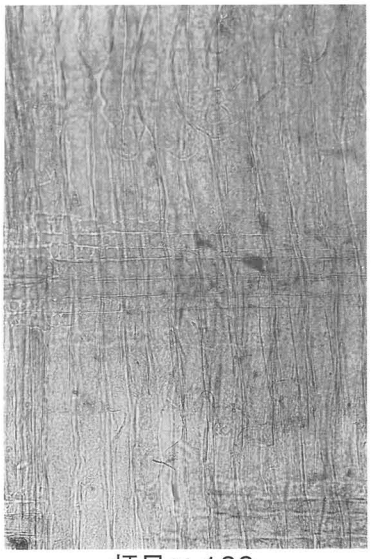


板目× 40

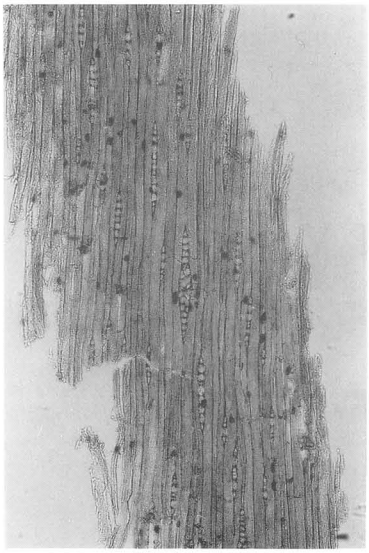
No-8　スギ科スギ属スギ



木口× 40

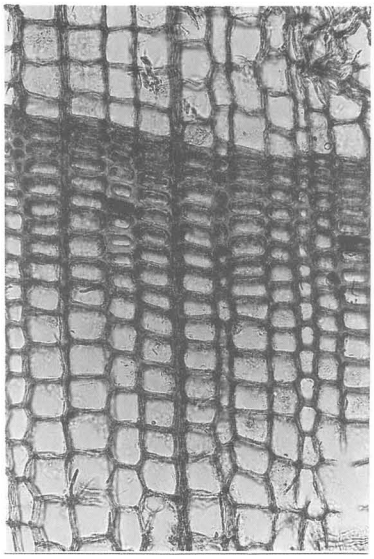


柾目× 100

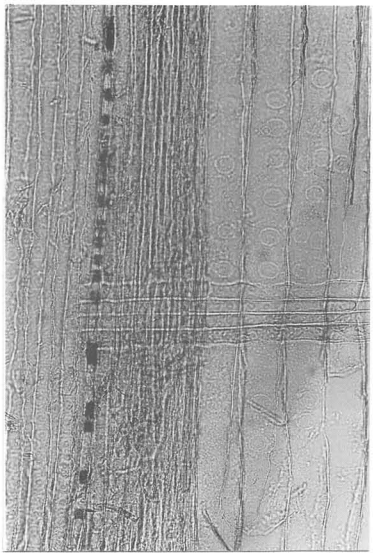


板目× 40

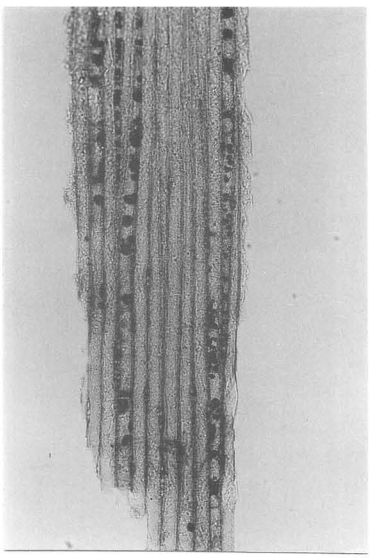
No-9　マツ科マツ属［二葉松類］



木口× 40

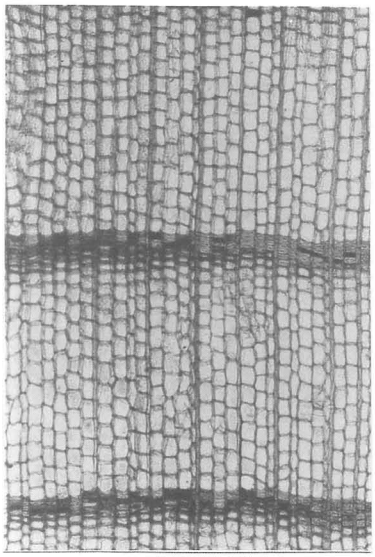


柾目× 100

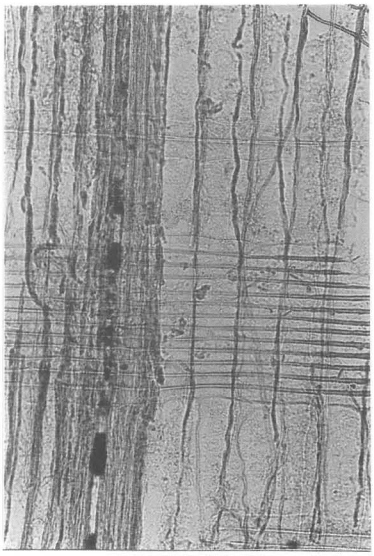


板目× 40

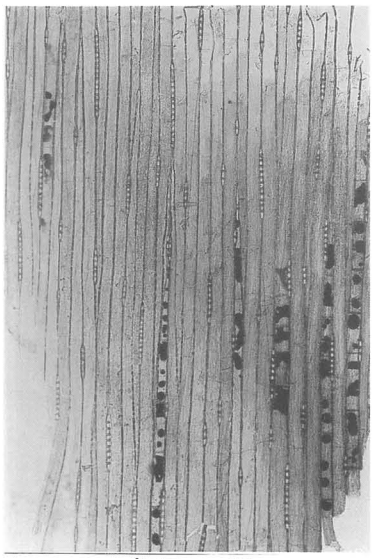
No-10　スギ科スギ属スギ



木口× 40



柾目× 100



板目× 40

No-11　ヒノキ科アスナロ属

第5章　まとめ

第1節　遺構の変遷

本遺跡のＩ区では３面の遺構面を検出した。最下位の第３遺構面については『市街地再開発関連街路事業（高松駅南線）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第１冊　高松城（無量寿院跡）』において既に報告した。ここではＩ区の第１・２遺構面で検出した遺構の変遷に関して述べることとする。

17 世紀前半

第２遺構面において検出した遺構が当該期の遺構である。遺構の検出は調査区全域に見られ，その検出したレベルは標高 1.00 m前後である。遺構としては，掘立柱建物跡（ＳＢ 1201），溝（ＳＤ 1201 ～ 1204），井戸（ＳＥ 1201），土坑（ＳＫ 1201 ～ 1215），柱穴，性格不明遺構（ＳＸ 1201 ～ 1209）である。遺構の分布は，調査区西側中央でＳＢ 1201 が１棟のみ存在し，その北側には多数の柱穴が集中した状態で検出した。柱穴は切り合い関係があるが，明確な時期差としては確認できない。さらに建物跡としての柱穴の配置も不明瞭である。井戸は調査区南西隅で１基検出した。土坑は調査区ほぼ全域で検出したが，ほとんどの土坑は小規模であり，遺物の出土量は少ない。ＳＫ 1209 はその中で最も規模が大きく，埋土中に多量の焼土と炭を含んでいた。溝は調査区北西部にのみ検出し，他の遺構に切られていることから若干古い時期のものであると考えられる。ＳＢ 1201 は他の柱穴より直径が大きく，また根石が残存していたが，建物自体の規模は２×２間 (4.90 × 5.30 m) の小規模な建物である。柱穴群の検出は何らかの建物の存在を示唆するが，ＳＢ 1201 同様に小規模な建物であると考えられる。

当該期の様相としては，北側が建物域，南側には井戸とやや規模の大きな土坑が存在していた。

17 世紀後半

第１遺構面において検出した遺構が当該期の遺構である。遺構の検出は調査区全域に見られ，その検出したレベルは標高 1.20 m前後である。遺構としては，溝（ＳＤ 1001），井戸（ＳＥ 1002･1003），土坑（ＳＫ 1001 ～ 1020），柱穴，性格不明遺構（ＳＸ 1001 ～ 1004）である。井戸は調査区南壁に沿う位置で検出し，第２遺構面のＳＥ 1201 の東側である。土坑は調査区ほぼ全域で検出したが，ほとんどの土坑は小規模であり，遺物の出土量は少なく，いわゆるゴミ穴としての性格は考えられない。柱穴は調査区北西隅を除くほぼ全域で検出したが，建物跡とする明確な柱穴の配置は不明である。ただし，ＳＫ 1013・1014 の東側には柱穴が一直線上に並んだ状態で検出され，建物跡の存在が想定される。柱穴は切り合い関係があるが，明確な時期差としては確認できない。当該期の遺構の中で注目すべき遺構は，ＳＤ 1001 である。ＳＤ 1001 は調査区南壁際で検出し，東西方向に延びる溝である。溝の上面は数基の土坑と柱穴が検出されており，ＳＤ 1001 は他の遺構より若干古い時期の遺構である。底面に１段ないし２段の石組みが残存する。これらの石が石組み溝であるか石垣の基礎であるかは，今後の検討を必要とする。

当該期の調査区の様相としては，前段階とほぼ同様であり，北側が建物域で，南側には井戸とやや規模の大きな土坑が存在していた。これより若干古い時期には，ＳＤ 1001 の存在から調査区南壁中央より東側に何らかの施設が存在していたと考えられる。

19 世紀後半

明確な遺構としては，第１遺構面の井戸（ＳＥ 1001）のみである。ＳＥ 1001 はＳＥ 1002 の北西側に位置することから，17 世紀後半より約 200 年間も地下水の水脈はほぼ変わらなかったと考えられる。

第２節　絵地図・文献史料における「西ノ丸」について

高松城は，豊臣秀吉の家臣であった生駒親正が天正 15 年 (1587) に讃岐国へ入り，翌年から築城された。この城は，北方を瀬内海にゆだね，三方に三重の堀が廻り，堀へ海水を引き入れた水城である。生駒氏は寛永 17 年 (1640) に出羽矢島に転封され，寛永 19 年 (1642) に松平頼重が新しい藩主となり，以後松平氏の居城として明治維新を迎えた。松平頼重は寛文 10 年 (1670) 以降に天守の改築や北ノ丸・東ノ丸の新造等，高松城の大改修を行い，ほぼ現在の縄張りとなった。

今回調査したⅠ区は，本丸と内堀を挟んで西側の位置にある西ノ丸の南部にあたり，Ⅱ区とⅢ区は中堀である。ここでは現存する数多くの絵地図と文献の中で「西ノ丸」の記載を検討し，今回の調査結果と対応して西ノ丸の変遷を考えることとする。なお絵地図の時期については，森下友子 1996「高松城下の絵図と城下の変遷」『財団法人香川県埋蔵文化財調査センター　研究紀要』Ⅳに依拠する。

高松城及び高松城下を描いた絵地図は，現段階で 49 点確認されている。まず，製作年代がわかっている絵地図の中で最も古いものは，寛永４年 (1627) に描かれた『讃岐探索書』（絵図－１）である。同書では西ノ丸，侍屋敷と記載されている。次に寛永 14 年 (1637) 以前と考えられる『讃岐高松丸亀両城図　高松城図』では単に西ノ丸とのみ書かれている。寛永 15 年 (1638) から寛永 16 年 (1639) に製作されたと推定される『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』(絵図－２) と『讃岐国高松城図寛永 17 年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興預当時』（絵図－３）には，北から西ノ丸生駒隼人の屋敷，生駒隼人の下屋敷，女房の家と記載されている。今回の調査区は，生駒隼人の下屋敷の位置に当たると考えられる。これらの絵地図は生駒家時代の高松城を描いており，時期的に今回調査した第２遺構面と同時期であると言える。しかし，検出した遺構は掘立柱建物跡，小規模の溝，井戸，土坑，柱穴であり，記載されている生駒隼人の下屋敷に伴う遺構であるかどうかは断定できない。

松平頼重が入部した寛永 19 年 (1642) 以後に描かれた絵地図としては，まず明暦元年（1655）以前と考えられる『讃岐高松丸亀両城図　高松城下図』がある。文字の記載はないが侍屋敷と思われる建物の表記が見られる。次に明暦２年 (1656) 以前の製作と推定される『高松城下図屏風』(絵図－４) がある。『高松城下図屏風』では西ノ丸の北側に侍屋敷があり，その南側には馬と厩と思われる建物が描かれている。調査区Ⅰ区はこの厩付近に当たる。『高松城下図屏風』より新しく，寛文 11 年（1671）以前に描かれた『讃岐国高松城図』では侍屋敷，蔵の記載がある。上記の３点の絵地図は高松城東の丸築造以前のものである。今回調査した第１遺構面が時期的に合致するが，記載されている建物として明確に比定できる遺構は検出できていない。第１遺構面で検出した遺構は井戸，土坑，柱穴等の小規模な遺構が大部分であり，絵地図に記載されるようなものではないと思われるが，石組み溝であるＳＤ 1001 は何らかの建物に伴う遺構であると考えられ，今後の検討を要する。

松平頼重は寛文 10 年（1670）に天守の改築を行い，寛文 11 年（1671）に東ノ丸を築造した。その後の絵地図は数多く現存する。その中で最も古い年代のものは享保年間（1716 ～ 1736）に描かれた『高松城下図』(絵図－５) である。その後に元文５年 (1740) の『元文５申年讃岐国高松地図』『高松地図』(絵図－６), 正徳享保年間の『日本輿地南海道郡郷部讃州高松地図』,『讃州高松地図』, 寛政元年 (1789) の『寛政元年巳酉年５月高松之図』，文化年間（1804 ～ 18）の『文化年間讃州高松城下絵図』『高松市街古図』(絵図－７),『讃岐文化年間高松御城下絵図』,『高松新井戸水本並水掛惣絵図』,『高松市街古図』，弘化年間（1844 ～ 48）の『高松城下町屋敷割図』(絵図－８), 天保 15 年（1844）の『天保 15 年高松之図』(絵図－９),『天保 15 年高松城下図』,『讃岐国名勝図会』(絵図－ 10), 安政４年（1857）の『安政４未年高松之図』(絵図－ 11)，慶応２年（1866）『高松城古図』，制作年代不明の『高松城内図』(絵図－ 12),

『旧高松御城全図』（絵図－13），『高松城下図』，『高松市街之図』，『高松城下古図』等がある。東ノ丸築造以前の絵地図と以後の絵地図を比較すると，高松城の内部は変化が明瞭である。しかし，以後の絵地図は城下町の様子は詳しく描かれているが，中堀より内側の高松城に関してはほとんど描かれていない。唯一城の内部がわかる資料は『旧高松御城全図』のみであり，西ノ丸については南北方向に細長い建物を描くが，その建物の種別は記載していない。図中には桜ノ馬場と西ノ丸を区画する塀が描かれており、ＳＤ1001がこの塀に該当する可能性も考えられる。ただ中央より北側に「薬園」の文字が見られ、今回の調査では18世紀以降に比定される遺構はＳＥ1001以外にはほとんど検出しておらず，耕作地としての想定も可能である。寛文10年以降の高松城の詳細は不明である。

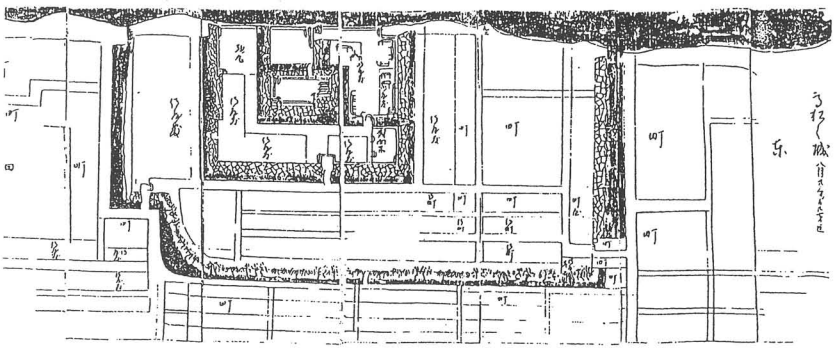
上記の絵地図以外に高松城の様子や変化がわかるものとしてはいくつかの文献がある。その代表は『小神野夜話』[1]であり，高松城だけでなく城下町の様子も詳細に書かれている。しかし，西ノ丸の記載は意外に少なく，寛文～延宝期（1661～1681年）の様子として巻一に「一，御本丸は古来之通り相更き無之候，西の丸さかいの御多門矢倉戸口を御付られ，刎橋口と申候，」と「一，あり腰壱重取，五重作り替申候，雛形木図，西の御丸御藪之内に捨有之，次第に朽捨申候由，此説疑敷御座候得共記置申候，西の御丸家之内に立申候を，栗田寛規壮年之時，御番にて登城致し候節，度々見申候由，物かたりにて御座候，当午年右寛規八十四才に成申候，」という記載が見られる。また，『増補高松藩記』巻七舊高松藩内學事沿革大要[2]には寛政11年（1800）城内西ノ丸に一の学館を創建し，13年後の文化10年（1813）に当館を廃する記載がある。さらに時代が新しくなるが，『年々日記　三十』[3]には「明治４年８月４日　前略・・・　西の御丸を見めぐり，元の考信閣をも見るに，昔とはやうかわりていとさうさうし。・・・後略」と記している。

ここまで絵地図と文献史料に書かれた西ノ丸に論考してきた。寛文11年（1671）以前の絵地図には西ノ丸の様子が詳細に描かれているが，その後の絵地図は中堀より内側が空白となっている。文献史料にも西ノ丸の記載は非常に少ない。このように西ノ丸に関する情報は少なく，特に松平家になってからの様子はほとんど不明と言える。今後の周辺地域における発掘調査が重要となってくる。

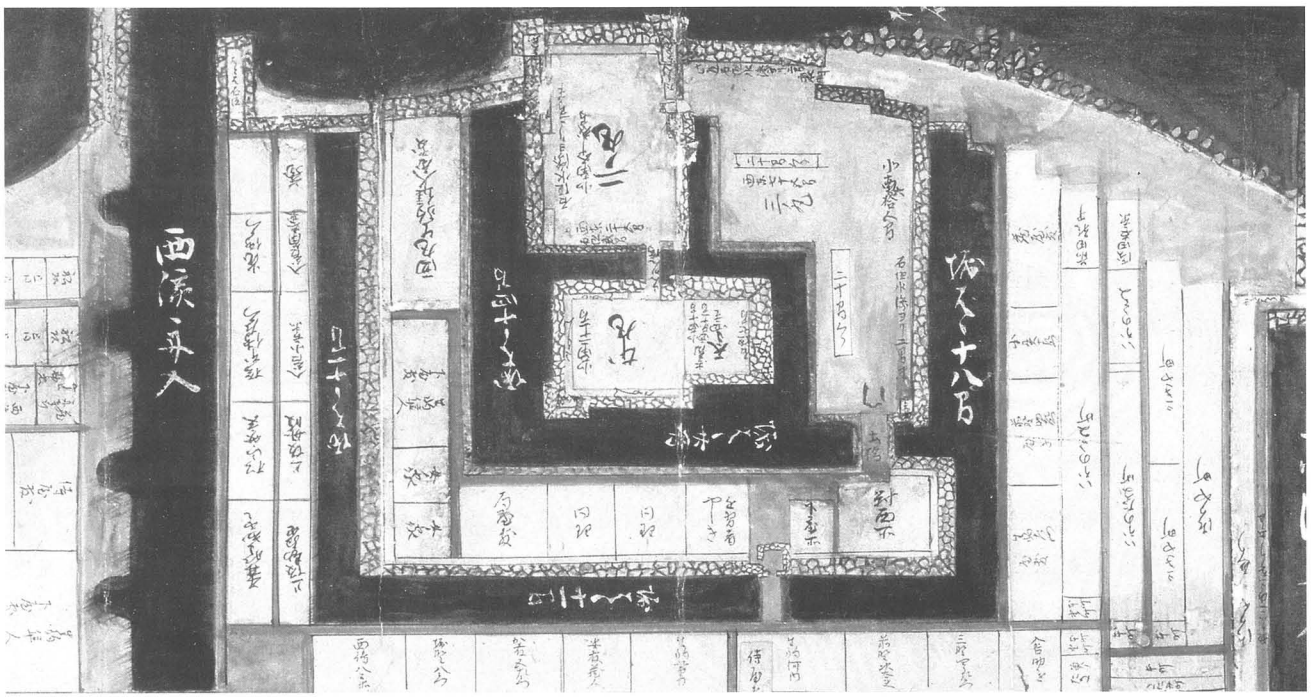
文献史料の西ノ丸の記載については見落としているものがあると思うが，これはすべて筆者の浅学のせいである。先輩諸氏のご批判，ご指導を願う次第である。

註１　『小神野夜話』『新編香川叢書』史料篇（１）1979
　２　『増補高松藩記』永年會 1932
　３　『年々日記』多和文庫蔵

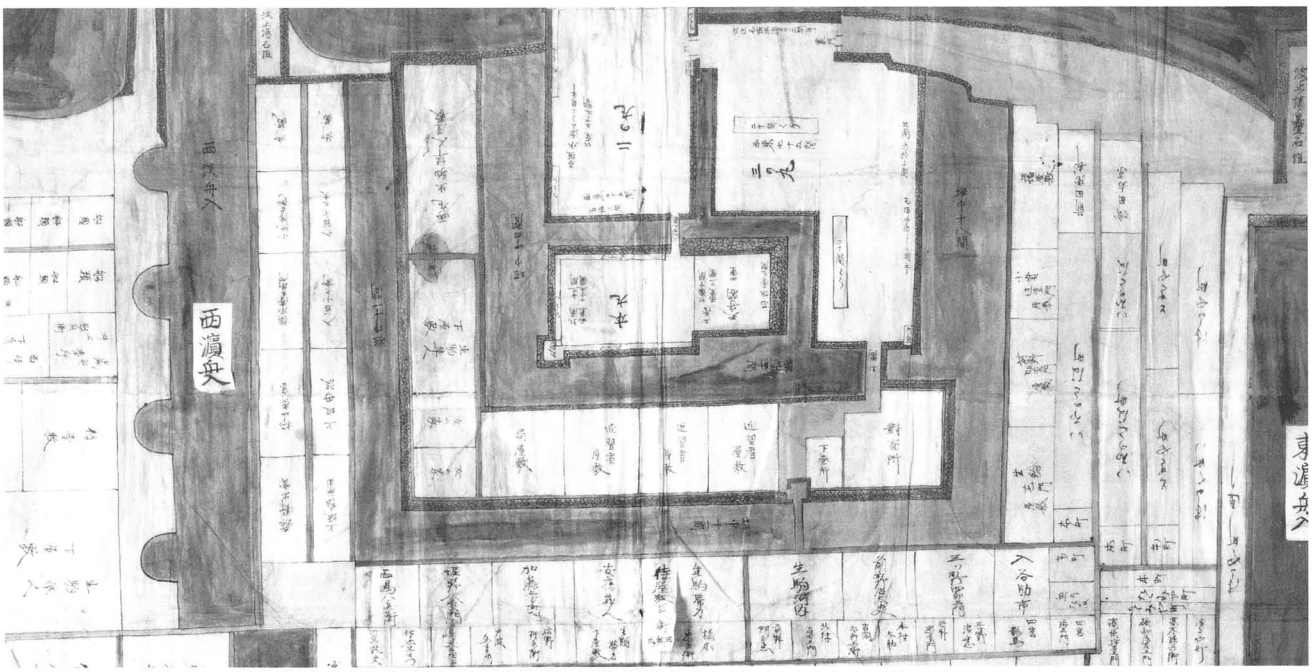
絵図－１）『讃岐探索書』（『香川県史』第３巻通史編近世Ｉより抜粋）
絵図－２）『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（高松市歴史資料館所蔵）
絵図－３）『讃岐国高松城図寛永17年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興預当時』（高松市歴史資料館所蔵）
絵図－４）『高松城下図屏風』（香川県歴史博物館所蔵）
絵図－５）『高松城下図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）
絵図－６）『高松地図』（香川県歴史博物館所蔵）
絵図－７）『高松市街古図』（高松市歴史資料館所蔵）
絵図－８）『高松城下町屋敷割図』（香川県歴史博物館所蔵）
絵図－９）『天保15年高松之図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）
絵図－10）『讃岐国名勝図会』（高松市歴史資料館所蔵）
絵図－11）『安政４未年高松之図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）
絵図－12）『高松城内図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）
絵図－13）『旧高松御城全図』（香川県歴史博物館所蔵）



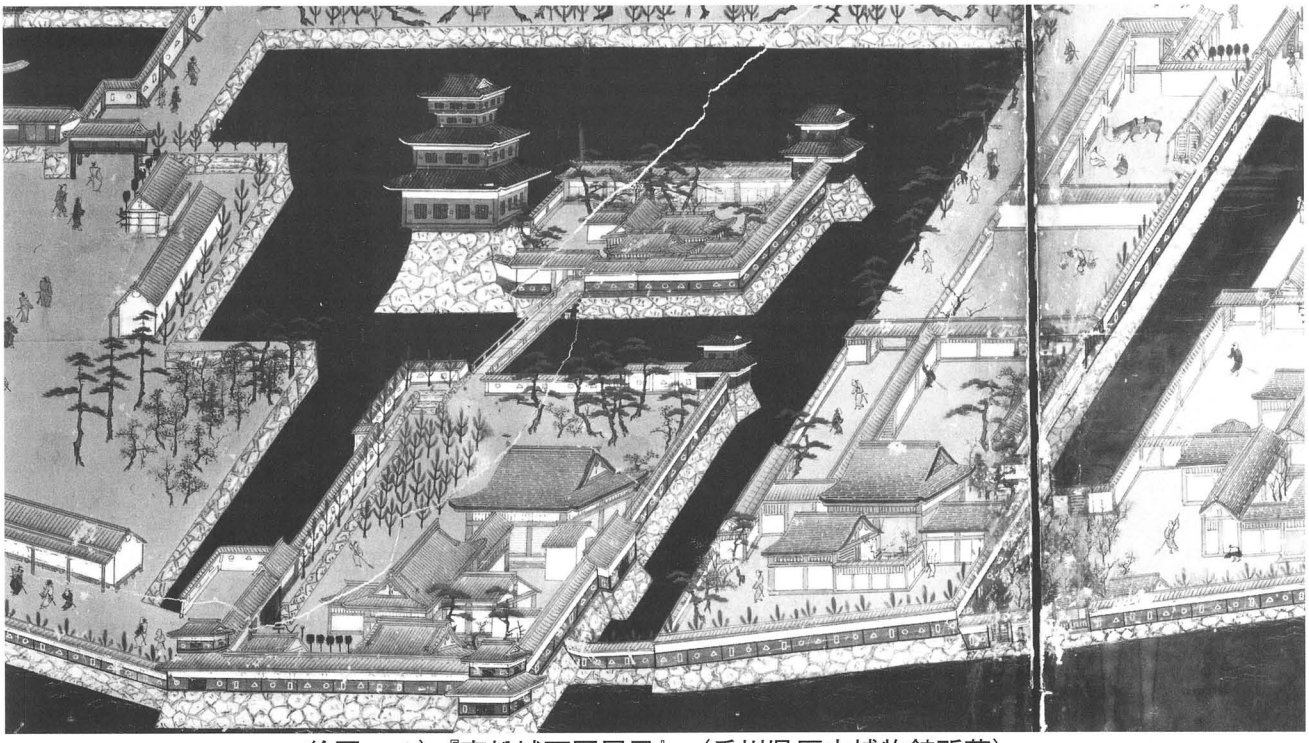
絵図－１）『讃岐探索書』（『香川県史』第３巻通史編近世Ｉより抜粋）



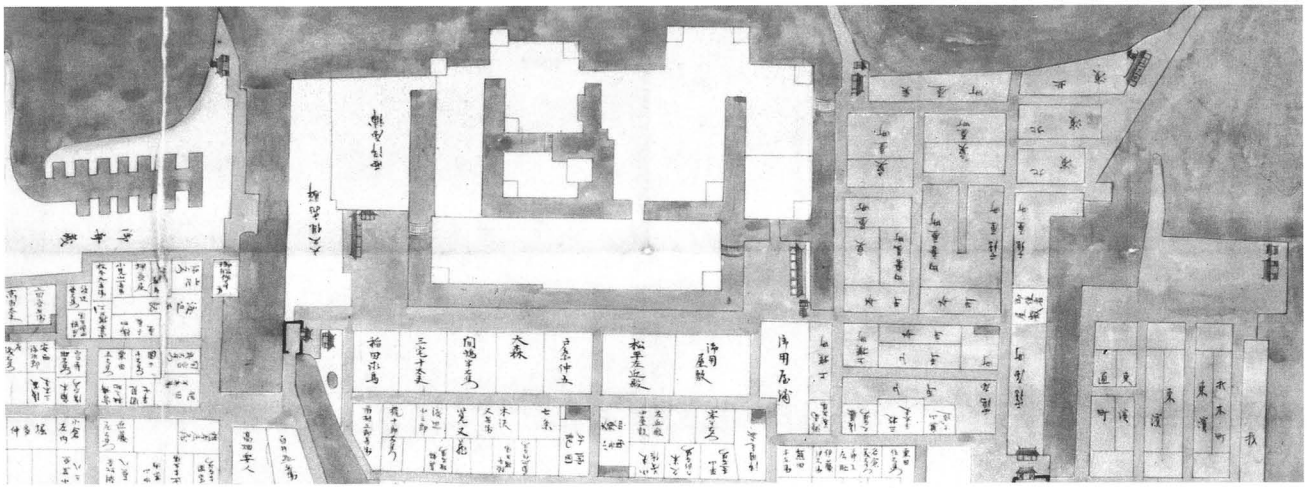
絵図－２）『生駒家時代讃岐高松城屋敷割図』（高松市歴史資料館所蔵）



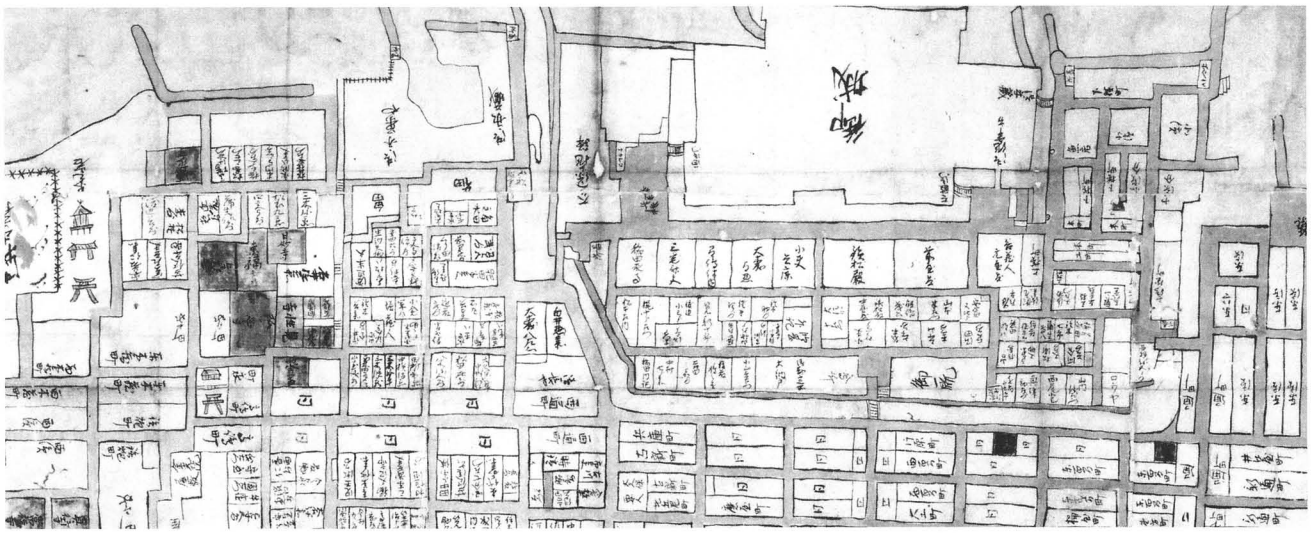
絵図－３）『讃岐国高松城図寛永 17 年生駒家封地没収大洲藩主加藤泰興預当時』
（高松市歴史資料館所蔵）



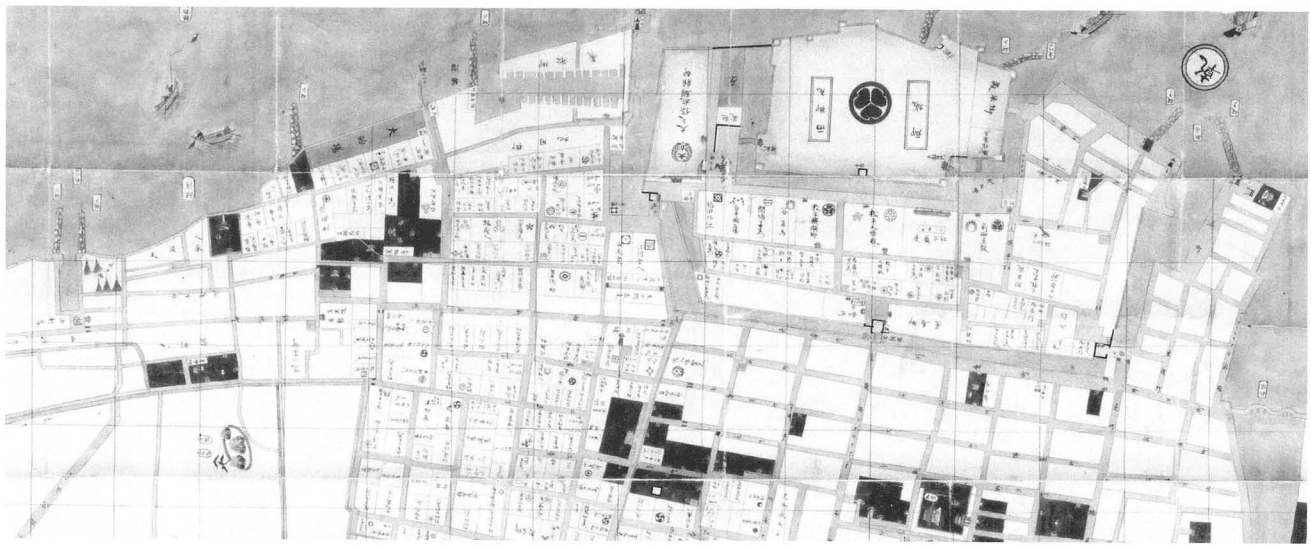
絵図－４）『高松城下図屏風』（香川県歴史博物館所蔵）



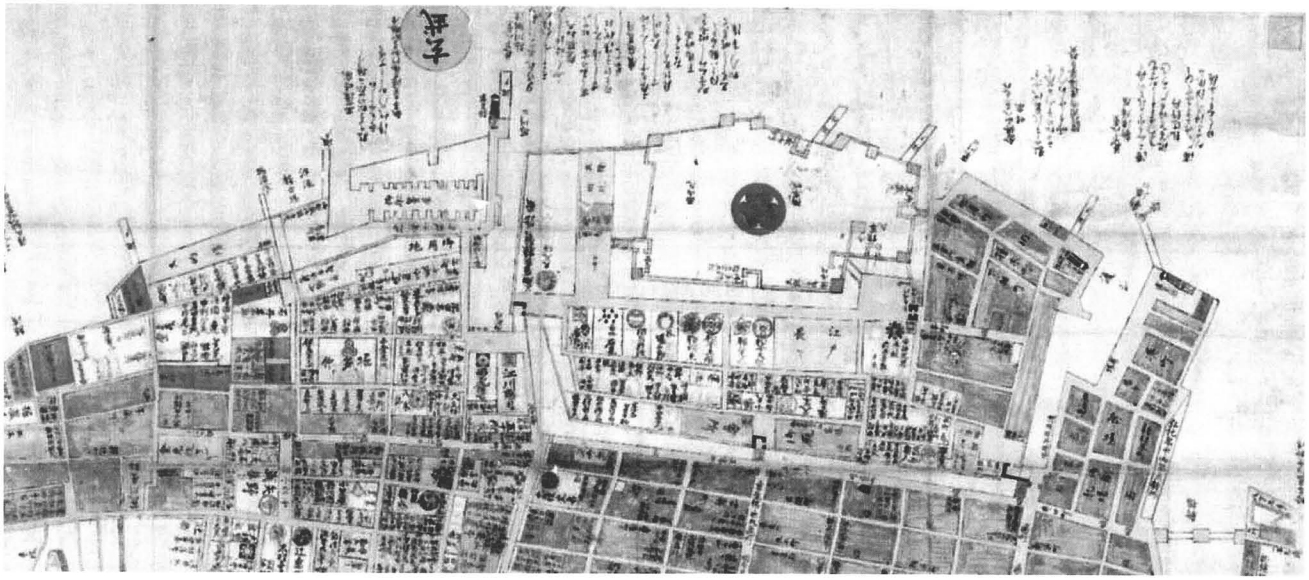
絵図－５）『高松城下図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）



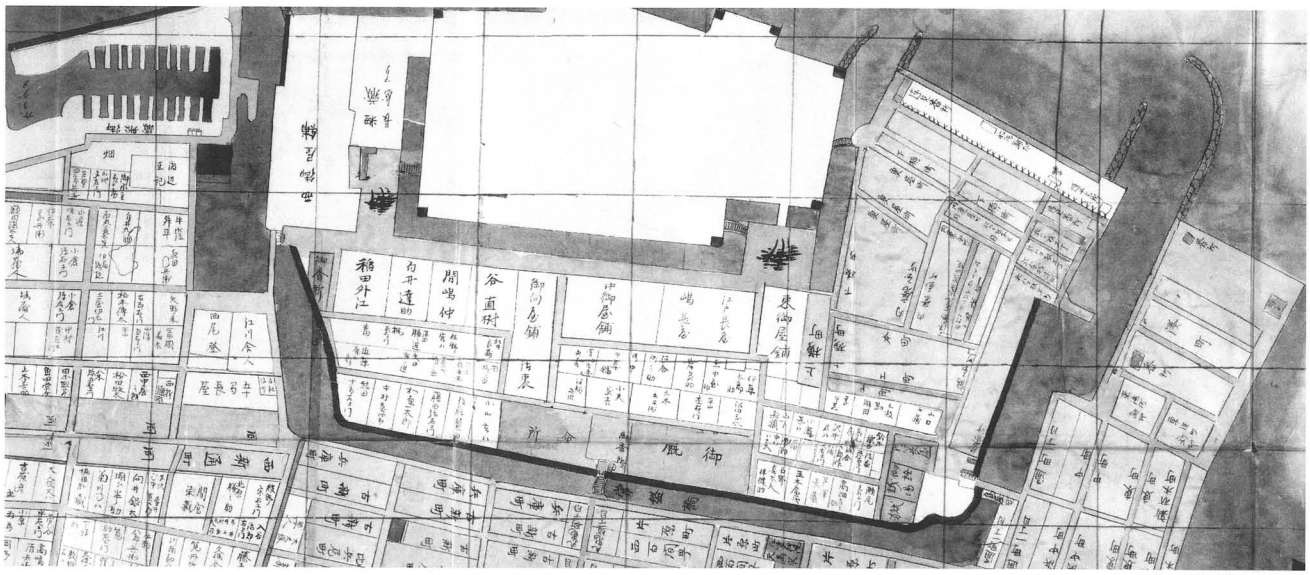
絵図－６）『高松地図』（香川県歴史博物館所蔵）



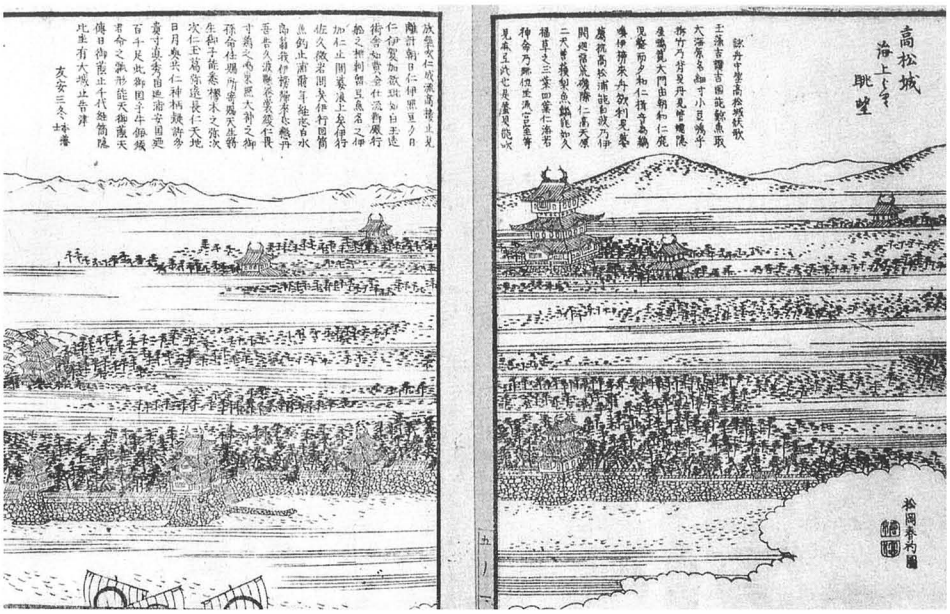
絵図－７）『高松市街古図』（高松市歴史資料館所蔵）



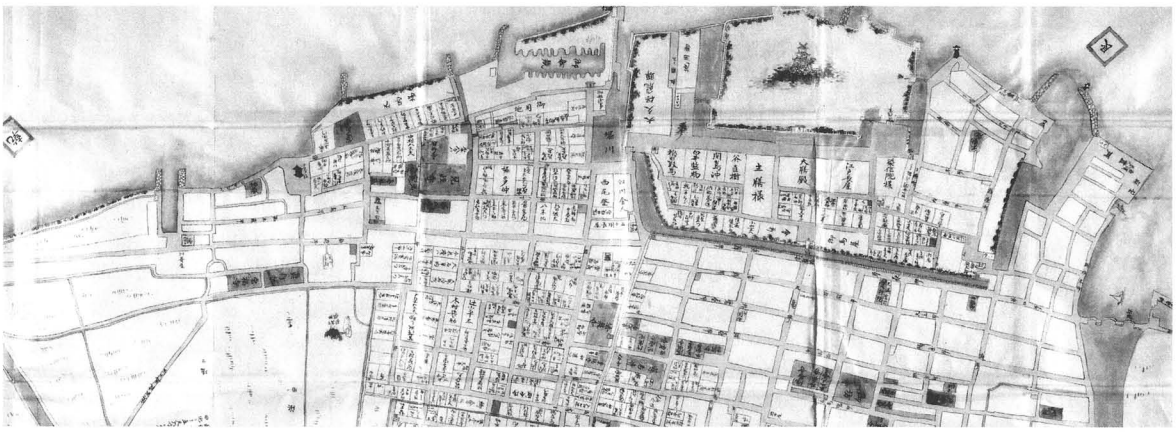
絵図－８）『高松城下町屋敷割図』（香川県歴史博物館所蔵）



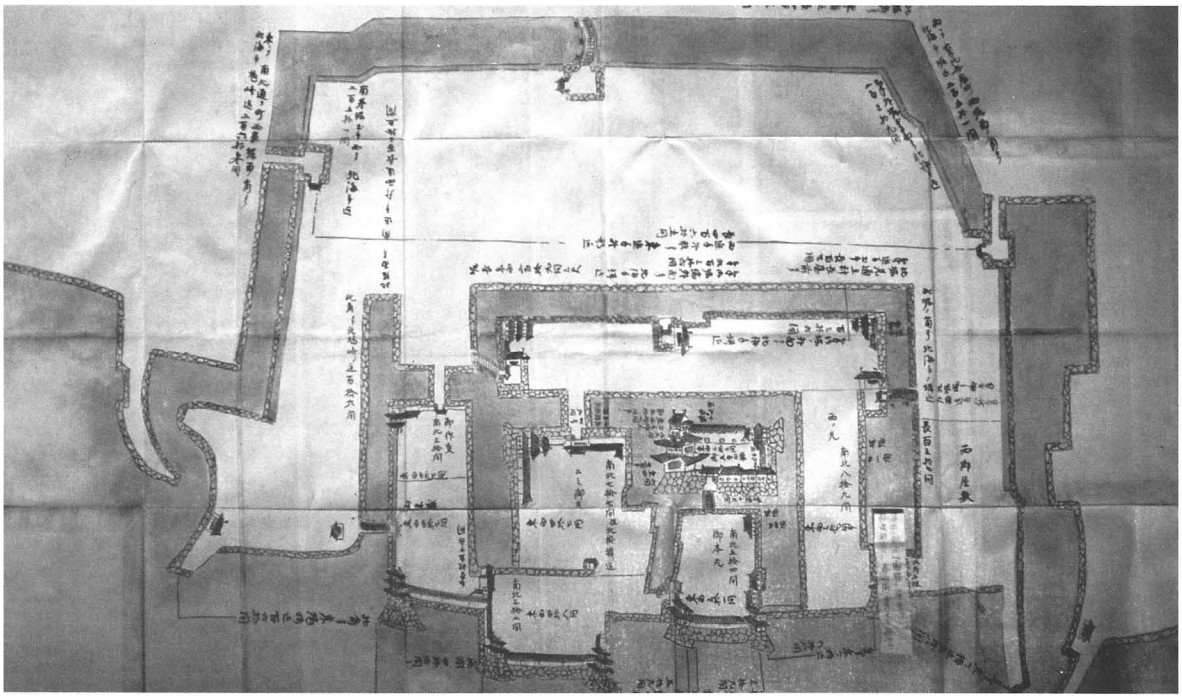
絵図－９）『天保 15 年高松之図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）



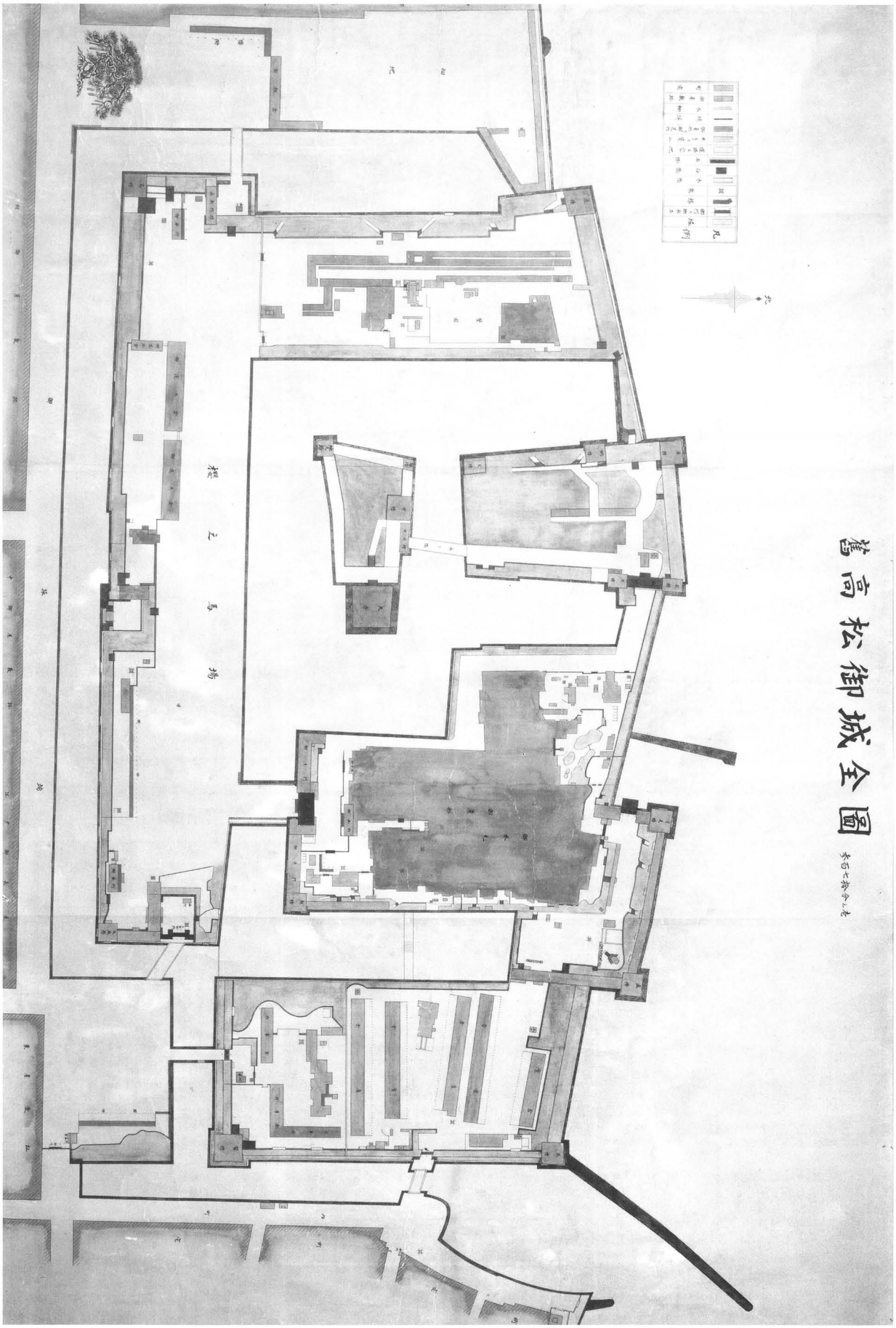
絵図－10）『讃岐国名勝図会』（高松市歴史資料館所蔵）



絵図－11）『安政４未年高松之図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）



絵図－12）『高松城内図』（鎌田共済会郷土博物館所蔵）



絵図－13）『旧高松御城全図』（香川県歴史博物館所蔵）

高松城跡(寿町一丁目)出土遺物観察表

※法量の()は，残存値を表す。

報告番	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	調整	色調	胎土	備考
1	土師質土器 皿	5.8	5.2	1.8	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR6/6	微砂	底面:回転ヘラ切り
2	土師質土器 皿	10.2		(1.8)	内外面:ナデ	外面:橙7.5YR7/6 内面:橙5YR7/6	微砂若干	
3	土師質土器 皿	10.2	6.8	(2.2)	内外面:ナデ	内外面:橙7.5YR7/6	微～細砂	
4	土師質土器 杯	11.8		(1.5)	内外面:回転ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白10YR8/1	細砂若干	
5	土師質土器 杯		4.0	(1.4)	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR7/6	微砂若干	底面:静止ヘラ切り
6	土師質土器 杯		5.4	(0.8)	内外面:ナデ	外面:橙7.5YR7/6 内面:にぶい橙7.5YR7/4	微砂	底面:回転糸切り
7	土師器 杯		7.6	(0.9)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	微～細砂	底面:回転ヘラ切り
8	土師質土器 羽釜			(2.7)	内外面:ナデ	内外面:橙7.5YR7/6	細～粗砂	
9	須恵質土器 甕		10.6	(3.0)	内外面:回転ナデ	外面:褐灰10YR5/1 内面:褐灰10YR6/1	微砂	底面:ナデ
10	土師質土器 擂鉢		11.2	(3.7)	内外面:ヘラナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:灰黄褐10YR6/2	微～粗砂	
11	軒平瓦	長さ (6.7)	幅 (8.6)			凹凸面:暗灰N3/0	微～細砂	重波文的波状文
12	軒平瓦	長さ (7.0)	幅 (11.2)			凹凸面:暗灰N3/0	微砂若干	重波文的波状文
13	軒丸瓦					凹凸面:褐灰10YR4/1	微～細砂若干	巴文
14	土錘	長さ (5.8)	直径 1.2		外面:ナデ	内外面:にぶい褐7.5YR5/3	粗砂	重さ:7.7g
15	瓦器 碗		5.4	(2.7)	外面:ヘラミガキ，指頭圧 内面:ヘラミガキ	外面:灰N4/0 内面:灰10Y7/1	微～細砂	
16	土師質土器 皿	6.6	4.8	1.0	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:橙7.5YR6/6	微～細砂	底面:回転ヘラ切り後に板目
17	土師質土器 皿	7.8	6.4	1.4	内外面:回転ナデ	外面:褐灰10YR6/1 内面:黄灰2.5Y5/1	微～細砂	底面:回転ヘラ切り
18	土師質土器 甕	13.4		(1.5)	外面:回転ナデ，ナデ 内面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:灰白2.5Y7/1	微～細砂	
19	黒色土器 椀		6.4	(1.4)	外面:回転ナデ 内面:ヘラミガキ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:黒2.5Y2/1	微～細砂	黒色土器A類
20	土師質土器 足釜				外面:ナデ	外面:褐灰10YR4/1	微～細砂	煤付着
21	磁器 皿	11.0	5.6	3.2	内外面:施釉	釉:灰白N8/0 素地:灰白7.5Y8/1	精選	畳付:露胎
22	磁器 碗	12.6		(2.9)	内外面:施釉	釉:灰白5Y7/2 素地:灰白N7/0	精選	
23	磁器 碗		2.6	(1.6)	外面:施釉，高台畳付露胎 内面:施釉，蛇ノ目釉ハギ	釉:灰白5Y7/2 素地:灰白N8/0	精選	
24	陶器 甕			(3.6)	内外面:回転ナデ	内外面:黄灰2.5Y5/1	精選	外面:自然釉付着
25	陶器(備前) 杯	10.2	6.8	2.8	内外面:回転ナデ	内外面:灰褐5YR4/2	微～細砂	底面:回転糸切り後に板目
26	陶器(備前) 壺	10.4		(3.7)	内外面:回転ナデ	内外面:灰赤10R4/2	微砂	
27	陶器(備前) 甕			(3.7)	内外面:ナデ	釉:オリーブ5Y5/4 素地:暗灰黄2.5Y5/2	細砂	
28	陶器(備前) 甕			(3.6)	内外面:回転ナデ	釉:赤灰2.5YR5/1 素地:灰赤2.5YR4/2	細砂	
29	陶器(備前) 甕			(6.7)	内外面:回転ナデ	釉:灰白2.5Y8/1 素地:黄灰2.5Y4/1	細砂	外面肩部:沈線2条
30	陶器(備前) 甕		16.0	(6.3)	内外面:回転ナデ	外面:褐灰10YR4/1 内面:黒褐10YR3/1	細砂	
31	陶器(備前) 擂鉢	26.6		(4.6)	外面口縁部:回転ナデ 体部:ナデ 内面:回転ナデ	内外面:灰褐7.5YR5/2	細砂	
32	陶器(備前) 擂鉢	27.8		(8.5)	内外面:回転ナデ，指頭圧	内外面:灰N6/0	微砂	
33	陶器(備前) 擂鉢	29.6	14.4	10.3	内外面:回転ナデ	外面:灰N6/0 内面:灰オリーブ5Y5/2	微～粗砂，小石	
34	陶器(備前) 擂鉢	30.6		(6.8)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐2.5YR5/4 内面:赤灰2.5YR4/1	細砂	
35	陶器(備前) 擂鉢	31.4		(5.2)	内外面:回転ナデ	内外面:灰黄褐10YR5/2	微砂	
36	陶器(備前) 擂鉢	31.6		(5.9)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐2.5YR5/4 内面:明赤褐2.5YR5/6	細砂	
37	陶器(備前) 擂鉢		12.4	(6.4)	外面:回転ナデ，指頭圧 内面:回転ナデ	外面:灰褐7.5YR5/2 内面:灰N6/0	粗砂	
38	陶器(備前) 擂鉢		14.8	(4.9)	内外面:回転ナデ	外面:灰黄褐10YR4/2 内面:黒褐7.5YR3/1	細礫，小石，粗砂	
39	陶器(備前) 擂鉢		17.1	(6.6)	外面:回転ナデ，ヘラ削り 内面:回転ナデ	外面:灰褐5YR5/2 内面:赤褐10R5/4	細砂，微砂	
40	土師質土器 皿	7.1	5.2	81.5	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい黄橙10YR7/3	微砂	底部:回転ヘラ切り後に回転ヘラナデ
41	土師質土器 皿	7.2	5.8	1.5	内外面:回転ナデ	内外面:灰白2.5Y8/2	微砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
42	土師質土器 皿	8.0	5.6	1.1	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	微砂	底面:回転ヘラ切り後に板目
43	土師質土器 (灯明)皿	8.4	5.8	1.6	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:灰白10YR8/2	微砂	口縁端部:煤付着 底面:回転ヘラ切り後に板目
44	土師質土器 皿	8.6	6.4	1.2	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:橙7.5YR7/6	微砂	底面:回転ヘラ切り後に板目，回転ヘラナデ
45	土師質土器 皿	9.0	6.6	1.6	内外面:回転ナデ	内外面:橙7.5YR7/6	微砂	
46	土師質土器 皿	10.2	6.6	(2.3)	内外面:回転ナデ後にナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/4 内面:灰白7.5YR8/2	微砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
47	土師質土器 皿	10.4	7.8	2.4	内外面:ナデ	内外面:灰白10YR8/2	微砂	

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
48	土師質土器 皿	11.5		(2.1)	内外面:回転ナデ後にナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR8/1	微砂	
49	土師質土器 皿	7.8		(1.5)	内外面:回転ナデ後にナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:灰白10YR8/2	微砂	底面:ナデ
50	土師質土器 皿	8.8		(1.4)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:灰白10YR8/2	微砂若干	
51	土師質土器 皿	9.2	5.6	1.5	内外面:回転ナデ	内外面:灰白10YR8/2	微砂若干	
52	土師質土器 皿	9.4		(2.3)	内外面:回転ナデ	内外面:淡黄2.5Y8/3	微砂	
53	土師質土器 皿	10.6	5.8	(1.8)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙5YR7/4	微砂	
54	土師質土器 杯	16.4		(3.8)	内外面:回転ナデ	内外面:灰白10YR8/2	微砂	
55	土師質土器 杯		5.0	(1.9)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:浅黄橙10YR8/4	微砂	底面:回転ヘラ切り後に板目, ヘラナデ
56	土師質土器 杯		5.8	(1.3)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:浅黄橙7.5YR8/4	微砂	底面:回転ヘラ切り後に板目
57	土師質土器 杯		6.4	(1.7)	内外面:回転ナデ	外面:灰白7.5YR8/1 内面:灰白7.5YR8/2	微砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
58	土師質土器 鉢	21.2		(5.9)	外面口縁部:ヨコナデ 胴部:ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 胴部:指頭圧後にナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:浅黄橙10YR8/3	細砂	
59	瓦質土器 鉢	32.8		(5.3)	内外面:回転ナデ, ヨコナデ	外面:灰N4/0 内面:灰N5/0	細砂	
60	土師質土器 鍋			(2.7)	内外面:ヨコナデ	内外面:にぶい黄橙10YR6/3	細砂	
61	土師質土器 足釜	22.4		(7.3)	外面口縁部:指頭圧後にヨコナデ 胴部:ナデ, タタキ 内面口縁部:ヨコナデ 胴部:ハケ	内外面:にぶい黄橙10YR7/2	細砂	体部外面:煤付着
62	土師質土器 足釜	24.4		(4.8)	外面:ヨコナデ, 指頭圧痕 内面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい橙5YR6/4	細砂	
63	瓦器 椀	14.2		(3.6)	外面口縁部:回転ナデ 体部:指頭圧後にヘラミガキ 内面:ナデ後にヘラミガキ	内外面:灰N4/0	微砂	
64	白磁 碗			(2.2)	外面:回転ヘラ削り, 体部下半露胎 内面:回転ナデ, 施釉	釉:灰黄2.5Y7/2 素地:浅黄2.5Y7/3	精選	
65	青磁 碗			(2.2)	内外面:施釉	釉:明オリーブ灰2.5GY7/1 素地:黄灰2.5Y6/1	精選	蓮弁
66	須恵器 甕			(6.9)	外面:平行タタキ, ヘラ削り 内面:指頭圧, ヘラナデ	内外面:灰N5/0	微砂	
67	軒丸瓦				瓦当裏面:ナデ	凹凸面:暗灰N3/0	粗砂	巴文
68	丸瓦	長さ (4.9)	幅 (9.2)		凸面:ナデ 凹面:布目, 板ナデ	凹凸面:灰白2.5Y8/1	粗砂	
69	丸瓦	長さ (5.5)	幅 (7.5)		凸面:縄目タタキ 凹面:布目, 面取	凸面:灰白7.5Y8/1 凹面:灰白7.5YR8/1	やや密	
70	軒平瓦	長さ (6.6)	幅 (10.5)	厚さ 2.8	凸面:横方向のヘラナデ 凹面:布目, コビキA	凸面:灰5Y5/1 凹面:灰5Y4/1	細礫, 小石, 粗砂	
71	道具瓦	長さ (11.6)	幅 (7.8)		凹面:板ナデ, 面取	凸面:灰N5/0 凹面:灰N6/0	細砂, 粗砂	
72	鬼瓦	長さ (12.4)	幅 (4.1)		外面:ナデ, 指頭圧	外面:灰N4/0	粗砂	
73	瓦製円盤	直径 6.0		厚さ 2.1		外面:赤灰7.5R5/1 内面:にぶい黄橙10YR7/3	粗砂	重さ:88.6g
74	土錘	長さ 8.5	幅 5.2	厚さ 5.1	外面:ナデ	外面:灰白2.5Y8/2	細礫	重さ:183.4g
75	土錘	長さ 7.2	直径 3.9		外面:ナデ	外面:灰黄2.5Y7.2	粗砂	重さ:59.8g
76	土錘	長さ (4.5)	直径 1.4		外面:ナデ	外面:2.5Y7/2	極細砂	重さ:9.2g
77	加工板	長さ (53.3)	幅 10.7	厚さ 2.0				柾目, 方形の孔
78	加工板	長さ (49.6)	幅 10.7	厚さ 2.5				板目, 加工痕
79	加工板	長さ (34.5)	幅 15.7	厚さ 3.0				柾目, 方形の孔
80	加工板	長さ (39.2)	幅 18.0	厚さ 2.4				柾目, 方形の孔
81	加工板	長さ 16.5	幅 (7.7)	厚さ 2.0				柾目
82	加工板	長さ (20.8)	幅 (5.0)	厚さ (0.7)				板目
83	加工板	長さ (7.0)	幅 (5.2)	厚さ 2.6				面取り
84	曲物の底板	長さ (10.1)	幅 (3.6)	厚さ 0.4				
85	骨	長さ (12.0)	直径 3.7					
86	陶器(備前) 擂鉢			(4.0)	内外面:回転ナデ	内外面:灰赤10R5/2	やや密	
87	土師質土器 皿	4.8	5.6	0.9	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	微砂	底面:回転ヘラ切り後にヘラナデ
88	土師質土器 皿	8.3		(1.4)	内外面:回転ナデ	内外面:橙7.5YR6/6	細砂	
89	土師質土器 皿	9.6	6.4	(1.9)	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR6/6	微砂	底面:回転糸切り
90	土師質土器 杯		5.0	(1.6)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	微砂	底面:回転糸切り
91	土師質土器 杯		5.0	(1.0)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/3	微砂若干	底面:ナデ
92	陶器(肥前系) 碗	6.2		(3.4)	内外面:回転ナデ, 施釉	釉:褐7.5YR4/4 素地:にぶい褐7.5YR5/3	精選	
93	陶器(肥前系) 鉢			(5.0)	外面:回転ナデ, 施釉(下半露胎) 内面:回転ナデ, 板ナデ, 施釉	釉:暗灰褐2.5Y5/2 素地:にぶい赤褐5YR5/4	精選	外面:沈線2条
94	陶器 鉢			(5.8)	内外面:施釉	釉:灰白10YR8/2 素地:褐灰10YR6/1	精選	

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
95	土師質土器 甕	31.2		(8.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧, ヘラミガキ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧, ナデ	外面:にぶい橙5YR6/4 内面:橙5YR6/6	粗砂	
96	磁器(肥前系) 碗			(2.4)	内外面:施釉	釉:にぶい黄橙10YR7/2 素地:灰白10YR7/3	精選	
97	瓦器 椀	16.0		(2.6)	外面口縁部:回転ナデ 体部:指頭圧後にヘラミガキ 内面:ナデ後にヘラミガキ	外面:灰N5/0 内面:灰N6/0	微砂若干	
98	瓦器 椀	11.2		(3.3)	外面口縁部:回転ナデ 体部:指頭圧後にヘラミガキ 内面口縁部:回転ナデ後にヘラミガキ 体部:ナデ後にヘラミガキ	内外面:灰N5/0	微砂若干	
99	瓦器 椀		4.4	(1.1)	外面:回転ナデ 内面:ナデ後にヘラミガキ	内外面:灰N6/0	微砂若干	
100	陶器(肥前系) 皿	11.2	4.2	3.2	外面:回転ナデ, 施釉(体部下半露胎) 内面:施釉	釉:灰オリーブ5Y6/2 素地:灰褐5YR5/2	精選	
101	軟質施釉陶器 蓋	9.0		(1.7)	外面:回転ナデ, 施釉(上面のみ) 内面:回転ナデ	外面:にぶい橙2.5YR6/4 内面:橙2.5YR6/4	精選	沈線1条
102	陶器(備前) 擂鉢		20.0	(4.6)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐2.5YR5/4 内面:暗赤灰2.5Y3/1	細～粗砂	底面:ヘラナデ
103	陶器(備前) 甕			(8.0)	内外面:回転ナデ, ナデ	外面:灰褐7.5YR5/2 内面:褐灰10YR5/1	微砂	
104	陶器(備前) 甕			(8.3)	外面:板ナデ, ナデ 内面:回転ナデ, 板ナデ	外面:褐7.5YR4/4 内面:褐灰10YR4/1	細砂	底面:ヘラナデ
105	土師質土器 擂鉢	32.3		(9.4)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧後にヘラナデ 内面:板ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	粗砂	内面:黒斑
106	土師質土器 足釜	25.4		(4.0)	外面口縁部:ヨコナデ, 指頭圧 体部:ナデ, 指頭圧 内面:ハケ	内外面:にぶい黄橙10YR7/3	細砂	
107	土師質土器 足釜			(4.4)	外面:ヨコナデ, 指頭圧 内面:板ナデ	外面:橙5YR7/6 内面:橙5YR6/8	粗砂～細礫	
108	土師質土器 鍋			(3.2)	外面口縁端部:ハケ 口縁部:ヨコナデ, 指頭圧 体部:ハケ 内面口縁部:ハケ 体部:ヨコナデ	外面:黒褐7.5YR3/2 内面:にぶい橙7.5YR6/4	粗砂若干	外面:煤付着
109	土師質土器 甕		11.5	(3.1)	外面:ナデ 内面:回転ナデ	内外面:にぶい黄橙10YR7/4	細砂	沈線2条 花文状の刻印
110	土師質土器 皿	8.0	5.6	1.3	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, 指ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	細砂	底面:回転ヘラ切り後に回転ヘラケズリ
111	土師質土器 皿(灯明皿)	8.2	4.9	1.5	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/6	細砂	底面:回転ヘラ切り後に板目 口縁部:煤付着
112	土師質土器 皿	8.8	5.2	1.8	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/4	細砂	底面:ヘラナデ
113	土師質土器 皿	9.0	7.0	1.4	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	細砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
114	土師質土器 皿(灯明皿)	8.6	5.8	1.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ナデ	内外面:にぶい橙5YR7/4	細砂	口縁部:煤付着 底面:回転ヘラ切り後にナデ
115	土師質土器 皿	9.4	7.4	1.1	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/4 内面:浅黄橙7.5YR8/3	細砂	底面:回転ヘラ切り
116	土師質土器 皿	9.6		(1.3)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	細砂	内面外面に黒斑
117	土師質土器 杯		5.8	(1.9)	内外面:回転ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/2	微砂	底面:ヘラケズリ, ナデ
118	土師質土器 杯		5.6	(1.3)	内外面:ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	微砂若干	底面:回転ヘラ切り後にナデ
119	土師質土器 杯		6.4	(1.5)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	細砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
120	土師質土器 杯		6.0	(1.4)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, 指ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/4	細砂	底面:板目, 回転ヘラナデ
121	土師質土器 杯		4.2	(1.6)	内外面:摩滅	内外面:浅黄橙7.5YR8/4	細砂	
122	土師質土器 火舎			(6.5)	内外面:ナデ	内外面:にぶい黄橙10YR7/3	細砂若干	
123	青磁 碗	16.0		(4.1)	内外面:施釉	釉:オリーブ灰5GY6/1 素地:灰N8/0	精選	
124	須恵器 高杯			(2.7)	内外面:摩滅	内外面:灰白2.5Y7/1	微砂	
125	軒丸瓦				瓦当裏面:ヘラナデ	凹面:にぶい黄橙10YR7/2 凸面:褐灰10YR6/1	細砂若干	巴文
126	丸瓦	長さ (9.5)	幅 (7.0)		凸面:縄叩き痕 凹面:布目, 面取	内外面:橙2.5YR6/6	粗砂	
127	瓦製円盤	直径 7.9×7.5		厚さ 2.3		内外面:にぶい橙7.5YR7/4	粗砂	重さ:163.1g
128	砥石	長さ (8.3)	幅 6.0	厚さ 2.8				砂岩
129	鉄製品	長さ 9.4	直径 2.7					
130	須恵質土器 椀		4.8	(1.3)	外面高台部:回転ナデ 内面:ナデ	外面:灰白5Y8/2 内面:灰白5Y7/1	微砂若干	底面:静止ヘラナデ
131	軟質施釉陶器 鉢	7.2	4.6	3.6	外面:回転ナデ, 施釉(下部下半露胎) 内面:回転ナデ, 施釉	釉:赤褐2.5YR4/8 素地:橙2.5YR6/6	精選	底面:回転ヘラ切り
132	土師質土器 椀		4.0	(1.3)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:淡黄2.5Y8/3	細礫	
133	土師質土器 杯	10.8	6.8	(1.9)	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR7/6	細砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
134	瓦器 椀	16.2		(4.3)	外面口縁部:ヘラミガキ 体部:指頭圧後にヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	内外面:灰N4/0	微砂若干	
135	土師質土器 足釜			(9.2)	外面:ナデ	外面:褐灰7.5YR4/1	細砂若干	
136	土師質土器 皿	8.1	6.4	1.0	内外面:回転ナデ	内外面:淡黄2.5Y8/3	微砂	底面:ナデ
137	青磁 碗			(2.5)	内外面:回転ナデ	釉:オリーブ灰2.5GY6/1 素地:灰7.5Y6/1	精選	

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
138	鉄釘	長さ (3.9)	幅 0.6	厚さ 0.4				
139	青磁 碗		4.6	(3.2)	内外面:施釉	釉:オリーブ灰10Y5/2 素地:灰10Y6/1	精選	中国龍泉窯系
140	瓦器 椀	15.0		(3.1)	外面:回転ナデ, 指頭圧, ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	外面:暗灰N3/0 内面:灰N4/0	微砂	
141	瓦器 椀		7.0	(1.8)	外面高台部:回転ナデ 内面:ヘラミガキ	内外面:灰N4/0	微砂	底面:回転ヘラ切りのちにナデ
142	陶器 甕			(4.6)	内外面:施釉	釉:オリーブ黄5Y6/4 素地:灰黄褐10YR6/2	細砂	
143	土師質土器 杯	8.9	5.0	1.4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ナデ	内外面:にぶい橙5YR7/4	微砂	底面:回転ヘラ切り後に板目
144	土師質土器 杯	9.9		(2.2)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	微砂	
145	土師質土器 杯	10.8		(1.5)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	微砂	
146	土師質土器 足釜	19.0		(5.2)	外面:回転ナデ, ナデ 内面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐5YR5/3 内面:褐灰5Y4/2	細～粗砂多量	体部外面:煤付着
147	土師質土器 杯	9.0		(2.0)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい黄橙10YR6/4	微～細砂若干	
148	須恵質土器 杯	14.6		(1.7)	内外面:回転ナデ	外面:黄灰2.5Y5/1 内面:灰白2.5Y7/1	微砂, 粗砂若干	
149	陶器(肥前系) 壺	12.8		(4.1)	内外面:回転ナデ	釉:オリーブ黄5Y6/3 素地:灰白5Y7/1	微砂若干	
150	土師質土器 火鉢	21.8		(6.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, 指ナデ	外面:にぶい褐7.5YR6/3 内面:灰黄2.5Y7/2	微～細	外面:墨書あり
151	鉄釘	長さ (3.6)	幅 0.4					
152	青銅製品	長さ 9.5	幅 0.8	厚さ 0.5				
153	土師質土器 杯		7.4	(1.0)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい黄橙10YR7/4	微砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
154	土師質土器 杯		7.2	(1.6)	内外面:摩滅	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	微～細砂	底面:回転ヘラ切り
155	黒色土器 椀	15.0		(2.4)	外面口縁部:回転ナデ 体部:指頭圧, ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰N4/0	微砂若干	黒色土器A類
156	磁器 碗		6.4	(2.6)	内外面:回転ナデ	釉:灰白5Y7/1 素地:灰白5Y7/2	細砂	
157	土師質土器 杯	15.0	9.6	(2.1)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/4 内面:灰白10YR8/2	細砂若干	
158	土錘	長さ 8.7	幅 6.1	厚さ 5.9	外面:指頭圧	外面:にぶい橙7.5YR7/4	細砂	重さ:227.7g
159	白磁 碗			(1.5)	内外面:回転ナデ	釉:灰白5Y8/1 素地:灰白N8/0	精選	
160	土師質土器 杯		8.8	(1.3)	内外面:回転ナデ	外面:灰黄褐10YR5/2 内面:黒褐10YR3/1	微砂若干	底面:回転ヘラケズリ 内面:黒色の漆付着
161	黒色土器 杯	15.4		(2.2)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:黄灰2.5Y4/1	微～細砂	黒色土器A類
162	土師質土器 杯		7.0	(0.8)	内外面:ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/3	微～粗砂, 小石	底面:回転ヘラケズリ
163	土師質土器 杯		4.6	(0.9)	外面:ナデ 内面:回転ナデ・ナデ	内外面:橙5YR6/6	微砂若干	底面:回転ヘラ切り後にナデ
164	土師質土器 杯	12.2		(3.2)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/2 内面:明褐灰7.5YR7/2	微～粗砂	
165	須恵器 甕	27.0		(2.4)	内外面:回転ナデ	外面:灰N6/0 内面:灰N5/0	微～細砂	
166	土師質土器 杯	11.0		(2.0)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙5YR7/4 内面:にぶい橙7.5YR7/4	微砂若干	内面:動物の爪によるひっかき傷
167	陶器 碗		3.6	(2.0)	内外面:回転ナデ	釉:黒褐7.5YR2/2 素地:にぶい黄橙10YR7/2	微砂	
168	陶器 皿		5.4	(8.0)	内外面:回転ナデ	釉:暗緑灰10GY8/1 素地:灰黄褐10YR6/2	精選	
169	土師質土器 皿	8.9	5.4	(2.3)	内外面:摩滅	内外面:橙7.5YR7/6	細砂	
170	土師質土器 皿	8.8	6.2	1.6	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/6 内面:淡橙5YR8/4	細砂	底面:回転ヘラ切り
171	土師質土器 皿		4.0	(1.1)	内外面:摩滅	内外面:橙5YR6/6	細砂	底面:静止糸切り後にヘラケズリ
172	瓦製円盤		直径 5.1	厚さ 2.0		外面:にぶい黄橙10YR6/3	粗砂	重さ:61.6g
173	土錘	長さ 4.9	直径 3.7		外面:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/4	粗砂・細礫	重さ:53.7g
174	土錘	長さ 5.4	直径 3.8		外面:ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/3	粗砂	重さ:74.6g
175	陶器 蓋			(1.0)	内外面:回転ナデ	外面:橙7.5YR7/6 内面:にぶい黄橙10YR7/4	微砂	
176	陶器(肥前系) 皿	14.8		(2.4)	内外面:回転ナデ	釉:にぶい橙7.5YR7/3 素地:にぶい黄橙10YR7/4	微砂	
177	磁器(肥前系) 皿		4.8	(1.3)	内外面:回転ナデ	釉:灰オリーブ7.5YR6/2 素地:浅黄2.5Y7/3	精選	
178	陶器(肥前系) 大皿	33.2		(5.4)	内外面:回転ナデ	釉:オリーブ灰2.5GY6/1 素地:黄褐10YR5/4	微砂	
179	陶器(肥前系) 鉢		11.6	(5.1)	外面:施釉(体部下半露胎) 内面:施釉	釉:明オリーブ灰2.5GY7/1 素地:にぶい橙5YR7/4	精選	
180	陶器(備前) 擂鉢	25.4		(5.3)	内外面:回転ナデ	外面:赤橙10R6/6 内面:にぶい赤褐5YR4/3	粗砂	
181	陶器(備前) 擂鉢	28.2		(5.1)	内外面:回転ナデ	内外面:赤褐2.5YR4/6	粗砂若干	
182	陶器(備前) 擂鉢	30.0		(7.0)	内外面:回転ナデ	内外面:赤褐10R4/4	粗砂若干	
183	陶器(備前) 甕	31.2		(13.7)	外面口縁部:ヨコナデ 胴部:ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 胴部:回転ナデ, ヘラナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい黄橙10YR6/4	細砂	櫛描直線文2条 櫛描波状文1条
184	陶器(備前) 甕	42.0		(7.0)	外面:回転ナデ 内面口縁部:回転ナデ 頸部:ヘラナデ	内外面:にぶい赤褐5YR4/3	細～微砂	

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
185	陶器(備前)甕			(8.9)	内外面:ナデ	外面:黒褐10YR3/2 内面:灰赤10R4/2	粗砂・細礫	
186	陶器(備前)甕		24.0	(4.7)	外面:回転ヘラ削り, ヘラナデ 内面:ヘラナデ	外面:灰褐5YR5/2 内面:灰褐7.5YR4/2	粗砂	自然釉付着
187	陶器(備前)甕		27.6	(11.2)	外面:ヘラナデ 内面:指頭圧, ハケ目, ナデ	内外面:灰褐7.5YR5/2	粗砂	外面:黒斑
188	陶器(備前)甕			(8.6)	外面:ヘラナデ, ナデ 内面:剥離	外面:灰褐7.5YR4/2 内面:灰N5/0	細砂	
189	土師質土器甕	28.4		(5.1)	外面口縁部:ヨコナデ 胴部:ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 頸部:ハケ 胴部:ヘラナデ	外面:明赤褐5YR5/6 内面:橙5YR7/6	粗砂・細礫	
190	土師質土器甕	30.0		(3.7)	外面:ヨコナデ, 指頭圧 内面:ヨコナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:橙5YR6/6	粗砂	
191	土師質土器足釜	22.1		(5.9)	外面口縁部:回転ナデ 胴部:ナデ 内面:回転ナデ	内外面:橙5YR6/6	細礫	外面, 内面口縁部:黒斑
192	土師質土器足釜	24.4		(5.0)	外面口縁部:ヨコナデ 胴部:ナデ 内面:板ナデ	外面:にぶい橙5YR6/3 内面:にぶい橙5YR6/4	粗砂	外面:煤付着
193	土師質土器皿	8.0		(1.1)	内外面:回転ナデ	内外面:灰白7.5YR8/2	細砂	底面:回転ヘラナデ
194	土師質土器皿	8.6		(1.5)	内外面:回転ナデ	外面:橙7.5YR6/6 内面:淡橙5YR8/4	細砂	底面:ナデ
195	土師質土器皿	9.2	6.6	(1.8)	内外面:回転ナデ	外面:黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/3	細砂	底面:回転糸切り
196	土師質土器杯	10.7	6.4	3.7	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, 指ナデ	外面:にぶい橙5YR6/4 内面:橙2.5YR6/6	細砂	底面:板目後にナデ
197	土師質土器杯	12.6		(1.6)	内外面:回転ナデ	外面:明褐灰7.5YR7/2 内面:にぶい橙7.5YR7/4	細砂	口縁部:煤付着
198	土師質土器杯		8.4	(6.0)	内外面:回転ナデ	外面:橙7.5YR7/6 内面:にぶい橙7.5YR6/4	細砂	底面:回転糸切り
199	土師質土器杯			(0.6)	内外面:回転ナデ	外面:灰白10YR8/1 内面:灰白10YR8/2	細砂	底面:回転糸切り
200	土師質土器杯		6.0	(0.8)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい褐:7.5YR5/3	細砂	底面:静止糸切り
201	土師質土器焼塩壺	5.2		(6.2)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラ削り後にヘラナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラナデ, 未調整	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい橙7.5YR7/3	細砂	
202	土師質土器椀		6.4	(2.3)	外面体部:ナデ 高台部:回転ナデ 内面:ナデ	内外面:灰白2.5Y8/2	細砂	底面:静止ヘラケズリ, ヘラナデ
203	弥生土器高杯			(2.5)	内外面:摩滅	内外面:明赤褐5YR5/6	石英・長石・雲母	
204	イイダコ壺			(4.6)	内外面:ナデ, ヘラナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	細砂	
205	土錘	長さ 6.1	直径 (4.1)		外面:ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/4	粗砂若干	重さ:56.7g
206	軒丸瓦				瓦当裏面:ヘラナデ	凹凸面:灰N4/0	粗砂	巴文
207	軒丸瓦				瓦当裏面:ヘラナデ	凸面:灰N4/0 凹面:褐灰10YR6/1	粗砂	巴文
208	軒丸瓦				瓦当裏面:ヘラナデ	凹凸面:灰白N4/0	粗砂	巴文
209	獅子瓦	長さ (19.6)	幅 (12.2)		凹面:ヘラナデ 凸面:ナデ	凹凸面:灰N5/0	粗砂	汎字
210	白磁皿			(2.6)	内外面:回転ナデ	釉:透明釉 素地:灰白5Y7/1	微砂	
211	土師質土器杯		6.0	(0.8)	外面:回転ナデ 内面:摩滅	内外面:浅黄橙7.5YR8/4	細砂	底面:静止ヘラ切り後に回転ヘラケズリ
212	土師質土器羽釜			(4.2)	外面口縁部:ヨコナデ 内面:板ナデ	内外面:にぶい橙5YR6/4	細砂	
213	骨(歯)							
214	土師質土器皿	8.6		(2.0)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/3 内面:明褐灰7.5YR7/2	細砂	
215	土師質土器皿	9.9	4.8	1.6	内外面:回転ナデ後にナデ	内外面:橙5YR7/6	細砂	口縁部:煤付着
216	土師質土器杯		9.6	(1.3)	内外面:摩滅	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:にぶい黄橙10YR6/3	細砂	底面:静止ヘラ切り後に回転ヘラ削り
217	土師質土器杯			(3.0)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	微砂	外面:墨書「月　幸(?)」
218	青磁碗			(1.6)	内外面:回転ナデ	釉:明オリーブ灰5GY7/1 素地:灰白N7/0	微砂	
219	軒丸瓦				瓦当裏面:ナデ	凹凸面:灰5Y6/1	細砂	巴文
220	鉄釘	長さ 9.7	幅 0.5	厚さ 0.5				
221	鉄釘	長さ 4.3	幅 0.5	厚さ 0.3				
222	土師器土器杯		7.0	(0.6)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, 指ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:にぶい黄橙10YR7/4	細砂	底面:回転ヘラ切り後に静止ヘラ削り
223	土師器杯		7.6	(1.0)	内外面:回転ナデ	内外面:橙7.5YR7/6	細砂	
224	土師質土器羽釜			(2.8)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケ, 指頭圧 内面:ヘラナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	粗砂	
225	白磁碗	22.0		(3.4)	内外面:施釉	釉:透明釉 素地:灰白5Y8/1	精選	
226	土師質土器足釜	21.6		(5.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧, ナデ 内面:細かいハケ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	粗砂	
227	鉄板	長さ (4.3)	幅 (3.5)	厚さ 0.1				
228	土師質土器皿	11.2		(2.1)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	微砂	
229	瓦器椀		5.6	(1.7)	外面:ナデ 内面:ヘラミガキ	外面:灰N5/0 内面:灰白5Y7/1	細砂	

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
230	土師質土器 椀		5.7	(3.6)	外面:回転ナデ 内面:ヘラミガキ	外面:灰白2.5Y8/2 内面:黄灰2.5Y4/1	細砂	底面:回転ヘラ切り
231	軟質施釉陶器 蓋	9.4		(1.6)	内外面:回転ナデ	釉:赤褐2.5YR4/8 素地:橙2.5YR6/6	精選	沈線1条
232	陶器(肥前系) 碗	10.6	4.5	6.3	外面:回転ナデ 体部下位:回転ヘラケズリ 内面:回転ナデ	釉:灰黄2.5Y6/2 素地:にぶい黄橙10YR6/4	精選	
233	陶器(肥前系) 皿	12.0		(2.0)	外面:口縁部施釉 内面:施釉	釉:にぶい赤褐5YR4/3 素地:にぶい赤褐5YR5/4	精選	
234	陶器(肥前系) 皿	13.0		(2.4)	外面:回転ナデ, 口縁部施釉 内面:施釉	釉:灰オリーブ5Y6/2 素地:にぶい赤褐5Y5/4	精選	
235	陶器(肥前系) 皿	12.2	4.2	4.0	外面:回転ナデ, 回転ヘラ削り, 施釉(体部下半露胎) 内面:回転ナデ	釉:黄橙2.5Y5/3 素地:橙5YR6/6	精選	見込みに胎土目
236	陶器(肥前系) 皿		5.4	(2.2)	外面:回転ナデ 内面:施釉	釉:明赤褐2.5YR5/8 素地:灰7.5Y6/1	精選	見込みに胎土目
237	陶器(肥前系) 皿		5.6	(1.7)	外面:回転ナデ 内面:施釉	釉:褐灰5YR6/1 素地:赤10R5/6	精選	見込みに胎土目
238	陶器(肥前系) 皿		5.4	(2.5)	外面:回転ナデ, 施釉(体部下半露胎) 内面:回転ナデ, 施釉	釉:暗オリーブ7.5Y4/3 素地:にぶい褐7.5YR6/3	精選	見込みに胎土目
239	磁器(肥前系) 皿	9.2	4.4	2.5	内外面:施釉	釉:透明 素地:灰白2.5Y8/2	やや粗	見込みに胎土目
240	陶器(備前) 擂鉢	18.0		(3.9)	内外面:回転ナデ	外面:赤褐10R5/3 内面:灰褐7.5YR5/2	微砂	
241	陶器(備前) 擂鉢	33.1		(5.4)	内外面:回転ナデ	外面赤灰2.5YR6/1 内面:暗灰N3/	細砂	
242	陶器(備前) 擂鉢			(9.9)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐2.5Y5/3 暗灰黄2.5Y5/3 内面:褐灰10YR6/1	粗砂	
243	土師質土器 皿	6.8	5.0	1.4	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:浅黄橙7.5YR8/3	細砂	底面:回転ヘラ切り
244	土師質土器 皿	7.2	6.2	(1.6)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	微砂	底面:回転ヘラ切り後に回転ヘラナデ
245	土師質土器 皿	7.9	6.2	(1.1)	内外面:摩滅	内外面:浅黄橙10YR8/3	細砂	
246	土師質土器 皿	7.2	6.0	1.3	内外面:回転ナデ後にナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/3 内面:にぶい橙7.5YR7/4	細砂	底面:回転ヘラ切り
247	土師質土器 皿	7.6	5.8	1.3	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	細砂	底面:回転ヘラ切り後に板目
248	土師質土器 皿	8.4	6.0	(1.2)	内外面:回転ナデ	内外面:灰白10YR8/2	微砂	底面:回転ヘラ切り後に板目, ナデ
249	土師質土器 皿	8.2	5.4	1.3	内外面:回転ナデ	内外面:橙7.5YR7/6	細砂	底面:回転ヘラ切り
250	土師質土器 皿	7.7	6.0	1.8	内外面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3 内面:にぶい黄橙10YR7/4	細砂	底面:回転ヘラ切り後に板目, ナデ
251	土師質土器 皿	8.7	4.4	1.6	内外面:回転ナデ	外面:にぶい褐7.5YR6/3 内面:灰褐7.5YR6/2	微砂	底面:ナデ
252	土師質土器 皿	8.4	4.3	1.9	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, 指ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	細砂	底面:静止糸切り
253	土師質土器 皿(灯明皿)	9.0	6.2	(1.6)	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR6/6	微砂	口縁部:煤付着 底面:板目, ナデ
254	土師質土器 皿	9.0		(2.4)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい褐7.5YR5/4	微砂	
255	土師質土器 皿	10.0		(1.9)	外面口縁部:回転ナデ 体部:ナデ 内面:回転ナデ	内外面:にぶい黄橙10YR7/4	微砂	
256	土師質土器 皿	11.0		(2.1)	外面口縁部:回転ナデ 体部:ナデ 内面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	微砂	
257	土師質土器 皿(灯明皿)	8.6		2.2	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR6/6	微砂	底面:回転ヘラ切り後に板目, 回転ヘラナデ
258	土師質土器 皿		5.0	(1.2)	内外面:回転ナデ	外面:橙7.5YR7/6 内面:にぶい黄橙10YR7/4	細砂	底面:回転糸切り
259	土師質土器 杯	8.8	6.1	3.6	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/4 内面:にぶい橙7.5YR7/4	微砂	底面:回転ヘラ切り後に回転ヘラナデ
260	土師質土器 杯	9.9		(3.3)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙5YR7/4 内面:橙5YR7/6	微砂	外面:墨書
261	土師質土器 杯	10.2	4.6	2.3	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ナデ	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:橙7.5YR6/6	細砂	底面:回転糸切り
262	土師質土器 杯	11.6		(2.1)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:浅黄橙7.5YR8/3	細砂	底面:回転ヘラ切り
263	土師質土器 杯		6.6	(1.5)	外面:摩滅 内面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/4 内面:浅黄橙10YR8/3	微砂	底面:静止糸切り
264	土師質土器 杯		5.8	(1.6)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙5YR7/4	細砂若干	底面:回転糸切り
265	土師質土器 杯		5.4	(1.3)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ナデ	内外面:にぶい橙5YR7/4	細砂若干	底面:回転糸切り
266	土師質土器 杯		7.8	(1.1)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/4 内面:灰白10YR8/2	細砂	底面:回転ヘラ切り
267	土師質土器 椀		6.0	(1.3)	内外面:摩滅, 剥離	内外面:にぶい橙5YR7/4	微砂	
268	瓦器 椀		10.1	(3.4)	外面:回転ナデ 高台部:ヨコナデ 内面:ナデ	外面:灰N6/0 内面:灰N5/0	細砂	高台部底面:煤付着
269	土師質土器 甕			(16.5)	内外面:ナデ	外面:灰N5/0 内面:灰白10YR7/1	細礫	
270	土師質土器 蓋	21.4		2.8	外面:ナデ, ヘラミガキ, 面取 内面:回転ナデ, ハケ	内外面:黒2.5Y2/1	細砂	
271	土師質土器 足釜	17.2		(5.7)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケ後にヘラナデ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい褐7.5YR5/3	細礫	体部外面:煤付着
272	黒色土器 椀		5.8	(1.8)	外面:回転ナデ 内面:ナデ後にヘラミガキ	外面:灰白10YR8/2 内面:暗灰N3/0	細砂	黒色土器A類
273	黒色土器 椀		5.7	(1.0)	外面回転ナデ 内面:ナデ後にヘラミガキ	外面:灰N6/0 内面:にぶい黄橙10YR7/2	微砂	黒色土器A類
274	須恵器 椀		4.7	(1.0)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	内外面:灰白5Y8/1	微砂	

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
275	青磁 碗	14.0		(5.8)	内外面:施釉	釉:オリーブ灰10Y6/2 素地:灰白7.5Y7/1	精選	鎬蓮弁
276	青磁 碗	14.8		(2.5)	内外面:施釉	釉:明オリーブ灰5GY7/1 素地:灰白7.5Y7/1	精選	口縁部外面:雷文
277	青磁 鉢	21.0		(2.7)	内外面:施釉	釉:灰オリーブ7.5Y5/2 素地:灰白7.5Y7/1	精選	
278	青磁 鉢	13.0		(2.8)	内外面:施釉	釉:灰オリーブ5Y6/2 素地:灰白5Y7/1	精選	
279	青磁 鉢	31.0		(2.4)	内外面:施釉	釉:灰10Y6/1 素地:灰白7.5Y7/1	精選	
280	弥生土器 甕	14.0		(1.6)	内外面:摩滅	外面:褐7.5YR4/6 内面:赤褐5YR5/6	石英・長石・雲母・ 角閃石	
281	弥生土器 高杯			(7.8)	外面:ナデ 内面:ヘラナデ	内外面:灰白10YR8/2	微砂若干	
282	丸瓦	長さ (29.9)	幅 (13.5)		凸面:縄タタキ後ナデ 凹面:布目, 両側辺を面取	凹凸面:にぶい黄橙10YR7/2	細砂	
283	軒平瓦				凹面:摩滅 凸面:横方向のナデ	凸面:灰白2.5Y7/1 凹面:灰N5/0	細砂	中心飾り:巴文, 珠文
284	土製円盤		直径 5.5	厚さ 1.6		外面:にぶい黄橙10YR7/4 内面:明黄褐10YR7/6	細礫	
285	土錘	長さ 8.4	幅 6.2	厚さ 6.3	外面:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3	細礫	重さ:270.9g
286	土錘	長さ 4.3	直径 2.0		外面:ナデ	外面:にぶい橙5Y6/4	粗砂	重さ:16.9g
287	銅銭		直径 2.6	厚さ 0.2				
288	宣和通宝		直径 2.5	厚さ 0.2				
289	鉄板	長さ (4.2)	幅 (2.5)	厚さ 0.1				
290	鉄板	長さ (7.0)	幅 (1.5)	厚さ 0.3				
291	鉄板	長さ (4.0)	幅 (3.5)	厚さ 0.1				
292	磁器 皿	10.8		(1.5)	内外面:ナデ	釉:透明釉 素地:灰白2.5Y8/1	精選	
293	磁器 椀		2.4	(1.2)	内外面:ロクロ	釉:透明 素地:灰白2.5Y8/2	精選	
294	陶器(備前系) 鉢		2.6	(2.7)	内外面:ロクロ	釉:青黒5PB2/1 素地:黒褐7.5YR3/1	精選	底面:回転糸切り
295	陶器(備前) 甕	16.8		(6.5)	内外面:回転ナデ	釉:明褐7.5YR5/6 素地:灰白5Y7/1	細砂, 小石	
296	陶器(備前) 甕	68.0		(5.7)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐5YR4/3 内面:灰褐7.5YR4/2	細砂～細礫多量	
297	陶器(備前) 甕		27.8		外面:ヘラナデ 内面:板ナデ, ナデ	外面:暗赤褐2.5YR3/3 内面:にぶい黄褐10YR4/3	粗砂, 小石	
298	陶器(備前) 擂鉢	24.2		(6.2)	内外面:回転ナデ	内外面:灰黄褐10YR4/2	細～粗砂, 小石	
299	陶器(備前) 擂鉢	27.4		(5.8)	内外面:回転ナデ	外面:明赤褐2.5YR3/4 内面:にぶい赤褐5YR5/3	細～粗砂	
300	土師質土器 皿	7.6	6.0	1.5	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ヘラナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/4	微～細砂	底面:回転ヘラ削り
301	土師質土器 皿	8.6	6.8	1.6	内外面:回転ナデ	内外面:灰白2.5Y8/2	細砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
302	土師質土器 皿	8.6	7.2	0.9	内外面:回転ナデ	内外面:灰白10YR8/1	微砂, 細砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
303	土師質土器 皿	9.0	5.0	1.8	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, 指ナデ	内外面:褐灰7.5YR4/1	微砂, 細砂	底面:板目, ナデ
304	土師質土器 皿	11.0	6.6	2.0	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/4 内面:にぶい橙7.5YR7/4	微～細砂	底面:ナデ
305	土師質土器 皿		6.2	(1.1)	外面:回転ナデ, ヘラナデ 内面:回転ナデ	内外面:にぶい黄橙10YR7/3	微砂若干	底面:板目, ヘラナデ
306	土師質土器 皿		5.8	(1.2)	内外面:ナデ	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい橙7.5YR7/3	微砂若干	
307	土師質土器 皿		8.0	(1.9)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3 内面:浅黄橙10YR8/4	微～細砂	底面:静止ヘラ削り後ナデ
308	土師質土器 甕	19.6		(4.1)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ハケ 内面口縁部:粗いハケ後にナデ 体部:ヘラナデ	内外面:にぶい橙7.5YR6/4	細砂	
309	土師質土器 羽釜	(16.2)		(4.1)	外面口縁部:回転ナデ 体部:粗いハケ 内面:ハケ	外面:橙5YR7/6 内面:橙7.5YR7/6	微～細砂	
310	土師質土器 羽釜	21.5		(3.2)	外面:ヨコナデ 内面:粗いハケ, ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/4	粗砂, 小石	内面外面に煤付着
311	土師質土器 羽釜	(22.2)		(6.2)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧, ナデ 内面:ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:浅黄橙10YR8/3	微～細砂多量	外面:煤付着
312	土師質土器 羽釜			(5.5)	外面:摩滅 内面:粗いハケ	外面:赤橙10YR6/6 内面:にぶい橙7.5YR7/4	微～細砂若干	
313	土師質土器 足釜	(22.4)		(3.7)	外面:回転ナデ, ナデ 内面:板ナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:にぶい橙5YR6/4	微～粗砂多量	
314	土師質土器 足釜	25.6		(3.9)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ, 指頭圧 内面:ナデ, ハケ	外面:にぶい橙7.5YR6/4 内面:にぶい褐7.5YR5/3	微～粗砂	
315	土師質土器 足釜	29.9		(4.5)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ 内面:ヘラナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:橙7.5YR7/6	細～細礫多量	
316	土師質土器 足釜	30.0		(5.3)	外面口縁部:ヨコナデ 内面:ヘラナデ	内外面:橙2.5YR6/6	微～粗砂多量	
317	土師質土器 鍋	26.0		(5.8)	外面:指頭圧, ヘラナデ, ナデ 内面:ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/4	細～粗砂	
318	土師質土器 鍋	42.0		(6.6)	外面口縁部:ヨコナデ, 粗いハケ 体部:粗いハケ後にナデ 内面口縁部:粗いハケ, ヨコナデ 体部:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR7/3 内面:にぶい黄橙10YR7/2	微～粗砂多量	外面:煤付着
319	土師質土器 足釜				外面:ヘラ削り	外面:赤褐5YR5/4	微～細砂	

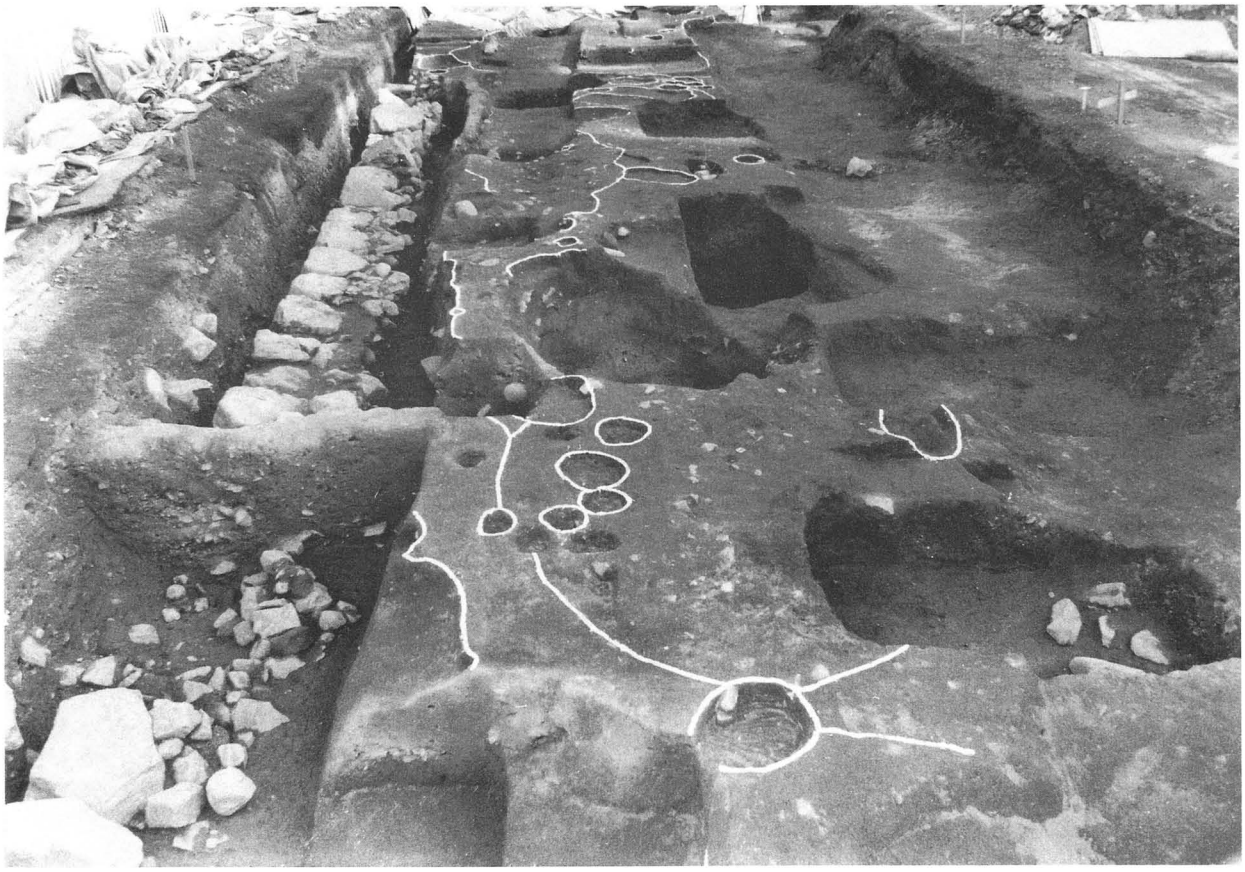
報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
320	土師質土器 足釜				外面:ヘラナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/3 内面:浅黄橙7.5YR8/6	細砂～細礫	
321	須恵器 杯	8.8		(2.2)	内外面:回転ナデ	内外面:灰白N7/0	微～細砂若干	
322	須恵器 杯	14.8		(3.3)	内外面:ナデ	外面:灰白2.5Y8/1 内面:灰白2.5Y7/1	微砂若干	口縁部:重ね焼き痕
323	須恵質土器 杯		8.5	(2.5)	内外面:回転ナデ	内外面:灰白7.5Y8/1	細砂～粗砂若干	底面:ナデ
324	瓦器 皿	9.0	3.8	2.2	外面口縁部:回転ナデ 体部:指頭圧 内面口縁部:回転ナデ 体部:ナデ後にヘラミガキ	外面:灰N5/0 内面:灰N4/0	微砂	底面:指頭圧
325	瓦器 椀	13.6		(3.3)	外面:指頭圧, ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	内外面:灰N4/0	微砂若干	
326	黒色土器 椀	16.2		(3.6)	外面口縁端部:回転ナデ 体部:指頭圧, ヘラミガキ 内面:ナデ, ヘラミガキ	内外面:灰N5/0	微砂	黒色土器B類
327	青磁 碗			(3.7)	内外面:施釉	釉:オリーブ灰2.5GY6/1 素地:灰N6/0	精選	
328	青磁 碗			(1.7)	内外面:施釉	釉:緑灰7.5GY6/1 素地:灰白N8/	精選	
329	白磁 碗	17.0		(3.0)	内外面:施釉	釉:灰白5Y7/1 素地:灰白7.5Y7/1	精選	
330	白磁 碗			(2.8)	内外面:施釉	釉:灰白5Y7/2 素地:灰白7.5Y7/1	精選	
331	弥生土器 壺			(4.6)	外面:ナデ 内面:摩滅	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:にぶい黄橙10YR6/3	石英・長石・金雲母	
332	弥生土器 高杯	24.0		(3.4)	内外面:ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:明赤褐5YR5/6	石英・長石・雲母	
333	土錘	長さ 8.2	幅 5.3	厚さ 5.5	外面:ナデ	外面:浅黄橙10YR8/3	粗砂	重さ:206.6g
334	土錘	長さ 8.5	幅 6.8	厚さ 5.3	外面:ナデ	外面:にぶい橙5YR6/4	細礫	重さ:304.3
335	土錘	長さ 8.9	幅 7.0	厚さ 4.9	外面:ナデ, 指頭圧	外面:にぶい橙7.5YR7/4	細礫	重さ:273.5g
336	土錘	長さ 8.8	幅 6.8	厚さ 6.5	外面:ナデ, 指頭圧	外面:橙5YR6/6	細礫	重さ:252.4g
337	イイダコ壺			(4.4)	外面:ナデ, 指頭圧 内面:指頭圧	内外面:にぶい黄橙10YR6/4	細礫	
338	瓦製円盤	直径 7.0		厚さ 1.9		内外面:灰N4/0	細砂	
339	丸瓦	長さ (10.0)	幅 (5.9)	厚さ 2.0	凸面:ヘラナデ 凹面:布目	凹凸面:明褐灰5YR7/2	微～細砂若干	
340	丸瓦	長さ (15.7)	幅 (11.7)	厚さ 2.8	凸面:ヘラナデ 凹面:布目, コビキA	凸面:にぶい橙7.5YR7/4 凹面:灰黄2.5Y7/2	細～粗砂若干	
341	軒平瓦				凹面:ナデ, 瓦当上端を面取り 凸面:横方向のナデ, 瓦当下端を面取り	凹凸面:灰N4/0	粗砂	重波文的波状文
342	骨	長さ (10.5)	直径 3.5					
343	骨	長さ (6.4)	幅 (3.5)					
344	砥石	長さ (4.2)	幅 (3.6)	厚さ 1.2				石灰岩製
345	磁器 碗		3.6	(3.4)	内外面:施釉	釉:透明 素地:灰白N8/	精選	模様:青
346	磁器 碗		4.2	(2.2)	内外面:施釉	釉:透明 素地:灰白10YR7/1	精選	模様:黒色, 水色, 朱色
347	陶器(備前) 擂鉢	30.6	14.4	11.8	外面口縁部:回転ナデ 体部:回転ナデ, 指頭圧, 指ナデ 内面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐2.5YR5/4 内面:にぶい橙2.5YR6/4	微～粗砂, 小石	
348	土師質土器 皿(灯明皿)	9.2	5.4	(1.8)	内外面:ナデ	外面:にぶい橙5YR7/4 内面:橙5YR7/6	微～細砂	口縁端部:煤付着
349	土師質土器 皿(灯明皿)	9.4	6.4	1.4	外面:ナデ 内面:回転ナデ	内外面:灰白7.5YR8/2	微～細砂	口縁部:煤付着
350	土師質土器 杯	9.2	4.2	2.3	外面口縁部:回転ナデ 体部:回転ナデ後にナデ 内面:回転ナデ後にナデ	内外面:橙5YR7/6	微～細砂	底面:回転糸切り
351	土師質土器 杯	14.0	9.4	(3.0)	内外面:ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	微～細砂	
352	瓦器 椀		5.4	(1.2)	外面高台部:回転ナデ 内面:ヘラミガキ	内外面:青黒5B2/1	微砂若干	
353	青磁 椀		6.4	(1.4)	内外面:施釉	釉:オリーブ灰2.5GY6/1 素地:灰白N8/0	微砂若干	
354	土師質土器 足釜	26.2		(6.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧 内面:ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	細～粗砂, 小石多量	
355	土師質土器 足鍋	31.5		(5.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧, ナデ 内面:ナデ	外面:橙2.5YR6/6 内面:橙5YR6/6	細砂～細礫	体部外面:煤付着
356	土師質土器 足釜	31.4		(4.5)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧 内面:ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:明赤褐5YR5/6	細砂～細礫多量	
357	土師質土器 甕	23.4		(4.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ 内面口縁部:粗いハケ, ナデ 体部:ハケ	外面:にぶい赤褐5YR5/3 内面:にぶい橙7.5YR6/4	微～細砂多量	
358	土師質土器 甕		5.8	(3.0)	内外面:摩滅	外面:にぶい褐7.5YR6/3 内面:にぶい黄橙10YR6/3	微～粗砂, 小石多量	
359	土師質土器 擂鉢		14.8	(4.9)	外面:指頭圧, ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	細～粗砂, 小石多量	
360	須恵質土器 鉢	長さ 1.7	幅 5.1	厚さ 1.0		内外面:灰10Y5/1	微砂若干	断面を磨く
361	五徳	28.0	23.8	5.2	外面:回転ナデ, ハケ状工具のナデ 内面:粗いハケ	外面:にぶい赤褐5YR5/4 内面:にぶい赤褐5YR5/3	微～細砂, 細礫	
362	軒丸瓦				凸面:ヘラナデ 凹面:ナデ	凹凸面:黄灰2.5Y6/1	微砂若干	巴文
363	軒丸瓦	直径 12.7			瓦当裏面:ナデ	凸面:にぶい黄橙10YR7/2 凹面:灰白2.5Y8/2	粗砂～細礫若干	巴文

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
364	軒丸瓦				凸面:ヘラナデ 凹面:摩滅	凹凸面:灰白5Y7/1	微砂若干	巴文
365	軒平瓦				凹凸面:摩滅	凹凸面:灰N5/0	微砂若干	唐草文
366	軒平瓦				凸面:横方向のヘラナデ 凹面:摩滅	凹凸面:灰N5/0	微砂若干	唐草文
367	軒平瓦					凹凸面:暗灰N3/0	微砂若干	唐草文
368	軒平瓦				凸面:ヘラナデ 凹面:摩滅	凹凸面:灰N5/0	微～細砂	唐草文
369	軒平瓦				凸面:ナデ 凹面:横方向のヘラナデ	凹凸面:灰N6/0	微砂若干	唐草文
370	砥石	長さ (5.2)	幅 (5.8)	厚さ (4.6)				砂岩
371	磁器(肥前系) 皿		(6.7)	(3.4)	内外面:施釉	釉:オリーブ灰10Y5/2 断面:灰白N7/0	精選	見込み:蛇ノ目釉はぎ, 融着痕
372	陶器(肥前系) 碗	14.8		(1.7)	内外面:施釉	釉:にぶい黄橙10YR7/2 素地:明褐灰5YR7/2	精選	
373	陶器(肥前系) 皿		4.6	(2.1)	内外面:施釉	釉:灰白5YR8/1 素地:にぶい橙5YR6/4	精選	見込み部:砂目3箇所 畳付部:砂目3箇所
374	陶器(肥前系) 皿		10.0	(2.6)	外面:露胎 内面:施釉	釉:灰オリーブ5Y6/2 素地:明褐灰5YR7/2	精選	
375	陶器 鉢		7.2	(2.8)	外面:施釉(体部下半露胎) 内面:施釉	釉:灰白5Y8/1 素地:灰白2.5Y8/1	精選	底面:回転ヘラ切り
376	陶器(肥前系) 鉢		3.8	(2.3)	外面:施釉(体部下半露胎) 内面:施釉	釉:黒褐10YR3/2 素地:灰赤2.5YR4/2	細～微砂多量	
377	陶器(肥前系) 鉢		4.3	(2.5)	外面:露胎 内面:施釉	釉:透明釉 素地:灰褐5YR6/2	精選	見込み部:融着痕
378	陶器(備前) 擂鉢	21.8		(4.9)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/6 内面:橙7.5YR6/6	微～細砂	
379	陶器(備前) 擂鉢	31.8		(7.6)	内外面:ナデ	内外面:にぶい赤褐2.5YR4/3	細～細礫	
380	陶器(備前) 甕	25.0		(10.0)	外面:ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラナデ	外面:黒褐7.5YR3/2 内面:灰黄褐10YR4/2	細～細礫	
381	陶器(備前) 甕	31.0		(13.2)	内外面口縁部:ヨコナデ 体部:板ナデ	内外面:褐7.5YR4/3	微～粗砂, 小石	
382	土師質土器 足釜	15.0		(5.4)	外面口縁部:回転ナデ 体部:ナデ, 指頭圧, 格子目タタキ 内面口縁部:回転ナデ 体部:指ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	粗砂～細礫	外面:煤付着
383	土師質土器 足釜	20.5		(5.9)	外面口縁部:回転ナデ 体部:ナデ, 指頭圧, 格子目タタキ 内面:ナデ	内外面:明赤褐7.5YR7/2	細～粗砂	外面:煤付着
384	瓦質土器 甕		13.4	(3.2)	内外面:回転ナデ	外面:灰白N7/0 内面:灰N6/0	細砂	底面:ナデ
385	土師質土器 鍋	43.2		(6.3)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ナデ 内面口縁部:ハケ後にナデ 体部:粗いハケ	内外面:橙5YR6/6	粗砂～細礫多量	体部外面:煤付着
386	土師質土器 甕	38.3		(4.3)	外面:指頭圧後にナデ 内面:ハケ後にナデ	内外面:橙7.5YR7/6	細～粗砂	
387	土師質土器 甕	22.0		(7.6)	外面:指頭圧, ナデ 内面口縁部:ハケ 体部:板ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR6/4	粗砂～細礫	
388	土師質土器 足鍋	長さ (13.4)			外面:ヘラナデ	外面:にぶい褐7.5YR5/3	微～細砂	
389	土師器 杯		5.2	(0.9)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	微砂	
390	土師器 杯		6.1	(1.4)	内外面:回転ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白10YR7/1	微～細砂	底面:板目後に回転ナデ
391	須恵器 皿	8.6	6.2	1.4	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:灰白2.5YR8/1	微～粗砂	底面:回転ヘラ切り後に板目
392	須恵器 甕	16.8		(3.3)	内外面:回転ナデ	内外面:灰N4/0	粗砂, 微砂	
393	須恵器 甕	35.1		(10.6)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:格子目タタキ 内面:ヘラナデ	内外面:灰N6/0	微～粗砂, 小石	
394	軒丸瓦				凸面:ヘラナデ 凹面:ナデ	凹凸面:灰N4/0	細砂	巴文
395	軒丸瓦				凸面:ヘラナデ 凹面:ナデ	凹凸面:灰N6/0	細砂	巴文
396	軒平瓦				凸面:摩滅 凹面:横方向のナデ	凹凸面:灰N6/0	細砂	唐草文
397	軒平瓦		幅 22.2		凹面:摩滅 凸面:ナデ	凹凸面:灰N4/0	微～粗砂	唐草文
398	軒平瓦				凸面:ナデ 凹面:ナデ	凹凸面:暗灰N3/0	微砂若干	珠文
399	軒平瓦				凸面:ナデ 凹面:布目, コビキA, 瓦当端を面取	凸面:黄灰2.5Y6/1 凹面:灰N5/0	細砂	梵字
400	青銅製飾り	直径 2.5		1.1				内側:ガラス
401	鉄板	長さ (4.1)	幅 2.0	厚さ 0.2				
402	磁器(瀬戸・美濃系)　碗	11.4		(5.0)	内外面:施釉	釉:透明 素地:灰白N8/0	精選	模様:呉須
403	陶器 甕		14.6	(3.5)	外面:施釉(底部付近露胎) 内面:施釉	釉:にぶい赤褐5YR4/3 素地:にぶい黄橙10YR7/4	微砂	
404	陶器(備前) 擂鉢			(4.5)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐5YR5/3 内面:灰褐5YR5/2	微～細砂	外面:自然釉付着
405	陶器(備前) 甕		16.2	(10.0)	内外面:回転ナデ	外面:にぶい赤褐5YR4/3 内面:にぶい赤褐2.5YR5/3	細～粗砂多量	高台に抉りあり
406	土師質土器 皿	8.4	6.2	(1.2)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/4	微～細砂若干	底面:ナデ
407	土師質土器 皿	8.2	6.5	1.1	内外面:ナデ	外面:淡黄2.5Y8/3 内面:灰白2.5Y8/2	微～細砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
408	土師質土器 皿	12.0		(2.1)	外面:回転ナデ, ヘラナデ 内面:回転ナデ	外面:灰褐5YR6/2 内面:にぶい黄褐10YR7/3	微砂若干	

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
409	土師質土器 杯	11.4		(4.0)	外面口縁部:回転ナデ 体部:指押え, ヘラミガキ 内面口縁部:回転ナデ 体部:ヘラナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	微砂若干	
410	瓦器 皿	3.6		(1.7)	外面口縁部:回転ナデ 体部:指頭圧, ヘラナデ 内面:回転ナデ, ヘラミガキ	外面:灰N5/0 内面:灰N4/0	微砂若干	
411	瓦器 椀	13.4		(2.6)	外面口縁部:回転ナデ 体部:指頭圧, ヘラミガキ 内面:ヘラミガキ	内外面:N4/0	微砂若干	
412	イイダコ壺	4.6		(3.5)	外面:摩滅 内面:ナデ	外面:明赤褐5YR5/6 内面:明赤褐2.5YR5/6	粗砂多量	
413	弥生土器 高杯			(5.9)	外面:摩滅 内面:摩滅(ヘラナデ)	内外面:明赤褐5YR5/6	石英・長石・角閃石 多量	
414	軟質施釉陶器 皿			3.0	内外面:施釉	釉:緑 素地:浅黄橙7.5YR8/4	細～粗砂	
415	土師器 杯		6.2	(1.4)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	微砂	底面:回転ヘラ切り後に静止ヘラナデ
416	土師器 杯	9.0	4.6	(1.9)	内外面:回転ナデ	外面:橙5YR6/6 内面:にぶい橙5YR6/4	微砂若干	底面:回転ヘラ切り
417	陶器(備前) 杯	9.8	6.8	2.5	外面:回転ナデ, ナデ 内面:回転ナデ	釉:にぶい赤褐2.5YR5/3 素地:褐7.5YR4/6	微砂	底面:静止糸切り
418	陶器(肥前系) 段重	5.3	2.9	(2.9)	内外面:回転ナデ	釉:灰黄褐10YR5/2 素地:にぶい褐7.5YR6/3	精選	
419	陶器(肥前系) 碗	14.0		(2.0)	外面:回転ナデ 内面:回転ナデ, ナデ	内外面:赤褐10YR4/4	微砂	
420	磁器(肥前系) 皿		4.8	(1.5)	内外面:施釉	釉:透明 素地:灰白N8/0	精選	呉須:青藍色
421	土師質土器 皿(灯明皿)	7.6	4.8	1.2	内外面:回転ナデ	内外面:橙7.5YR7/6	細砂	口縁部:煤付着 底面:回転ヘラ切り
422	土師質土器 杯	12.8		(2.5)	内外面:回転ナデ	外面:橙5YR7/6 内面:にぶい橙5YR7/4	微砂	
423	土師質土器 椀		6.0	(2.5)	外面体部:未調整 高台部:回転ナデ 内面:ヘラナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	細砂	
424	須恵器 杯		6.3	(1.7)	内外面:回転ナデ	内外面:灰白5Y7/1	細砂若干	
425	土師質土器 椀		5.6	(1.9)	外面体部:ナデ 高台部:回転ナデ 内面:ナデ, ヘラミガキ	外面:淡黄2.5Y8/3 内面:灰黄2.5Y7/2	微～細砂多量	
426	土師質土器 椀		6.5	(1.9)	外面体部:ナデ 高台部:回転ナデ 内面:ナデ	内外面:灰7.5Y6/1	微砂	
427	道具瓦	長さ (5.3)	幅 (6.1)	厚さ 1.5		凹凸面:黒2.5Y2/1	細～粗砂	凸面に刻印
428	陶器(備前) 杯	10.0	6.6	2.6	外面:回転ナデ, ナデ 内面:回転ナデ, ナデ, 指ナデ	内外面:にぶい赤褐2.5YR5/4	微砂若干	底面:回転糸切り
429	土師質土器 椀	14.2		(4.4)	外面口縁部:回転ナデ 体部:ナデ, ヘラミガキ 内面:ナデ, ヘラミガキ	内外面:淡黄2.5Y8/3	微砂若干	
430	須恵器 高杯		3.8	(3.4)	内外面:回転ナデ	内外面:オリーブ黒5Y3/1	密	
431	瓦製円盤		直径 5.4	厚さ 2.0		内外面:浅黄橙10YR8/3	細～粗砂小石	
432	軒平瓦				凸面:横のヘラナデ, 斜めの板ナデ 凹面:ヘラナデ	内外面:灰N5/0	微砂若干	唐草文
433	土師質土器 皿	11.0		(1.9)	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR7/6	微砂	
434	土師質土器 皿	8.2	5.5	1.5	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	細砂	底面:板目
435	陶器(肥前系) 皿	21.4		(2.1)	内外面:施釉	釉:黄褐2.5Y5/3 素地:灰黄2.5Y6/2	精選	
436	土師質土器 鍋	31.4		(4.0)	外面口縁端部:ヨコナデ 口縁部:指頭圧 内面:ナデ	内外面:にぶい褐7.5YR5/3	細～粗砂多量	
437	陶器 皿			(3.1)	内外面:施釉	釉:灰5Y5/1 素地:褐灰10YR6/1	細砂	
438	須恵質土器 甕			(6.8)	外面:摩滅, 剥離 内面口縁部:ナデ, ヘラナデ 体部:板ナデ	外面:灰黄2.5Y7/2 内面:にぶい黄橙10YR7/2	微～細砂若干	
439	硯	長さ 9.0	幅 4.2					粘板岩
440	土師質土器 皿	8.5	6.0	1.6	内外面:摩滅	内外面:にぶい黄橙10YR7/4	微砂	底面:回転糸切り
441	土師質土器 皿	11.2	8.2	(1.8)	内外面:摩滅	内外面:にぶい黄橙10YR7/4	微砂若干	底面:糸切り
442	陶器(肥前系) 碗		4.2	(5.0)	外面:回転削り, 施釉(体部下半露胎) 内面:施釉	釉:にぶい橙7.5YR7/4 素地:灰白10Y7/1	密	体部内面:直線文
443	瓦製円盤		直径 5.7	厚さ 1.6		内外面:灰白2.5Y8/1		重さ:59.8g
444	土師質土器 皿	7.3		(1.9)	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR7/6	微～細砂	
445	須恵器 杯	19.8		(3.2)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	内外面:灰白5Y7/1	微砂若干	
446	須恵質土器 椀		5.9	(2.6)	外面:回転ナデ 内面:ハケ	内外面:灰N4/0	微砂	内外面:黒色
447	土師質土器 皿	9.5		(1.5)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	微砂, 細砂	
448	土師質土器 杯		5.8	(0.8)	内外面:ナデ	内外面:橙2.5YR6/6	細砂	底面:静止糸切り
449	土師質土器 甕	32.2		(10.9)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:板ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:細いハケ	外面:にぶい橙5YR6/4 内面:橙7.5YR6/6	細砂～細礫	
450	土師質土器 杯	11.7		(1.8)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	微砂, 小石	
451	土師質土器 杯	11.5		(2.1)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/3	微～細砂	

報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
452	土師器 杯		6.8	(1.4)	内外面:回転ナデ	内外面:浅黄橙7.5YR8/3	微～粗砂	底面:回転ヘラ切り
453	土錘	長さ 4.8	直径 1.5			外面:にぶい黄橙10YR6/4	微～細砂多量	重さ:12.0g
454	磁器(瀬戸・美濃系)　碗		3.8	(1.5)	内外面:施釉	釉:透明 素地:灰白5Y8/1	精選	
455	磁器(瀬戸・美濃系)　碗			(2.7)	内外面:施釉	釉:透明 素地:灰白5Y8/1	精選	
456	陶器(備前) 壺			(3.2)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	外面:褐灰10YR5/1 内面:にぶい橙5YR6/4	微～細砂	把手の痕跡
457	陶器(備前) 擂鉢			(5.6)	内外面:ナデ	外面:灰赤2.5YR4/2 内面:灰N5/0	細～粗砂	
458	白磁 碗			(1.9)	内外面:施釉	釉:灰白5Y7/1 素地:灰白N7/0	微砂若干	
459	土師質土器 杯	9.0		(3.3)	内外面:ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/4	微砂若干	
460	陶器(肥前系) 皿	11.6	4.4	3.7	外面:回転ナデ, 施釉(体部下半露胎) 内面:施釉	釉:灰白10Y7/1 素地:にぶい橙7.5YR7/3	精選	見込み:胎土目
461	土師質土器 皿	7.6	6.4	1.4	内外面:回転ナデ	外面:にぶい橙10YR7/3 内面:灰白7.5YR8/2	細砂	底面:回転ヘラ切り
462	土師質土器 杯	10.2		(2.4)	内外面:回転ナデ	外面:淡赤橙2.5YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/3	微砂若干	
463	土師質土器 杯	11.4	8.0	(2.7)	内外面:回転ナデ	内外面:淡橙5YR8/4	微砂, 細砂	底面:ナデ
464	土師質土器 杯	12.0		(1.9)	内外面:ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/3	微砂	
465	弥生土器 甕			(6.3)	外面:平行タタキ 内面:ナデ	内外面:にぶい褐7.5YR5/4	石英・長石・角閃石多量	
466	軒丸瓦				瓦当裏面:ヘラナデ, 指ナデ	凹凸面:黒N2/0	粗砂	巴文, 接合痕
467	軒丸瓦				瓦当裏面:ヘラナデ	凹凸面:灰N5/0	粗砂	巴文, 接合痕
468	軒丸瓦				瓦当裏面:板ナデ, 指ナデ	凹凸面:暗青灰5B4/1	粗砂	巴文, 接合痕
469	軒丸瓦				凸面:横方向のナデ 凹面:布目, コビキ接合痕 瓦当裏面:ナデ	凸面:淡黄2.5Y8/3 凹面:灰黄2.5Y6/2	粗砂	巴文
470	軒平瓦		幅 26.6		凹面:板ナデ, ナデ 凸面:ナデ 瓦当裏ナデ	凸面:褐灰10YR6/1 凹面:灰黄褐10YR6/2	粗砂	唐草文
471	軒平瓦		幅 28.5		凹面:ナデ 凸面:板ナデ, 瓦当接合部を指ナデ	凸面:にぶい黄橙10YR7/2 凹面:灰白2.5Y7/1	粗砂	唐草文
472	軒平瓦				凸面:ナデ 凹面:ヘラナデ	凹凸面:灰7.5Y6/1	粗砂	唐草文
473	軒平瓦				凸面:瓦当接合部を指ナデ 凹面:板ナデ	凹凸面:灰N4/0	粗砂	唐草文
474	軒丸瓦				凸面:ヘラナデ 瓦当裏面:ナデ	凹凸面:灰5Y5/1	粗砂	唐草文
475	平瓦	長さ 31.7	幅 24.7		凸面:ナデ 凹面:ナデ, 面取, 工具痕	外面:灰N4/0 内面:灰N4/0	粗砂	
476	陶器(備前) 甕		56.0	(7.8)	外面:細かいハケ, 粗いハケ 内面:ハケ, ナデ	外面:にぶい赤褐10R6/4 内面:灰赤2.5YR5/2	細～粗砂, 小石	
477	土師質土器 火鉢			(5.7)	外面:ヘラナデ 内面:ハケ	外面:橙7.5YR7/6 内面:浅黄橙10YR7/6	微～細砂若干	
478	磁器(肥前系) 天目碗	12.2		(5.9)	外面:回転ナデ, 施釉(体部下半露胎) 内面:回転ナデ, 施釉	釉:黒褐7.5YR2/2 素地:浅黄橙10YR8/3	精選	
479	陶器(肥前系) 皿	13.2	4.8	3.1	外面:回転ナデ, 施釉(体部下半露胎) 内面:回転ナデ, 施釉	釉:灰オリーブ5Y6/2 素地:にぶい黄橙10YR6/3	精選	見込み:胎土目
480	陶器 皿		4.0	(2.4)	内外面:回転ナデ, 施釉	釉:にぶい橙5YR6/3 素地:橙7.5YR7/6	精選	
481	陶器(肥前系) 碗		4.5	(2.4)	外面:回転ナデ, 施釉(体部下半露胎) 内面:回転ナデ, 施釉	釉:透明釉 素地:にぶい橙7.5YR7/4	精選	見込み:胎土目
482	陶器 鉢			(4.0)	外面:施釉, 底面露胎 内面:施釉, 貫入	釉:透明釉 素地:灰白10YR7/1	精選	二次焼成 平面形:方形
483	陶器(肥前系) 鉢		11.4	(6.4)	外面:回転ナデ, 露胎 内面:施釉	釉:褐7.5Y4/3 素地:灰白2.5Y7/1	精選	
484	陶器 皿	37.0		(2.2)	内外面:施釉	釉:淡黄2.5Y8/3 素地:黄灰2.5Y6/1	精選	
485	土師質土器 皿	8.0	5.8	1.3	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	細砂	底面:回転ヘラ切り
486	土師質土器 皿	9.0	7.4	(1.7)	内外面:回転ナデ	外面:灰白10YR8/2 内面:橙7.5YR7/6	細砂	底面:板目後にナデ
487	土師質土器 皿	11.4		(1.8)	内外面:回転ナデ	外面:橙5YR7/6 内面:浅黄橙10YR8/4	微砂	
488	土師質土器 杯	11.2		(2.9)	内外面:回転ナデ	外面:明褐灰7.5YR7/2 内面:褐灰7.5YR6/1	微砂	
489	土師質土器 杯	11.0	7.2	(2.5)	内外面:回転ナデ	内外面:にぶい橙7.5YR7/4	細～粗砂	
490	土師質土器 杯	12.0		(3.7)	内外面:回転ナデ	外面:灰白5Y8/1 内面:灰N8/0	細砂	底面:静止ヘラケズリ
491	土師質土器 杯(灯明皿)	13.6	8.0	(3.5)	内外面:回転ナデ	内外面:灰白5Y8/2	微砂	口縁部:煤付着 底面:回転ヘラ切り後にナデ
492	土師質土器 杯		5.0	(1.7)	外面:回転ナデ 内面:ナデ	内外面:浅黄橙10YR8/3	粗砂	底面:回転ヘラ切り
493	瓦器 皿	7.8		(2.2)	外面口縁部:回転ナデ 体部:指頭圧 内面:ナデ後にヘラミガキ	内外面:灰N6/0	微砂	
494	瓦器 椀	14.8		(3.9)	外面口縁部:回転ナデ後にヘラミガキ 体部:指頭圧後にヘラミガキ 内面:ナデ後にヘラミガキ	内外面:灰N4/0	微砂	
495	陶器(備前) 擂鉢	30.0		(5.9)	内外面:回転ナデ	外面:灰褐5YR5/2 内面:暗赤褐5YR3/3	細砂	
496	土師質土器 鍋	32.0		(6.0)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧 内面口縁部:ヨコナデ 体部:板ナデ	外面:灰褐7.5YR6/2 内面:にぶい橙5YR7/4	細礫	
497	土師質土器 鍋	40.2		(6.4)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:指頭圧 内面:ハケ	内外面:にぶい橙7.5YR7/3	細礫	

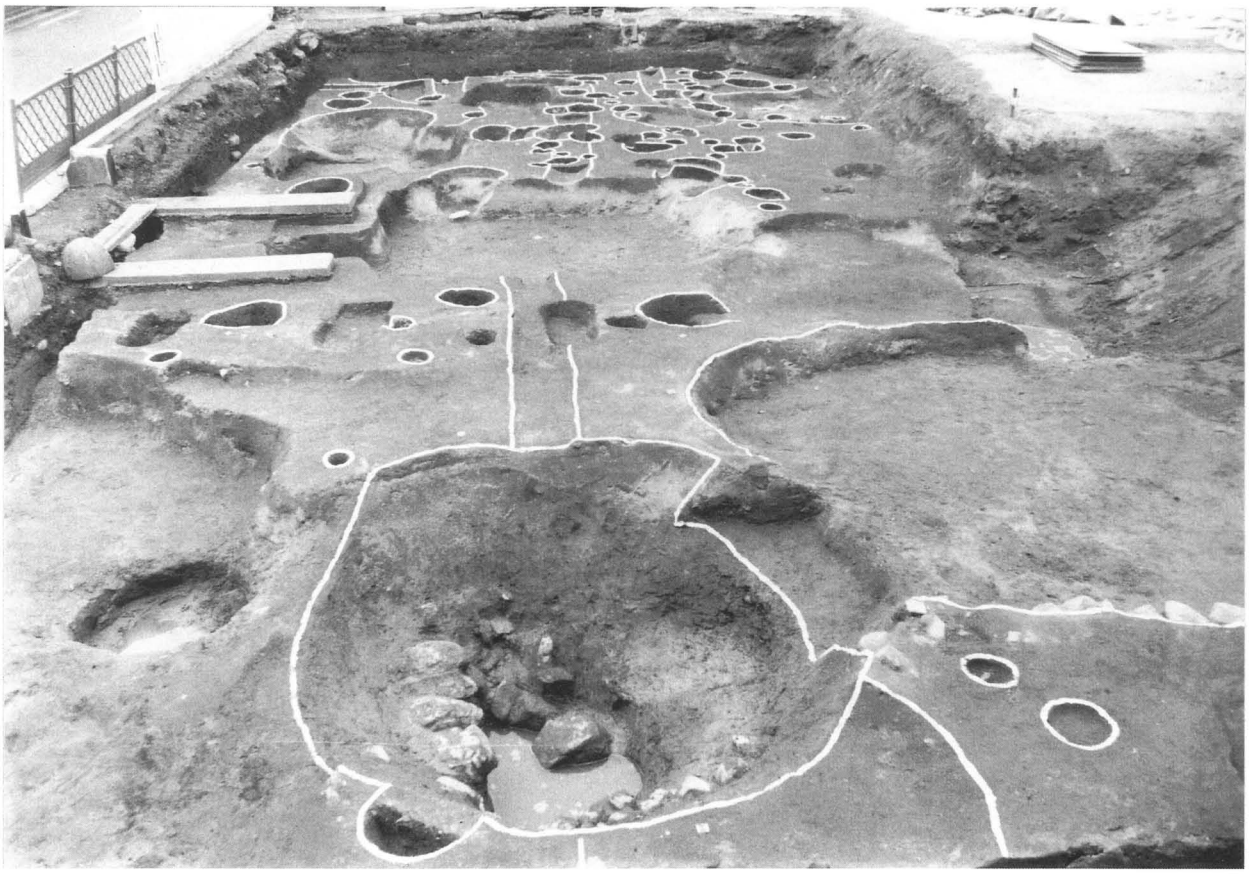
報告番	器種	法量(cm)			調整	色調	胎土	備考
		口径	底径	器高				
498	須恵器 捏ね鉢	32.0		(5.4)	内外面:回転ナデ	内外面:灰白5Y7/1	細砂	
499	青磁 碗		7.0」	(3.0)	外面:回転ナデ, 露胎 内面:回転ナデ, 施釉	釉:灰白5Y7/2 素地:灰白2.5Y7/1	精選	
500	弥生土器 壺	11.6		(4.3)	外面口縁部:ヨコナデ 頸部:ナデ 内面口縁部:ヨコナデ 頸部:指頭圧後にヘラ削り	外面:明褐7.5YR5/6 内面:にぶい褐7.5YR5/4	石英・長石・雲母・角閃石	
501	弥生土器 甕	22.2		(1.7)	内外面:摩滅	外面:にぶい橙7.5YR7/4 内面:にぶい黄橙10YR7/4	石英・長石・雲母・角閃石	
502	弥生土器 高杯		16.7	(4.2)	外面裾部:ヨコナデ 脚部:ナデ 内面:ヘラ削り	外面:にぶい褐7.5YR5/4 内面:褐7/5YR4/6	石英・長石・雲母・角閃石	
503	弥生土器 高杯		20.0	(2.3)	外面:ナデ 内面:ヘラ削り	内外面:明褐7.5YR5/6	石英・長石・雲母・角閃石	
504	軒平瓦				凹凸面:板ナデ 瓦当裏:横方向のナデ	凹凸面:灰N5/0	粗砂	唐草文
505	土錘	長さ 8.4	幅 5.1	厚さ 5.7	外面:ナデ	外面:橙5YR7/6	粗砂	重さ:225.7g
506	土錘	長さ 2.7	直径 2.6		外面:ナデ	外面:にぶい黄橙10YR6/3	粗砂	重さ:12.7g
507	天禧通宝		直径 2.5	厚さ 0.2				
508	永樂通宝		直径 2.4	厚さ 0.2				
509	鉄釘	長さ (4.2)	幅 0.4	厚さ 0.2				
510	土師質土器 皿	7.0		(1.6)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙7.5YR8/6 内面:浅黄橙7.5YR8/4	微砂	
511	土師質土器 皿	8.8	7.4	1.2	内外面:回転ナデ	外面:橙5YR7/6 内面:浅黄橙7.5YR8/4	細砂	底面:回転ヘラ切り後にナデ
512	土師質土器 皿	8.4	4.2	1.5	内外面:回転ナデ	内外面:橙5YR6/6	微砂	底面:回転糸切り
513	土師質土器 杯	16.0		(2.4)	内外面:回転ナデ	外面:浅黄橙10Y8/3 内面:灰白10YR8/2	微砂	
514	土師質土器 杯		4.5	(0.9)	内外面:回転ナデ	内外面:橙2.5YR6/6	微砂	底面:回転ヘラ切り
515	磁器(瀬戸・美濃)仏飯器	5.1		(3.1)	内外面:回転ナデ	釉:灰白10Y8/2 素地:灰白N8/0	精選	
516	磁器 碗		3.0	(1.2)	外面:回転ナデ, 露胎 内面:貫入	釉:灰白7.5Y8/1 素地:にぶい黄橙10YR7/2	精選	
517	青磁 碗		5.2	(3.5)	外面:施釉(畳付露胎) 内面:施釉	釉:明緑灰10GY7/1 素地:明緑灰7.5GY8/1	精選	
518	陶器(備前) 擂鉢			(7.9)	内外面:回転ナデ	外面:灰赤10R4/2 内面:灰赤2.5YR5/2	粗砂	
519	陶器(備前) 擂鉢	29.6		(5.0)	内外面:回転ナデ	外面:暗赤灰2.5YR3/1 内面:褐灰7.5YR4/1	粗砂	
520	瓦質土器 擂鉢	32.4		(4.7)	外面口縁部:ヨコナデ 体胴部:指頭圧 内面:ハケ	外面:灰白2.5Y/1 内面:灰N6/0	粗砂	
521	イイダコ壺			(3.6)	内外面:ナデ, 指頭圧	内外面:橙5YR6/6	粗砂	
522	土錘	長さ 8.7	幅 6.9	厚さ 6.3	外面:ナデ, 指頭圧	外面:灰白10YR8/2	粗砂	重さ:281.4g
523	土錘	長さ 9.4	幅 6.3	厚さ 5.8	内外面:ナデ	外面:橙5YR6/6	粗砂, 細礫	重さ:266.9g
524	軒丸瓦				瓦当裏面:ナデ	凹凸面:灰N4/0	粗砂	巴文
525	軒平瓦				凹凸面:ナデ	内外面:灰N4/0	粗砂	重波文的波状文
526	軒平瓦				凹面:コビキA, 瓦当端を面取	凸面:褐灰10YR6/1 凹面:灰N5/0	粗砂	梵字
527	土師質土器 甕	14.2		(9.6)	外面口縁部:ヨコナデ 体部:ヘラナデ 内面口縁部:ヨコナデ 体部:指ナデ, ヘラナデ	内外面:淡黄2.5Y8/4	粗砂	内面:輪積み痕2箇所
528	磁器(肥前系) 猪口			(2.9)	外面:施釉 内面:露胎	釉:灰白5GY8/1 素地:灰白N8/0	精良	絵付釉:呉須
529	軒丸瓦				瓦当裏面:ナデ, 瓦当辺に沿ってナデ	凹凸面:暗灰N3/0	粗砂	
530	弥生土器 壺			(2.0)	内外面:摩滅	外面:橙5YR6/6 内面:橙2.5YR6/6	微砂～細砂, 石英・長石	
531	弥生土器 甕	13.2		(0.9)	内外面:ヨコナデ	内外面:赤褐5YR4/6	微～細砂, 石英・長石	
532	弥生土器 甕			(3.3)	内外面:摩滅	内外面:灰黄褐10YR5/2	微～細砂, 石英・長石多量	
533	磁器(瀬戸・美濃系) 蓋			(2.1)	内外面:施釉	釉:透明 素地:灰白10YR7/1	精選	



１　第２遺構面完掘状況（東から）

２　第２遺構面完掘状況（西から）

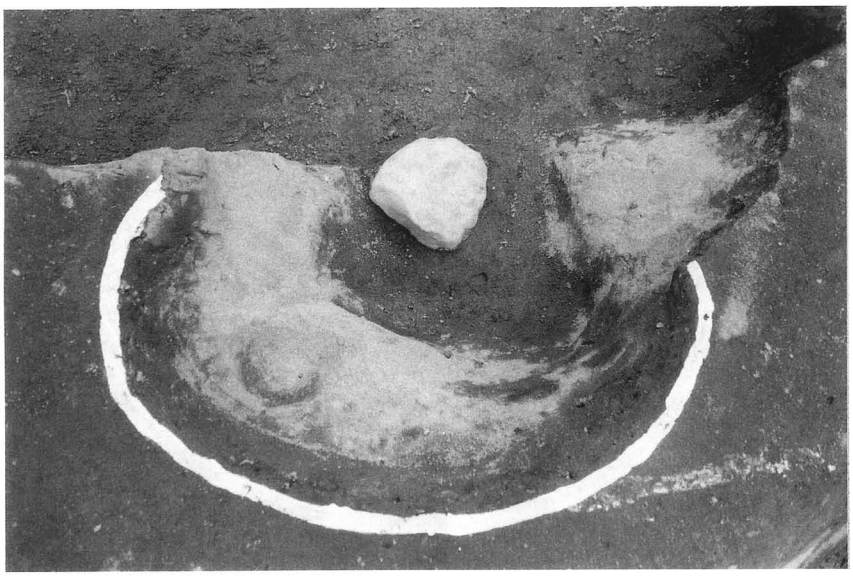
図版２



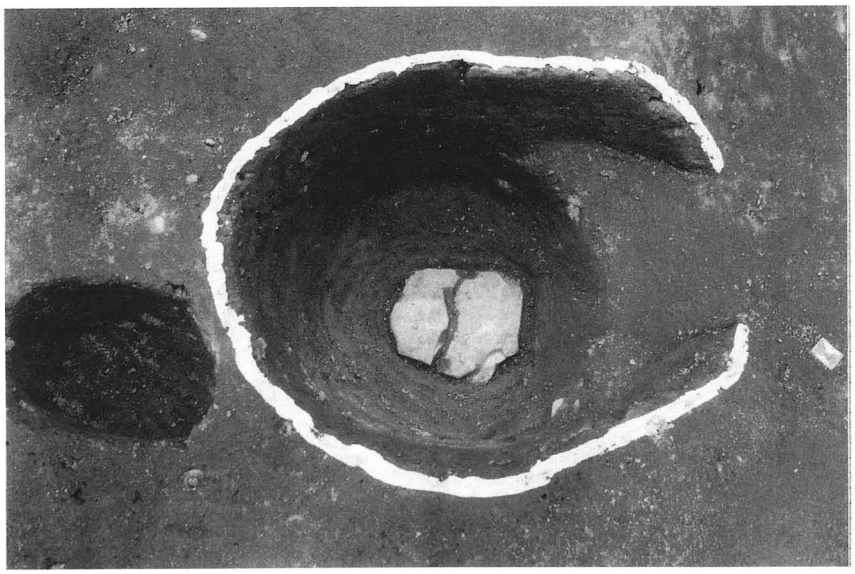
１　第２遺構面完掘状況（南から）

２　第２遺構面完掘状況（北から）

1　ＳＢ 1201 完掘状況（西から）



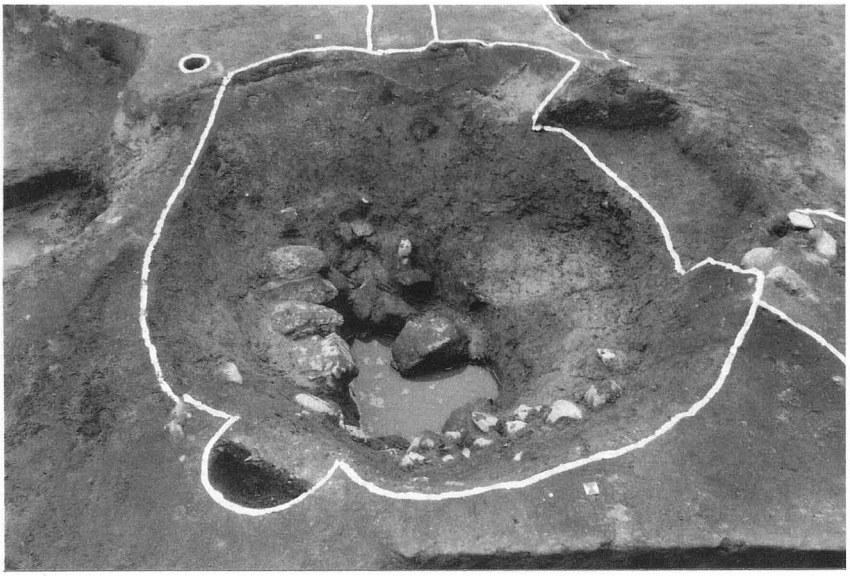
2　ＳＢ 1201　Ｐ－２



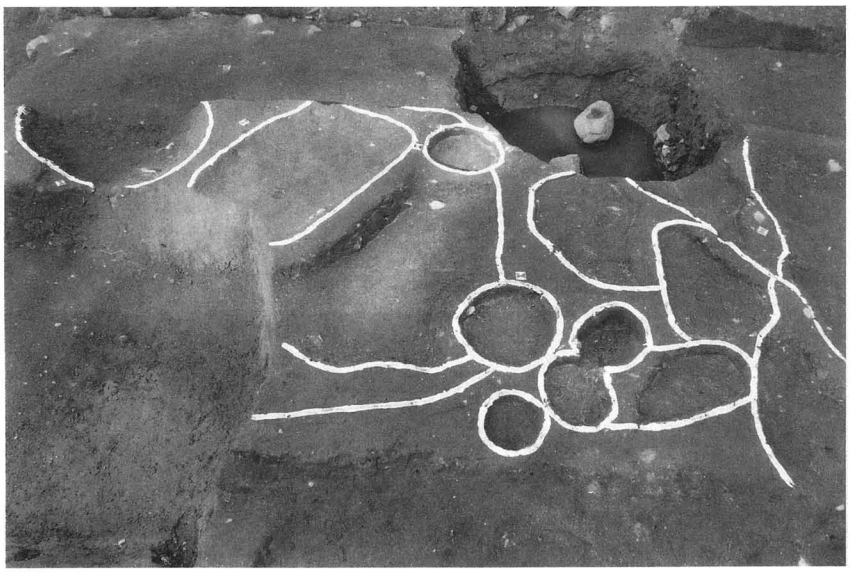
3　ＳＢ 1201　Ｐ－４

図版４

1　ＳＥ 1201 土層断面（西から）



2　ＳＥ 1201 完掘状況（南から）



3　ＳＫ 1202 ～ 1208 完掘状況
（北から）